The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古代ブルガリア語文法 : 語幹論
Author(s)	Dobrev, Ivan; 石田, 修一
Citation	大阪外国語大学学術研究双書. 1993, 8, p. 1-285
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学学術研究双書 8

古代ブルガリア語文法

語幹論

イヴァン・ドブレフ著
石　田　修　一　訳

1993

大阪外国語大学学術研究双書 8

古代ブルガリア語文法

語幹論

イヴァン・ドブレフ著
石　田　修　一　訳

1993

Publications of Osaka University of Foreign Studies, No. 8 1992

OLD BULGARIAN GRAMMAR

Theory of the foundations

Ivan Dobrev

translated from Bulgarian by Shuichi Ishida

СТАРОБЪЛГАРСКА ГРАМАТИКА

Теория на основите

© 1982 by Ivan Dobrev (Иван Добрев Добрев)
c/o JUSAUTOR, Sofia (София)

This book is published in Japan with the permission of the Author.

訳　者　序

本書は、ソフィア大学教授イヴァン・ドブレフ氏による「古代ブルガリア語文法、語幹論」（Наука и изкуство 科学と芸術社、1982）の全訳である。

古代ブルガリア語（старобългарски език, древнеболгарский язык, Old Bulgarian, Altbulgarisch）という名称は、わが国ではなじみが薄く、普通は古代教会スラヴ語（Altkirchenslavisch, древнецерковнославянский язык, Old Church Slavonic）ないしは古（代）スラヴ語（vieux slave, старославянский язык）の名称を以て知られている。どの名称が最適であるかは、「にわかには定め難いが、『古代ブルガリア語』はこの言語の行われた地域をあまりに狭く限定している点に、また『古代スラヴ語』は反対にあまり漠然としていて誤解をまねく恐れがある点に難がある」と木村彰一氏は述べられている（古代教会スラヴ語入門、白水社）。厳密には、これは、9世紀中葉にギリシャ語の福音書、祈祷書、典礼書等キリスト教会文献の翻訳に用いられたスラヴ文語である。その翻訳に用いられたスラヴ文語は、当時のブルガリア（マケドニア地方）方言を基盤としたものである。ただし、残存しているのは10－11世紀の写本であって、普通はこれらの写本やこの時期に書かれたオリジナル（翻訳ではない）も含めて上のタームを使っている。

以上に関連して、ここで若干用語の問題に触れておきたい。

鳥山成人氏は、黒海沿岸を芝居の舞台に喩えて、ここが「世界史の上でも、最も登場人物の多い舞台であり、その舞台に登場する人物の共通点は、必ず上手－東方から現れて、下手－西方に消えてゆく、したがって、下手の楽屋にあたるバルカン半島には、スラヴあり、アジアの遊牧民ありの複雑な国家形成が行われるに至った」と書かれている（大世界史　15、スラヴの発展、文芸春秋社）。スキタイ、サルマト、ゴート、フン、アヴァール、ブルガール、マジャール、ペチェネグ、ポロヴェツの興亡である。ブルガール族（原

ブルガール人）は、本来チュルク系の民族であって、終点バルカンに至る以前は、ヴォルガ下流のステップ地帯におり、そこからハザールに追われて、一部はヴォルガ中流域にブルガール汗国を作り、もう一つの集団がドナウ河畔・バルカン半島にブルガール国を作ったのである（7世紀末）。アジアから来たったブルガールは、バルカン半島に居住していたスラヴ人（スロヴェネ）を征服しつつ、一方では文化的・民族的に、次第に圧倒的多数のスラヴ人に同化されていったのである（9世紀の内に同化をほぼ完了した）。そして、ブルガールを同化・吸収したスラヴ人自らがブルガリア人を名乗り始めるのである。

ブルガリアの優れたスラヴィストであり、印欧学者であったムラデーノフ（Стефан Младенов, 1880 － 1963）はバルカン半島のスラヴ人が征服者から受容したのは、民族名と文化面の若干の単語と国家組織・規律の基本精神だけであって、冷静な立場でもって、ブルガリア語を純粋なスラヴ語と見なし得るとして、異民族語を自らの民族名に冠した二つの事例（フランス人とロシア人）を挙げたのである：「西にあっては、フランス人は、完全にロマンス方言を保存したのに、異民族のゲルマン名を受容したガリア・ロマンス人に起源を持つ。東にあっては、言語的にはブルガリア人と同じくスラヴ人でありながら、フランス人と同じくゲルマン名を冠したロシア人（русите *ルシ人）がある。古代ブルガリア語という場合も、古フランス語や古代ロシア語について述べるときに、常にガリア・ロマンス人や東スラヴ人の言語だけを想定するのと同じなのである。この名称の意味は、当然古バルカンのスロヴェネ（СЛОВѢНЕ）の言語のことでなければならない・・・アスパルフの率いたブルガール人の言語に対しては、『原ブルガール語』（първобългарски, Protobulgarisch）という立派な名称がある」（История на Българския език, София, 1979, Издателство на Българската Академия на Науките, стр. 32 [Geschichte der bulgarischen Sprache, 1929]）。

フランスや旧ソヴィエトの学界は、古（代）スラヴ語の名称を好んで使ってきた。例えば、ハブルガエフ（Г．А．Хабургаев）は、「古代教会スラヴ語」という用語が、① キリスト教会の言語としてのこの言語の役割、機能を明確化し、② 「古代」（древне-）を冠することによって、後のローカルな教会スラヴ語との関係を明確化する点で評価できるが、この言語が、① 非常に早くから（10－11世紀に）教会の言語としてだけではなく、学術・文学の言語として利用され始めること、② 多数のスラヴ文語に長期にわたる深い影響を与え続けてきたこと、③「古（代）」（старо-）の付加によって、他のスラヴ諸語と区別し、かつその言語学的な意義を明示できること、④ 簡便であり、しかも後のローカルな教会スラヴ語という名称との混同を回避できる、という理由で、今日では、「古（代）スラヴ語」の名称を使うスラヴィストの方が多い、という自説を展開している（Старославянский язык, Москва, Просвещение, 1974, стр. 6 - 8）。ただし、この二つの用語とも、この言語が何れのスラヴ語群に属するものなのかという点、つまりこの文語の基盤となった当時の実際の民族語への分属を明示しないという点では問題があると思われる。その点では、「古代ブルガリア語」という名称は、スラヴ語南群への分属を明示できるのである。なお、訳者は、以上を勘案し、かつ菱山忍先生に倣って、「古スラヴ語」という用語を使っておきたい（ロシア語史概説－古代ロシア研究４，５，８号、1964 － 1967）。

何れにしろ、たとえブルガリアという名称自体が本来スラヴのものではないとしても、古スラヴ語の一切の原点がブルガリア（マケドニア）の地にある以上、ブルガリアの人々がこれを古代ブルガリア語と呼び慣わして来たのは当然のことである。古スラヴ語は、スラヴ世界の言語史と文化史の上に巨大な足跡を残し、スラヴ研究の原点であるべき重要な言語であり、そのためヨーロッパでは早くから研究が盛んであるが、わが国で公刊された古スラヴ関係の図書は、現在までに僅かに二書 － 小川利治［古代］教会スラヴ語文法 広文堂 1971（絶版）；木村彰一 古代教会スラヴ語入門 白水社

1985 ― を数えるのみである。しかも、これらは入門書であり、したがって印欧語との比較歴史的な観点は欠落している。本書は、印欧語比較文法の観点から、加えて近年の類型学的な印欧語研究の成果をベースにして、古スラヴ語の語と語形の成り立ちを解釈、論究したものである。したがって、先ず第一には、青年文法学派以来の研究の総括とラリンガル・モデルによる語（祖形）の設定・提示、第二に、活格構造言語としての印欧祖語と古スラヴ語におけるその痕跡の証明、が本書を貫徹している二大特徴である。

活格言語（active languages）については、京都大学の山口巌先生が、日本ロシア文学会関西部会で発表された「ロシア語の類型学」(1989)、次いで「アジアの諸言語と一般言語学」(三省堂　1990）に発表された論文「ロシア語の類型学的考察」において、その大要を知ることができる。すなわち、主述関係を柱にして言語構造を見るとき、概して、印欧語等一連の言語が、活格言語　→　能格言語（ergative languages）　→　対格（主格）言語（accusative〔nominative〕languages）という歴史的な連関性を持って発達してきた（印欧語は、この能格段階を外す）ことを知るのである。活格言語の大きな特徴として、①　名詞を有生（animate）と無生（inanimate）に類別し、②　名詞に形態の存在する場合には、活格（active case）と絶対格（absolute case）を区別すること、また③　動詞もこれに対応して、有生に関係する活格動詞（active verbs）と無生に関係する絶対格動詞（absolute verbs）に分類されること、したがって、対格言語の自動詞と他動詞の大部分が活格動詞（行為動詞）に含まれ、自動詞に属する状態動詞は形容詞述語や名詞述語に属するものと共に絶対格動詞（状態動詞）を構成すること、④　有生は活格及び不活格の両方を取り得るが、無生の場合は絶対格しか取り得ないこと、活格は活格動詞の論理的主語として用いるだけであるが、絶対格は、活格動詞の論理的目的語と絶対格動詞の論理的主語として用いること、等を挙げることができる。さらに、これらのことから、活格言語は、第一次のシンタグマの構成法においては、能格言語と同じであり、すなわち［不活格（絶対格）＋動詞述語］であり、この第一次シンタグマに対する活格ない

しは能格の付加如何が、活格（能格）動詞か不活格（絶対格）動詞かの差異であること、これにたいして、対格言語では、［主格＋動詞述語］が第一次のシンタグマを構成し、対格（目的語）の付加如何によって、他動詞と自動詞の類別を行うことが明らかになる。しかし、能格言語は、動詞（行為）を能動性の強弱の程度に応じて類別することから、目的語を伴う動詞は能格動詞に、状態を表すものは絶対格動詞に分属されることになり、活格言語の動詞分類よりは対格言語の動詞分類により近いという関係にある。

ステパーノフ（Ю. С. Степанов）は印欧語の発達段階は、ガムクレリーゼ、イヴァノフ期（活格構造の段階、ただし能格現象の混在期）→（いくつかの中間段階）→ウーレンベク期（活格構造の崩壊期、すなわちこの構造に特有の名詞と動詞の類別及び形態特徴の崩壊期であり、バルト・スラヴ的、ギリシャ・アーリア的なディアテシス・アスペクト・テンス体系の萌芽期）だとしている（Т. В. Гамкрелидзе, Вяч. Вс. Иванов, Индоевропейский язык и индоевропейцы, 1984, Изд. АН СССР 及び C.C. Uhlenbeck, Agens und patiens im Kasussystem der indogermanischen Sprachen, 1901, Indogermanische Forschungen, Bd.12 の研究対象となっている時期のこと)。彼によれば、印欧語にかつて存在した文型は、最低限三種：Ⅰ．不活性主体（物）＋不活格動詞（例、雪が解けている。石が横たわっている[1]、突き出ている。)、Ⅱ．活性主体（人ないしは人に準ずるもの）＋活格動詞（例、人が歩いて行く。熊が横たわっている[2]。「ある」「横たわっている」「立っている」「座っている」の動詞には、主体が活性類か不活性類かに応じて２種類ずつ計８個の動詞が認められるという)、Ⅲ．活性主体＋活格動詞＋不活性客体（例、人が石を置く。熊が石を置く。）であり、発達した主格・対格構造の言語においては、さらに、 *Ⅳ．活性主体＋動詞＋活性客体、 **Ⅴ．不活性主体＋動詞＋不活性客体、 ***Ⅵ．不活性主体＋動詞＋活性客体（＊ 印は出現可能性の程度を表す、また、活性主体＝активный субъект、不活性客体＝неактивный объ

ект等）の文型が理論的に想定でき、この内Ⅰ～Ⅳ型までが、印欧祖語に可能であった基本文型（major sentence types）であるという（Индоевропейское предложение, Москва, 1989, Наука）。

本書の内容も、こうした研究の基本方向を背景にしながら、またガムクレリーゼ、イヴァノフ等と同時期に記述されたものであると考えられる。本書の内容を簡単に要約することは難しいが、大きな柱としては、次のような動詞組織と名詞組織の発達過程の記述である：

① 古い動作態（Aktionsart）の種類とテンス・アスペクトの萌芽・生成過程。印欧語の過去形・完了形と古スラヴ語の過去形・完了形の生成過程とそれらの関係（畳音、加音の方法によって過去形を作った古典語との関係、古スラヴ語アオリスト内での第Ⅰ、第Ⅱシグマ・アオリストの関係等）。

② 名詞の文法性と格と数の生成過程とその意義（男性、女性、中性名詞の類別の意義、一連の母音幹、子音幹名詞の幹母音の意義、集合名詞等）。

しかし、それにもまして著者が力を込めて書いたと思われるのは、いわゆる nomina anomala （変則曲用名詞、o-, jo-, i- 語幹の正常曲用を有する一方で、es-, er-, u- 語幹の子音幹曲用を行う男性、中性名詞）に秘められている古代世界のシャーマニズムと古い名詞曲用類の関連の問題である。すなわち、著者は、活格構造的な発想自体が持つ自然認識と世界認識、またそれとの関連での er 語幹の起源、スラヴ語等のアオリストや es 語幹名詞が包摂するシグマ指標と u 語幹名詞の裏に隠された認識論的な意義についてサスペンス的な推論を展開して行くのである。最近、ドブレフ氏自身より、「スラヴ祖語の子音幹及び二重音幹曲用の起源と意義」（Иван Добрев, Произход и значение на праславянското консонантно и дифтонгично склонение, София, 1982, Издателство на Българската Академия на Науките）［発行部数 600］という大変貴重な著書を恵与されたが、これは正にこの nomina

anomala を扱ったものである。特に、著者の手紙によれば、同書の約７割を占める第三章「スラヴ祖語 u 語幹の起源と意義（スラヴ新年祝い歌［коледни песни］の真髄)」(注、коледни песни＝ロシア語 コリャダーの歌 коляда, колядка）は、同氏の博士論文（1984年）となったものである（序文の他三つの章からなり、第一章は es- 語幹、第二章は er- 語幹の起源と意義がテーマである)。したがって、本訳書に見られる同テーマについての記述は、正に著者の得意とする分野であり、その意味で、ここには同テーマについて他書に見られない著者独自の見識が示されていると言えよう。訳者は、最近入手したばかりの同モノグラフを読破し得ていないが、我々は著者が次のように述べていることに留意しておきたい。「es, er, u の接尾辞は、 nt, i の接尾辞とは違って、新しいスラヴ語語根には付加され得ないものである。このことは、恐らく、これが我々以前に死滅した曲用類であり、その存在は、紀元前1000年期後半にはもはやスラヴ人の世界観に基盤を持たなかったことを示唆したものである。しかし、かつての es-, er-, u- 語幹曲用は、多かれ少なかれ、他の古い印欧語族（ギリシャ、イタリア、古ゲルマン、一部インド・イラン）の言語の中にも散在している。これら諸族は、スラヴ人よりはるかに早くから地中海、黒海北部、近東文明に接触しているのである。全体的に見て、彼らの精神性には、バルト人と共に最も遅れてヨーロッパ史と世界史に編入された原始スラヴ人の世界観に比べれば、古めかしい特徴は希薄である。個々の印欧語族の宗教、信仰、慣習は個別的に取り上げれば、どれ一つとして、始原的な子音幹曲用、二重音曲用類のテーマ領域に対する鍵を提供し得ないのである。 es-, er- そしてまた一部 u- 語幹名詞が属するテーマ領域は、はるかに古いユーラシア文化の歴史的脈絡の中でのみ確定しかつ解明できるのである」(同書 p.5 － 6）。

さらに同モノグラフの内容について、若干紹介しておきたい。例えば、本訳書 §．20 にも扱われている s-praesentia の動詞語彙類の問題である。これらを並べてみる時、そこには古代世界のシャーマンについての一つの簡

単なシナリオができあがるほどだという。すなわち、これらの動詞類は、精神的興奮状態を表す動詞、(耳をそばだてて) 聴くことを表す動詞 (**слоухъ, слоушати** < *k'leu̯-s-)、動物的な鳴き声、うなり声を表す動詞、身にまとう、装うことを表す動詞、(全身が) 震えることを表す動詞、律動的に両手を動かし、振ることを表す動詞、引き裂き、引き破ることを表す動詞、凝視、注視することを表す動詞 (ラ visō 「正確に見る、観察する」)、恐怖、狂暴状態、怒髪天を衝く状態に陥ることを表す動詞、守り、擁護し、救うことを表す動詞、乗り物に乗って行く、旅に出ることを表す動詞であるという。ここから思い浮かぶシャーマンの情景は、次のようなものになるという — 先ず、強い精神的興奮状態に入って、次第に錯乱、驚愕、戦慄の様相を帯び、次いで痙攣状態に陥って身体は震え、金縛りの静止状態がやってくる、聴覚と視覚は研ぎ澄まされ、動物的ないななき、うなりにも似た意味不明の言葉を語り始める、ある特別な衣を纏い、鳥が飛ぶように両手を振り、何かの動物の背に乗って旅に出る、そして霊を追い払うように息を吹き付けて一族の人を救うのである。こうして、著者は、スラヴ祖語 (印欧語) の接尾辞 *es (*s) の意味は、「ユーラシアのシャーマニズムに照らして観察すれば、一層明白になろう」(同書 p.10) と主張するのである。したがって、著者は、古スラヴ語の es 接尾辞の中性名詞の大部分は類推によるものだとした、かつてのメイエ (A.Meillet) 等の主張に反対するのである (同書 p.32)。

また、著者は、スラヴ祖語の er 語幹名詞の語彙類が、非分離の所有 (属性) (неотделима принадлежност) 表現に関連があることを、§. 16 で述べているが、これらのカテゴリーもまた、メラネシア方言 (オーストラリア)、北アメリカ・インディアン族の一部の言語、ユーラシア (トゥングース・満洲諸語、アドィゲ語 — カフカス山脈西北麓アドィゲ自治共和国の主要民族) のいくつかの言語に類例が見られるという。非分離の所有 (属性) とは何か。ブルークマンの「印欧語比較文法」(K.Brugmann, Vergleichende Grammatik der indogermanischen

Sprachen, II, 1, Leipzig, 1906）による印欧語接尾辞 *er（*ter）の五分類を引用しながら、著者は、これらの共通の意味基盤は、ボアス（F. Boas, Handbook of American Indian Languages, Washington, 1911 ）のいう intransferable possession（譲渡不能所有）ないしは inseparable possession（非分離所有）、ヤコヴレフ及びアシハマフ（Н. Яковлев, Д. Ашхамаф, Грамматика адыгейского литеретурного языка, М., 1941 ）のいう неотчуждаемая, органическая принадлежность（分離不能的、有機的所有〔属性〕）である、としている — 序でながら、ガムクレリゼ、イヴァノフの前掲書にも同じ用語が使われている（I, p.289-290）。「非分離の所有範疇は、相互に密接かつ有機的に結びついている人、もの、事物に関係する範疇、すなわち肉体全体に対する肉体の部分や器官の関係、事物全体に対する事物の一部の関係、ある種の親族関係（とりわけ真の血縁的親族関係）、ある種の空間・時間関係、ある種の武器、衣服、切削器、事物である。非分離の所有は、専用の接辞（affix）によって表されるが、それは通常の意味での所有接辞ではなく、本来的な恒常的連関性を証する接辞なのである。親族名称や肉体部分の名称の場合、この接辞は、むしろ人間と人間にとって分離不能な構成要素（最も近い親族、肉体器官）間の同一・一体性（identity）の表徴である。レヴィ・ブリュール（L. Lévy-Bruhl）によれば、この接辞の意味は、関与（participation）であって、所有（possession）ではない、すなわち所有ではなくて、主体との不可分一体性を表す語である」（同書 p.35-36）。したがって、例えば、印欧語に多数見られる nomina instrumenti（道具名詞）や nomina agentis（行為者名詞）の接辞 *er（*ter, *tro, *dhro）は、本来、道具、行為者の意味を持つものではなく、生活必需品や人を取り囲む世界の現象の名称に非分離的な所有の表徴を与えた記号である（古ブ **КАМЪ**［自然の石］に対する 古高ド hamar「ハンマー［加工した石、切削石器］」；ゴ fōn「火［自然現象としての］」に対する ギ πῦρ「火［家庭の、炉の］」； 古

ブ ДАНЬ, ラ dōnum「＊利用に供せられるもの」に対する ギ δῶρον, 古ブ ДАРЪ「＊不変の、返済義務のない贈り物」等）という（同書 p.39)。また、シャーマン的宇宙観に関連する用語類を含んでいる（СѢВЕРЪ, ПЕШТЕРА, ЕЗЕРО 等）(p.40)。さらに、上例のように非分離所有を表す接尾辞を有する諸言語にあって、この接尾辞が、中動（不活格、非他動）活用の接尾辞、すなわち「動詞の表す特質が、主体と不可分一体であり、主体の領分に留まり、他の対象に及ぼされないことを表す接尾辞」（同書 p.7）と同一であることを確認するのである。

なお、この範疇一般については、フィルモア(Ch. J. Fillmore) 等も扱っているが（「格文法の原理」)、活格構造全体を展望しながら、これを活格構造にこそ内包連係する現象として最も系統的に扱ったのは、クリモフ（Г. А.Климов）であろう（Типология языков активного строя, М., 1976, p. 148-156)。そして、わが国で初めて、これを、活格構造の「包含事象」として論じられたのは、山口巌先生の「類型学」（京都大学出版会近刊予定）である：「活格言語は対象を活性と不活性に分類することを基本原理としており、また活性のクラスの名詞の方が社会的に重要な役割を持つ対象を表しているから、活性のクラスに属する対象の勢力範囲、あるいはこの対象の所属を示す必要が大きいのはよく理解できる。したがって活性のクラスの対象の所属の表示は、活格言語の包含事象の一つであるということができる。このような所属の表現は、非分離所有 organic possessive と分離所有 inorganic possessive とに分けられる」（草稿、第一部 類型学の概念、内容類型学の進展 ― I 能格言語、II 活格言語、より)。

さらに、スラヴ祖語の u 語幹名詞が、原始スラヴの天地創造神話に関連があることは、§. 25 において詳細に検討されているが、そのことを最も完全な形で立証できるのは、古いスラヴのコリャダー（新年祝い歌）であるという：「スラヴ神話が反映されているスラヴのフォークロアを比較方法によって詳しく調べた結果、原始スラヴの u 語幹曲用の本質は、スラヴ・

コリャダーの祝祭に関連があるという結論に達した」(同書　p.41)。また、「ザカルパチエ・ウクライナとブルガリアのコリャダー歌の比較対照」を研究の中心に据えつつ、これらスラヴのコリャダー歌と古代北方（古アイスランド）の物語伝説の一部、すなわち「エッダ」のプロットの間には「疑うべからざる関連を確認した。このことは、スラヴのコリャダーの主題の一部は明らかに印欧起源であることを示唆している。私は、このフォークロアの分析を、ｕ　語幹の神話的解釈全体の基礎に据える」(同書　p.７）としている。さらに、著者は、スラヴ民俗学が、これら歌謡の内容について「完璧に」紹介する一方で、その起源や本質についてはほとんど何の関心も示していないし、理解していないと指摘している（同書　p.７，42)。こうした著者の発言からして、本書のｕ　語幹の記述は、比較民俗学的な研究の成果であることが判るのである。ｕ　語幹の章については、訳者はこの訳業終了の段階でいまだ全てを読み終えることができなかったが、この読解には、スラヴや北欧のフォークロアの研究者の協力が必要であるように思われる。

さて、これら二つの著書の基底に流れる、ドブレフ氏の言語研究に対する態度には、共通のものがある。それは、語根が、形態素が、したがって音が全て意味を持って語られるという共通性である。上述の、山口先生の「類型学」の第四部「類型学の応用　－　比較言語学におけるガムクレリゼの試み」(草稿　§．115）においても、音韻のレヴェルと言語類型の関係について指摘され、「少なくとも現在のところ、音韻のレヴェルに関しては、音韻体系の中の音韻相互の関係のあり方、その実現の一般的な可能性の問題に、研究が限定されているのが、現状であると思われる」とされているが、ドブレフ氏の仕事もまた、言語研究の本来あるべき方向に向けての一つの試案であろうと思われる。言語現象の細部についてのあれこれの研究は、総合的な視点で総括できなければ、すなわち真の意味での分析と総合がなければ、結局、群盲象をなでるが如き結果に終わるであろうからである。ドブレフ氏の手紙によれば、同氏は 1967 － 1968年及び1974年の二度にわたって旧レニングラード（現サンクトペテルブルク）とモスクワで研鑽を積んだという。一緒

に送られてきた同氏の論文「印欧語語根の子音構造」（Консонантната структура на индоевропейския корен, 1992, Език и литература XLVII）には、ガムクレリゼ、イヴァノフ論文が随所に引用されていることからみても、当然、ガムクレリゼやイヴァノフ氏等旧ソヴィエトのこうした研究の潮流には接触されていたであろうと思われる。興味深いところである。

ともあれ、本書は、ロシア語学徒を初めとするスラヴ学徒は勿論、他の印欧語を専門とする人たちにとっても大変興味深いものであろうと思われる。訳者として、もし本書に副題を付けるとすれば、「印欧語比較歴史文法から見た古スラヴ語文法」ともいうべき豊かな内容を含んでいるからである。また、記述が具体的で、用例が豊富である。さらに、文化人類学的にみても上述のような極めて興味深い内容を含んでおり、人類が自然に対する畏れとそれによって立つ世界観の中で言語を生成して来たことが判るのである。日本のスラヴ学徒は、西欧や一部東欧（ロシア、チェコやポーランド）の文献は読むが、ブルガリアの文献を無視しがちである。しかし、考えてみれば、古スラヴ語研究は、ブルガリアの地においてこそ最も先進的であって当然であろう。

索引の欠落、翻訳文の的確さという点で大いに心残りであるが、こうした内容の著書がブルガリアの地で発行されていることに注意を喚起できれば、それだけでもう今回の訳者の使命は充分に果たせたであろうと考えている。

今回の翻訳を承諾され、加えて御自分の関係論文と関係著書を御恵送くださった原著者イヴァン・ドブレフ教授、そして版権問題で奔走してくださった在日ブルガリア大使館のゲオルギ・コスチャネフ氏、そのコスチャネフ氏に連絡を取ってくださった在ソフィア日本大使館の大嶋勝氏、大嶋氏をご紹介戴き、ヴェリコ・タルノヴォ大学の知人宛連絡を取ってくださった香川大学の山田勇先生の御好意に対して心から感謝する次第である。

1992年11月　奈良にて

凡　　例

1．頻出する略語は、以下の通りである。比較的頻度の低い語（例、ヒッタイト、ドーリス等）については、略語を使っていない。

ギ	ギリシャ語	グ	グラゴール文字
ラ	ラテン語	1	1人称
ゴ	ゴート語	2	2人称
古イ	古代インド語	3	3人称
古プ	古プロシャ語	単	単数
ド	ドイツ語	複	複数
古高ド	古高地ドイツ語	双	双数
ア	アルメニア語	現	現在
リ	リトアニア語	過	過去
ラト	ラトヴィア語	未	未来
ブ	ブルガリア語	完	完了（パーフェクト）
古ブ	古代ブルガリア語	未完	未完了過去（インパーフェクト）
ロ	ロシア語		
古ロ	古代ロシア語	アオ	アオリスト
スラ祖	スラヴ祖語	スピ	スピーヌム（supīnum）
セ・ク	セルビア・クロアチア語		
ス	スロヴェニア語	能過分	能動過去分詞
チ	チェコ語	受過分	受動過去分詞
スロ	スロヴァキア語	不	不定詞
ポ	ポーランド語	命	命令法
古	古（代）	希	希求法
能	能動相	接	接続法
受	受動相	主	主格
中動	中動相	生	生格

男	男性	属	属格
女	女性	奪	奪格
中	中性	与	与格
完	完了体（§.40）	対	対格
不完	不完了体（§.40）	造	造格
		具	具格
		所（処）	所（処）格

2．例語、例文の後ろに示される日本語訳については、原著に現代ブルガリア語訳があるときには、「　」によって、現代ブルガリア語訳が示されていないときには、訳者が必要と考えた場合に、（　）によって、また時に［　］によってこれを示した。

例、 **чьтѫ, чьтєши**「読む」 と **каѭ, каєши**（悔いる、告解する）

испльнь（スプラシル写本 136_4 **рѫцѣ кръвє испльнь** [両の手は血に染まっている]）

Rōmam tōta Italia convenit「イタリア中がローマに集まった」

съ-мрьть「（逐語的には）良き、自然な死」（cf. ・・・リ sãvo smerčiù miřti [天寿を全うする]）

3．一連の文法用語等については、なるべく邦訳の後ろの（　）内に英訳等を示したが、これは原著に示されていたものではなく、訳者が付け加えたものである。しかし、（　）内に原著のブルガリア語をそのまま挙げた場合もある。

例、 過去現在動詞（preterite-present verb, perfecto-present verb）
非完了（infectum）
畳音、畳語法、語根重複（reduplication）
中間後置詞（м е д и е н з а д л о г）
一括多数性（т о т а л н а м н о ж е с т в е н о с т）

ただし、概してラテン語による文法用語の指示は、原著者によるものであ

る。

例、　絶対単数（singulāria tantum）

第Ⅱオリスト受動形（aoristus secundus passīvī）

時量的加音（augmentum temporāle）

音節的加音（augmentum syllabicum）

4．原注については（　）付きアラビア数字によって、また、訳注は（　）なしのアラビア数字によってこれを示し、巻末にまとめた。なお、原注の中に必要であった訳注は、原注内の当該箇所で［訳注 ……］ないしは（訳注 ……）のように示した。

5．二重母音（diphthong）の第二要素（非成節母音）を表す符号、例えば、oi̯, ou̯　等の符号は全て oi̯, ou̯　のように記載する。

本研究書は、古代ブルガリア語の理論的形態論である。本書には、古代ブルガリア語の文法形の起源が解明されている。主要テーマは、語幹 － 成り立ち，意義及び用法の点からみた名詞、代名詞、動詞の語幹 － である。古代ブルガリア語の母音、スラヴ祖語の語根に伴う変化、名詞及び動詞接尾辞、性、数範疇、時制、語尾、格、代名詞語根等が研究される。

本書は、上級水準の学生及び専門家向けである。

本書は、ブルガリア建国1300年を記念して執筆されたものであり、個人の全面的・調和的発展長期総合計画 － 哲人コンスタンティノス、キュリロス計画 － に関連して、上梓されるものである。

目　次

§. 1　青年文法学派の母音モデル …… 1
§. 2　古代ブルガリア語母音の起源 …… 10
§. 3　ラリンガル（喉音）・モデル …… 27
§. 4　ラリンガル・モデルとスラヴ祖語アクセント問題 …… 37
§. 5　延長階梯 ē 及び ō の形態的意義 …… 45
§. 6　e : o 交替の形態的意義 …… 48
§. 7　スラヴ祖語の語幹構造の変化 …… 57
§. 8　スラヴ祖語の語根構造の変化 …… 61
§. 9　始原的な名詞接尾辞と動詞接尾辞の統一性 …… 67
§. 10　始原的な動詞、名詞語幹における一括多数性指標　H_2 …… 69
§. 11　語幹母音の延長階梯の形態的意義 …… 75
§. 12　古代ブルガリア語過去語幹の起源 …… 80
§. 13　古代ブルガリア語における過去語幹間の相関関係 …… 87
§. 14　始原的な動詞非完了幹と完了幹 …… 98
§. 15　始原的な活格活用と不活格活用 …… 101
§. 16　古代ブルガリア語の -er　語幹の起源 …… 104
§. 17　始原的活格活用動詞における動作態カテゴリー …… 108
§. 18　古代ブルガリア語における始原的な不活格活用の痕跡 …… 118
§. 19　古代ブルガリア語時制の起源 …… 126
§. 20　スラヴ祖語の動詞・名詞接尾辞　-s- …… 129
§. 21　青年文法学派の形態モデル …… 136
§. 22　古代ブルガリア語の女性の起源 …… 141
§. 23　古代ブルガリア語の男性カテゴリー …… 149
§. 24　始原的名詞接尾辞　H_2 …… 153
§. 25　古代ブルガリア語の u　語幹の起源 …… 157
§. 26　古代ブルガリア語の男性及び女性前史から …… 172

§．27　始原的な名詞接尾辞　-i- …… 178
§．28　始原的な純粋語幹の文法的意義 …… 184
§．29　始原的後置詞（前置詞）　*od（ot）…… 187
§．30　中間的代名詞語根　*m- …… 190
§．31　格語尾としての指示代名詞的小辞　i …… 195
§．32　状況格的（具格的、共同格的、所格的、奪格的）意義を持つ古代ブルガリア語の格形の起源 …… 198
§．33　始原的代名詞語根　*s- …… 206
§．34　古代ブルガリア語の３人称動詞形の起源 …… 209
§．35　古代ブルガリア語の１・２人称代名詞と動詞語尾の起源 …… 216
§．36　古代ブルガリア語の生格の起源 …… 232
§．37　古代ブルガリア語の複数形の起源 …… 234
§．38　古代ブルガリア語の対格の起源 …… 239
§．39　古代ブルガリア語の中性の起源 …… 250
§．40　古代ブルガリア語の動詞アスペクトの起源 …… 255
原　注 …… 263
引用文献 …… 269
訳　注 …… 271

本書は、大学の古代ブルガリア語の必修課程を修了し、さらに、古代ブルガリア語の形態の起源に特に注意を集中しながら、古代ブルガリア語形態論の学習を引き続いて行おうとする言語学徒のために執筆したものである。本書は、古代ブルガリア語の入門課程ではない。ブルガリア語学、スラヴ語学、ロシア語学（フィロロジー）専攻の上級課程の学生やとりわけソフィア大学やヴェリコ・タルノヴォ大学で言語学的な関心を持つ者あるいは古代ブルガリア学を専攻する者たちに推薦できるものである。本書は、また、国立古典語・古典文化中学校（Националната гимназия за древни езици и култура）を卒業した言語学徒にも利用できるものである。

したがって、著者は、古代ブルガリア語の基本的な形態的事項（文法範疇、曲用、活用）や、また、スラヴ祖語の最も重要な音声学的過程（口蓋化、先行子音及び後続母音に対するヨット［ｊ］の影響、二重母音の単母音化、流音音位転換［metathesis］）についても、すでに周知している読者を対象としている。本研究を通じて、読者は、古代ブルガリア語の文法的事実を引き出す基となるべき始原的形態組織についての知識を得ることができよう。この組織体系の助けを借りることによって、古代ブルガリア語及びスラヴ祖語の一連の文法形態の起源を設定し、かつまた、それの、古い他の印欧諸語の文法形との同系的な相互関係を説明することができよう。記述は、伝統的な形態区分（名詞、形容詞、代名詞、動詞等）に従わず、具体的な形態資料とその解釈を基にして、一歩一歩徐々に読者を次段階の文法的論証に導くものである。基本的な形態的事項の追跡に必要な予備的音声学的知識は、最初の四節において与えられている。

§.1　青年文法学派の母音モデル

古代ブルガリア語の母音は、印欧語の母音と二重母音を継承したスラヴ祖語の母音ないしは二重母音に起源を持つ。印欧語学の青年文法学派時代（19世紀最終四半期）に、学者達は、古代ブルガリア語も含めたより新しい時代の印欧語の全母音種を引き出している。すなわち、5種類の原短母音（a, o, e, u, i）、それらに対応する原長母音（ā, ō, ē, ū, ī）、そしていわゆる下向き原二重母音（falling diphthong）、つまり、その第一要素に三種の広母音 a, o, e（長母音ないしは短母音）の何れか、第二要素にソナントたる、狭母音 u, i、ないしは流音（r, l）および鼻音（m, n）が来る二重母音である。

先行位置の母音 a, o, e（ā, ō, ē）と後続位置の構成素 u, i, r, l, m, n からなる計36組の下向き結合群が形成され得るが、本来的な下向き二重母音として青年文法学派が挙げているのは第二要素に u, i を有する二重母音だけである。しかし、 a, o, e と流音、鼻音との結合群は、スラヴ祖語の歴史において重要な役割を演じて来ており、したがって、我々は下向き二重母音という用語を更に広い意味で使うことにする。多くの印欧語では、本来の長二重母音が短二重母音と対応関係を成すが（例えば、 āu̯ と au̯, ēi̯ と ei̯ 等）、長母音が残っているところでは（いくつかのインド・イラン語の例）、原則として第二要素、すなわち u, i が消失している。

語末閉音節にあっては、始原的結合群 -ōi̯s は -ōs に短縮し、そこから後に規則的に -ѢІ を得るのである（§.2）— 例、ВЛЬКѢІ（複・造）*u̯l̥kʷ-ōi̯s（-ōi̯s を -oi̯s に短縮する リ vilkaĩs（複・造）；ギ λύκοις（複・与）＜ *u̯l̥kʷ-ōi̯s と同類である）。語末閉音節の始原的結合群 -āns は -ans に短縮し、そこから後規則的に -ons＞ -ѢІ を得るのである（§.2）— 例、ЖЕНѢІ（複・対）＜ *gʷen-āns、 cf. 古プ rānkans「手」＜ *rañk-āns、クレタ方言 τῑμανς「敬意、褒美」＜ *τῑμ-ᾱνς（-āns

＞ -ans への短縮を伴う）、またドーリス方言　τιμᾱς ＜ *τιμ-ᾱνς、アッティカ方言 χώρᾱς ＜ *χωρ-ᾱνς、 古イ　áśvāḥ「雌馬」＜ *ek'u̯-āns（ -āns ＞ -ās の短縮を伴う）[1]。

青年文法学派は、鳴子音 r, l, m, n が、二子音間、語頭子音前、語末子音後に来る時、母音化して成節ソナント（r̥, l̥ ,m̥, n̥）となり、またそれは長音（r̥̄, l̥̄ ,m̥̄, n̥̄）にもなり得るとしている。それとは逆に、u, i は二母音間、語末母音後、語頭母音前では子音化して、u̯(w), i̯(j) で記される子音に変質するのである 。

青年文法学派によれば、印欧語の母音 e, o は独立母音ではなく、それぞれ e 階梯（正常階梯）、o 階梯（対応階梯）と称する、同一の原母音の二つの階梯であると考えられる。 e 階梯、o 階梯以外に、e が弱いか全く発音されない第三の階梯、すなわち低減階梯、ないしはゼロ階梯も存在する。同一の印欧語の語根、例えば、語根 *p-t「飛ぶ」にあって、母音 e は正常階梯（ *pet-）にも、対応階梯（ *pot-）にも、また低減ないしゼロ階梯（ *pt-）にもなり得たのである。 例、ギ πέτ-ομαι「飛ぶ」（e 階梯、1・単・現）, πότ-ῃ「飛行」（o 階梯), ἐ-πτ-όμην「飛んだ」（ゼロ階梯、1・単・Ⅱアオ)。ゼロ階梯に替わる低減階梯は流音前ないしは鼻音前に見られる ― 例、**БЕР-Ж**（ e 階梯、1・単・現）：**БЪР-ДТИ**（低減階梯、不定詞）；リ men-ù「覚えている」（ e 階梯、1・単・現）：**МЪН-ѢТИ**（低減階梯、不定詞)。古代ブルガリア語の文字に合わせて、我々は低減階梯を ъ の文字を持って表すことにする。 e : o : ъ（あるいはゼロ階梯）の交替は質的（音質）交替と呼ばれる。

正常階梯以外に、母音 e は延長階梯、つまり ē 階梯（延長正常階梯）になることもある ― 例、**ВЕЗЖ**（1・単・現）：**ВѢСЪ**（1・単・アオ）＜ *u̯ēg'h-s-（cf. ラ vehō「運ぶ」（1・単・現）＜ *u̯eg'h- : vēxī「運んだ」（1・単・完）＜ *u̯ēg'h-s-)。 o の延長階梯は ō（延長対応階梯）である ― 例、ギ κλοπή「窃盗」：κλώψ（ *klōps）「泥棒」。 e : ē や o : ō の交替は量的（音量）交替と呼ばれる。

青年文法学派は、ē : ō の交替以外に e : o の交替も見られる語根を，その正常階梯の母音 e が短いものであるため、軽い語基（л е к и　б а з и）と呼んでいる。一方、彼らは軽い e 語基以外に、e : o の交替がなくて ē : ō の交替が現れる重い語基（т е ж к и　б а з и）、すなわち ē 語基についても述べている。重い語基の場合には、正常階梯もその対応階梯も常に長いのである。青年文法学派は、重い語基における ē 母音の低減階梯を schwa と呼び（この用語は古代ヘブライ語文法からの借用）、それを ə の記号を以て表している。したがって、軽い語基の母音の e は五つの階梯 － 正常階梯（ e ）、対応階梯（ o ）、延長正常階梯（ ē ）、延長対応階梯（ ō)、低減階梯（ ь ）ないしはゼロ階梯 － を持つことになる。重い語基では e の階梯は三つ － 正常階梯（ ē ）、対応階梯（ ō ）、低減階梯（ ə ）ないしはゼロ階梯 － である。

母音交替は原語根だけではなく原接尾辞にも存在している。例、**РОД-О-МЬ**（ o 階梯、単・造），**РОД-Е**（ e 階梯、単・呼）；**БЕР-Е-ТЪ**（ e 階梯、3・単・現），**БЕР-Ж-ТЪ**（ o 階梯、3・複・現、グ **ЪЭЬ-ЭЄ-Ѡѳ**, **Э**=o）；**СЪН-Ъ-МЬ**（< *sūn-u-mi［接尾辞母音 e のゼロ階梯］、単・造），**СЪН-ОВ-Е**（< *sūn-eu̯-es［接尾辞の e 階梯］、複・主、§.2参照）；ゴ sun-au（単・与 < 単・所 *sun-ēu̯、接尾辞母音 e の ē 階梯）；ギ *π ο ι-μ έ ν-α*「牧夫」(接尾辞の e 階梯、単・対)，*ἠ γ ε-μ ό ν-α*「領袖」(接尾辞の o 階梯、単・対)，*π ο ι-μ ή ν*（ ē 階梯、単・主），*ἠ γ ε-μ ώ ν*（ ō 階梯、単・主）。

青年文法学派の交替モデルによれば、語根は通常両子音構造を持つ － 例、**БЕР-Ж**（1・単・現），**СЪ-БОР-Ъ**（単・主），**БЬР-ДТИ**（不）；**НЕС-Ж**（1・単・現），**НОС-ИТИ**（不、反復相 ［iterative］、§.6 参照)。最初の子音に対しては、第二子音としての s が後から前へ続けて置かれることがあるが、語根に応じて可変性を持つ（現れたり、消えたりする）－ 例、ラ teg-ō「被う」（1・単・現），tog-a「上着」；ギ *τ έ γ-ο ς*，*σ τ έ γ-ο ς*；*τ έ γ-η*，*σ τ έ γ-η*「屋根、家」。長母音で終わる語根（例、不 **АѢТ**

И < *dhē-, **СТА-ТИ** < *stā-, **ДА-ТИ** < *dō-）は、語頭母音を持つ語根（1・単・現、**ЕС-МЬ** 単・主 **ОК-О** ; ラ 1・単・現 ag-ō「導く、駆る」）と同じく、両子音構造の逸脱である。

ПЛЕТ-Ж（1・単・現), **О-ПЛОТ-Ъ**「編垣」(単・主）のような単語にあっては、原語根は本来 *p-l-「曲げる、巻く、畳む 」である － cf. ラ du-plus「二重の < 二つ折の」（語根母音はゼロ階梯）。したがって、青年文法学派によれば、**ПЛЕТ-** の **-ЕТ-**（更に古い -ek't- ないしは -ekt- から、cf. ラ 1・単・現 plectō「編む」）は、ゼロ階梯である語根 *p-l- の後ろに付け加えられた、かつての接尾辞（語根拡張）である。通常、語根がゼロ階梯（ *pl-）の時には、接尾辞は正常階梯（**ПЛ-ЕТ-**）であるか、対応階梯（**ПЛ-ОТ-**）であり、また 逆に、語根が正常階梯か対応階梯にある時には、接尾辞はゼロ階梯である。例、語根 *gʷer-「重い」と古い接尾辞 -bh- より、 *gʷer-bh- > **ЖРЪБА**「（新生）子馬」(語根の e 階梯と接尾辞のゼロ階梯）; *gʷr-ebh- > ギ *βρέφος* 「胎児、新生児、赤ん坊」（ゼロ階梯の同一語根と e 階梯の同一接尾辞より ; *gʷer- 語根の低減階梯は ギ *βαρ-ύς*「重い」< *gʷьr-u- に見られる ;「重い（重み）」>「胎児」といった再解釈については、ブ民間方言 , тежка жена товарна жена「身重の妻（女）」、また、**БРЪМА**「重荷、重み」や, бременна「胎児を宿す女、妊婦」を参照)。また、古イ gárbhaḥ < *gʷer-bh-「胎内、胎児」も参照。

青年文法学派の印欧語母音階梯のモデルは、*pet-: *pot-: *pēt-: *pōt-: *pt- 型の交替に加えて、同一の非拡張（両子音）語根あるいは同一の接尾辞における、i, u, r, l, m, n の、母音あるいは子音としての二重の現れ方についても明らかにするのである － 例、**МРЪТИ**（不）< *mēr-tēi̯, **ОУ-МОР-ИТИ**（使役、不、§. 6参照), **СЪ-МРЬ-ТЬ**< *su-mr̥-ti-s ; **ПЕР-Ж**「叩く、打つ」（1・単・現), **СЪ-ПОР-Ъ**「闘い」, **ПЬР-АТИ**（不), リ pirtìs「風呂、人々が（蒸し風呂用)枝掃をもって汗を流す場所」< *pr̥-tis ; リ 不 šveĩ-sti「光沢を出す、磨く」< *k'u̯ei̯-, **СВЪТЪ**「光」< *k'u̯oi̯-,

СВѢТѢТИ「輝く」(不) < *k'u̯i- ; **СѢН-Ъ-МЬ** (単・造) < *sūn-u-mi, **СѢН-ОВ-Е** (複・主) < *sūn-eu̯-es。 i, u, r̥, l̥, m̥, n̥ は母音 e がゼロ階梯の時に現れる子音 i̯ (j), u̯ (w), r, l, m, n の母音形であることが判明するのである。

青年文法学派のモデルによって、古代ブルガリア語の語根及び接尾辞の母音階梯の最も重要な特徴が説明されるのである。しかし、このモデルの主要な長所は、他の印欧語にも対応形を持つかなりの数の古代ブルガリア語の単語や 語形が、ある少数の語根から、母音階梯やさまざまな語根拡張子（接尾辞）を経てどのように形成されるかを、このモデルの助けによって設定できることである 。

青年文法学派にとって、語根は、必ずしも絶対不変の両子音構造として実現される、相互不可侵、相互独立のものではない。語根母音だけではなく、いくらかの語根子音もまた異形態を有しているのである。軟口蓋子音は三種 － 摩擦的［спирантна］(k', g')、円唇的［лабиална］(k^w, g^w) 及び純粋的［чиста］、つまりそのどちらでもない中立的［неутрална］(k, g) － 音として現れる。古代ブルガリア語では、摩擦型に対応するのは **С, З** であり、純粋（中立）型及び円唇型に対応するのが **К, Г** である。有声音の g は帯気化（gh）することがある － 摩擦型（g'h）には **З** が、純粋型（gh）及び唇音型（g^wh）には **Г** が対応する。

後舌子音の円唇型及び純粋（中立）型は、スラヴ祖語（古代ブルガリア語）以外では、さらに、インド・イラン（古代インド、アヴェスタ）、バルト祖語（リトアニア、ラトヴィア、古プロシャ語）、アルメニア、アルバニア語において同じである。これらの諸語では、摩擦型からはス一音ないしはシュー音が派生するが、これはヒッタイト、ギリシャ、ケルト、イタリア祖語（ラテン、オスク、ウムブリア）、ゲルマン祖語（ゴート、古高地ドイツ語）では観察されない。そこでは、摩擦型は、軟口蓋子音純粋（中立）型と一致するが、軟口蓋子音円唇型はもっと独自の対応を示し、しばしば円唇音あるい

は、軟口蓋音＋唇音（ v ）の結合形を与えるのである[2]。

比較・歴史的対照を容易にするために次表を掲げる。

	原子音	古代ブルガリア	古代インド	ギリシャ	ラテン	リトアニア	ゴート
1	k'	с	ś（=š）	κ	c	š	h
2	g'	з	j（=ž）	γ	g	ž	k
3	g'h	з	h	χ	g,h	ž	g

例：

1. **ѻсмь**, 古イ aṣṭā́u, aṣṭā́, アヴェスタ ašta, ギ ὀκτώ, ラ octō, ゴ ahtau ＜ *ok'tō（**ѻсмь** の **м** は **седмь** の影響）

вьсь「村落」, 古イ vīś「村落、入植地」＜ *u̯ik'-（ゼロ階梯）, ギ οἶκος ＜ *Foἶκος「家」, ラ vīcus「村、田荘」, 古プ 対 w aispattin「所有者、主婦」, リ viẽšpats「君主、家長」＜ *u̯oi̯k'-（o 階梯 ; リ viẽšpats の第二要素は ラ potēns「力強き、支配せる」や 古イ pátiḥ「君主」と同一語根), ゴ weihs「村落」＜ *u̯ei̯k'-（ e 階梯）

2. **зѫбъ**, 古イ jámbhaḥ「歯」, ギ γόμφος「釘」, 古高ド kamb「櫛 ＜ ギザギザ（歯形）を付けたもの」, リ žam̃bas「鋭利な角、角張った先」＜ *g'ombh-

брѣза, リ béržas, 古プ berse, 古高ド birihha, 古イ bhū́rjaḥ「白樺」＜ *bherg'-, bhr̥g'-（§.4 参照）

3. **ѫзъкъ**, 古イ aṁhúḥ, ラ angustus, リ aṅkštas, ゴ aggwus（=angwus)「狭い」, ギ 1・単・現 ἄγχω「狭める、締め付ける」＜ *ang'h-

лижѫ, 不 **лизати**, ギ λείχω, リ 1・単・現 liežiù「なめる」＜ *lei̯g'h-（ e 階梯), 古イ 3・単・現 līhati「なめる」＜ *lig'h-（ゼロ階梯), ラ lingō「なめつくす」（接中辞 -n- を有する、§.12, §.17 第2項 参照), ゴ bi-laigon「舌なめずりをする」＜ *loi̯g'h-（ o 階梯）

語根によっては、軟口蓋子音が純粋のものと摩擦的なものとの両方に現れ

る場合がある。例　：

ГРАДЪ, リ gařdas「囲んだ場所」, ゴ gards「家」＜ *ghordhos, 古イ gṛháḥ「家」（dh の前の gh の g への異化を伴う）、一方、ロ方言 з о р ȍ д「干草の山」, リ žárdas「亜麻乾燥室」, ラト zãrds「えんどう豆と亜麻種の乾燥室」, 古プ sardis「囲んだ場所」＜ *g'hord-

КРАВА, リ kárvė ＜ *kor-u̯-（o 階梯、-u̯- 接尾辞）、一方、**СРЬНА**, 古プ sirwis「鹿」, ラト sirna「シャモア」＜ *k'ьr-n-（低減階梯、接尾辞 -n- を伴う）; cf. 語根 *ker- : *k'er-「つの」及びその以下の交替、ギ κεραός ＜ *κεραFός「有角の」, ラ cornū「つの」, cervus「鹿」。また、以下のものも参照、**СРЬШЕНЬ**「もん雀蜂」＜ *k'ьr-s- すなわち「角状のもので突き刺す昆虫」－ **СРЬШЕНЬ**は、リ širšuõ, 古プ sirsilis, ラ crābrō「雀蜂」＜ *k'ṛ-s-rō, ド Hornisse「雀蜂」＜ Horn ＜ *k'or-n-「つの」、と同類である。

ЧРѢДА「大有角家畜の群れ ＞ 列」, リ keřdžius「牧夫」, 古プ 対 kērdan「時間、一続き」＜ *ker-dh-、一方、 古イ sárdhaḥ「群れ」＜ *k'er-dh-, cf. ゴ haírda「畜群」＜ *ker-dh- : k'er-dh-, キンブリー[3] cordd「群れ」＜ *kor-dh- : k'or-dh-、すなわち、語根 *ker- : k'er-「つの」と接尾辞 -dh- より。

ЦВѢТЪ（スラ祖 *ku̯oi̯t-, o 階梯、cf. チ květ-, ポ kwiat, ポラーブ kjot「花」）, ラト 1・単・現 kvitu「明滅する、閃く」（ゼロ階梯）、一方、**СВѢТЪ**「光」＜ *k'u̯oi̯t-（o 階梯）, **СВЬНЖТИ**「明るくなる」＜ *k'u̯it-n-（ゼロ階梯）, リ šviẽsti「輝く」, švytėti「輝く」, 古イ śvitraḥ「白い、輝かしい」

ЗВѢЗДА（スラ祖 *gu̯oi̯zd-, o 階梯、cf. チ hvězda, ポ gwiazda, 上ソルブ hwězda「星」）、一方、リ žvaigždė, žvaizdė, 古プ 対 swāigstan「光輝」＜ *g'u̯oi̯zd-

ГЖСЬ ＜ *ghan-s-, 一方、リ žąsìs, 古プ sansy, 古イ haṁsáḥ「がちょう」＜ *g'han-s-. cf. ギ χήν, 古高ド gans「がちょう」

СВЕКРЪ ＜ *sṵekr-, 一方、古イ śvaśuraḥ, リ šẽšuras「舅、夫の父」＜ *sṵek'ur-. cf. ラ socer「舅、妻の父」, ギ ἑκυρός ＜ *σFεκυρός 古高ド swëhur「舅、夫の父」

ЖЛЬТЪ ＜ *ghьl-t-（ゼロ階梯), リ geĩtas「黄色い」＜ *gh-el-t-（e 階梯). cf. ギ χολή「胆汁、胆嚢」＜ *ghol-, ラ fel, 属 fellis「胆汁」＜ *hel- ＜ *ghel-, 一方 **ЗЛЬЧЬ** ＜ *g'hьl-k-, しかし中世ブ **ЖЛЬЧЬ** ＜ *ghьl-k-. *g'hel- 型は更に次のものにも認められる、**ЗЕЛЬЕ**, リ žolẽ「草」＜ *g'hōl-, žãlias「緑の」＜ *g'hol-, また、**ЗЛАТО** ＜ *g'hol-t-, リ žeĩtas「黄金の」, 古イ háriḥ「金色の」＜ *g'hol-（古代インド語では、r と l は通常 r に, 希に l に統合される). cf. 古ラ helus ＞ holus「野菜」＜ *ghel- : g'hel-, ゴ gulth「(黄) 金」＜ *ghьl-t-

青年文法学派によれば、r と l が語根末子音である時には、両者間の交替もあり得るのである。例、1・単・現 **ГРЕБЖ**, 2・単・現 **ГРЕБЕШИ** ＜ *ghr-ebh-, **ГРОБЪ** ＜ *ghr-obh-, ギ γράφω「書く、窄つ、彫る」＜ *gṛ-bh-（帯気音の付いた g に替わって、純粋の g が付いている), cf. **ЖРЪБЬИ**「くじ ＜ 印を刻んだ木板、金属板」＜ *ger-bh-, 古プ 対 gīrb-in「数」＜ *gṛ-bh-, 古高ド kerfan「切り抜く、切りとる」＜ *ger-p- であるが、一方 次の例、ギ γλάφω「掘る、窄つ」＜ *gl̥-bh-, ブ方言 глобам, ス globíti「深くする」, глоб「眼窩」＜ *gl-obh-（原語根は「そこに何か別のものを入れるために、何かをくりぬく」の意、cf. с-глоб-явам「組み立てる、一緒に集める」, 西部ブ глóбим「葱、ピーマンを植える」, チ hlobiti「杭を打ち込む」, ポ głobić「固定する」。拡張語根 *gʷer-bh-「胎児」と並んで（cf. **ЖРЪБА**「子馬」, ギ βρέφος「胎児、新生児、幼獣」）、*gʷel-bh-, *gel-bh- の別形も存在している、例、ギ δελφύς「子宮、胎児」＜ *gʷel-bh-, ἀδελφός「同じ胎からの ＞ 兄弟」, ラ vulva ＜ volva ＜volba「子宮」＜ *gʷol-bh-, ゴ kalbo「子牛」＜ *gol-bh- ; 古イ gárbhaḥ「子宮、胎児」は *gher-bh-（bh の前での gh の g への異化を伴う）と *gʷel-bh- の

どちらからも派生した可能性あり。

cf. nōmina agentis（行為主名詞）及び nōmina īnstrūmentī]（道具名詞）を作る接尾辞 -ter-(-tor-, -tr-), -tel-(-tl-), -dhl- における r と l および t と dh の交替。例、ギ δώτωρ, δωτήρ, 古イ dātár-, ラ dator「与える人」< *dō-tor-s, *dō-ter-s, *də-ter-s,（§.37 参照）。一方、**ПОДАТЕЛЬ** < *dō-tel- ; 古イ hantár-, アヴェスタ ǰantar-「打つ人、殺す人」< *gʷhen-tor-, また、一方、**ЖАТЕЛЬ**「穀物刈取人 < 切る人」< *gʷhen-tel- ; 古イ dhā́tar-「創造者」, ラ con-ditor < *condator「創始者」< *dhē-tor-, *dhə-tor-, また、一方、**БЛАГО-ДѢТЕЛЬ** < *dhē-tel- ; **РАЛО** < *ar-dhlo (cf. チ rádlo, ポ radło), リ árklas「鋤」< *ar-tl-o, また、一方、ギ ἄρο-τρο-ν, ラ arā-tr-um「鋤」; cf. **ШИЛО**（チ šídlo, ポ szydło）< *si̯ū-dhl-o, ラ sūbula < *sū-dhl-ā < *si̯ū-dhl-ā(i̯ū の ū への短縮を伴う), 古高ド siula「錐」< *si̯ū-dhl-ā

§．2 古代ブルガリア語母音の起源

10個の印欧語の原母音（a, o, e, u, i, ā, ō, ē, ū, ī）から10個の異なる古代ブルガリア語の母音が得られて然るべきであろうが、すでにスラヴ祖語の時代に、a と o 、ā と ō は統合してしまっている。同様の統合は、他の古代印欧諸語にも存在している。古代インド語の a は、a と o と e の、また ā は、ā と ō と ē の継承であり、ゴート語及び古プロシャ語の a は、a と o の、また o は ā と ō の継承である。ところが、リトアニア語では、a と o は a に融合するが、古い ā と ō の差異はしばしば保存されている － 原母音 ā に対しては ō が対応するが、原母音 ō に対しては、ō 以外に uo が対応することもあり、それはまた語末では u に短縮する。

古代ブルガリア語においては、a, o － ⰾ、e － ⰵ 、u － ⱆ、i - ⱄ のように、また、ā, ō －ⰰ、ē － ⱑ 、ū － ⱇ、ī －ⰻ のように対応するのである。

以下に、古代インド、ギリシャ、ラテン、リトアニア及びゴート語（比較歴史的対照が最もしばしば行われる言語）の、古ブルガリア語母音との対照を表示する。

	原母音	古ブ	古イ	ギ	ラ	リ	ゴ
1	a	ⰾ	a	α	a	a	a
2	o	ⰾ	a	o	o	a	a
3	e	ⰵ	a	ε	e	e	i,aí(＝e)
4	u	ⱆ	u	υ	u	u	u,aú(＝o)
5	i	ⱄ	i	ι	i	i	i
6	ā	ⰰ	ā	η, ドα	ā	o	o(＝ō)
7	ō	ⰰ	ā	ω	ō	o,uo,u	o(＝ō)
8	ē	ⱑ, ⱑⰰ[1]	ā	η	ē	ė[2]	e(＝ē)
9	ū	ⱇ	ū	ῡ	ū	ū	u(＝ū)
10	ī	ⰻ	ī	ῑ	ī	y＝(ī)	ei(＝ī)

（ド＝ドーリス）

例：

1．**ось**，古イ ákṣaḥ，ラ axis，ギ ἄξων，リ ašìs，古プ assis，古高ド ahsa「軸」＜ *ak'-s- ＜ *ag'-s-

остръ，古リ aštras「尖った、鋭い」，古イ áśriḥ「端、切っ先」，ギ ἄκρον「頂点、切っ先」＜ *ak'-r-（挿入音 t を伴う）

орати，リ 1・単・現 ariù，ラ arō，ギ ἀρόω，ゴ arjan「耕す」

соль，ラ sāl ＜ *sal-s，ギ ἅλς，ゴ salt ＜ *sal-，*sal-d-

2．**домъ**，古イ dámaḥ，ギ δόμος，ラ domus「家」＜ *dom-

овьца，古イ áviḥ，ギ ὄϊς，ラ ovis，リ avìs「羊」，ゴ awistr「羊小屋」＜ *ou̯-i-

око，ギ 主・双 ὄσσε「眼」（＜ *okʷ-i-，cf. 主・対・双 **очи** ＜ *okʷ-ī における i 語幹 → §.27 参照），古イ 主・対・双 akṣī「眼」（cf. 生・単 **очесе** における es 語幹 →§.20 参照），リ akìs，ラ oculus「眼」，ア akn「眼、穴」＜ *okʷ-

原母音 o が e の対応階梯である時には、アルメニア語におけるその対応は o あるいは u である － ア lusa-vor（ラ lūcifer と同類）「明るい、明るさをもたらす」＜ *luk'ā-bhor- 参照。Cf. ギ φορός「運んでくるところの」，**съ-боръ** ＜ *bhor- における語根母音の o 階梯と 1・単・現 **берѫ**，ラ ferō，ギ φέρω，ゴ baíra「運ぶ」＜ *bher- における語根母音の e 階梯。原母音 o が e の対応階梯でない時には（例えば、**око**，ラ oculus，ア akn におけるように、上を参照）、それのアルメニア語の対応は a である。したがって、青年文法学派のモデル（§.1 参照）によれば、少なくとも二種類の原母音 o が存在し、その一つは e の対応階梯であり、今一つは e の対応階梯でないものである。

3．**небо**，ギ νέφος「雲」，ラ nebula「霧、雲層」，古高ド nebul「雲」，古イ nábhaḥ「霧、空」＜ *nebh-

БЕРѫ, ギ φέρω, ラ ferō, 古イ bhárāmi , ゴ baíra, ア ber em 「運ぶ」< *bher-

ДЕСѧТЬ, ラ decem , 古イ dáśa, ギ δέκα, ゴ taíhun「十」, 古プ dessempts , リ dešimtas「第十の」 < *dek'm̥-, *dek'm̥t-

呼・単 **ВЛЬЧЕ**, ギ λύκε, ラ lupe, リ vilkè , 古イ vṛ́ka < *u̯lk^w-e

4. **ДЪШТИ**, 古イ duhitā́ , 古プ duckti, リ duktẽ, ア dustr, ギ θυγάτηρ, ゴ daúhtar「娘」 < *dhugh ə -ter-

СНЪХѧ, 古イ snuṣā́, ラ nurus, ギ νυός, ア nu, 古高ド snur < *snus-

РЪДѢТИ「赤くなる」, 古イ rudhirā́ḥ , ラ ruber , ギ ἐρυθρός, リ rūdas「赤い」 < *rudh-

5. **ВЬДОВѧ**, 古プ widdewu, ラ vidua, ゴ widuwo, 古イ vid hávā < *u̯idheu̯ā

ЧЬТО, ラ quid, オスク[4] pid, ギ τί, アヴェスタ čit 「何」 < *k^w-i-d

МЬГЛѧ, リ miglà, ギ ὀμίχλη「霧」, 古イ mih-「雲、雨」, 低・ド miggelen「そぼ降る」 < *migh-

ДЬНЬ, 古イ dī́nam , ラ diēs, リ dienà 「日」< *di-

6. **МѧТИ**, ラ māter, ギ μήτηρ, ドーリス μάτηρ, 古イ mātā́, ア mayr, トカラA mācar「母」, リ mótė「妻」 < *mā-ter-

БРѧТРЪ, ゴ brothar , ラ frāter , 古プ brāti, 古イ bhrā́tā , トカラ pracar「兄弟」, ギ φράτηρ「胞族（フラトリア）の成員」, リ 指小形 broterẽlis < *bhrā-ter-

СТѧТИ, リ stóti「立つ、立ち止まる」, 古プ po-stāt, ラ stāre「立つ、立ち止まる」, 古イ スピ sthātum「立つこと」, ギ ἵστημι, ドーリス ἵσταμι < *σί- στᾱ-μι「立つ」< *stā-

БАЮТИ, ギ φημί, ドーリス φάμί「話す」, ラ fāma「噂」, ア ban「語、言葉」＜ *bhā-

7. **ДАТИ**, ラ dōnum「贈り物」, ギ δί-δω-μι, 古イ da-dā-mi, リ dúoti「与える」＜ *do-

ЗНАТИ, リ žinóti「知っている」, ギ γι-γνώ-σκω「知る」, ラ nō-scō「知る」, 古イ 3・単・現 jānáti「知る」＜ *g'nō-（重い語基）（cf. 古高ド knāen「知る」＜ 重い語基 *g'nē- における ē 階梯）。当初、「自分の氏族を知る、自分の一族に加える、血縁関係にある、産む」を意味した、同語根 *g'nē- : *g'nō- : *g'nə- は（cf. ブ не и скам да те знаяя「お前を血縁者と見なさない、血縁関係を破る」）、次の例にも認められる : 古イ jñátum「名門の生まれ」＜ *g'nō-, *g'nē-, ギ γνήσιος「血縁の、名門の」＜ *g'nē-, ラ cō-gnā-tus「血縁の」＜ *g'n̥- ＜ *g'nə-, ギ γνωτός「知られた、著名な」（γι-γνώ-σκω「知る」の動詞派生形容詞として）, 「友達、同族の者」（γί-γνο-μαι「生まれる」の動詞派生形容詞の名詞化）, ラ cō-gnō-men「姓、家名」＜ *g'nō-, ラ genitor「生める人、父」＜ *genator ＜ *g'enə- ; 次の軽い語基 *g'en- : *g'on- : *g'n- も参照 : ギ γένος, ラ genus「種属、出生、家門」, ラ gī-gn-ō「産む、生ずる」, ギ γί-γνο-μαι「生まれる」、また、*g'en- に替わる異形 *gen- の例 : ラ genū, ギ γόνυ, 古イ jā́nu , ゴ kniu「膝」、更にまた、*g'en- に替わる異形 *gʷen- の例 : **ЖЕНА**（当初は「産む人（女）」の意）, 古イ jániḥ, 古プ 呼 genno, ア kin , ゴ qino「女」 ;「生む、（氏）族、血統、子孫（ブ раждам, род, коляно）」の意味群の単語については、ブルガリア語 коляно（膝、曲がり、節、族、世、代、血統）と同語根の поколение（代、世代、一族）を参照。

双・主・対 **ВЛЬКА**, 古イ vṛ̥ka-u , ギ λύκω, リ vilkù ＜ *u̯l̥kʷ-ō（語幹母音 e の延長対応階梯を有する ; cf. 正常階梯の呼格 **В**

ЛЬЧЕ ＜ *u̯l̥kʷ-e 、上記第３項参照）。

上例から判るように、原母音 ō が e ないしは ē の対応階梯である時には、語中音節でのリトアニア語の対応形は ō であり（cf. **ЗНАТИ**, リ žinóti, ラ nōscō「知る、認識する」, ギ γι-γνώ-σκω「知る、認める」）、原母音 ō が e（ē）の対応階梯でない時には、語中音節でのリトアニア語の対応形は uo である（ cf. **ДАТИ**, リ dúoti, ギ δί-δω-μι「与える」, ラ dō-num 「贈り物」）。したがって、青年文法学派のモデルにしたがえば（§.1 参照）、少なくとも二種類の異なる原母音 ō があり、その一つは e（ē）の対応階梯のものであり、今一つは e（ē）の対応階梯でないものである。

こうして、e の対応階梯でない原母音 o にたいしてはアルメニア語では a が対応し（上記第２項参照）、リトアニア語の語中音節での、その延長階梯 ō の継承が uo である。一方、e（ē）の対応階梯である原母音 o に対して、アルメニア語では o が対応し（上記第２項参照）、それの延長階梯 ō の、リトアニア語語中音節での継承が ō である。次例参照 ： **ІАСЕНЬ**（語頭にヨットを伴う）, リ úosis「とねりこの木」＜ *ōs-, ア haçi「とねりこの木」＜ *osk'-, ラ ornus 「とねりこの木、槍」 ＜ *osenos（ cf. ブ方言 о с е н「とねりこの木」）, ギ ὀξύη「ぶなの木、槍」, 古アイスランド語 askr「とねりこの木」＜ *os- 。一方、次例 ：**ГОВЛДО**, ア kov「雌牛」, ギ 属・単 βοός ＜ *βοFός ＜ *gʷou̯- ＜ *gʷi̯ou̯-（三重母音 i̯ou̯ の ou̯ への短縮）, ラト gûovs「大形有角獣」, リ gõta, gõtas「羊群、豚群」（語中音節に ō を有する）, gúota, gúotas , 古イ gāúḥ, ラ bōs（オスク語・ウムブリア語からの借用）「牛」＜ *gʷōu̯- ＜ *gʷi̯ōu̯- 。語根母音の古い e 階梯は次の諸例にみられる ： 1・単・現 **ЖОУЖ**, 2・単・現 **ЖОУЕШИ** ＜ *gʷi̯eu̯-, 不 **ЖЬВАТИ** ＜ *gʷiu̯-（ゼロ階梯）「食べ物を咀嚼する」, ブ方言 ж в а к а м, ロ ж е в а т ь「咀嚼する」, ブ п р е ж и в я м（咀嚼する） ; cf. リ 複 žiáunos「顎」＜ *gʷi̯ou̯-,

ア kiv「樹脂（香）」（ロ ж и в й ц а［テルビン油、含油樹脂］，チ živice［樹脂、タール］，上ソルブ živica「白い松脂」も参照），古高ド kiuwan「咀嚼する」（異化による、ゲルマン祖語の kṵ ＜ gʷ から k への変化を伴う）。すなわち、**говѧдо**, ラ bōs, 古イ gāúḥ ＜ *gʷōṵ- ＜ *gʷi̯ōṵ- は「反芻動物」を意味したのである。同一の語根 *gʷi̯eṵ- : *gʷi̯oṵ : *gʷiṵ から、**живѫ**, **живеши**「生きる、すなわち、食べる」（cf. ロ ж и в о т「胃」），**гоѭ**, **гоиши** ＜ *gʷoi̯ -「（ある人を）食べさせる、養育する」（§.6 参照），**житo**「食物、糧」。**гоѭ**, **гоиши**のような例は、本来の始原的な語根は *gʷi- であり、u は始原的な語根拡張子であることを示している、cf. 不 **жити** ＜ *gʷī-（§ .13 参照）。

何故青年文法学派のモデルでは二つの異なる母音 o（ō）－ o ＞ ア a、そして ō ＞ リ uo であるのに、一方では、o ＞ ア o、そして ō ＞ リ ō － があるかについては、§.3 で示すことにする。

8．**сѣмѧ**, ラ sēmen「種子」，リ sḗmenys「亜麻種」，ゴ mana-seths「人類、人間」（逐語的には、人間の種子）＜ *sē-

ѩмь, リ 古 ḗmi, ḗdu「食べる」，ゴ 1・複・過 etum, ラ 1・単・完 ēdī「食べた」，ギ 完・分 ἐδ-ηδ-ώs，古イ ād-i-vān「食べた人」＜ *ēd-（§.12 参照）

вѣрѧ, ラ vērus「真の」，ゴ tuzwerjan「疑う」＜ *u̯ēr-

9．**мъшь**, 古イ mūṣ-, ギ μῦς，ラ mūs, 古高ド mūs「ネズミ」＜ *mūs-

дъмъ, 古イ dhūmáḥ, リ 複 dúmai, ラ fūmus「煙」，ギ θυμός「魂、気、息」＜ *dhū-

въмѧ,（語頭添加音 prothesis **в** を伴う），古イ ū́dhar, ラ ūber, 古高ド ūtar「家畜の乳房」＜ *ūdh-

бъти, リ būti, 古イ bhū́tiḥ「存在」，ギ 1・単・Ⅱアオ ἔφυν「生ずる、生まれである」，古ラ 1・単・完 fuī「あった」＜

*bhū-

10. **ПИТИ**, 古イ pītíḥ, ギ π ί ν ω「飲む」＜ *pī-

対・複 **СВИНЬѦ**, ゴ swein「豚」, ラ suīle「豚舎」＜ *su̯ī-

対・複 **ТРИ**, 古イ trī, アヴェスタ θrī「3」, 古高ド drī「3」, ラ trī-gintā「30」＜ *trī-

スラヴ祖語の極めて重要な変化過程として、下向き二重母音の単母音化がある。原二重母音の ei̯ に対しては、子音前あるいは絶対的語末において **И** が、oi̯(ai̯) に対しては **Ѣ** ないしは **И** が、eu̯ に対しては **Ю** が、ou̯(au̯)に対しては **ОУ** が対応する。原二重母音 em (en) に対しては **Ѧ** (グラゴール文字、**Ѥ**) が、om(on, am, an) に対しては **Ѫ** (**Ѥ**) が対応する。原初的な結合群 er, el, or(ar), ol(al) は、子音前では **РѢ**, **ЛѢ**, **РА**, **ЛА** を与えるが、絶対的語末では、鳴子音 r は消失した (**ВОДА** ＜ *u̯od-ōr, cf. ギ 中・単 ὕ δ ω ρ , ヒッタイト 主・対・中・複 widār (u̯idār) ;主・単 **МАТИ** ＜ *mātēr, ギ μ ή τ η ρ, ラ māter 参照)。

以下には、原二重母音の、古代ブルガリア、古代インド、ギリシャ、ラテン、リトアニア及びゴート語における対応表を掲げる。

	原母音	古ブ	古イ	ギ	ラ	リ	ゴ
1	ai̯	**Ѣ И**	e	α ι	ae	ie,ai	ai
2	au̯	**ОУ**	o	α υ	au	au	au
3	am	**Ѫ**グ**Ѥ**	am	α μ	am	am	am
4	an	**Ѫ**グ**Ѥ**	an	α ν	an	an	an
5	ar	**РА**	ar	α ρ	ar	ar	ar
6	al	**ЛА**	ar	α λ	al	al	al
7	oi̯	**Ѣ,И**	e	ο ι	ū	ie,ai	ai
8	ou̯	**ОУ**	o	ο υ	ū	au	au
9	om	**Ѫ**グ**Ѥ**	am	ο μ	um	am	am
10	on	**Ѫ**グ**Ѥ**	an	ο ν	on	an	an
11	or	**РА**	ar	ο ρ	or	ar	ar
12	ol	**ЛА**	ar	ο λ	ul	al	al
13	ei̯	**И**	e	ε ι	ī	ie,ei	ei(=ī)
14	eu̯	**Ю**	o	ε υ	ū	jau	iu
15	em	**Ѧ**グ**Ѥ**	am	ε μ	em	em	im
16	en	**Ѧ**グ**Ѥ**	an	ε ν	en	en	in
17	er	**РѢ**	ar	ε ρ	er	er	aír(=er)
18	el	**ЛѢ**	ar	ε λ	ul	el	il

例　:

1. **ДѢВЕРЪ**, リ dieverìs, 古イ devár, ギ δᾱήρ ＜ *δαFήρ, ア taigr「夫の兄弟」＜ *daiu̯ -

ЛѢВЪ, ラ laevus, ギ λαιός ＜ *λαιFός「左の」＜ *laiu̯-

2. **СОУХЪ**, リ saũsas, 古プ sausai（古い所格派生の副詞）＝**СОУСѢ**, ギ αὖος ＜ *σαῦσος「乾いた」, 古イ śóṣaḥ「乾燥」＜ *sau̯s-

ТОУРЪ, リ taũras「野牛」, 古プ tauris「野牛」, ラ taurus「雄牛」＜ *tau̯r-

ОУХО, リ ausìs, 古プ 対・複 ausins, ラ auris ＜ *au̯sis（cf. aus-cultāre「傾聴する」）, ゴ auso「耳」＜ *au̯s- 、ところが、ギ οὖς, 属 οὔατος（ホメロスの言語）＜ *ou̯s-n̥-t- においては、n は古い属格語尾であり（§.36 参照）、t は不活格類名詞（後、中性名詞 － §.39 参照）に属することの指標である。何故、ギリシャ語において、予期される αυ（cf. ラ auris〔耳〕）の替わりに ου が来るかについては、§.3 において説明する。

3. **КЖПИНА**「いばらの茂み、黒いちごの茂み」(cf. チ kupina, ポ kępina「川中、湖上の樹木の茂った小島」), ラ campus「平地、広場」, リ kam̃pas「角、片隅、一地区」, ギ καμπή「カーブする所」＜ *kamp-。「カーブ、屈曲」＞「平地、平原」への変遷については、**ЛЖКА**＝ リ lankà「雪解け水で冠水する牧草地」, leñkti「曲げる」=**ЛѦКЖ**, 不 **ЛѦШТИ**「曲げる、伸ばす、張る」,**ЛЖКЪ**「曲がっているもの、ぴんと張ったもの」を参照。

4. **ЖЗЪКЪ**, 古イ aṁhúḥ, ラ angustus, ゴ aggwus, リ añkštas「狭い」, ギ 1・単・現 ἄγχω「締め付ける」＜ *ang'h-

ЖТЪ, 生 **ЖТЪВЕ**, リ ántis, 古プ antis, ラ anas, 属 anatis「鴨」＜ *ant-（§.4 も参照）

5. **РАЛО**, リ árklas, ギ ἄροτρον, ラ arātrum＜ *ar-（§.4

も参照）

рамо, ア armukn「肘」, ゴ arms「手」, ラ armus「上はく、肩部」＜ *arm-（§.4 も参照）

6. **сладъкъ**, リ saldùs「甘い」（**соль**と同語根より、cf. ゴ salt, ラ sāl, 属 salis, ギ ἅλς「塩」）＜ *sal-d-

слама, ラト salȷms「藁」, 古プ salme「藁」, ギ κάλαμος「藁、葦の茎」, 古高ド halm「草の茎」＜ *k'olm-（§.4 も参照）

7. **вѣдѣти**, ギ 1・単・完 οἶδα ＜ * Foῖδα, 古イ vēda, ゴ 1・単・現 wait, 古プ 1・複 waidimai「私たちは知る」＜ *u̯oi̯d-

цѣна, ギ ποινή「支払、身代金」, リ káina「価格」, ラ pūniō「罰する、報復する」＜ *kʷoi̯n-（ラ poena「罰、贖い」は ギ ποινή からの借用である、cf. ロ пеня「罰、贖い」は、これまたラテン語からの借用であるポーランド語 pena を経たもの）

единъ, **инъ**（**ед**- は不定性を強めるための要素、cf. ブ еди-кой си「誰か、何か」）, ラ ūnus ＜ 古 oinos, ゴ ains「一」＜ *oi̯n-

2・単・命 **бери**, 古イ 2・単・希 bháres, アヴェスタ barōiš, ギ φέροις, ゴ baírais「運びなさい」＜ *bher-oi̯-s（§.17, 第 6 項参照）

8. **строуꙗ**（ epentheticum 挿入音 t を伴う）, リ sraujà「流れ」, ギ ῥόος ＜ *ῥόFος「流れ」＜ *srou̯-（語根母音の o 階梯）; cf. ギ ῥεῦμα「流れ、川」＜ *sreu̯- における e 階梯

боудити, 古イ bodháyati「眼をさまさせる」＜ *bhou̯dh-（語根母音 o 階梯を伴う使役動詞、§.6 参照）。cf. ギ πεύθομαι「照会する、知る」, ゴ anabiudan「指図する、指示する」, **блюдѫ**「見守る、注視する」＜ *bheu̯dh- における e 階梯 ; **бъдръ** ＜ *bhudh- における語根母音ゼロ階梯参照。

роуда, リ raũdas「赤っぽい、赤黄色の」, 古イ rōhitaḥ, ラ rūfus, ゴ rauths「赤い」＜ *rou̯dh-

ЛОУЧА, 古イ rokáḥ,ラ lūx「光、明かり」, リ laũkas「額に白い斑点のある動物」< *louk- ; cf. ギ λευκός「明るい」, ゴ liuhath「光、明かり」< *leuk-における語根母音の e 階梯

ОУСТА, 古イ óṣṭaḥ「唇」, 古プ 対 āustin「口」, ラ 指小 ausculum「小さな口」< *aus- ; cf. リ uostà「口」, úostas「河口、港湾」, ラ ōs , 属 ōris < *ōsis「口」, ōstium「河口」, 古イ ās-「口」< *ōus- (e の階梯ではなく、二重母音 ōu の ō への短縮)

9. **ЗЖБЪ**, 古イ jámbhaḥ「歯」, ギ γόμφος「歯、楔、木釘」, リ žambas「尖った角、端」, 古高ド kamb「櫛、つまりギザギザのある」< *g'hombh-

10. **ПЖТЬ**, 古イ pánthaḥ「小道、細道」, ラ pōns, 属 pontis「橋」, ギ πόντος「海、海路」, ア hun「浅瀬、渡河(点)」(n の前で、o が u に替わった), < *pont-

11. **ПРАСЯ**, リ paršas「子豚」, ラ porcus「豚」, 古高ド farah「子豚」< *pork'-

РАБЪ, ラ orbus, ア orb, ギ ὀρφανός「孤児」, 古イ árbhaḥ「男の子、少年」, ゴ arbi「相続、遺産(逐語的には孤児の所有物)」< *orbh-

ГРАДЪ, ゴ gards「屋敷、家」, リ garďas「垣、囲い」< *ghor-dh- ; cf. **ЖРЬДЪ**「木、樹枝、棒」< *ghьr-dh- における低減階梯。ラ hortus「庭」, ギ χόρτος「囲んである場所、放牧地」< *ghort-が示しているように、dh や t は古い語根拡張子である。

12. **ЛАКЪТЪ**, リ alkūnė , 古プ alkunis, ゴ aleina, ラ ulna, 古イ aratníḥ「肘、尺骨」< *ol- 。 *ōl- の変異形からは リ úolektis , 及び ギ ὠλένη「肘」が派生している。

13. **ЗИМА**, リ žiemà, ギ χεῖμα「冬」, 古イ héman「冬期に」< *g'heim-

СТИГНЖТИ, ギ στείχω「行く、近づいて行く」, ゴ steigan

「上がる、上る」＜ *steiǫgh-

ВИДЪ, リ véidas「顔」, ギ ε ἶ δ ο ς ＜ *F ε ἶ δ ο ς「姿、形、様子」＜ *u̯eid-

14. **ЛЮБИТИ**, ゴ liufs「可愛い、愛すべき」, リ liaupsẽ「讃美、賛歌」＜ *leu̯bh-

БЛЮДѪ, **БЛЮДЕШИ** (epentheticum **Л** を伴う), ギ π ε ύ θ ο μ α ι「知る、情報を得る」, ゴ ana-biudan「指示、指令する」＜ *bheu̯dh-

15. **ТРѦСѪ**, **ТРѦСЕШИ**, ギ τ ρ έ μ ω, ラ tremō「震える」＜ *trem-

16. **ПѦТЬ**, ギ π έ ν τ ε, ゴ fimf, 古イ páñca「5」, リ penkì「5」＜ *penkʷ-, penkʷt-

17. **БРѢЗА**, リ bẽržas, 古プ berse「白樺」, ゴ baírhts「明るい、光輝く」＜ *bherg'- (§.4 も参照)

ЧРѢДА「有角家畜群」, リ keřdžius「牧夫」, ゴ haírda「家畜の群れ」＜ *kerdh-, cf. 古イ śárdhaḥ「家畜の群れ」＜ *k'erdh-

18. **ПЛѢВА**, 古プ pelwo, リ 複 pẽlūs「殻、籾がら」＜ *pelu-

スラヴ祖語の二重母音は、母音前、すなわち別音節前では、単母音化していない。しかし、二重母音の ei̯ は、 ii̯ ＞ьi̯ へと変化した（次例参照、ラ 主・複 hostēs「敵」, ゴ gasteis「客」＜ *ghost-ei̯-es, ところが一方、**ГОСТЬЕ** ＜ スラ祖 *gost-ii̯-es ＜ *ghost-ei̯-es ; 古イ 主・男・複 tráyaḥ, ギ τ ρ ε ῖ ς , クレタ τ ρ έ ε ς, ラ trēs「3」＜ *trei̯-es, 一方、**ТРЬЕ** ＜ スラ祖 *trii̯es ＜ *trei̯es）。また、一方、二重母音の eu̯ は、硬母音の前では ou̯ に変わっている（次例参照、ギ ν έ ο ς, ヒッタイト newa-, ゴ niujis「新しい」＜ *neu̯- であるのに **НОВЪ**; ギ κ λ έ ο ς「栄光、栄誉、名声」＜ *k'leu̯-os であるのに **СЛОВО**）。同様の eu̯ ＞ ou̯ 変化はイタリア諸語にも観察される ― cf. novus「新しい」＜ *neu̯-os 。 u 語幹名詞の曲用において、格形の中で -**ЕВ**- に替わる接尾辞 -**ОВ**- は類推（アナロジー）によって現れるものである ― 例、主・複 **СЪНОВЕ** ＜ *sūn-eu̯-es は、生・複 **СЪНОВЪ** ＜ *sūn-eu̯-on

の影響によるものであり、この場合、eu̯ ＞ ѻв の交替は規則的である。

二重母音の er, el, em, en は、母音 e が 低減階梯の時、ьr, ьl, ьm, ьn に替わるか、また別の記録では r̥, l̥, m̥, n̥ に替わっている。前者の記録は、古ブルガリア語の書記法に近いが（語根母音の低減階梯を持つ **влькъ**, **вьлкъ**[3] ＜ *u̯ьlkʷ-、 cf. 1・単・現 **влѣкѫ** ＜ *u̯elkʷ- における e 階梯と **ѻблакъ** ＜ *obh-u̯olkʷ- の o 階梯）、後者の記録は、学者達が古代インド文字（デーヴァナーガリー）を転写する方法に似ている（**влькъ**, **вьлкъ** に対する 古イ vṛ̥kaḥ「狼」参照）。書法として、二方法とも（ьr も r̥ も）使うが、長母音を示したい時には r̥̄ の表示のみを使用することにする。

子音前では、始原的結合 ьr, ьl, ьm, ьn（すなわち、母音 r̥, l̥, m̥, n̥ ）は、古代ブルガリア、古代インド、ギリシャ、ラテン、リトアニア、ゴート語において、次のような対応を有する：

	始原的結合	古ブ	古イ	ギ	ラ	リ	ゴ
1	ьr(r̥)	**рь, ръ, ьр, ър**	r̥	ρα, αρ	or	ir,ur	aûr(=or)
2	ьl(l̥)	**ль, лъ, ьл, ъл**	r̥	λα, αλ	ul	il,ul	ul
3	ьm(m̥)	**ѧ**, グ **ѭ**	a	α	em	im	um
4	ьn(n̥)	**ѧ**, グ **ѭ**	a	α	en	in	un

例：

1. **срьдьце**, リ širdìs, ギ καρδία, καρδίη, ラ 属 cordis「心臓、心」＜ *k'r̥d- ; cf. **срѣда** ＜ *k'erd- の語根母音の e 階梯、また ゴ haírto「心臓、心」, リ šerdìs「心（しん）、中心」も参照。

съ- мрьтъ, リ mirtìs, 古イ mṛ̥tiḥ, ラ 属 mortis, ゴ maûrthr「殺人」＜ *mr̥-t-

2. **влькъ**, ゴ wulfs, 古イ vṛ̥kaḥ, リ vìlkas「狼」＜ *u̯l̥kʷ-

3. **десѧть**, リ dešimtas「第十の」, 古イ dáśa, ラ ＞ decem, ギ δέκα, ゴ taíhun「十」＜ *dek'm̥- , *dek'm̥-t-

4. **ПАМѦТЬ**, 古リ　mintìs「思考 、思い」, 古イ　matíḥ「思考、考え」, ラ 属　mentis「思考、知性」, ゴ　ga-munds「記憶、覚え」, ギ　*αὐτό-ματος*「自動の、自発的」< *mṇ-t-

子音前では、始原的な長母音 r̥̄, l̥̄, m̥̄, n̥̄ は、古代ブルガリア、古代インド、ギリシャ、ラテン、リトアニア、ゴート語において、次のような対応関係を有する：

	原母音	古ブ	古イ	ギ	ラ	リ	ゴ
1	r̥̄	**ѻЬ, ѻЪ, Ьѻ, Ъѻ**	īr,ūr	*αρα, ρω, αρο*	rā	ir,ur	aúr(=or)
2	l̥̄	**ѦЬ, ѦЪ, ЬѦ, ЪѦ**	ūr,īr	*λᾱ, ολ*	lā	il,ul	ul
3	m̥̄	**Ѧ**, グ **Ѥ**	ā	*μᾱ*	mā	im	um
4	n̥̄	**Ѧ**, グ **Ѥ**	ā	*νᾱ*	nā	in	un

例（§ .4 も参照）：

1．受過分・主・男・単　**ПРОСТѻЬТЪ**, 古イ stīrṇáḥ 「まき散らした」, ギ　*στρωτός*, ラ　strātus「敷かれた、広がった」 < *str̥̄-

2．**ПѦЪНЪ**, 古イ　pūrṇáḥ, リ　pìlnas, ゴ　fulls < *pl̥̄n-

語末閉音節では、原母音はもっと別の方法で変化した。それらに対する古代ブルガリア語の対応は次の通りである　：

Ⅰ. os > **Ъ**	i̯os > **Ь**
Ⅱ. on > **Ъ**	i̯on > **Ь**
Ⅲ. us, un > **Ъ**	is, in > **Ь**
Ⅳ. ōs > **Ѡ**	i̯ōs > **И**（ Ⅸ も参照）
Ⅴ. ōn(ōm, ām, ān) > **Ѫ**	i̯ōn(i̯ōm, i̯ām, i̯ān) > **ІѪ**
Ⅵ. ons > **Ѡ**	i̯ons > **Ѧ**, 古ロ **Ѣ**
Ⅶ. āns > ons > **Ѡ**	i̯āns > i̯ons > **Ѧ**, 古ロ **Ѣ**
Ⅷ. uns > **Ѡ**	ins > **И**
Ⅸ. ōi̯s > ōs > **Ѡ**	i̯ōi̯s > i̯ōs > **И**

語末の位置における us > ъ 及び is > ь の変化（Ⅲ）は、語末子音の消失（いわゆる開音節法則）に続く u > ъ 及び i > ь の規則的変化を表している。語末の位置での un, in（Ⅲ）は、初ず狭い鼻母音 ǫ, ę に変わったが、古代ブルガリア語の鼻母音にはならず、その随伴鼻音を失って、ъ 及び ь をもたらした。語末結合群 os, on（Ⅰ，Ⅱ）は、狭まって、 us, un に変わり、また同じく、ǫ, ę を介して、ъ, ьをもたらした。同様にして、ios, ion（Ⅰ，Ⅱ）は ь をもたらした（ios > ь 及び ion > ь の変化は、os > us > ъ 及び on > un > ъ の変化を基に変換することによって、ios > ius > iъ > iь > ь, ion > iun > iъ > iь > ь のような展開過程として示すことができる）。 os > us > ъ（Ⅰ，Ⅲ）の変化に合わせて、始原的な語末結合 ōs は ūs を経て、ѫ となり、また始原的結合 iōs は iūs を経て、ѧ となった（Ⅳ）；cf. 本節冒頭の表に基づいて並べた u > ъ : ū > ѫ = i > ь : ī > ѧ 及び Ⅰ，Ⅲ，Ⅳに基づいて並べた os > us > ъ : ōs > ūs > ѫ = ios > ius > ь : iōs > iūs > ѧ の平衡関係。始原的な語末結合 uns, ins は長い狭い鼻母音 ǫ, ę を媒介として（古代ブルガリア語の鼻母音には発展しなかったが)、ѫ 及び ѧ をもたらした（Ⅷ）。 un, in は、むき出しの語末の位置（絶対的語末）では ǫ > ъ, ę > ь となったが（Ⅲ）、閉じた語末の位置（子音 s の前）では、鼻音化の際長母音化したのである。語末結合 ons は uns > ǭ を介して ѫ となった（Ⅵ）； cf. un > ǫ > ъ : uns > ǭ > ѫ = on > un > ǫ > ъ : ons > uns > ǭ > ѫ の平衡関係。語末結合 ions からは、e の狭い長い鼻母音が得られた。古代ブルガリア語の基になった方言も含めて、スラヴ祖語方言の一部では、それは ѧ に変わったが、西スラヴや東スラヴ語の基になった別のスラヴ祖語方言では、鼻母音の早期消失によって、それは他のすべての長母音 e がそうであったのと同じように、すなわち ѣ に変わったのである。閉じた語末の位置（子音 s の前）では、長い二重母音 ān（ām）は an（am）に短縮し、その結果更に、a と o のスラヴ祖語における同一化によって、 āns 結

合は ons ＞ ѫ に変わった。同様にして、 i̯āns 結合は i̯ons ＞ 古代ブルガリア語 ѧ, 古代ロシア語 ѣ に変わっている（Ⅶ）[5]。

閉じた語末の位置（子音 s の前）では、原二重母音 ōi̯ は ō に短縮し、その結果、ōi̯s 結合は ōs を介して ѫ に変わり、同様にして始原的結合 i̯ōi̯s ＞ i̯ōs は и に変わったのである（Ⅳ, Ⅸ）。

例：

Ⅰ. 主・単 ВЛЬКЪ ＜ *u̯l̥kʷos, cf. 古イ vṛ̥kaḥ, ギ λύκος, ラ lupus, リ vìlkas「狼」

1・複・現 БЕРЕМЪ ＜ *bher-e-mos, cf. ラ ferimus「我々は運ぶ」＜ *bher-e-mos

与・複 СЪНЪМЪ ＜ *sūn-u-mos, cf. 古ラ 与・複 quercubus「オークの木」＜ *perkʷ-u-bhos（§. 32 の第4項参照）

主・単 ВОЖДЬ ＜ *u̯odh-i̯os, cf. ラ alius, ギ ἄλλος, ゴ aljis「別の、他の」＜ *ali̯os, リ élnias「鹿」＜ *elni̯os

例えば、НЕБО ＜ *nebhos のような es 語幹の主・対格形は（cf. ギ νέφος「雲」, 古イ nábhas-「霧、空」）、ИГО ＜ *i̯ug-o- の例と同じく、o 語尾を有する。

Ⅱ. 1・単・単純アオ ПАДЪ ＜ *pōd-om, cf. 1. 未完 ἔφερον＝ 古イ ábharam「私は運んでいた」＜ *e-bher-om

対・単 ВЛЬКЪ ＜ *u̯l̥kʷ-on, cf. 古イ vṛ̥kam, ギ λύκον, ラ lupum, リ vìlką

対・単 ВОЖДЬ ＜ *u̯odh-i̯on, cf. ラ alium, ギ ἄλλον, ゴ aljan-a「別の」＜ *al-i̯on

Ⅲ. 対・単 СЪНЪ ＜ *sūn-un, cf. 古イ sūnúm, ギ πῆχυν「肘、腕」, ラ querc-um「オークの木」＜ *perkʷ-un, リ sūnų「息子」

対・単 НОШТЬ ＜ *nokʷt-in, cf. リ nãktį, 古イ matím ＜ *mn̥t-in「思考、考え」, ギ πόλ-ιν「町」, ラ turrim「塔」

IV.　主・複　**МЫ** ＜ *mōs,　cf. リ　mẽs, 古プ　mes, ラト mẽs「我々」, o 階梯に替わって、e 階梯を伴う、また　ラ　主・複　nōs「我々」＜ *n-（代名詞語根、§．35 参照）

主・複　**ВЫ** ＜ *u̯ōs（ ＝ ラ　主・複　vōs「あなた達」）

V.　対・単　**ЖЕНЖ**, グ　**ЖЭРЭЄ** ＜ *gʷen-ān, cf. 古イ　áśvām ＝ラ　equam「牝馬」＜ *ek'u̯-ān,　ギ　χώρᾱν「国、地方」, リ　rañk ą ＝ **РЖКЖ**

1・単　**БЕРЖ**, グ　**ЬЭЬЭЄ** ＜ *bher-ō-m　（§ .35参照）

造・女・単　**ТОЮ**, グ　**ѾЭѦЄ** ＜ *toi̯-ām

VI.　複・対　**ВЛЬКЫ** ＜ *u̯l̥kʷ-ons,　cf.　クレタ　λύκους,　ゴ　wulfans「狼（複）」, 古プ　deiwans「神（複）」

現在能動分詞・主・男・単　**СЫ** ＜ *sons ＜ *sonts, cf.　古イ　sán, ギ　ὤν ＜ *sonts（ ＝ being)。例えば、スラヴ祖語の *sų̄ ＜ *sons ＜ *sonts に、前接語（enclitic）として主格男性単数の前方照応代名詞（承前代名詞、anaphora）*i̯ь（ ＝**И**）が後続するとき、古い鼻母音 ų̄ ＜ on s は語末位置に来ず、その鼻母音的調音を残している。Cf. 承前代名詞付加分詞形（長語尾形）**СѦИ**（グラゴール　**Ѹ**ЄЪ）, **СЖИ**、また、承前代名詞なしの分詞形（短語尾形）**ГРѦДЫ**, **ЖИВЫ**, **ѢДЫ**　に対する承前代名詞付分詞形（長語尾形）**ГРѦДѦИ**, **ЖИВѦИ**, **ѢДѦИ**, **ГРѦДЖИ**, **ЖИВЖИ**, **С ТРѢГЖИ**　も同様。おそらく、**Є**（上記のキリール文字の翻字では **Ѧ** を以て伝えられる）は、硬い閉じた鼻母音を表す記号である。

主・単　**КАМЫ** ＜ *kāmons（ §.37 参照）

対・複　**ВОЖДѦ** ＜ *u̯odh-i̯ons,　cf.　ゴ　aljans「別の（もの）」、ただし、古ブ　**КЛЮЧѦ**, **ВОѦ**, **ЦѢСАРѦ**, **КОНѦ**　に対して、古ロ　**КЛЮЧѢ**, **ВОѢ**, **ЦѢСАРѢ**, **КОНѢ** 参照。

能動現在分詞・主・男・単　**ПЛАЧѦ** ＜ *plāk-i̯ons ＜ *plāk-i̯onts　スラヴ祖語の現在語幹接尾辞 -ī- を持つ動詞（例えば、1・単・現　**МОЛЮ**, 2 **МОЛИШИ**, 不　**МОЛИТИ**, 1・単・現　**МЬНЮ**, 2 **МЬНИШИ**, 不　**МЬН**

ѢТИ）は、能動現在分詞主格男性単数形を、現在語幹接尾辞 -i̯o-（-i̯e-）を持つ動詞（**ПЛАЧЖ**, **ПЛАЧЕШИ**, **ПЛАКАТИ**）をモデルにして、形成した ー 例、**МОЛѦ** < *mol-īns < *mol-īnts . **МЬНѦ** < *mь n-īns < *mь n-īnts 。単純アオリスト（п р о с т　а о р и с т）3人称複数形を持つ動詞は、現在形をモデルにして、その形を形成した ー 例、3・複・単純アオ **ПАДЖ** < *pōd-ont, 3・複・現 **ПАДЖТЪ** < *pōd-ont-i（§ .19 参照）。

Ⅶ. 主・対・複／生・単 **ЖЕНЪ** < *gʷen-āns, cf. 古プ 対・複 gennans「女達」, クレタ 対・複 χώρανς「国、地方」

主・対・複 . 生・単 **БОУРѦ** < *bhou̯r-i̯āns, ただし、古ブ **ЗЕМЛѦ**, **ВОНѦ**, **ПЬШЕНИЦѦ**, **ПЬТИЦѦ**, **ДОУШѦ** に対する 古ロ **ЗЕМЛѢ**, **ВОНѢ**, **ПЬШЕНИЦѢ**, **ПЬТИЦѢ**, **ДОУШѢ** 参照。

Ⅷ. 対・複 **СЪНЪ** < *sūn-uns, cf. 古イ sūnū́n, クレタ υἱύνς「息子達」< *sū-i̯-uns（**СЪНЪ**の **Н** は古い語根拡張子、語根 *su- の意味については、§ .33 参照）, ゴ sununs

対・複 **НОШТИ** < *nokʷt-ins, ゴ 対・複 gastins = **ГОСТИ** < *ghost-ins

Ⅸ. 造・複 **ВЛЬКЪ** < *u̯l̥kʷ-ōs < *u̯l̥kʷ-ōi̯s, cf. 古イ vr̥kaiḥ, アヴェスタ vəhrkāis「狼達と共に」, おそらく、リ 造・複 vilkaĩs も *u̯l̥kʷ-ōi̯s から、原初期の ōi > oi への短縮に次いで発生したものである；ラテン語、奪・与 lupīs < *u̯l̥kʷ-oi̯s < *u̯l̥kʷ-ōi̯s も参照。

§．3　ラリンガル（喉音）・モデル

青年文法学派モデルの唯一の欠点は、二つの異なるタイプの語根（いわゆる、軽い語基と重い語基）と二つの独立母音　a　と　e（一方が他方の階梯ではなく、軽い語基に五つの階梯、重い語基に三つの階梯を有する）、そしてある語根では　e　の対応階梯、別の非常に少数の語根では　a　の対応階梯、これまたある少数の語根では独自の階梯（軽い語基に三つ、重い語基に二つ）を持つある第３の母音　o　、を前提とする母音階梯の体系である。この煩雑な、またシムメトリーを欠く状態は、いわゆるラリンガル（Laryngeal）・モデルの助けを借りることによって － それは、いくらかは抽象的な手法で設定され、またいくらかはヒッタイト語の資料とも合致しているのであるが － 排除できる。ラリンガル・モデルの基本構想は次の通りである：

1.　三つの音声学的要素　H_1, H_2, H_3　が存在した。

2.　それらは、母音　e　と隣接する時脱落し、母音　e　とその対応階梯　o　は、次のようなルールで変化を行った：

$H_1e > e$	$H_1o > o$	$eH_1 > \bar{e}$	$oH_1 > \bar{o}$
$H_2e > a$	$H_2o > o$	$eH_2 > \bar{a}$	$oH_2 > \bar{o}$
$H_3e > o$	$H_3o > o$	$eH_3 > \bar{o}$	$oH_3 > \bar{o}$

e　と　o　の延長階梯は、非延長階梯と同じように変化を行った（$H_1\bar{e} > \bar{e}$, $H_2\bar{e} > \bar{a}$　等）。

3.　母音　e　がゼロ階梯の時には、H_1, H_2, H_3　は同一母音に変じた（古代インド語では　i、ラテン語では　a、古代ブルガリア語では　ъ、ギリシャ語では　α、ギリシャ語は時に　$H_1 > \varepsilon$, $H_2 > \alpha$, $H_3 > o$　の結果を得る；これは、アナロジーによって、語根母音が　e　階梯の場合に合わせたものである － 次例参照、１・単・未　θήσω「置くだろう」

＜ *dheH$_1$-s-, 動詞派生形容詞 θετός「据えた、定まった」＜ *dhH$_1$-t- ; ドーリス 1・単・未 στάσω「置くだろう」＜ *steH$_2$-s-, 動詞派生形容詞 στατός「据えた」＜ *stH$_2$-t- ; 1・単・未 δώσω「与えるだろう」＜ *deH$_3$-s-, 動詞派生形容詞 δοτός「与えられた、所与の」＜ *dH$_3$-t-）。

ラリンガル・モデルは、青年文法学派のモデルに対して次のような長所をもつ：

1. 単子音語根と両子音語根の差異が解消する。不定詞 **ДѢ-ТИ**, **СТА-ТИ**, **ДА-ТИ** （＜ *dheH$_1$-, *steH$_2$-, *deH$_3$-）の語根の祖語構造は、1人称単数現在の **БЕР-Ѫ**, **НЕС-Ѫ** の語根の両子音構造と何等異なる所がない。語頭母音を持つ語根は、語頭子音を持つ語根から引き出すことができる — 1・単・現 **ЕС-МЬ** ラ 1・単・現 ag-ō「導く、駆る」, **ОК-Ѳ**（*H$_1$es-, *H$_2$eg'-, *H$_3$ok^w-）における語根の祖語構造もまた 1・単・現 **БЕР-Ѫ**, **НЕС-Ѫ** の語根の構造と異なるところはない。

2. 母音交替の体系において、母音 a は、母音 e に対する等価的な対応母音ではなくなり、そこから派生する母音（ e に隣接して、H$_2$ の音がある場合に）に還元する。こうすれば、e : o の交替が極めて多発的な現象であるのに対して、a : o の交替は相対的に極めて希な現象であるという事実も説明されることになる。何れの場合も、o 母音は e 母音の階梯である。a : o の母音交替は H$_2$ に続く e : o の交替に帰せられるのに対して、青年文法学派のモデルにおいて o が e の階梯でない場合とは H$_3$ に続く e : o 交替に帰せられることになる。

青年文法学派の階梯6系列は以下の通りである：

Ⅰ. e : o : ē : ō : ь（あるいはゼロ階梯）

Ⅱ. a : o : ā : ō : ь（あるいはゼロ階梯）

Ⅲ. o（第Ⅰ系列の e、第Ⅱ系列の a の階梯でない場合の）: ō : ь（あるいはゼロ階梯）

Ⅳ. ē（第Ⅰ系列の e の延長階梯でない場合の）: ō : ə（あるいはゼ

ロ階梯）

V. ā（第Ⅱ系列の a の延長階梯でない場合の）：ō：ə（あるいはゼロ階梯）

VI. ō（第Ⅰ系列の e、第Ⅱ系列の a、第Ⅲ系列の o、第Ⅳ系列の ē、第Ⅴ系列の ā の階梯でない場合の）：ə（あるいはゼロ階梯）

ラリンガル・モデルは、これらの諸系列をただ一つの系列（Ⅰ）に還元してしまい、そこから（e ないしは o に先行あるいは後続して H_1, H_2, H_3 がある場合に）他の諸系列（Ⅱ - Ⅵ）が作り出されたことになる。

ラリンガル・モデルは、例えば、次のような諸例から観察することができる：

ギ 1・単・現 ἄγ-ω ＝ラ ag-ō「導く、駆る」，ギ ὄγ-μος「鋤いた路」，リ amb-āg-ēs「回り道、迂回」，ギ ἀγ-ωγ-ή「導くこと、（ある状態に）もってくること」（先頭に a の正常階梯、後続して a の延長対応階梯を持つ語根重複［畳音］）。青年文法学派のモデルによれば、これは、*ag'-：*og'-：*āg'-：*ōg'-（第Ⅱ系列）の母音階梯であるが、ラリンガル・モデルでは、*H_2eg'-：*H_2og'-：*H_2ēg'-：*H_2ōg'-の母音交替ということになる（1・単・現 **ВЕД-Ж**, 反復相不定詞 **ВОД-ИТИ**, 1・単・アオ **ВѢСЪ** ＜ *u̯ēdh-s- ，不 **ПРИ-ВАЖДАТИ** ＜ *u̯ōdh- ― 二次的不完了体 ― の場合と同じ）。

ギ 1・単・現 ὄζ-ω「臭いを発する」＜ *odi̯- ，δυσ-ώδ-ης「臭い、臭気のある」。青年文法学派のモデルによれば、この母音交替は o：ō（第Ⅲ系列）であるが、ラリンガル・モデルでは、*H_3ed-：*H_3ōd-（*H_3ēd-）の交替である。ラリンガル・モデルによれば、ὄζ-ω「臭いを発する」＜ *H_3ed- 対 ラ odor「臭い」＜ *od-os ＜ *H_3ed-os の相関関係は、ギ 1・単・現 κλέ-ω「賞賛する」＜ *k'leu̯-ō（1・単・現 **СЛОВЖ**, 不 **СЛОУТИ** と同系）対 κλέος「知らせ、消息、誉れ」＝ **СЛОВО** ＜ *k'leu̯-os の相関関係、すなわち、e 階梯 対 e 階梯の相関関係と同様の関係たり得るのである。青年文法学派のモデルでは、

そのような解釈は許容され得ない。ラリンガル・モデルは、語形成タイプを均一化する、と思われる。

1・単・現 ДѢ-ѭ, 不 ДѢ-ТИ, ラ 1・単・完 fē-cī「為した」＜ *dhē-, ギ 1・単・現 τί-θη-μι「置く」, ラ sacer-dō-s「司祭」＜ *sacro-dhō-t- , ギ θω-μός「堆積、山」, ラ fa-ctus, ギ θε-τός, 古イ hi-táḥ ＜ *dhi-táḥ「為された、据えられた、配置された」。青年文法学派のモデルでは、この交替は ē : ō : ə（第Ⅳ系列）であるが、ラリンガル・モデルでは、 *dheH₁- : *dhoH₁- : *dhH₁- となる。

不 СТА-ТИ ラ 不 stā-re, ドーリス 1・単・現 ἵστάμι ＜ *σι-στά-μι「置く、据える、立てる」, ラ sta-tus, ギ στα-τός, 古イ sthi-táḥ「置かれた、据えた」。青年文法学派モデルでは、この交替は ā : ə （第Ⅴ系列） であるが、ラリンガル・モデルでは *ste H₂- : *stH₂- である。

不 ДА-ТИ, ギ 1・単・現 δίδωμι, ラ 不 da-re, ギ δο-τός, ラ da-tus「与えられた」, 古イ 中動（反射態）アオ á-di-t 。青年文法学派モデルでは、この交替は ō : ə（第Ⅵ系列）であるが、ラリンガル・モデルでは、*deH₃- : *dH₃- である。

ラ auris ＜ *ausis, ギ οὖς, 属 οὔατος（ホメロスの言語）「耳」, ドーリス 複 ὤατα「耳」。青年文法学派モデルでは、この交替は *ōu̯s- : *əu̯s-（第Ⅵ系列）である。ラリンガル・モデルでは、ラ auris ＜ *ausis は *H₂eu̯s- から引き出すべきであるが、ドーリス 複 ὤατα は、長二重母音 ōu̯ の ō への短縮と母音間の s の脱落を伴う *ōs-a-t- ＜ *H₂ōu̯s-n̥-t- から引き出すべきである（延長階梯を持つ語根の集合・多数性の意味については、§．5参照）。ギ 主・単 οὖς は *H₂ou̯s- から生じたものである。

ラリンガル・モデルの助けを借りることによって、*pet- : *ptō- : *ptā-（ギ 1・単・現 πέτομαι「飛ぶ」, 1・単・完 πέπτωκα「倒れた、落ちた」, ドーリス 1・単・アオ ἔπτᾱν）タイプの

交替も、例えば、主・単 КАМѢ と ギ ἄκ-μων「金敷、砧骨」，リ akmuõ, 古イ áśman-「石」のような場合の対応や ラ avis「鳥」に対する 中世ブ АЕ「卵」のような場合の対応も説明されるのである。

ラリンガル・モデルによれば、上の一連の形において、語根 *pet- は拡張子（接尾辞） -H_2- を得たのであって、したがって、ドーリス 1・単・アオ ἔ-πτᾱ-ν と 1・単・完 πέ-πτω-κα は、*pt-eH_2- 及び *pt-oH_2- （語根のゼロ階梯とそれぞれ接尾辞の e 階梯、o 階梯）から生じたものである。接尾辞 -H_2- の存在については、古イ スピ pát-i-tum < *pet-H_2-t- が証明している。一方、主・単 КА-МѢ, 生 КА-МЕН-Е は *H_2k'-eH_2-men- （語根のゼロ階梯と接尾辞 -H_2- の e 階梯）から生じたものであるのに対して、リ ak-muõ, ギ ἄκ-μων, 古イ áś-man- は *H_2ek'-H_2-men- （語根の e 階梯と接尾辞 -H_2- のゼロ階梯）から生じたものである。H（H_1, H_2, H_3）の、先行の後口蓋子音との融合については、以下を参照。

ラ avis「鳥」は、H_2e > a と H_3（=H^w, 以下参照） > u̯ の変化を伴う *H_2eH_3-i- から引き出すべきである。 Cf. ラ ōvum「卵」< *H_2ōH_3-o-, ギ ᾠον < *ὤϝι-ο- < *H_2ōH_3-i-, 中世ブ АЕ < *$H_2$$H_3$-ōi̯-o-（語根母音のゼロ階梯と接尾辞 -ōi̯- の延長対応階梯 ; АНЦЕ < *ōi̯-k- < *$H_2$$H_3$-ōi̯-k- は古い接尾辞 -k- を含む，cf. オセット[6] aik「卵」）。$H_2$$H_3$（ここでは H_3 = H^w） > u̯ への変化は、古チ vajce, スロ vajce < *$H_2$$H_3$-ōi̯-k- において証明される。*$H_2$ō$H_3$-i-, *$H_2$$H_3$-ōi̯- における延長階梯 ō については、§．5参照。

二つの異なる現母音 o（ō）－ すなわち、o_1 = ア o（あるいは u），o_2 = ア a、また、$ō_1$ = リ 語中音節 ō, $ō_2$ = リ 語中音節 uo（§．2 参照）－ は、それぞれ o > o_1 , H_3o > o_2、また ō > $ō_1$, H_3ō（oH_3） > $ō_2$ から引き出されるのである。次例参照、ア lusa-vor < *luk'-ā-bhor-「明るさをもたらす」における -vor（cf. СЪ-БОРЪ）に対して、ア akn「穴、孔、眼」< *H_3ok^w-n-（cf. ОКО, ブ方言 o

кно「小さな孔、穴、小窓」＝ロ　окно）；リ　iš-vora「スープ」＝ブ　извара「凝乳チーズ、コテージチーズ」（cf. **ВАРЪ**「炎熱、熱気」＜ *u̯ōr-［リ　vērdu「支度する」＜ *u̯er-　における e　階梯と不定詞　**ВЬРѢТИ**　における低減階梯参照］）に対して、リ　úosis「とねりこの木」＜ *H₃ōs-（cf. **ꙗСЕНЬ**　語頭にヨット付き），ア　haçi「とねりこの木」＜ *H₃osk'-，また　**АДТИ**　と同系の　リ　dúoti　＜ *deH₃-　も類例。

ラリンガル・モデルは次例のようなヒッタイト語資料にも合致している。ギ　ἀντί「〔に〕(反) 対して」や　ラ　ante「前に、〔の〕前に」は原初形 *H₂ent- を推定させる。ヒッタイト語の対応形は ḫant「前方」であり、ここでの ḫ は恐らく後舌無声流出音である。同様にして、ギ　ἀργός「白い、輝かしい、明るい」，ギ　ἄργυρος，ラ　argentum「輝く、光る金属　＞銀」＜ *H₂er-g'-　に対しては、ヒッタイト語　ḫarki-(＝ḫargi-)[4]「白い」が対応し、また、1・単・現　**ПАСЖ**　＜ *peH₂-sk'-（cf. ラ　1・単・現　pā-scō「放牧する」－ 現在時制の接尾辞 sk'- は、ラ　1・単・完　pā-vī では消失する）に対しては、ヒッタイト語　paḫ-š-「番をする、守る、保存する」（意味については、同一語根である　ブ　пазя「番をする、守る」と　不定詞　**СЪ-ПАС-ТИ**「救う」を参照）が対応する。ラ　plānus「平の、均しい」＜ *pl-eH₂-（語根ゼロ階梯）に対しては、ヒッタイト語　palḫiš「広い」＜ *pol-H₂-（接尾辞ゼロ階梯）が対応する。同一語根からのものとして、**ПОЛЕ**　や　**ПЛАНИНА**「高原」がある。

これらの際立った一致が見られることからして、ラリンガル・モデルはヒッタイト語資料に完全な裏づけをもったものだということにはならない。H_1, H_2, H_3　の推定音に対応するのは ḫ という一子音だけである。別の例において（ギ　ἀπό，ラ　ab ＝　ヒッタイト　appa）、ラリンガル・モデルは、ヒッタイト語の単語の語頭に ḫ が来ることを要求するが、そこには語頭子音は存在しないのである。

H_1, H_2, H_3 の音声学的性質については統一見解はない。現代のラリンガル・モデルの創始者クリウォーヴィッチ（J. Kuryłowicz, 1927）やバンヴェニスト（E. Benveniste, 1935）は、H_1, H_2, H_3 を音声学的不定要素（代数学における変数に似て）として扱っており、それは比較歴史対照の一層の透明性と体系化を必要としているのである。H_1, H_2, H_3 は、ヒッタイト語の ḫ の子音的性質から推して、現代のセム・ハム語に存在しているような、もっと古い喉音（ларингарни〔гърлени〕звукове）から出た、後舌無声流出音（задноезични беззвучни проходни съгласни）であったと考える研究者もいる。このモデルの名称もここから得られたものである。アンドレーエフ（Н. Андреев, 1959）によれば、H_1 は（硬）口蓋化軟口蓋音（палатализиран велар）〔H'〕、H_3 は（円）唇軟口蓋音（лабиализиран велар）〔H^w〕、H_2 はそのどちらでもない。この推定は、H_1e ＞ e, eH_1 ＞ ē ; H_2e ＞ a, eH_2 ＞ ā ; H_3e ＞ o, eH_3 ＞ ō の変化とも合致している。

ヒッタイト語の ḫ や推定音 H_1, H_2, H_3 の後舌音的な性質については、サピア（E. Sapir, 1939）やマルティネ（A. Martinet, 1955）がその一部を立証したいくつかの間接資料がある。ギ ὀστέον, 古イ ásthi 及び ラ os, 属 ossis ＜ *ostis「骨」は *H_3os- なる原語根を推定させるが、これはヒッタイト語 ḫaštai-「骨」によって確認される。他の印欧諸語では脱落してしまったヒッタイト語の ḫ（H_3）は、**КОСТЬ**や ラ costa「肋（骨）」において、後舌無声子音として残っている。古イ ajáḥ「雄山羊」, ajā́「（雌）山羊」, リ ožỹs「雄山羊」は原語根 *Heg'- とその階梯を予想させる。語頭の H（＝ H_1, H_2）は **АЗЬНО**, **ꙗзьно**「皮（膚）」＜ *Hōg'- では落ちてしまっている。しかし、それは **КОЗА**, **КОЗЬЛЪ**, **КОЖА** における後舌子音として保存されている。能動過去分詞 **ШЬДЪ**＜ *H_1i-dh- の起源については、§ .13 参照。

古代ブルガリア語の二子音間の位置における H(H_1, H_2, H_3）には、母音

ѳ が対応している。第Ⅱシグマ・アオリストの、例えば、1・単 **НЕС-Ѳ-ХЪ** ＜ *nek'-H_2-s- の起源については、§. 12 参照。

先行母音がソナント（r̥, l̥, m̥, n̥, i, u）である時、H（H_1, H_2, H_3）の音は脱落して、それは延長した － 例、**ПЛЪНЪ** ＜ スラ祖 *pl̥-n- ＜ *pl̥-H_1-n-（cf. 古イ pūrṇáḥ, リ pìlnas「いっぱいの、満ちた」＜ *pl̥-H_1-n-）である。一方、ラ plēnus「いっぱいの、満ちた」＜ *pl-eH_1-n-, ギ 1・単・アオ ἔ-πλη-σ-α「満たす」＜ *pl-eH_1-s-（§. 4 も参照）。主・女・単、たとえば、 **СИ**「この」＜ *k'-i-H_2 や **ЖРЬНЪ**, 生 **ЖРЬНЪВЕ**「水車、挽臼」＜ *g^wr̥H_2n-uH_2 の語尾における **Ъ**, **И** ＜ *uH_2, *iH_2 の起源については、§. 24 参照。r, l, m, n, i, u が下向き二重母音の第二要素である場合には、それらに後続する H 音は脱落し、二重母音の第一要素は延長した － 例、1・単・アオ **ПѢСЪ** ＜ *pēn-s- ＜ *pen-H_2-s-, **МРѢХЪ** ＜ *mēr-s- ＜ *mer-H_2-s-, cf. §. 10。

H の音が後舌子音後にあるとき、一部の例では、それが軟口蓋化して先行子音と融合してしまう。**ДЪШТИ**, リ duktẽ, ゴ daúhtar ＜ *dhug-H-ter「娘」参照。H の存在については、gH ＞ gh への変化を伴うギ θυγάτηρ や 古イ duhitā́ が証明している。 **ПО-СОХЪ**「先が二つに分かれる棒、熊手、（農業用）フォーク」（cf. ロ coxa「ロシア犂」）における子音の **Х** は k-H 結合より派生したものである；cf. 古イ śā́khā「枝」, ゴ hoha「すき」, リ šakà「枝」＜ *k'ok-H-（cf. 古イ における帯気音化した k）。

H（H_1, H_2, H_3）に接続する s（母音前の）に対しては、後舌子音後や r, u, i 後（cf. 1・単・アオ **РѢХЪ** ＜ *rēk-s-om, **ВРЬХЪ** ＜ *u̯r̥-s-u-, **СНЪХА** ＜ *snu-s-ā, 所・複 **ВЛЬЦѢХЪ** ＜ *u̯l̥k^w-oi̯-su）と同じように、古代ブルガリア語において **Х** が対応する **ОУ-СПѢХЪ** ＜ *sp-eH_1-s- の例参照；**СПОРЪ**「速さ、多量」＜ *sp-H_1-r- も同一語根, cf. 古イ sphiráḥ「沢山の、豊かな」（H_1 ＞ i と p の帯気

音化 pH_1 ＞ ph を伴う）。不定詞 **ꙗхати** ＜ *H_1i-eH_2-s- （§．13 参照）の **х** は H_2 に後続する s より出たものである。第Ⅰ、第Ⅱシグマ・アオリストの一連の形における s ＞ **х** の変化（例えば、1・単 **бьрахъ** ＜ *bhьr-e-H_2-s- と **несохъ** ＜ *nes-H_2-s- ）は、先行の H_2 の存在によって説明し得るのである（§．10 参照）。1・単 **пасъ** ＜ *pēn-s- ＜ *pen-H_2-s- のような第Ⅰシグマ・アオリストの形においては、s ＞ **х** の変化は、H_2 の早期脱落の故に発生せず、その脱落が先行母音の延長を惹起したのである。 **нѣсъ** ＜ *nēk'-s- や **вѣсъ** ＜ *u̯ēdh-s- のような 1・単・アオリストの形は、シグマを保存しているが、それはこれらの祖語形が H_2 を包含していないからである（§．12 参照）。

ギリシャ語やラテン語の過去形においては、二連続音 H（H_1, H_2, H_3）から得られた後舌子音 k が立証される － 例、ギ 1・単・アオ ἔ-δωκα「与えた」＜ *deH_3-H_2-m̥, ἔ-θηκα「置いた」＜ *dheH_1-H_2-m̥ 。Cf. ラ 1・単・完 fēcī「為した、行った」＜ *dheH_1-H_2-, 受過分 factus「為された」＜ *dhH_1-H_2-t- 。母音で始まる語尾の前の H_2 から得られたギリシャ語完了指標 κ（例えば、1・単・現 λύω「解放する」に対する 1・単・完 λέλυκα「解放した、解いた」）に対しては、古代インド語では、i ＜ H_2 が対応する － 例、2・単・完 bubōdhitha「君は起こした」＜ *bhu̯-bhou̯dh-H_2- 。

全ての印欧語の a が、ラリンガル・モデルが求めるような eH_2 から発生し得るとは限らない。クーン（H. Kuhn, 1954 ）は、ゲルマン、ケルト、イタリア、スラヴ、バルト語群、またギリシャ語に反映されるような、印欧語のヨーロッパ系語群におけるいわゆる a 調（モード）に注意を向けさせたのである。年代的には、それ（ a 調）は新石器時代後期及び青銅器時代初期を包括し、なかんずく農耕に関連する単語に広がり、かつ原則としてインド・イラン語では欠落している。次例参照、 **орати**（ ＝ラ arāre, ギ ἀρόω, リ ārti, ゴ arjan 「耕す」）、同系語として、**рало**

＜　スラ祖　*ordlo, リ　árklas, ギ　ἄροτρον, ラ　arātrum, トカラ　āre「鋤、プラウ」; БРАШЬНО ＜ *bhars-、同系語として、ラ　fār「穀粉、挽き割り小麦」, ゴ　barizeins 「大麦の」; БОБЪ ＜ *bhab- 、同系語として、古プ　babo, ラ　faba「豆」。こういった語根には母音交替が観察されない。このことは、この無交替の a を持つ単語は比較的遅い時期に発生したことを物語っている。恐らくは、これらの印欧語の単語は、発達した農耕技術をもった非印欧語族からの文化的借用たる単語の一部であろう。

§. 4　ラリンガル・モデルとスラヴ祖語アクセント問題

スラヴ祖語期には2種類のソナント － 短母音（ṛ, ḷ, ṃ, ṇ）と長母音（r̄, l̄, m̄, n̄）－ が存在した（§. 2 参照）。上述のように（§. 3）、長いソナント r̄, l̄, m̄, n̄ は、rH, lH, mH, nH（H = H_1, H_2, H_3）から得られたものである。アクセントのある始原的な短母音 ṛ, ḷ, ṃ, ṇ に対しては、曲音調（circumflex intonation）、すなわち、リトアニア語における曲アクセント［~］（circumflex）、ラトヴィア語の重アクセント［ˋ］、セルビア・クロアチア語の長下降アクセント［ˆ］、スロヴェニア語の長下降アクセント［ˆ］ないしは長上昇アクセント［ˊ］が対応する。

例　：**ВЛЬКЪ**, セ・ク　в ŷ к, ス　vôłk, リ　viĩkas, ラト　vîlks

СКРЬБЬ, ス　skr̂b, セ・ク　с к р̂ б「心配ごと」, リ　不　skuřbti「悲しむ」, ラト　skùrbt「目眩がする、酔う」

СТЛЪПЪ, セ・ク　с т ŷ п, ス　stôlp, リ　stuĩpas, ラト　stùlps「杭」

ЧРЬВЬ, セ・ク　ц р̂ в, ス　čr̂v, リ　対・単　kiřmį「虫、うじ、幼虫」

アクセントのある始原的な長母音 r̄, l̄, m̄, n̄ に対しては、鋭音調（acute intonation）、すなわち、リトアニア語の重アクセント［ˋ］（grave）、ラトヴィア語の曲アクセント［~］及び中性名詞にあっては二重アクセント［ˆ］、セルビア・クロアチア語の短下降アクセント［ˇ］、スロヴェニア語の閉音節における長下降アクセント［ˆ］及び開音節における長上昇アクセント［ˊ］が対応する。

例　：**ГРЪЛО**, セ・ク　г р̏ л о, ス　gŕlo, リ　対・単　gùrklį「咽喉」, ギ　*βάραθρον*「深淵、奈落」＜ *g^{w}ṛH-

ЗРЬНО, セ・ク　з р̏ н о, ス　zŕno, リ　žìrnis「えんどう豆粒」, ラト　zirns, ラ　grānum ＜ *g'ṛH_2-n-「すりつぶして粉にしたもの ＞ 穀

粒」, cf. 古イ jīrṇaḥ「すりつぶした」< *g'ṛH₂-n- 。異形 *gʷṛH₂-n- については、 **ЖРЬНЪ**「製粉所、石臼」, ラト dzirnus「手びき石臼」, リ gìrna「石臼」を参照。 *gʷreH₂-u- の語幹からは、古イ grā́van-「魔法の植物ソーマを砕く石」, cf. アイルランド bró「水車小屋」< ケルト祖語 *brāvan < *gʷreH₂-u- 。 *gʷerH₂-n- は ゴ asiluqaírnus 「ロバが動かす製粉所」に立証される。

ВЛЪНА, セ・ク в ȳ н а, ス vółna, リ vìlna「毛、ウール」, ラト viĩna「毛」, 古イ ū́rṇā, ラ lāna, ドーリス λ ά ν ο ς「毛」「長い」< *u̯ḷHn-

ДЛЪГЪ, セ・ク д ȳ г, ス dôłg (閉音節), 女 dółga, リ ìlgas, ラト iĩgs「長い」, 古イ dīrghā́ḥ「長い」< *dḷHgh-

1・単・現 **ЖЬРЖ**, 不 **ЖРЬТИ**「生け贄を差し出す、犠牲を払う」, リ gìrti「ほめる」, ラト dzirt「賞賛する」, 古イ gīr-「賞賛」, ラ 主・複 grātēs「感謝」< *gʷṛH-。語幹 *gʷṛH- は、 **ГРЪЛО**(上記参照)もそこから派生するのであるが、当初は、「生け贄の動物の肉(血)を少し味わう > 生け贄を差し出す > 誉め称える」を意味したのである。 Cf. **ГРАНЕСА**「賛辞」< *gʷreH-n-, *gʷroH-n-, 次も参照 ギ β ι-β ρ ώ-σ κ ω「食べる、飲み込む」< *gʷṛH-, 古イ gīrṇá-「飲み込まれた」< *gʷṛHn-

ПЛЬНЪ, セ・ク п ȳ н, ス pôln (閉音節), リ pìlnas, ラト piĩns「いっぱいの、満ちた」, 古イ pūrṇáḥ「いっぱいの」< *pḷH₁-n-。 *pleH₁- から派生するものとして、ラ plēnus = 古イ prāṇaḥ「いっぱいの」, ギ π λ ή ρ η ς「いっぱいの」, π ί μ-π λ η-μ ι「満たす」がある。

始原的なソナント性短母音(ṛ, ḷ, ṃ, ṇ)と長母音(ṝ, ḹ, m̄, n̄)の他に、ソナントを含む短二重母音(er, el, em, en, or, ol, om, on)と長二重母音(ēr, ēl, ēm, ēn, ōr, ōl, ōm, ōn)が存在した。ソナントを含む長二重母音は、 H (H₁, H₂, H₃) が後続するときの、ソナントを含む短二重母音か

ら発生したものである（すなわち、ēr ＜ erH, ēl ＜ elH 等）。始原的なソナントを含む短二重母音に対しては、曲音調、すなわち、リトアニア語の曲アクセント［~］、セルビア・クロアチア語の長下降アクセント［ˆ］、スロヴェニア語における一音節語の長下降アクセント［ˆ］と多音節語でのそのアクセント［ˆ］の一音節後退、チェコ語とスロヴァキア語の短母音、東スラヴ語母音重挿形（полногласие）оро, оло における語頭アクセントが対応する。

例 ： 対・単 **БРАДЪ**, セ・ク брâду, ス bradǫ̑, チ、スロ bradu, ロ бо̀роду, リ bařzdą ＜ *bhórdhān

ВРАНЪ, セ・ク врâн, ス vrân, チ vran, ロ во̀рон, リ vařnas「わたりがらす」＜ *u̯ornós

ГРАДЪ, セ・ク грâд, ス grâd, ロ го̀род, チ、スロ hrad「城、砦」、リ gařdas「垣、柵、家畜追い込み酔うに仕切った場所」＜ *ghórdhos

ГЛАСЪ, セ・ク глâс, ス glâs, チ hlas, ロ го̀лос ＜ *golsós, 類似のリトアニア語の単語 gařsas「音」, baĩsas 「声」

対・単 **ТЛАКЪ**「親類、隣人の勤労援助」, ウクライナ то̀локу「放牧地」, リ taĩką「援助」＜ *tólkān （当初の意味は）「人あるいは家畜の群れ」

ПЛѢНЪ, セ・ク плêн, ス plện 「獲得（物）、獲物」, チ plen, スロ plen「収奪、暴利」, リ peĩnas 「収入、報酬」＜ *pelnós

対・単 **РЪКЪ**, セ・ク рŷку, ス rokǫ̑, チ ruku, ロ ру̀ку, リ rañką 「手」＜ *rónkān, Cf. 古プ 対・単 rānkan （曲アクセントを伴う二重母音の第一要素に長音符号）

ЗЪБЪ, セ・ク зŷб, ス zǫ̑b, チ、スロ zub, リ žamb̃as「尖った先、角」＜ *g'ómbhos

ЛЪКЪ, セ・ク лŷк, ス lǫ̑k 「弓形、弧」, チ、スロ luk, リ lañkas「桶などのたが」＜ *lónkos

同様のアクセントの相関性は、単母音化した短い二重母音 ei̯, oi̯, eu̯, ou̯ から得られるスラヴ語母音にも観察される。

例 : 対・単 **ЗИМѢ**, セ・ク з и̂ м у, ロ方言、ウクライナ з ѝ м у, チ、スロ zimu, リ žiẽmą < *g'hei̯mān

МИГЪ, セ・ク м и̂ г, ス mîg, チ、スロ mih, リ miẽgas「眠り、夢」< *mei̯ghós

СНѢГЪ, セ・ク с н ê г, ス snę̑g, リ sniẽgas「雪」< *snoi̯gʷos

ДРОУГЪ, セ・ク д р ȳ г, ス drûg, チ、スロ druh, リ draũgas「友達、道連れ」< *dhrou̯ghós

ТОУРЪ, セ・ク т ȳ р, ス tûr, チ、スロ tur, リ taũras < *tau̯rós

アクセントのある、始原的なソナントを含む長二重母音に対しては、鋭音調、すなわち、リトアニア語の鋭アクセント［´］、ラトヴィア語の曲アクセント［~］、セルビア・クロアチア語の短下降アクセント［ˇ］、スロヴェニア語の長上昇アクセント［´］、チェコ語の長母音、スロヴァキア語の短母音、ポーランド語における古い短母音の痕跡、すなわち o > ó 変化の不在、ロシア語の母音重挿形 о р о, о л о, е р е における第2母音アクセント、西スラヴ諸語における語頭 or > ra への変化が対応している。

例 : **БРѢЗА**, セ・ク б р ȅ з а, ス bréza, チ bříza, ロ б е р ѐ з а, リ bẽržas, ラト bę̃rzs「白樺」< *bherH-, Cf. 古イ bhū́rjaḥ「白樺」, リ bìržis, ラト biẽzs「白樺林」< *bhr̥H-g'-

КРАВА, セ・ク к р а̏ в а, ス kráva, チ kráva, スロ krava, ポ krowa, ロ к о р о̀ в а, リ kárvė「雌牛」< *korH-u-, Cf. ギ κεραός < *κεραFός「有角の」< *ker-H-u-, ラ crābrō < *crāsrō「熊蜂、門雀蜂、すなわち角状のもので刺す動物」< *kr̥H-s-, *k'r̥H-s-（§. 1参照）

БРѢМѧ, セ・ク б р ѐ м е, ス bréme, チ břímě, ロ б е р ѐ м я ＜ *bher-H-, Cf. 古イ bharītram「手、すなわち運ぶもの」＜ *bher-H-tr-

РАМѧ, セ・ク р а̏ м е, ス ráme, チ rámě, スロ rámä, ポ ramię, 上ソルブ ramjo ＜ *arHm-, Cf. 古イ īrmáḥ 「肩胛骨」, 古プ irmo「手」＜ *r̥Hm-

РАЛО, セ・ク р а̏ л о, ス rálǫ, チ rádlo, スロ radlo, ポ、上ソルブ radło, リ árklas「犂」＜ *arH- ; Cf. ギ ἄ ρ ο τ ρ ο ν, クレタ ἄ ρ α τ ρ ο ν「犂」＜ *arH-

СЛАМѧ, セ・ク с л а̏ м а, ス sláma, チ sláma, スロ slama, ポ słoma, ロ с о л о̀ м а, ラト salȳms「藁」＜ *k'olHm-, Cf. ギ κ ά λ α μ ο ς「藁、葦の茎」

ѦТРЫ, リ jéntė, ギ ἐ ν ά τ η ρ「義理の姉妹」＜ *i̯enH-ter-, Cf. 古イ yā́tā, ラ 複 ianitrīcēs ＜ *ianatrīcēs 「義理の姉妹」＜ *i̯n̥H-tr-

ѫТЫ, リ ántis, ラ anas, 属 anatis「かも」＜ *H₂enH-t-, Cf. 語根母音のゼロ階梯の次例、古イ ātíḥ, ギ ν ῆ σ σ α, ボイオーティア[7] ν ᾶ σ σ α「かも」＜ *H₂n̥H-ti-

ЗѦТЬ, セ・ク з ѐ т, リ žéntas「むこ、娘の夫」＜ *g'enH-t-, Cf. ギ γ ν ω τ ό ς, 古イ jñātíḥ 「親族」＜ *g'noH-t-

従列オクシトーンの（すなわち、常に最終音節にアクセントを有する）古い曲用や活用において、先行母音が長母音であったりあるいは何らかの理由で長母音化したときに得られる新鋭音調（new acute, neo-acute intonation）の場合については、別に取り扱う必要があろう。この新鋭音調（н о в о а к у т о в а и н т о н а ц и я）に対しては、リトアニア語の鋭アクセント［ ´ ］、ラトヴィア語の二重アクセント［ ˆ ］（語末音節から先行音節へのアクセントの移動を表示している）、セルビア・クロアチア語の短下降アクセント［ ˋ ］ないしは長下降アクセント［ ˆ ］、ポサヴィナ（П о

ｃａｖｉｎａ)[8] 方言の曲アクセント［~］、スロヴェニア語の長上昇アクセント［´］（アクセントのある e に閉鎖が伴って ę となる）、ロシア語母音重挿形 ｏｒｏ，ｏｌｏ，ｅｒｅ における第２母音アクセント、チェコ語、スロヴァキア語の長母音、ポーランド語における古い長母音の痕跡（ｏ ＞ ó の変化）が対応している。

例 ： **СТРАЖА**, セ・ク ｓｔｒａ̑ｊｕａ，ポサヴィナ ｓｔｒａ̃ｊｕａ，ロ ｓｔｏｒｏ̀ｊｕａ，古ロ ｓｔｒａｊｕａ̀（古代ブルガリア語に一致するアクセントを持つ），ポ stróża

БРѢСТЪ, セ・ク ｂｒｙ̏ｊｅｓｔ，ス brést, ポ方言 brzóst, ロ ｂｅｒｅ̀ｓｔｏ

ДРѢНЪ, セ・ク ｄｒｙ̏ｊｅｎ，ポサヴィナ ｄｒｅ̃ｎ，ス drẹ́n, チ dřín, ロ ｄｅｒｅ̈ｎ

МРАЗЪ, セ・ク ｍｒａ̏ｚ，チ、スロ mráz, ポ mróz, ロ ｍｏｒｏ̀ｚ

青年文法学派モデルによる、古い長母音あるいは古い長二重母音に起源を有する語根母音の、古代ブルガリア語二音節不定詞（例、**БЫТИ** ＜ *bhūtēi̯, **КЛАТИ** ＜ *kōltēi̯ ）は特に興味深い。ここでは、語根母音に始原的アクセントを持つ acute 類と不定詞語尾 -tēi̯ に始原的アクセントを持つ neo-acute 類の２種類に分けるべきである。

acute 類（不定詞・アオリスト幹にアクセントを持つもの）：

БИТИ, セ・ク ｂｙ̏ｔｉ，３・単・アオ ｂｙ̏，能過分・女・単 ｂｙ̏ｌａ，ロ ｂｙ̏ｌａ，ス bíti, スピ bît

РЫТИ, セ・ク ｒｙ̏ｔｉ，３・単・アオ ｒｙ̏，能過分 ｒｙ̏ｌａ，ロ ｒｙ̀ｌａ

КЛАТИ, セ・ク ｋｌａ̏ｔｉ，３・単・アオ ｋｌａ̏，能過分 ｋｌａ̏ｌａ，ロ ｋｏｌｏ̀ｌａ，ス kláti, スピ klàt, リ 不 kálti「鍛える、打つ」

ШИТИ, セ・ク ｓｈｙ̏ｔｉ，３・単・アオ ｓｈｙ̏，能過分 ｓｈｙ̏ｌａ，ロ

шйла, リ siûti, スピ siûtų ＜ *siutun, ラト 不 šũt「縫う」

МЫТИ, セ・ク мйти, 3・単・アオ мй, 能過分 мйла, ロ мы̀ла

БРАТИ, ロ 能過分 боро̀лась, リ bárti, ラト baŕt

ТРѢТИ, **ТРЬТИ**, セ・ク тр̑ти, 能過分 тр̑ла, ロ тѐрла

ТЫТИ, セ・ク тйти, 能過分 тйла

КРЫТИ, セ・ク крйти, 能過分 крйла, ロ кры̀ла

ДЖТИ, セ・ク дȳти, 能過分 дȳла, ロ дȳла

ВЫТИ, セ・ク вйти, 能過分 вйла, ロ вы̀ла

ЖАТИ, セ・ク жѐти, 能過分 жѐла, ロ жа̀ла, ス 不 žéti, スピ žèt

МЛѢТИ, セ・ク млѐти, ロ 能過分 моло̀ла, チャ方言[9] млѐла, ス 不 mlę̑ti, スピ mlèt

neo-acute 類（不定詞・アオリスト幹後にアクセントを持つもの）

ПИТИ, セ・ク пйти, 3・単・アオ пй̂ ＜ **ПИТЪ**, チャ方言 能過分・女・単 пилȁ, ロ пила̀, ス 不 píti, スピ pít, ラト pît

ЖИТИ, セ・ク жйти, 3・単・アオ жй̂ ＜ **ЖИТЪ**, ロ 能過分 жила̀, リ gýti, ラト dzît「生き生きさせる、元気づける」

ВИТИ, セ・ク вйти, 能過分 вйла, ロ вила̀, リ 不 výti, スピ vytų̃, ラト vît

ЛИТИ, セ・ク лйти, チ líti, スロ liat'（古い長音）, ロ 能過分 лила̀, リ 不 lýti「雨が降る」, スピ lytų̃, ラト lît「流れる、降る」

ВЪЗ-ЯТИ, セ・ク узѐти, チ vzíti, スロ vziat'（古い長音）, チャ方言 能過分 зелȁ, ロ взяла̀, ラト 不 imt「取る」

БЫТИ, セ・ク бйти, チャ方言 能過分 бȳлȁ, ロ была̀,

リ bûti, スピ būtū̃

acute 類と neo-acute 類の間には明確な境界があるわけではない。そのことは、バルト・スラヴ諸方言における個々の揺れに示されている（例、**КЛАТИ**, セ・ク 能過分 клȁла, ロ колòла — acute 類に対する、ポ 不 kłóć, ラト kaĩt「打つ、鍛える」 — neo-acute 類；**МРѢТИ**, ロ 能過分 умерлà — neo-acute 類に対して、、ラト miřt — acute 類）。この揺れは、疑いもなく、アナロジーによる後世の均一化の結果である。

不 **КЛАТИ**, セ・ク клȁти, ス kláti, チ kláti, ロ колòть, リ kálti「打つ、鍛える」間のアクセントの対応は、**СЛАМА**, セ・ク слȁма, ス sláma, チ sláma, ロ солòма, ラト saĩms「穀草の茎、藁」＜ *k'olHm- 間の対応と同じである（上記参照）。このことは、**КЛАТИ** ＜ *kōltēi̯ が *kol-H-tēi̯ から発生したものであり、ここでの H（本質的には H_2）は古い過去テンスの接尾辞であり（§. 10 参照）、それがスラヴの不定詞語幹の一部に痕跡を止めていることを、我々に確認させるのである。同様にして、**ВИТИ** ＜ *u̯ītēi̯ は *u̯i-H_2-tēi̯ から引き出されるべきである, cf. 1・単 **ВЬЖ**, 2・単 **ВЬЄШИ** における現在語幹 *u̯ei̯-e-,（ei̯-e- ＞ ьi̯-e の変化を伴う、§. 2 参照）及び **ВѢНЬЦЬ** における名詞語幹 *u̯oi̯-n-。

§. 5　延長階梯　ē　及び　ō　の形態的意義

ラリンガル・モデルとそれに関連する単一母音体系は、e : o : ē : ō : ь（あるいは低減階梯）の階梯一系列だけを取り扱うのであって、青年文法学派モデルのように異なる階梯六系列を取り扱うのではない。それ故に、交替自体の説明ももっと簡単である。大多数の研究者は、ゼロ階梯（ないしは低減階梯）が現れるのは、正常階梯の母音 e が無アクセントの位置にあるときに調音が弱化した結果だと推定している。

o 階梯の、低減階梯からの発生については、クリウォーヴィチの仮説を参照（§. 6）。

今、e : o : ē : ō : ь　の交替が発生してくる唯一の原母音を V　でもって表すことにしよう。拡張語根　*u̯Vl-kʷ- からは母音 V　の付加によって、動詞・名詞語幹　*u̯Vl-kʷ-V- が形成された（語根母音も語幹母音も e　階梯の　3・単・現　**влѣчетъ**　＜　*u̯el-kʷ-e-　と語根母音低減階梯で語幹母音 o　階梯の　主・単　**влькъ**「引き運ぶ動物」　＜ *u̯ь l-kʷ-o-　を参照)。　*u̯Vl-kʷ-V-　*u̯Vl-kʷ-V-　「狼が引く」という始原的な文において、述語が主体（主語）と異なるのは、述語の上には句アクセントが落ちたという点だけである（ブルガリア語　в ъ л к ъ т　в л е ч е「狼が引く」の文の述語の上の句アクセント参照）。句アクセントの近くでは、母音の V　は最高の階梯つまり e　階梯になった － e　階梯は、述語（動詞）の形の特徴を表示し、原則としてその上に句アクセントが落ちた（**влѣчетъ** の e　階梯参照）。句アクセントからより遠い所では、母音の V　はより低い階梯（ o　階梯あるいはゼロ階梯）になった － この階梯は主語（名詞）の形の特徴を表示し、句アクセントは原則としてその上には落ちなかった。このようにして、動詞・名詞語幹　*u̯Vl-kʷ-V- からは、一方では句アクセントを持った動詞語幹　*u̯el-kʷ-e-　＞　**влѣчетъ**　が発生し、また一方では句アクセントのない名詞語幹　*u̯ь l-kʷ-o-　＞　**влькъ**　が起こっ

たのである。呼格形 *u̯Vl-kʷ-V- においては、語幹母音 V は句アクセントに近いものであり（呼びかけ全体が句である）、したがって、呼格単数形 **ВЛЬЧЕ**（= ギ λύκε, ラ lupe）において語幹母音は e 階梯である。Cf. 指示代名詞（句アクセント付加） **СЕ** 対 承前代名詞（句アクセントなし） **ТО**。

延長階梯 ē, ō は本質的には正常階梯 e の重複（ē = e + e）であるか、あるいはその対応階梯 o の重複（ō = o + o）であって、その重複が音象徴的な意義を持つのである。

あらゆる重複（reduplication）は多数（複数）性のための特徴である。名詞の体系にあっては、語根（語）の重複あるいは語根（語）の重複の継承としての語幹母音の延長は複数（双数）の形態的表現であり（§. 11参照）、集合性ないしは共同性の形態的表現である（§. 32 参照；共同・具格［socialive-instrumental］としての双数形の用法についてさらに同所参照）。このような語幹母音の延長は、例えば、双・主・対 **ВЛЬКА** < *u̯l̥kʷ-ō = *u̯l̥kʷ-o-o, **СЪНЪ** < *sūnū = *sūn-u-u, **НОШТИ** < *nokʷtī = *nokʷt-i-i の形に立証される。Cf. ギ 双・主・対 λύκω, 古イ vr̥kā, リ vilkù「2匹の狼」< *u̯l̥kʷ-ō, 古イ sūnū́, リ sū́nu「二人の息子」< *sūnū, 古イ matī「二つの考え、意見」< *mn̥tī, リ naktì「二夜」< *nokʷtī 。これらの諸例は、必ずしも全ての ū, ī を uH, iH から引き出す必要がある訳ではないことを示している。

動詞体系でも、語根重複、あるいは語根重複の継承としての語根母音延長（§. 12 参照）は同じく多数性の特徴であるが、行為に参加する人物の多数性ではない。動詞の場合、多数性特徴は、1）多回的、すなわち反復的（iterative）あるいは持続的（durative）であったり、また2）集合的（一括的、全一的）、すなわち一気実現的であったりする、行為自体の独自の推移を表すのである。後者の場合、それは完結的でもあるから、それに相当する語幹は過去（preterit）の意義を持つ時制の形成に適している。語根の重複は、ギリシャ語、古代インド語や、また一部ラテン語動詞の完了形（perfec

tum）にも立証されるが、その重複の基本的意義は過去性（praeteritum）である（完了形の活用の起源については、§．15 参照） － 例、ギ 1・単・完 λέλυκα「ほどいた、解放した」，古イ 1・単・完 pipḗṣa「打った」＜ *pi-poi̯-s-, これと同系の語として **пьхати**「均等に打つ、脱穀する」（cf. **пьшеница**）及び ラ pīnsō「搗砕く、碾いて細かくする、粉にする」（鼻音接中辞については、§．12 参照）。

動詞過去語幹での古い重複の継承が、古代ブルガリア語アオリスト幹の一部に見られる語根母音の延長である（§．12 参照） － 例、1・単・アオ **вѣсъ** ＜ *u̯ēg'h-s- と 1・単・現 **везѫ**, 2・単 **везеши** ＜ *u̯eg'h- (cf. ラ 1・単・現 vehō「引っぱる、運ぶ」と 1・単・完 vēxī）の対照； 1・単・アオ **басъ** ＜ *bhōdh-s- と 1・単・現 **бодѫ**, 2・単 **бодеши** ＜ *bhodh-（cf. ラ 1・単・現 fodiō「掘る、突き刺す」＜ *bhodh- と 1・単・完 fōdī ＜ *bhōdh-）。語根母音の延長は二次的不完了体動詞にも観察される － 例、不 **по-ложити** ＜ *logh-, **по-лаг-ати** ＜ *lōgh- ; **при-теш-ти** ＜ *tek-, **при-тѣк-ати** ＜ *tēk- ; **въз-дъх-нѫти** ＜ *dhu-s-, **въз-дъ-хати** ＜ *dhū-s- ; **по-мьн-ѣти** ＜ *mьn- ＝ スラ祖 *min-, **по-мин-ати** ＜ スラ祖 *mīn- ; **съ-бьр-ати** ＜ *bhьr- ＝ スラ祖 *bir-, **съ-бир-ати** ＜ スラ祖 *bīr- 。これらの場合のスラヴ祖語の語根母音の延長は、行為の反復性、多回性、あるいはまた持続性を象徴化したものである。後続子音の脱落による母音延長 － 例えば、ラ pēs「足」＜ *ped-s に対する 属 pedis ; スラ祖 kamų̄ (**камъ**) ＜ *kā-mon-s に対する 生 *kā-men-es (**камене**) － については、§．37 参照。

§. 6　e : o 交替の形態的意義

クリウォーヴィチ（1956）によれば、対応階梯 o は、なかんずく鳴子音 r, l, m, n 前に現れたのであり、そこでは母音 e が低減階梯で o と発音されたのである。初め、この位置的な o は次第に一定の文法形や文法範疇の語根あるいは接尾辞の特徴を表示し始めた。先ず、第一には、接尾辞（語幹母音）の交替によって、同一語根から形成された名詞形と動詞形の差異が強調された － 接尾辞の e 階梯は、動詞現在形のより大きな部分を特徴づけ始めた － cf. 2・単 **влѣч-е-ши** ＜ *u̯el-kʷ-e-, 3・単 **влѣч-е-тъ**, 1・複 **влѣч-е-мъ**, 2・複 **влѣч-е-те**； 2・単 **бер-е-ши**, 3・単 **бер-е-тъ**； 2・単 **рец-е-ши**, 3・単 **рец-е-тъ**。ところが一方、接尾辞の o 階梯は、対応同一語根から形成されるほとんど全ての名詞形を特徴づけ始めたのである － 例、主・単 **влькъ** ＜ *u̯l̥kʷ-o-s, 造 **влык-о-мь**；主・単 **съ-боръ** ＜ *bhor-o-s, 造 **събор-о-мь**； 主・単 **пророкъ** ＜ *rok-o-s, 造 **пророк-о-мь**。Cf. ギ 2・複 φέρ-ε-τε「運ぶ」＜ *bher-e-te ＝ **бер-е-те** に対して、φόρος「税」＜ *bhor-o-s 、これと **съборъ** は同系（意味については、ロ поборы「重税」, ブ недобор「滞納税」）；2・複 λέγ-ε-τε「話す」に対して λόγος「言葉、語」； 2・複 δέμ-ε-τε「建てる」に対して δόμ-ο-ς「家、建物」、これと **домъ** は同系。

語幹母音の e 階梯は動詞を、 o 階梯は名詞を特徴づけるという原則の、いくつかの例外と思しきものについては、歴史的な説明を与えることができる。例えば、3人称複数現在形、**берѫтъ**, グ **ƀэь-э-ѥѡ** cf. ギ 3・複・現 φέρουσι, ラ ferunt, ゴ baírand, 古イ bharanti ＜ *bher-o-nti は、分詞に起源を持つ（§. 34 参照）。**берѫ**, グ **ƀэь-э-ѥ** 型の1人称単数現在形は *bher-ō-m ＜ *bher-o-H_2 に起源を持つ

ものであって、ここでの、古い活格活用1人称単数語尾 m（§．15 参照）はもっと後に付加されたものである － cf. ギ 1・単・現 φέρω = ラ ferō, ゴ baíra「運ぶ」< *bher-ō < *bher-o-H_2（1人称指標 m はない)。この語末の H_2 は古い中動相的（自動詞的、完了相的）活用の1人称単数の語尾であって、それは名詞語幹に付加されたものである（cf. 例、ギ 1・単・完 οἶδα = 古イ vēda「私は知っている」< *u̯oi̯d-a < *u̯oi̯d-H_2e 、これは当初は「私の知ること」の意 － 下記の第3項参照)。また、o 語幹男性名詞の呼格形（例、**ВЛЬЧЕ** = ギ λύκε, ラ lupe, リ vilkė < *u̯l̥kʷ-e）は、始原的な絶対格（純粋語幹）（абсолютен падеж〔чиста основа〕）の継承であって、それは後の名詞曲用には組み入れられることなく、早くから呼びかけ専用とされたものである（§．28 参照)。

第二に、ある一つの初期の格形の接尾辞や語尾の交替を通じて、スラヴ祖語や印欧語の名詞曲用の形成に必要な多様な格形が作り出されたのである。例えば、単・主 **СЪНЪ**（= 古イ sūnúḥ, リ sūnùs < *sūn-u-s), 生 **СЪНОУ**（= 古イ sūnóḥ, リ sūnaũs < *sūn-ou̯-s)、そして主・複 **СЪНОВЕ**（= 古イ sūnávaḥ < *sūn-eu̯-es）は、同一の始原的な活格（активен падеж）の継承であって（§．36, 37参照)、そこから、後に、三つの異なる格 － 単数主格、単数生格、複数主格が発生したのである（cf. ギ 単・主 κόραξ「わたりがらす」< * κόρακ-ς, 生 κόρακο-ς, 主・複 κόρακ-ες)。いずれかの時点で、接尾辞母音の交替によって、単数主格形は、そのほかの格形に対立するに至った － 次例参照、主・対・単 **НЕБО**（=ギ νέφος「雲」< *nebh-os に対して、生 **НЕБ-ЕС-Е**（ギ 生 νέφεος < *nebh-es-os と同系）；主・単 **КАМЪ** < *kā-mon-s < *H_2k'-eH_2-mon-s（ギ ἄκμων「鉄敷」< *H_2ek'-H_2-mon-s と同系）に対して、生 **КАМ-ЕН-Е** 。

印欧語及びスラヴ祖語の時期、語根母音の o 階梯は次のようなさらに

重要な形態範疇の特徴を表示したのである：

1．動詞にその対応形を有する相当数の o 語幹と ā（eH₂）語幹の名詞：1・単・現 РЕК-Ж, 2 РЕЧ-ЕШИ, ПРО-РОК-Ъ ; ГРЕБ-Ж, ГРОБ-Ъ ; ВЕД-Ж, ВОЕ-ВОД-А ; ПЬН-Ж, О-ПОН-А「幕、帳」; ПЛЕТ-Ж, О-ПЛОТ-Ъ「編み、垣、籬」; МЬР-Ж, МОР-Ъ ; ТЕК-Ж「走る、流れる」, ТОК-Ъ「流れ、奔流、家畜を、その足で打ち固めさせるべく走り回らせる場所 ＝ 脱穀場」; ДЕР-Ж, РАЗ-ДОР-Ъ ; БЕР-Ж, СЪ-БОР-Ъ ; НЕС-Ж, ВОДО-НОС-Ъ「水運び人、水を運ぶ容器」; ЧЕШ-Ж ＜ *kes-, КОС-А ; ВЕЗ-Ж, ВОЗ-Ъ「荷馬車」; ЛЖК-Ж グ ѦЭЄІЭЄ, ЛЖКЪ グ ѦЭЄІѲ「弓」; БЛЖД-Ж グ ЬѦЭЄѦЭЄ「誤る、罪を犯す」, БЛЖД-Ъ グ ЬѦЭЄѦѲ「放蕩、思い違い」; ЗЖБН-Ж グ ѦЭЄЬРЭЄ「発芽する、生える、刺のごとく芽を出す」, ЗЖБ-Ъ グ ѦЭЄЬѲ ; ТРЖС-Ж グ ѾЬЭЄѠЭЄ, ТРЖС-Ъ グ ѾЬЭЄѠѲ ; ギ 1・単・現 δέμω「建てる」, ДОМ-Ъ ; ラ 1・単・現 precor「頼む、尋ねる」＜ *prek'-, ВЪ-ПРОС-Ъ ＜ *prok'- ; ギ 1・単・現 πέλομαι「動く」＜ *kʷel-, КОЛ-О「車輪」＜ *kʷol- ; リ 1・単・現 renkû「集める」, РЖК-А グ ЬЭЄІѢ ; ВЛЪК-Ж ＜ *u̯elkʷ-, ОБЛАК-Ъ ＜ *obh-u̯olkʷ- ; БЛЬШТ-Ж ＜ *bhlig'-sk-, БЛЪСК-Ъ ＜ *bhloi̯g'-sk- ; ВЪЗ-ДЪХ-НЖ ＜ *dhu-s-, ДОУХЪ ＜ *dhou̯-s- ; ЦВЬТЖ ＜ *ku̯i-t-, ЦВЪТ-Ъ ＜ *ku̯oi̯-t- ; ГНЬ-ЮЖ ＜ *ghnei̯- （§．2 参照）, ГНОИ ＜ *ghnoi̯- ; ПО-ЧЬ-ЮЖ ＜ *kʷei̯- （§．2 参照）, ПО-КОИ ＜ *kʷoi̯-

2．語根母音が e 階梯かゼロ階梯である第一次動詞（非使役、非反復動詞）の形と対照的な使役（作為）及び反復（多回）動詞（§．17 参照）の形：

a）使役動詞（これらの動詞にあっては、行為者が、行為を行うのではなく、その行為実現の原因となる） ― 例、1・単・現 БОУЖДЖ, 2 БОУДИШИ「目を覚まさせる、人を眠らさずにおく」＜ *bhou̯dh- と 1・

単・現 **БЛЮДѫ**, 2 **БЛЮДЕШИ**「番をする、看視する、注意を集中する」(ギ *πεύθομαι*「知る、探り出す、照会する、情報を得る」＜ *bheu̯dh-) の対照； **ОБѢШѪ**, **ОБѢСИШИ**「懸ける、ぶら下げる、吊るす」＜ スラ祖 *ob-u̯oi̯s- と **ВИШѪ**, **ВИСИШИ**（ぶら下がっている）＜ スラ祖 *u̯ei̯s-； **ТОЧѪ**, **ТОЧИШИ**「流れさせる」と **ТЕКѪ**, **ТЕЧЕШИ**「流れる、走る」； **ОУМОРЮ**, **ОУМОРИШИ**「死なせる、殺す」と **МЬРЮ**, **МЬРЕШИ**（死ぬ）； **ПОЮ**, **ПОИШИ**「飲ませる」と、**ПЬЮ**, **ПЬЕШИ**（飲む）＜ *pei̯e-（§. 2 参照）； **СОЧѪ**, **СОЧИШИ**「人にある事を追跡させる」＜ *sok^{w}- と、リ 1・単・現 sekû, ラ sequor, ギ *ἕπομαι*「跡をつける、従う、ついていく」ゴ saíhvan「見る、目で追う」＜ *sek^{w}-。使役動詞の一部は語根母音の延長階梯を有する（以下参照)。

b）反復動詞 ： 1・単・現 **ВОЖДѪ**, 2 **ВОДИШИ** と 1・単・現 **ВЕДѪ**, **ВЕДЕШИ**； **ВОЖѪ**, **ВОЗИШИ** と **ВЕЗѪ**, **ВЕЗЕШИ**； **НОШѪ**, **НОСИШИ** と **НЕСѪ**, **НЕСЕШИ**； **ВЛАЧѪ**, **ВЛАЧЕШИ** ＜ *u̯olk^{w}- と **ВЛѢКѪ**, **ВЛѢЧЕШИ** ＜ *u̯elk^{w}- の対照。

語根母音の延長によって、語根の第一次的な意義に比べて集約的（強調的）[intensive] な意義を持つ新しい語幹が作り出された。集合性及び集合・多数性の意義の一変種としての集約性については、§. 20, 27 参照。名詞の場合、この集約性は、語幹の増大的（集合・増加的）(augmentative) な意義を表したのである。次例参照、古イ nábhas- ＝ **НЕБО**, ギ *νέφος*「空、雲」＜ *nebhos と 古イ nā́bhas-「雲層、雲量」＜ *nēbh-；古イ vácas- ＝ ギ *ἔπος*「話，語」＜ *u̯ek^{w}os と ラ vōx「声」，古イ vā́c-「言葉、話し」＜ *u̯ōk^{w}-（cf. **РѢЧЬ** ＜ *rēk- と 1・単・現 **РЕКѪ** ＜ *rek-）の対照； **СЛОВО** ＝ ギ *κλέος*，古イ śrávas-「語、噂、知らせ」＜ *k'leu̯-os と **СЛАВА** ＝ リ šlovẽ「名声、誉れ」＜ *k'lōu̯-（§. 2 参照）； 中世ブ **АЕ** ＜ *H_2H_3-ōi̯-o, ラ ōvum「卵」＜ *H_2ōH_3-o と ラ avis「鳥」＜ *H_2e

H_3-i- （§．3参照）；**врань** ＝ リ vaȑnas「わたりがらす」＜ *u̯orn-os と **врана**（セ・ク врâна，ス vrána，ロ ворóна，チ vrána，スロ vrana）＝ リ várna「からす」＜ *u̯ōrnā ＜ *u̯or-H-n- 。女性範疇と集合多数性範疇との近似性については、§．22 参照。

動詞の場合、この集約性は、当該語幹が使役的、反復的意義の動詞を形成し得る可能性を持つことに現れている（集約・使役動詞と集約・反復動詞間の近似性については、§．17、第5項参照）。時として、語根延長母音を持つ集約性動詞が、根源動詞（非集約性動詞）と対照的な別の意味を持つのである － 例、1・単・現 **полѭ**，2 **полиши**「燃える」と 1・単・現 **палѭ**，2 **палиши**「燃やす」（使役）＜ *pōl- ； **вьрѭ**，**вьриши**（煮え立つ、沸く）＜ *u̯ьr-（ゼロ階梯）と **варѭ**，**вариши**（煮る、沸かす）（使役）＜ *u̯ōr- ；ギ σβέννῡμι「消す」＜ *sgʷes- と **гашѫ**，**гасиши** ＜ *gʷōs-（集約的）； ギ 1・単・現 κλέω「（について）語る、讃える」＜ *k'leu̯- と **славлѭ**，**славиши**（有名にする、誉め讃える）＜ *k'lōu̯-（集約的）； 不 **бѫти** ＜ *bhū-（§．12 参照）と **бавлѭ**，**бавиши** ＜ *bhōu̯-（使役；当初、この動詞は「立たせる、生じさせる」の意）； **ис-чезнѫ**，**исчезнеши**（消失する、なくなる）＜ *kʷeg'- と **ис-кажѫ**，**исказиши**「絶やす、駆使する、消す」（使役）＜ *kʷōg'- ； **рекѫ**，**речеши**（言う）＜ *rek- と **рачѫ**，**рачиши**（同意を与える、気遣う、望む、愛する）（集約的）＜ *rōk- ； **чьтѫ**，**чьтеши**「読む」＜ *kʷi-t- と **каѭ**，**каеши**（悔いる、告解する）（集約的）＜ *kʷōi̯- ；古イ 3・単・現 vádati「話す、言う」＜ *u̯ed-，*u̯od- と **важдѫ**，**вадиши**「（に）反対して言う、非難する、告発する」（集約的）＜ *u̯ōd-（cf. 古イ vādaḥ「発言、意見、論争」 － 始原的な語根は *Hæu̯-d、このことは、ギ αὐδή「音、声」，αὐδάω「話す、大声を上げる」からも判る）。

使役動詞と反復動詞における語根母音の対応 o 階梯は、使役動詞、反復

動詞、更にまた名詞派生動詞（denominative）との間に極めて大きな近似性があることを証明している。使役動詞や反復動詞のほとんど全てが、語根母音 o を伴う o 語幹名詞や ā 語幹名詞に対応形を持つのである。次例参照、1・単・現 **точѫ**, **точиши**（流れ出させる、滴らせる）と 単・主 **токъ**「流れ、奔流」；**оумори**ѭ, **оумориши**（殺す）と **моръ**（疫病、死病）；**посажда**ѭ, **посадиши** と **садъ** ＜ *sōd-（古い u 語幹起源の名詞）；**вожда**ѭ, **водиши** と **воєвода**（リ vãdas ＜ *u̯odh-o-「指導者、領袖」、**вождь** ＜ *u̯odh-i̯-o- も同じ）；**вожѫ**, **возиши** と **возъ**「荷馬車」（＝ギ ὄχος「荷馬車」＜ *u̯og'h-）；**ношѫ**, **носиши** と **водоносъ**「桶、水運び容器」；**влачѫ**, **влачєши**（引く、曳く）と **влакъ** ＜ *u̯ol-kʷ-（cf. ブ в л а к「細木製まぐわ、小魚用すくい網、荷馬車前部」）；**славлѭ**, **славиши** と **слава** ＜ *k'lōu̯-；**ис-кажѫ**, **ис-казиши**（滅ぼす、破壊する）と **про-каза**（悪事、悪行、癩病）＜ *kʷōg'-；**варѭ**, **вариши** と **варъ**「炎熱、暑熱」＜ *u̯ōr-。古代ブルガリア語の名詞派生動詞（例、1・単・現 **мѣрѭ**, 2 **мѣриши** ＜ **мѣра**；**льштѫ**, **льстиши** ＜ **льсть**；**солѭ**, **солиши** ＜ **соль**；**богаштѫ**, **богатиши** ＜ **богатъ**；**испльнѭ**, **испльниши** ＜ **пльнъ**）は、使役動詞や反復動詞としての活用変化も行う（**точѫ**, **точиши** 及び **ношѫ**, **носиши** 参照）。**славлѭ**, **славиши**（cf. **слава**）のような個々の動詞については、それが名詞派生動詞なのか集約性動詞（使役動詞）なのかを言うことはむずかしい。**оутѣшѫ**, **оутѣшиши** ＜ *toi̯s- や **о-цѣштѫ**, **о-цѣстиши**「純化、浄化する（通常、宗教的に）」＜ *koi̯d-t- にあっては、語根母音は o である（cf. 形容詞 **тихъ** ＜ *tei̯s- 及び **чистъ** ＜ *kei̯d-to- における語根母音の e 階梯、これと動詞 **оутѣшѫ**, **оутѣшиши** 及び **оцѣштѫ**, **оцѣстиши** は明らかに関連がある。）

3．起源的に、始原的完了（パーフェクト）活用（その起源については、

§. 15 参照）に関連する過去語幹の一部。例、ギ　1・単・現　δέρκομαι「見る」に対する　1・単・完　δέ-δορ-κα「見た」；1・単・現　πείθομαι「信じる、従う」に対する　1・単・完　πέ-ποιθ-α「従った」；1・単・現　τρέφω「養う、飼育する」に対する　1・単・完　τέ-τροφ-α「養った」；1・単・現　φθείρω「壊す、汚す、駄目にする」に対する　1・単・完　ἔ-φθορ-α「壊してしまった」。Cf. 次例のようなゴート語強変化動詞過去（＝ アオリスト）形、1・単・現　binda「結ぶ、結合する」＜ *bhendh- に対する　1・単・過　band「結んだ」＜ *bhondh- ；　1・単・現　qima ＜ *gʷem- に対する　1・単・過　qam「来た」＜ *gʷom-　（古イ　1・単・完　jagâma「来た、来ている」＜ *gʷe-gʷom- における語根母音の o 階梯　参照）。

始原的完了活用動詞の大部分は名詞起源である。例えば、ギ　1・単・完　οἶδα「私は知っている」（＝ 古イ　vēda,　ゴ　wait ＜ *u̯oi̯d-H₂e、また、1・単・現　**вѣмь**、古ブ　プレスラフ文献　**вѣдѣ**　も同類）のような、語根母音 o 階梯を持つ完了活用動詞の原型は「我が知識、私の知ること」の意であった。Cf. チュルク諸語の過去形の名詞派生的な性質、例えば、ウズベク語の過去形活用、活用　1・単・アオ　ёзд-им「私は書いた（＝ 私の書きもの）」、2　ёзд-инг「君は書いた（＝ 君の書きもの）」、3　ёзд-и「彼は書いた（＝ 彼の書きもの、（逐語的には）書きもの」は、所有曲用に完全に一致する、例えば、1・単　китоб-им「私の本」、2　китоб-инг「君の本」、3　китоб-и「彼の本」（始原的完了語尾の所有的性格については、§. 16 参照）。

語根母音 o　階梯の古代ブルガリア語動詞（語幹母音　**и**　を持つ使役、反復、名詞派生動詞を除く→　第２項参照）は、その完了の屈折語尾を失った古い完了活用動詞の継承である。動詞　1・単・現　**могѫ**, 2　**можеши**は、過去現在動詞（preterite-present verb、perfecto-present verb 、現在の意義と完了語尾を持つ）[10] であるゴート語動詞　1・単・現　mag

「できる、してもよい、かもしれない」, 2 magt, 3 mag と同系関係にある。この古代ブルガリア語動詞は特別なアクセント・パラダイムを持つが（1・単・現 **могѫ**= ロ м о г ȳ, 2 **мо̀жеши** = ロ м о̀ ж е ш ь）、現在形に語幹母音 e を持つ古代ブルガリア語動詞のどれ一つとして、このようなアクセント・パラダイムは持たない。語根母音 o 階梯の動詞、例えば、次のような動詞、1・単・現 **болѭ**, 2 **болиши**, 不 **болѣти**； **боѭ сѧ**, **бои̇ши сѧ**, **боѩти сѧ**；**полѭ**「燃える」, **полиши**, **полѣти**（cf. 重複語根 **попелъ**「灰、燃えかす」における語根母音の e 階梯）； **горѭ**, **гориши**, **горѣти**（cf. 集約性名詞 **жаръ** ＜ *gʷhēr- における語根母音の ē 階梯）は、始原的な完了活用動詞に代わるものとしての状態動詞の特徴を表示する不定詞接尾辞 -ѣ- を持っている（§.18 参照)。1・単・現 **вѣмь**（**вѣдѣ**）については、上記参照。

そのほか接尾辞 -ѣ- を持つ状態動詞の中には、語根母音の延長階梯を有するものもある — 例、**стѫждѫ сѧ**, **стѫдиши сѧ**, **стѫдѣти сѧ** ＜ *stūd-；**бѣжѫ**, **бѣжиши**, **бѣжати**（= リ 1・単・現 bẽgu, 不 bẽgti「走る」＜ *bhēgʷ-, cf. ギ 1・単・現 φέβομαι「走る」＜ *bhegʷ- における語根母音の e 階梯）； **сѣждѫ**, **сѣдиши**, **сѣдѣти** ＜ *sēd-；**виждѫ**, **видиши**, **видѣти** ＜ *u̯īd-（cf. リ 1単・現 pa-výdžiu, 不 pa-vydẽti「羨む」）；**кѫплѭ**, **кѫпиши**, **кѫпѣти** ＜ *kūp- 。語根母音の延長階梯と古い完了活用の関連については、§.12 参照。

語根母音の o 階梯、あるいはまた、延長階梯を持つ完了活用動詞の一定部分は、古代ブルガリア語に僅かの痕跡をとどめているスラヴ祖語の非テーマ動詞活用（無幹母音動詞、athematic verb）の中に組み込まれている（§. 18 参照)。ギ 1・単・完 οἶδα「知っている」（= 古イ 1・単・完 vēda, ゴ wait）と同系関係にある動詞 **вѣмь**（**вѣдѣ**）の非テーマ活用についても、同所参照。語根長母音を持つもう一つの非テーマ動

詞 1・単・現 **ѢМЬ** ＜ *ēdmi ＜ *e-ed- ＜ 重複語根 *H_1e-H_1ed- の完了起源については、§．12 参照。古い完了活用に取って代わった、不定詞接尾辞 -**Ѣ**- を持つ静態動詞（状態動詞）のいくつかも同じく、当初、テーマ（幹母音）を入れずにその現在形を形成している（cf. 非テーマ動詞 1・単・現 **ВѢМЬ**, 2 **ВѢСИ** の不定詞語幹 **ВѢД-Ѣ-ТИ** は **Ѣ** 指標を含んでいる)。このことは、1・単・現 **ГОРѮ**, 2 **ГОРИШИ**, 不 **ГОРѢТИ** に対する、能動現在分詞語幹 **ГОРЖШТ**- が証明している。この語幹は、サヴァの本（Саввина книга）やスプラシル写本（Codex Suprasliensis）に文証されるより新しい分詞幹 **ГОРѪШТ**- と併用される；**ГОРЖШТ**- は非テーマ動詞の分詞幹である ― cf. 1・単・現 **ВѢМЬ**, 2 **ВѢСИ** に対する分詞幹 **ВѢДЖШТ**- 。1・単・現 **ВИЖДЖ**, 2 **ВИДИШИ**, 不 **ВИДѢТИ** に対する受動現在分詞 **ВИДОМЪ** も参照。これは、より新しい形 **ВИДИМЪ** と併用される。2・3人称単数命令形 **ВИЖДЬ** も参照（これの起源については、§．17、第6項参照)。**ВИДОМЪ** 及び **ВИЖДЬ** は非テーマ活用である ― cf. 受動現在分詞 **ВѢДОМЪ** と 2・3人称単数命令法 **ПО-ВѢЖДЬ** ＜ **ВѢДѢТИ**。

§. 7　スラヴ祖語の語幹構造の変化

スラヴ語族の古典語としての古代ブルガリア語は、文献的に立証される古代印欧諸語の最も重要な文法的特徴を継承している。概して、古代ブルガリア語の曲用及び活用変化語の語構造は、語根、接頭辞、接尾辞及び語尾から成るスラヴ祖語の曲用、活用語の構造と同じである。スラヴ祖語のほとんど全ての変化語の必須構成要素は、語根、接尾辞（一ないしは数個の）、語尾であった。スラヴ祖語の語根は、一接尾辞（あるいは数個の接尾辞）と共に語幹を構成した。スラヴ祖語の単語が、希に、例えば、男性単数呼格形において、いくつかの単数所格形において、また名詞、形容詞中性主・対格において（§. 39 参照)、純粋語幹だけで、すなわち語尾なしで、語根と接尾辞だけで構成されることもあった。例えば、単・呼　*rod-e（РОДЕ), 単・所　*pont-ēi̯（ПѢТИ), 単・主・対　*nebh-os（НЕБО）における e , ēi̯, os は語尾ではなくて、接尾辞である － РОДЕ の Е はスラヴ祖語の接尾辞 -e- の正常階梯であって、それの o 階梯は 単・造 РОД-О-МЬ ＜ *rod-o-mi に見ることができる ; ПѢТИ の И は、接尾辞 -ei̯- の延長正常階梯に発するものである（同接尾辞のゼロ階梯は、例えば、単・造 ПѢТ-Ь-МЬ ＜ *pont-i-mi に見られる）; НЕБО ＜ *nebhos の o（§. 2 参照）は、例えば、複・主・対 НЕБ-ЕС-А に現れる接尾辞 -es- の母音 e の対応階梯である。

スラヴ祖語の観点からすれば、単・主 ЖЕН-А の語末の -А は語尾ではなくて、語幹母音である（cf. 複・与 ЖЕН-А-МЪ, 複・造 ЖЕН-А-МИ, 複・所 ЖЕН-А-ХЪ)。ラリンガル・モデルの観点からすれば（§. 3 参照)、女・単・主 ЖЕН-А の語末 -А は、複・中・主・対 СЕЛ-А の語末の -А と同じく、非分割多数性（一括性）指標 H_2 と単・造 РОД-О-МЬ の接尾辞 -o-（対応階梯）や単・呼 РОД-Е の接尾辞 -e-（正常階梯）と同等の語幹母音 e の結合したものである、すなわち ЖЕНА や СЕЛ

ѧ の ѧ は eH_2 に起源を持つのである。

開音節法則の結果として、スラヴ祖語のあらゆる子音語尾及びソナント語尾は脱落するかあるいはまた先行接尾辞母音に融合してしまった。それ故に、古代ブルガリア語の動詞、名詞、代名詞の語末の大部分は、実質的には、古い接尾辞であったり、あるいはまた古い接尾辞と古い語尾の融合より出たものである。次例参照、3・単・アオ ВЕДЕ ＜ スラ祖 *u̯ed-e-t, 単・男・主 РОДЪ ＜ スラ祖 *rod-o-s, 単・所 РОДѢ ＜ スラ祖 *rod-o-i̯, 複・女・対 КОСТИ ＜ スラ祖 *kost-i-ns 。二重母音の単母音化や語末の特別な音声学的変化過程（§. 2 参照）の故に、接尾辞はその外見を変えてしまったのである。例えば、ЖЕНА の曲用には － 単・主 ЖЕНА ＜ *gʷen-ā, 生 ЖЕНѢ ＜ *gʷen-ā-ns（§. 36 参照), 与 ЖЕНѢ ＜ *gʷen-āi̯ － スラヴ祖語の ā 語幹曲用の形を統合していたかつての幹母音 ā は、もはや見えなくなっている。三階梯（正常階梯 eu̯ 、対応階梯 ou̯ 、ゼロ階梯 u）における接尾辞 -u- の位置に、古代ブルガリア語では ОВ : ОУ : Ъ の交替が現れるのである。次例参照、単・主 СЪНЪ ＜ *sūn-u-s, 生 СЪНОУ ＜ *sūn-ou̯-s, 与 СЪНОВИ ＜ *sūn-eu̯-ei̯（§. 2 参照)。それ故、スラヴ祖語の同接尾辞 -eu̯-（eu̯ : ou̯: u）は、もはや古代ブルガリア語の曲用には現れていない。それは、ある形においては、語尾ないしは語尾の一部に変わってしまい（単・主 СЪН-Ъ, 生 СЪН-ОУ, 与 СЪН-ОВИ, 複・主 СЪН-ОВЕ, 生 СЪН-ОВъ）、また別の形では、語根と語尾の間の繋ぎ母音になってしまっている（単・造 СЪН-Ъ-МЬ, 複・造 СЪН-Ъ-МИ, 複・与 СЪН-Ъ-Мъ, 複・所 СЪН-Ъ-Хъ)。 Cf. 主 РОД-Ъ ＜ *rod-o-s, 造 РОД-О-МЬ ＜ *rod-o-mi, 所 РОД-Ѣ ＜ *rod-o-i̯, 複・所 РОД-Ѣ-Хъ ＜ *rod-o-i̯-su ; 単純アオ 単・1 СѢД-Ъ ＜ *sēd-o-m（ o 階梯), 2 СѢД-Е ＜ *sēd-e-s（ e 階梯), 複・1 СѢД-О-Мъ ＜ *sēd-o-mos, 複・3 СѢД-Ѫ ＜ *sēd-o-nt 。古い接尾辞と語尾の融合の結果として、古代ブルガリア語のあらゆる曲用と活用は、繋ぎ母音と語尾の独自の組み合わせ

特徴を持つに至るのである。

大鼻母音（голяма носовка）ないしは小鼻母音（малка носовка）で終わる古代ブルガリア語の文字の形は、我々がそれらをキリール文字で見るかグラゴール文字で見るかによって、二つの解釈が可能である。例えば、キリール文字 **ЖЕН-Ѫ** の **Ѫ** は語尾であるが、グラゴール文字 **ѫЭРЭЄ**（シナイ詩編 Psalterium Sinaiticum の字体による）では、**ѫЭР-** を語根、 **-Э-** を接尾辞ないしは繋ぎ母音、そして **-Є** は単数対格鼻音語尾（cf. ギ 単・対 χώρ-ᾱ-ν「国、地方」: ラ 単・対 terr-a-m「大地、国、地方」）だと見なすこともできる。同様にして、キリール文字の複数対格 **КОН-Ѧ** は、語根 **КОН-** と語尾 **-Ѧ** に分けることができるが、グラゴール文字の **ѣЭРЭЄ**（シナイ詩編の字体による）は、語根 **ѣЭР-**、幹母音ないしは繋ぎ母音 **-Э-** 及び鼻音語尾 **-Є**（cf. ギ 複・対 λύκους < *λυκ-ο-νς ; ラ 複・対 lupōs < *lup-o-ns）に分けることができる。同じことは、現在1人称単数 **БЕР-Ѫ**, グラゴールの **ЬЭЬЭЄ** < *bher-ō-m（§. 35 参照）及び単純オリスト複数3人称 **СѢД-Ѫ**, グラゴール **ѠѦѨЭЄ** < *sēd-o-nt のような形についても当てはまるのである ; cf. ギ 未完・複・3 ἐ-παίδευ-ο-ν < *ε-παιδευ-ο-ντ 。

こうして、スラヴ祖語の曲用及び活用変化形は、必ず語幹、すなわち語根及び接尾辞を備え（例えば、呼 *rod-e [**РОД-Е**], 単・主 *žen-ā [**ЖЕН-Ѧ**])、またほとんど必ず語尾を備えた（例えば、単・主 *rod-o-s [**РОД-Ъ**], 現・3・単 *u̯ed-e-ti [**ВЕД-Е-ТЬ**], アオ・3・単 *u̯ed-e-t [**ВЕД-Е**])。原則として、曲用及び活用変化を行う古代ブルガリア語の単語は、語根（語根及び繋ぎ母音）と語尾から成っている — 例、現・1・単 **ХОЖД-Ѫ**, 2 **ХОД-И-ШИ**, 3・複 **ХОД-Ѧ-ТЬ** ; 単純アオ・1・単 **ИД-Ъ**, 2 **ИД-Е**, 3・複 **ИД-Ѫ** ; 男・単・主 **ВАШ-Ь**, 生 **ВАШ-Е-ГО**, 複・生 **ВАШ-И-ХЪ** ; 単・主 **РОД-Ъ**, 生 **РОД-А**, 与 **РОД-ОУ**, 所 **РОД-Ѣ** 。しかし、すでにスラヴ祖語の時期に、連続的に付加し得る多数の派生力を持っ

た新接尾辞が登場して来るのである － 例、 **старъ**, **старьць**, 中世ブ **старьчьскъ** ; **рад-ъ**, **рад-ост-ь**, **рад-ост-ьн-ъ** ; **вѣр-а**, **вѣр-ьн-ъ**, **вѣр-ов-ьн-ъ** ; **мил-ъ**, **мил-ост-ь**, **мил-ост-ьн-и** ; **про-рок-ъ**, **про-роч-ьств-о**, **про-роч-ьств-ов-а-ти** ; **оуч-ен-ъ**, **оуч-ен-ик-ъ**, 中世ブ **оуч-ен-ич-ьск-ъ** 。

動詞、名詞、代名詞系列の中に、硬、軟二種類の繋ぎ母音と語尾のタイプが独立するのである。例、1・単 **бер-ѫ**, 3・複 **бер-ѫ-тъ** に対して、現・1・単 **глагол-ѭ**, 3・複 **глагол-ѭ-тъ** ; 単・主 **род-ъ**, 生 **род-а**, 与 **род-оу**, 造 **род-о-мь**, 複・対 **род-ы** に対して、単・主 **кон-ь**, 生 **кон-ꙗ**, 与 **кон-ю**, 造 **кон-е-мь**, 複・対 **кон-ѧ** ; 男・単・主 **т-ъ**, 生 **т-о-го** に対して、男・単・主 **ваш-ь**, 生 **ваш-е-го** 。

古代ブルガリア語最終期には、語末のイェル（ъ）、イェリ（ь）の脱落に続いて、語根（接頭辞及び語根）だけから成る、あるいは語根及び接尾辞（接頭辞、語根及び接尾辞）だけから成る形が発生してくる － 例、単・主 **род(ъ)**, **кон(ь)**, **зъл(ъ)**, **зол(ъ)**, 複・生 **ран(ъ)** ＜ **рана**, **на-род(ъ)**, **по-вин-ьн(ъ)**, **стар-ьц(ь)**, **стар-ец(ь)**, 複・生 **път-иц(ь)** ＜ **пътица**, 命・2・単 **вижд(ь)**, **ѩжд(ь)**, **сън-ъжд(ь)**, 能過分 **шьд(ъ)**, **при-шьд(ъ)** － すなわち語尾なしの形が現れてくるのである。弱い位置の（脱落して然るべき）イェル、イェリ母音（弱母音）に終わるいくつかの単音節代名詞形に対しては、すでに古代ブルガリア語の時期に新しい形態素（承前代名詞 anaphoric）が付け加えられている － 例、 男・単・主 **сьи**, **сии** ＝ **сь** ＋ **и**（ *i̯ь ＜ *i̯-o-s), 中世ブ **тъи**（現代ブ т о й）＝ **тъ** ＋ **и**。こうして、指示代名詞体系の全面的再編成が始まり、それは中世ブルガリア語期を通じて続くのである。

§．8　スラヴ祖語の語根構造の変化

古代ブルガリア語は、場合によっては、今なおはっきりと印欧語語根の二基本型の痕跡を顕している。第一型は、両子音型でかつ動詞・名詞産出型である。次例参照、 現・単・1　**РЕК-Ж**　と　単・主　**ОТ-РОК-Ъ**「発言しない者、子供、下僕」; **БЕР-Ж**, **БЬР-Д-ТИ**, **СЪ-БОР-Ъ**　と　**БРѢ-МѦ** ＜ *bher-men ; **ВЛѢК-Ж**「引っ張る、引き運ぶ」 ＜ *u̯el-kʷ- ,**ВЛЬКЪ**「引いていく、略奪していくもの」 ＜ *u̯l̥-kʷ- , **ВЛАКНО** ＜ *u̯ol-kʷ-n-, **ВЛАСЪ**＜ *u̯ol-s- , **ВЛЪНА** ＜ *u̯l̥-n- ＜ *u̯l̥-H-n-(§.4 参照)。上例後半の語群では、両子音構造が現出してくるのは、ようやく　kʷ, n, s　が浮彫りになって以後のことであり、これは、語根の一部ではなく始原的な語根拡張子ないしは接尾辞である。第二型の語根は単子音構造であり、代名詞産出型である： 男・中・単・生　**Т-О-ГО**　と　**С-Е-ГО**, 与　**Т-О-МОУ**　と　**С-Е-МОУ**, 男・単・主　**К-Ъ-ТО**,　中　**Ч-Ь-ТО**,　1・単・生　**М-Е-НЕ**,　2　**Т-Е-БЕ**。

祖語における　H (H₁, H₂, H₃)　類の音声学的変化の結果、また時と共に本来の意味を失って行った様々な語根拡張子の付加によって、すでに早期スラヴ祖語期に、始原的な動詞・名詞語根の両子音構造が全体として損なわれてしまった。例えば、スラヴ祖語の語根　*u̯l-　が今なお見えている　**ВЛѢКЖ**, **ВЛЬКЪ**, **ВЛАКНО**, **ВЛАСЪ**, **ВЛЪНА**（上例参照）　の場合とは違って、 現・単・1　**ПЛЕТ-Ж**＜ *pl-ek-t- や 不定詞　**ДѢ-ТИ** ＜　*dheH₁-

のような例においては、音や意味の近い古代ブルガリア語の単語の比較対照によっては、始原的な語根は再構し得ない。両子音モデルの観点からすれば、 現・単・2　**БОУДИШИ**　＜ *bhou̯-dh-　や　**ГРЕБЕШИ**　＜ *ghr-ebh- のような形における始原的な語根は、　*bhou̯-(o 階梯) や *ghr-(語根母音ゼロ階梯) であって、**Д** (dh) や　**Б** (bh)　は拡張（接尾辞）であり、前者はゼロ階梯、後者は e 階梯である ; 歴史的観点からすれば、**ГРО**

БЪ では、o 階梯にあるのは語根母音ではなく接尾辞母音である。同様の語根拡張子（接尾辞）は、現代スラヴ諸語にも見られる。例、語根 *der- : *dьr-（現・単・1 **ДЕР-Ж** 不 **ДЬР-ДТИ** 参照）によって、現代ブルガリア語に立証されるものとして次のもの、д е р а（皮を剥ぐ），д р ъ г н а（強く梳く） < *dьr-g-，д р а с к а м（引っかく），д ъ р п а м（引きむしる） < *dьr-p-，д р ъ н （**ДРЬНЪ**）= ロ д ё р н「（小）塊、裂き取ったもの」，д р ъ н к а м「綿花を梳く、羊毛を梳く」、ここから転義して、独立動詞 д р ъ н к а м「（羊毛を梳くような）単調な音を発する」が現れている；д р ъ н，д р ъ н，я р и н а「無駄話、空談」も参照。Cf. ギ δέρ-ω「皮を剥ぐ、なめす」，δρέπω < *dr-ep-「破り取る、裂き取る、切り取る」，δρέπανον「鎌」。

ある場合には、古代ブルガリア語の語根は、一見したところ両子音構造であっても、歴史的観点からすれば、第二子音は語根拡張子（接尾辞）であることが判るのである。例えば、現・単・1 **ПАСЖ** < *peH₂-sk'- においては、語根は *peH₂- であり、**С** はかつて現在形の特徴を表示した接尾辞 -sk'- に発するものである（cf. ラ 現・単・1 pāscō「放牧する」に対して、 完・単・1 pāvī ; 現・単・1 (g)nōscō「認識する、知る」に対して、 完・単・1 (g)nōvī、これは、ギ γι-γνώ-σκω「知る、気付く」 に対する Ⅱアオ・単・1 ἔ-γνω-ν と同系関係にある）。**РѢКА** においては、本当の語根は **РѢ-** < *roi̯-(cf. п о р о й 奔流、どしゃ降り）であり、語根の e 階梯は ラ rī-v-us「川、河、流れ」< *rei̯-u- に現れており、また、**К** は古い語根拡張子（接尾辞）である。

また、始原的な語根のうち一子音だけが残っている場合がある。次例参照、現・複・3 **СЖТЪ**（単・1 **ЕСМЬ**） < *H₁s-o-nt[5] あるいは、ゼロ階梯の語根母音と e 階梯の接尾辞 -er を持つ **ПЕРО**= ギ πτερόν「羽」（cf. ギ 現・単・1 πέτ-ο-μαι「飛ぶ」における e

階梯）。現・単・1 **пьѭ**, 2 **пьєши** ＜ スラ祖 *pei̯-e-（§. 2 参照）においては、始原的な語根部分は子音の **п** だけである － **пьѭ** ＜ *pH₃-ei̯-（語根ゼロ階梯と接尾辞 -ei̯- の e 階梯を持つ）。こうして、**пьѭ**と ラ pōtus「酔った、酒飲みの」＜ *peH₃-t- やレスボス方言[11] 現・単・1 πώνω「飲む」＜ *peH₃-n- との同系関係が説明される；o 階梯 *poH₃- については、ギ 完・単・1 πέπωκα「飲んだ」＜ *pe-poH₃- に立証される。

単子音語根（代名詞語根）では、時には、その一つの語根子音さえ失われていることがある。例えば、男・中・単・生 **єго** ＜ *i̯-o-go の形においては、先頭音 **є** は交替語幹母音 o（cf. **т-о-го**）からでたものである。一方、キリール書法の **ѥго** における **ѥ** の記号は、歴史的観点からすれば、代名詞語根だと見なすことができる（cf. ギ 単・主 ὅς ＝ 古イ jáḥ ＜ *i̯-o-s「関係代名詞［who, which, that］」)。しかし、このスラヴ祖語の代名詞語根 *i- は、例えば、複・与 **имъ** ＜ *i̯-o-i̯-m- の形においては、語幹母音 o 及び複数指標 i（§. 27 参照）と融合してしまっていて、キリール書法でもグラゴール書法でもそれらを識別することはできない。承前・関係代名詞複数与格の代名詞語根 *i- の唯一の痕跡は、ゾグラフォス写本の書法（**нимъ**）が証明している **нимъ** における語頭添加（prothesis）の **н** の軟性である。

後期スラヴ祖語の時期には、口蓋化過程と開音節法則の結果、古い両子音語根（動詞・名詞語根）には更に大きな変化が発生した。同一語根内で口蓋子音と非口蓋子音の間の交替が現れるのである － 次例参照、 **жити** ＜ *gʷī -「生きる、食べていく、咀嚼する」, 使役・不 **гонити**「（人を）食べさせる、存在させる」＜ *gʷoi̯-（語根母音 o 階梯、§. 6, 第 2 項 a 参照）；現・単・1 **женѫ**「追う」＜ *gʷen- , 不 **гънѧти** ＜ スラ祖 *gъn- ＜ *gʷhьn-（古い円唇軟口蓋音に後続する ь の ъ への変化を伴う）；**ис конь**「始めから、始めは」, 現・単・1 **н-ѧ-чьн-ѫ** ＜ *kьn-「始める」；現・単・1 **рекѫ** 2 **речеши**, 命・

単・2 **рьци** 不 **решти**；**чистъ** ＜ *kei̯d-t-（第一次的語根は **цѣдити** ＜ *koi̯d-「清める」），**оцѣстити** ＜ *koi̯d-t- ；現・単・1 **жьрѫ**「飲み込む」 ＜ *gʷ ь r-, **грълo** ＜ スラ祖 *g ъ r-＜ *gʷ ь r-（古い円唇軟口蓋音に後続する ь の ъ の変化を伴う）；現・単・1 **могѫ**, 2 **можеши**, 命・単・2 **моѕи** 不 **мошти**。

またところによっては、語根の第一子音あるいは第二子音が二子音結合群に変化した ― 例、 現・単・1 **блюдѫ**「注意する、気遣う、守る」＜ *bheu̯dh- ，使役・不 **боуДити**（覚醒させる）＜ *bhou̯dh- ；現・単・1 **ловлѭ**, 2 **ловиши**； **хождѫ**, **ходиши**；**лештѫ**, **летиши**。ある場合には、継ぎ目子音 **т**, **д** が **с** に変化したり、あるいは脱落した ― 例、 現・単・1 **ведѫ**, 不 **вести**；**водѫ**, **вости**；**чьтѫ**, **чисти**；現・複・3 **ѥдѧтъ**, 単・1 **ѥмь** ＜ *ēd-mi, 不 **ѥсти** ＜ *ēd-tei̯。時に（歯音の前で）、唇音 **п**, **б** も脱落した ― 単・1 **тепѫ**「打つ、叩く」 不 **тети**；**гребѫ**, **грети**；**сънъ** ＜ *sup-n- ＝ ギ ὕπνος「眠り」，**оу-съпати**。語根の内の第一子音に対しては、接頭辞（前置詞）も影響を与えた ― 次例参照 **чѧдо** に対して、**иштѧдье** ＜ **ис-чѧдье**；**чрѣво** に対して、**иштрѣва** ＜ **из чрѣва**；現・単・1 **женѫ**「追う」，2 **женеши** に対して、**ижденѫ**, **ижденеши** ＜ **из-женѫ**；現・単・1 **влѣкѫ**, 2 **влѣчеши** に対して、**облѣкѫ**, **облѣчеши** ＜ *obh-u̯elkʷ-。音声学的変化の結果、始原的語根の子音不変の原理は崩れたのである。早期スラヴ祖語の語根では、語根母音だけが変化していた（例、*rek- : *rēk- : *rok-）のに対して、古代ブルガリア語の語根では、この変化は母音にも子音にも及ぶに至るのである ― 例、現・単・1 **рекѫ**, 2 **речеши**, 不 **решти**, アオ・単・1 **рѣхъ**, 命・単・2 **рьци**, 反復・不 **на-рицати**；男・単・主 **от-рокъ**, 中 **от-роча**, 男・複・主 **от-роци**。

語根母音の階梯にも極めて大きな変化が発生した。正常階梯 e と対応階梯 o の始原的な差異は、一連の場合には残っている — 次例参照、現・単・1 **рекѫ**（言う、発言する），**от-рокъ**（子供、未成年）；**текѫ**（走る），**токъ**「流れ、奔流」；**везѫ**, **возъ**「馬車、（荷）車」；現・単・1 **несѫ**, 反復・現・単・1 **ношѫ**；現・単・1 **лежѫ**, 現・単・1 **по-ложѫ**。同様の差異は、グラゴール文献の次のような例にも見られる — 現・単・1 **ѿѧѳєѧѳє**（**блѧдѫ**）「罪を犯す、誤る」：**ѿѧѳєѧѳѹ**（**блѫдъ**）「放蕩、堕落、迷い」；**ѡьѳєѯѳє**（**трѧсѫ**）：**ѡьѳєѯѹ**（**трѫсъ**）；**ѧѳєѣѳє**（**лѧкѫ**）「曲げる、よる、折る」：**ѧѳєѣѹ**（**лѫкъ**）（弓）。しかし、スラヴ祖語後期には、ゼロ階梯（低減階梯）はもはや希に見られるにすぎない（r, l, m, n, i, u に終わる語根にのみみとめられるにすぎない）。非子音的な子音で終わる語根と同じ様な交替が、一貫して行われていたとすれば、それは極めて大きな音声学的変化をもたらしていたはずであり（例えば、語根 *nek'-〔**не-сѫ**〕は、ゼロ階梯で *n̥s- ＞ *ęs- となり、また一方、語根 *pekʷ-〔**пек-ѫ**〕は、ゼロ階梯で *pk- ＞ *k- になっていたはずである）、そうなれば一連の同系語間の音声学的近似性は消滅していたはずである。ゼロ階梯での両子音語根のあまりにも大きな単純化を避けるために、第二子音が r, l, m, n, i, u でない場合には、語根母音の正常階梯ないしはその対応階梯が一般化したのである。er:or: ь r, el:ol: ь l, en:on: ь n, em:om: ь m 結合群は、これに母音が後続するときには変化がなかったが（例、**берѫ**, **съ-боръ**, **бьрати**；**начьнѫ**, **коньць**）、子音が後続すると、それは **рѣ** : **ра** : **рь** = r̥（例、**врѣмѧ** ＜ *u̯ert-men, 使役・不 **от-вратити** ＜ *u̯ort-，不 **врьтѣти**）；**лѣ** : **ла** : **ль** = l̥（例、不 **облѣшти** ＜ *obh-u̯elkʷ- ,**облакъ** ＜ *obh-u̯olkʷ-, 受過分 **обльчєнъ** ＜ スラ祖 *ob-l̥č-en-＜ *obh-u̯ ь lkʷ-en-）；**ѧ** : **ѫ**（例、受過分 **рас-пѧтъ**（磔にされた）＜ *p ь n-t-, **пѫто**「枷、馬の足を縛る紐」＜ *pon-t-）のように変わったのである。

語根母音の延長といったような位置的な差異は（不完了体の派生動詞に最も頻出）、次のような **рѣ** : **ор** : **ар** : **ьр** : **ир** : **рь** (ṛ) あるいは **он** : **ѧ** : **ьн** : **ин** 型の独特の交替の原因となった。例えば、不 **мрѣти** < *mēr-t-（§. 10 参照）, **морѣ**, **оу-марѩти** < *mōr-, 現・単・1 **мьрѫ**, 現・単・1 **оу-мирѧѭ** < スラ祖 *mīr- = *m̄ьr-, **съ-мрьть** < *mьr-ti- ; **ис конии**, 不 **на-чѧти** < *kēn-t-, 現・単・1 **на-чьнѫ**, 現・単・1 **на-чинаѭ** < スラ祖 *čīn- < *k̄ьn-。ei̯: oi̯: i, eu̯: ou̯: u の始原的な交替は、位置的な条件や母音延長に応じて（ oi > ōi, ou > ōu, i > ī, u > ū ）、**и** : **ѣ** : **ь** : **ои** : **аи**, **ю** : **оу** : **ѣ** : **ѫ** : **ов** : **ѣв** : **ав** 型の交替に変じた。次例参照、 現・単・1 **по-чьѭ** < *kʷei̯-（§. 2 参照）, **по-кои** < *kʷoi̯-o- ; 不 **свьтѣтѣ** < *k'u̯i-t- ,**свѣтѣ** < *k'u̯oi̯-t-, 不 **свитати** < *k'u̯ī-t-; 不 **кроити**, **краи** < *krōi̯-o- ; 現・単・1 **блюдѫ** < *bheu̯dh-, 使役・不 **боудити** < *bhou̯dh-, 不 **бъдѣти** < *bhudh- ; 現・単・1 **словѫ** < *k'leu̯-（§. 2 参照）, 不 **слоути**, **слава** < *k'lōu̯- ; 不 **крѫти** < *krū-, **кровъ**「屋根、庇、幌」< *krou̯- ; 不 **тѫти**「太くなる、肥える」< *tū-, **тоукъ**「脂肪、膏」< *tou̯-k- ; 不 **на-вѫкнѫти** < *ūk-（語頭添加音 prothesis **в** を伴う）, 不 **оучити** < *ou̯k-。

§．9　始原的な名詞接尾辞と動詞接尾辞の統一性

古代ブルガリア語には、他の古代印欧諸語におけると同じように、名詞、代名詞、動詞の三つの主要品詞が存在している。それらに対応してそれぞれ、名詞変化（曲用）、代名詞変化（曲用）、動詞変化（活用）の三つの基本的な語形変化（屈折）類があり、そのいずれもが一定タイプの語根、接尾辞、語尾と結合するという特徴を持っている。語根母音の交替も、スラヴ祖語的な状態の名残として、名詞と動詞に固有のものである。多くの場合、古代ブルガリア語の名詞、代名詞、動詞の接尾辞は、起源的には同じであるが、やがて時と共に外面上の音の性格が変わってしまうか、あるいはまた異なる語派生、語形変化環境に措かれることになった　－　異なるタイプの語根、拡張語根ないしは語幹（語根　＋　別の接尾辞）の後ろ、あるいは異なるタイプの語尾の前、のように　－　すなわち、非常に一般的な言い方をすれば、異なるパラダイム（曲用と活用）に変じたのである。更に、開音節法則の結果、スラヴ祖語の接尾辞の多くが、古代ブルガリア語では語尾に変わったのである（§.7 参照）。

古い接尾辞は、その音と位置の多様性の故に、全ての顕れにおいて同一形態素であることをやめてしまった。歴史的観点からすれば、男・中・単・生 **Т-О-ГО**, 単・呼 **ВЛЬЧЕ**, アオ・３・単 **НЕС-Е**＜ *nek'-e-t , 単・造 **ВЛЬК-О-МЬ** は、語根の後ろに同種の始原的なテーマ（幹）母音を持っており、**ВЛЬЧЕ** と **НЕС-Е** では、それが正常階梯すなわち e 階梯であり、一方、**Т-О-ГО** と **ВЛЬК-О-МЬ** では o 階梯なのである。古代ブルガリア語では、この古い統一性が崩れてしまっている。指示代名詞の曲用（例、男・中・生 **Т-О-ГО**, 与 **Т-О-МОУ**, 所 **Т-О-МЬ**, 女・単・生 **Т-О-ѦА**, 与・所 **Т-О-И**, 造 **Т-О-ѪѪ**）においては、古い接尾辞 -e-（対応階梯では -o- ）は今なお語根と語尾間の結合母音の役割を果たしているが、男性名詞硬変化では、それは全１５格形中三つの格形（単・造 **В**

ЛЬК-О-МЬ, 複・与 ВЛЬК-О-МЪ, 双・与・造 ВЛЬК-О-МА）に見られるにすぎず、したがって、それは歴史的観点からのみ接尾辞という区分ができるにすぎない。一方、承前代名詞の曲用において、例えば、男・中・生 Е-ГО ＜ *i̯-o-go, 与 Е-МОУ, 所 Е-МЬ では、古い接尾辞 -e-（対応階梯では -o- ）はもはや語根である。

始原的な動詞語幹と名詞語幹の間には原理的な差異は存在しない。同一の接尾辞 -e-（対応階梯では -o- ）は、古代ブルガリア語の動詞の -e- 活用の現在形、例えば、単・1 ВЛѢК-Ж, 2 ВЛѢЧ-Е-ШИ ＜ *u̯el kʷ-e- あるいは НЕС-Ж, НЕС-Е-ШИ にも、男性・中性名詞硬変化（すなわちスラヴ祖語 o 語幹名詞曲用）、例えば、単・主 ВЛЬКЪ ＜ *u̯l̥ kʷ-o- あるいは ВОДОНОСЪ ＜ *-nok'-o- にも立証される。単・主 ВЛЬКЪ ＜ *u̯l̥kʷ-o-s には、語根母音のゼロ階梯と接尾辞の o 階梯が（接尾辞の e 階梯は 呼 ВЛЬЧ-Е ＜ *u̯l̥kʷ-e に見える）、また 現・単・3 ВЛѢЧ-Е-ТЪ ＜ *u̯elkʷ-e-ti には、語根母音の e 階梯と接尾辞の e 階梯が立証される（接尾辞の o 階梯は、現・複・3 ВЛѢКЖТЪ, グ ѵѧѧѧ-ѳ-ѥѡѳ ＜ *u̯elkʷ-o-nti に見られる）。現・単・3 НЕС-Е-ТЪ ＜ *nek'-e-ti では、語根母音、接尾辞共に e 階梯が現れ、ВОДО-НОСЪ ＜ *nok'-o- では、語根母音、接尾辞共に o 階梯が現れている。換言すれば、 *u̯elkʷ-e- 及び *nek'-e- の語幹から、語根母音と接尾辞の異なる階梯を用いて、一定の特性の担い手（引いたり運んだりする特性を持つ生物）の名称も行為自体（引いたり運んだりすること）の名称も形成されたのである。我々は、こうした同一の原接尾辞（正常階梯で -e- 、対応階悌で -o- ）を、代名詞語幹にも見ることができる - 例、中・単・生 Ч-Е-СО ＜ *kʷ-e-so, 男・中・生 С-Е-ГО ＜ *k'-e-go, 2・単・生 Т-Е-БЕ, 男・中・生 Т-О-ГО, 2・単・造 Т-О-БОЮ 。

§．10　始原的な動詞、名詞語幹における一括多数性（тотална множественост）指標 H_2

始原的な名詞語幹と動詞語幹の統一性は、-ѧ　語尾の中性複数主・対格形（**сѣл-ѧ**, **чрѣв-ѧ**）にも、現在語幹に接尾辞 -e-（-i̯e-）、過去語幹に語根母音ゼロ階梯（低減階梯）を持つ、動詞の不定詞・アオリスト形にも観察することができる　－　例、現・単・1　**бер-ѫ**,　2　**бер-е-ши**, 不　**бьр-ѧ-ти**；現・単・1　**пиш-ѫ**,　2　**пиш-е-ши**　＜ スラ祖 *pīs-i̯e- ＜ *pei̯-k'-i̯e-,　不　**пьс-ѧ-ти** ＜ *pik'-　。中性複数主・対格形語尾　-ѧ　と女性単数主格語尾　-ѧ、例えば、　**жена**　、また一般的に　-ā　語幹の接尾辞　-ā-（例、複・与　**жен-ѧ-мъ**,　造　**жен-ѧ-ми**,　所　**жен-ѧ-хъ**）の同系関係については、§．24 を参照。

中性複数主・対格形の語尾　-ѧ　は、始原的な動詞・名詞接尾辞　-e- と始原的な非分割（一括）多数性指標である　H_2（eH_2 ＞ ā,　§．3 参照）から発生したものである。テーマ母音　ā　を持つスラヴ祖語のこの原動詞は、非分割的、一括的、瞬時経過的、一気実現、完遂、完成的行為を表したのである（それは、後にスラヴ祖語の過去語幹、すなわちアオリスト［минали свършени форми］幹に変わっている　－　アオ・単・1　**бьр-ѧ-хъ**, **пьс-ѧ-хъ**　参照）。したがって、　**бьр-ѧ-** ＜ *bhьr-e-H_2-　及び　**пьс-ѧ-** ＜ *pik'-e-H_2-　における接尾辞　-ѧ-　は、現・単・2　**бер-е-ши**　や　単・造　**съ-бор-о-мь**　に見られる原接尾辞　-e-（対応階梯では　-o-）と行為や特性の全一性、非分割性指標である　H_2　とに由来するものである（cf. ギ　現・単・3　φέρ-ε-ι「運ぶ」＜ *bher-e- と　φορά「運ぶこと、携行、肥沃、（重）荷）」＜ *bhor-e-H_2、集合的な意味を持つ古い名詞で、後に女性名詞に編入された）。二次的不完了体動詞の接尾辞　-ѧ-　については、§.17　第 3 項参照。

その他の始原的な過去語幹の指標は次の通りである：

1. 語根重複（畳語法　reduplication）。これは、ギリシャ語やラテン語の完了形（perfectum）に見られる　－　1・単　γέ-γραφα「書いた」, πε-φρόν-ηκα「思った、考えた」，　λέ-λυκα「ほどいた、解き放った」，ce-cid-ī　「落ちた」，me-min-ī「覚えている」，te-tig-ī「触れた、達した」。これらの例における語根の重復は、例えばブルガリア語の　хōп !... хōп !「一回更にまた一回跳ぶ」といったような行為の多回性（反復性）を表すのではなく、例えばブルガリア語の　хòп-хоп !「素早く一気に跳んだ」のような、全一的、一括的実現行為、一気完遂的行為を表す。

2. 古い語根重複の継承としての、語根母音の延長（§. 12 参照)。こうした延長は、アオリスト形にみられる　－　例、1・単　**вѣсъ**　「導いた」＜　*u̯ēdh-s-，**бѧсъ**「刺した」＜ *bhōdh-s- 。

動詞の原接尾辞　-ā-　の形成に際して、H_2　の指標が加わったという証明はヒッタイト語にあり、そこでは、語幹　neuaḫḫ「復活させる、新しくする」が文証され、またそれはラテン語　nov-ā-re　「新しくする」＜ *neu̯-e-H_2-　の語幹と同じものである。

бьр-ѧ-,　**пьс-ѧ-**　＜ *bhьr-e-H_2-,　*pik'-e-H_2-　型の過去語幹は、語根母音のゼロ階梯ないしは低減階梯と接尾辞　-e-　の正常階梯を内包している。現在語幹に　-e-　を持つ別の動詞類、例えば、現・単・1　**нес-ѫ**, 2　**нес-е-ши**,　不　**нес-ти**；**вед-ѫ**, **вед-е-ши**, **вес-ти**　にあっては、語根は非完了（infectum）幹[6] も不定詞・アオリスト幹も共に　e　階梯であるが、接尾辞は非完了（infectum）形においてのみ　e　階梯であった。この過去語幹（アオリスト幹　минала　свършена　основа）では、接尾辞　-e-　はゼロ階梯であり、したがって、この語幹特徴を表示した、行為の全一性指標　H_2　は、語根の後ろに直接付加されたのである。この始原的な語幹　*nek'-H_2-　及び　*u̯edh-H_2-　から第Ⅱシグマ・アオリストの形　**нес-о-хъ**　及び　**вед-о-хъ**　が発生するのであり（§. 13 参照）、それは恐らくは、á-bodh-i-ṣam「私は目覚めた、気付いた」

＜ *e-bhou̯dh-H_2-s-(e は加音 augmentum）型の接尾辞 -iṣ- を持つ古代インド語のアオリスト形と同系関係にある。第Ｉシグマ・アオリスト形を持たなかった動詞、現・単・1 **ПАД-Ж**, 2 **ПАД-Е-ШИ**, 不 **ПАС-ТИ** ; **МОГ-Ж**, **МОЖ-Е-ШИ**, **МОШ-ТИ** ; **СѢД-Ж**, **СѢД-Е-ШИ**, **СѢС-ТИ** 型の動詞にあっては、古代ブルガリア語前期には、恐らく、第Ⅱシグマ・アオリストの方がより特徴的であったろう。

現在語幹に接尾辞 -e- を持つ動詞の過去語幹が H_2 を内包していることを間接的に示唆しているのが、見かけ上の非テーマ（無幹母音）不定詞 **НЕСТЍ**（ロ нестѝ）, **ВЕСТЍ**（ロ вестѝ）型と **ПѢТИ**（ロ распя̀ть, セ・ク пе̏ти）, **МРѢТИ**（ロ умерѐть）型のアクセントの差異である。この差異の名残がロシア語の無力点不定詞語尾の -ти の -ть への短縮である（例外は、печь ＜ **ПЕШТЍ** 及び мочь ＜ **МОШТЍ** 型のロシア語不定詞である ; ただし、次を参照、ウクライナ語 печѝ, мочѝ）。

不定詞は、接尾辞 -ti- を持つ古い名詞所格形、すなわち古い ti 語幹名詞に起源を持つ。この曲用の所格形としては純粋語幹そのものが使われたが、ただし、接尾辞の正常延長階梯（tēi̯-）を伴う。Cf. 現・単・1 **ПАД-Ж**, 2 **ПАД-Е-ШИ**, 不 **ПАС-ТИ**（落ちる）, 単・主 **ПАСТЬ**「（底なしの）深淵、断崖」＜ *pōd-ti-s, 所 **ПАСТИ** ＜ *pōd-tēi̯（語根母音の延長を伴う古い集約性語幹）（§. 5 参照）; 非集約性語幹 *ped-: *pod- は前置詞 **ПОД-Ъ** に立証されるし、また ギ 単・属 *πο δ-ός*, ラ 単・属 pedis ＜ *ped-es「足の」も同じである。単・所 **ПАСТИ** ＜ **ПАСТЬ**「深淵」の原型とは対照的に、見かけ上の非テーマ（無幹母音）不定詞 **НЕСТИ**, **ВЕСТИ**, **ПАСТИ**, **ПѢТИ**, **МРѢТИ** の原型は、祖語において行為の全一性指標 H_2 を包含した過去語幹に関連している。この古代ブルガリア語の不定詞形は、 *nek'-H_2-, *u̯edh-H_2-, *pōd-H_2-, *pen-H_2-, *mer-H_2- の語幹の継承と見なすべきであって、これに対して、後に H_2 が脱落して以後、接尾辞 -ti- が付加されたの

である。H_2 の脱落後、二重母音 en 及び er は延長されて、上昇調(acute)を得たのであり、そのため **ПѦТИ** 及び **МРѢТИ** のアクセントは、語根上に残るか、あるいはまた不定詞語末 -tēi̯ から語根上へ移動したのである。このような移動は、語根母音が短く、また不定詞語末 -tēi̯- が鋭音調(acute)の長母音を持っていた **НЕСТИ** 及び **ВЕСТИ** 型では起こらなかった。

現・単・1 **БЬЮ**, 2 **БЬЕШИ** < *bhei̯-e-(§. 2 参照), 不 **БИТИ** < *bhi-H_2-, アオ・単・1 **БИХЪ** < *bhi-H_2-s-; 現・単・1 **МЪЮ**, 2 **МЪЕШИ** < スラ祖 *mu-i̯e- < *mu-e-, 不 **МЪТИ** < *mu-H_2-, アオ・・単・1 **МЪХЪ** < *mu-H_2-s- といったような動詞の現在幹と不定詞・アオリスト幹での語根母音の短と長の交替も、このような説明がなされるべきである。

r, n に終わる語根のリトアニア語不定詞も、かつての不定詞・アオリスト語幹における始原的な一括多数性指標である H_2 について、はっきりと証明している。語根母音が e 階梯であったスラヴ祖語の不定詞(例えば、**МРѢТИ** < *mer-H_2-tēi̯, **ПѦТИ** < *pen-H_2-tēi̯)とは異なり、リトアニア語不定詞では、語根母音は低減(ゼロ)階梯であった。次例参照、pìnti < *pn̥-ti< *pn̥-H_2-ti は、**ПѦТИ** と同系; リ gìrti ,ラト dzirt「誉める、賞賛する」< *gʷr̥-ti< *gʷr̥-H_2-ti は、**ЖРЬТИ**「生け贄を捧げる、生け贄の動物の血肉を味わう、食べる」と同系(**ЖРЬТИ** のゼロ階梯は、「味わう」の意も「生け贄を捧げる」の意も表したかつての語根 *gʷer- から次の二つの動詞が作られたということによって説明される — 現・単・1 **ЖЬРЖ**, 2 **ЖЬРЕШИ**, 不 **ЖРѢТИ**「飲み込む」< *gʷer-H_2-tēi̯ は、リ gérti(飲む), ラト dzeŕt(飲む) < *gʷer-H_2-ti と同系、また 現・単・1 **ЖЬРЖ**, 2 **ЖЬРЕШИ**, 不 **ЖРЬТИ**「生け贄を捧げる」< *gʷr̥-H_2-tēi̯ は、リ gìrti(賞賛する), ラト dzirt「賞賛する」< *gʷr̥-H_2-ti と同系)である。リトアニア語不定詞 miŕti「死ぬ」(語根の短音性については、§. 4 参照)は、疑いもなく、新

しい形である　－　古い長音は、ラトヴィア語　miřt「死ぬ」＜ *mr̥-H₂-ti　に立証され、これはまた　**мрѣти**　＜　*mer-H₂-tēi̯　と同系である。古代ブルガリア語の過去語幹においては、語根母音のゼロ（低減）階梯は、能動過去分詞第Ⅱ形及び受動過去分詞形の特徴を表示した。例えば、　現・単・1　**простьрѫ**, 2　**простьреши**, 不　**прострѣти**, **простьрѣти**（現在語幹の影響による形）に対して、**прострьтъ**　＜　*str̥-H₂-t-（ cf.　古イ　stīrṇáḥ「まき散らされた」, ギ　σ τ ρ ω τ ό ς , ラ　strātus「広げられた、被物のある」、　§．2 参照）；**мьрѫ**, **мьреши**, **мрѣти**　に対して、女・単・主　**оумрьла**（ロ　＝　у м е р л ā ；　セ・ク　м р̑ л а、§．4 参照）；**тьрѫ**. **тьреши**, **трѣти**　に対して、**трьла**（cf. ロ　т ё р л а, セ・ク　т р̑ л а）。

第Ⅱシグマ・アオリスト（1人称単数で　**ох**　指標を持つ　－　例、**пад-ох-ъ**, **нес-ох-ъ**）と第Ⅰシグマ・アオリスト（1人称単数で　**х**　あるいは　**с**　指標を持つ　－　例、**бьр-а-х-ъ**, **нѣ-с-ъ**　＜ *nēk'-s- ,**вѣ-с-ъ**　＜ *u̯ēdh-s- , **пѧ-с-ъ**　＜ *pēn-s- , **мрѣ-х-ъ**　＜ *mēr-s-）という伝統的な二分法は、古代ブルガリア語の過去形の記述的分類には大変有効であるが、歴史的な観点からすれば、根拠を持たない。本来の二分法は、　1）古い完了形（パーフェクト perfectum）の語根重複の継承である語根母音延長のある語幹から作る過去形、　2）一括性（集合・多数性）指標　H₂を媒介にして作る過去形、であった。第1区分に属するのが、　現・1・単　**несѫ**,　2　**несеши**,　アオ・1・単　**нѣсъ**＜ *nēk'-s- ；**ведѫ**, **веде**ши, **вѣсъ**＜ *u̯ēdh-s-　類の動詞のアオリスト形である。現・1・単　**пьнѫ**,　2　**пьнеши**,　アオ・1・単　**пѧсъ**＜　スラ祖　*pēn-s-＜ *pen-H₂-s-;　**мьрѫ**, **мьреши**, **мрѣхъ**＜　スラ祖　*mēr-s-＜ *mer-H₂-s-　類の動詞のアオリスト形はこれに属さない。第2区分に属するのが、　現・1・単　**берѫ**, 2　**береши**, アオ・1・単　**бьрахъ**　＜ *bhьr-e-H₂-s-　；**пьнѫ**, **пьнеши**, **пѧсъ**＜　*pen-H₂-s-; **несѫ**, **несеши**, **несохъ**　＜ *nek'-H₂-s-　である。現・1・単　**пьнѫ**, 2　**пьнеши**；

мьрѫ, **мьрешн** 型の動詞にあっては、現・1・単 **несѫ**, **несешн** ; **веда**, **ведешн** 型の動詞とは違って、第Ⅱシグマ・アオリスト形は、スラヴ祖語期にも古代ブルガリア語期にも、原理的に不可能であり、それは第Ⅰシグマ・アオリスト **пасъ** < *pen-H_2-s- や **мрѣхъ** < *mer-H_2-s- は、**несохъ** < *nek'-H_2-s- や **ведохъ** < *u̯edh-H_2-s- とはもともと起源を同じくするものだからである。

§．11　語幹母音の延長階梯の形態的意義

更に我々に動詞・名詞語幹の統一性の例を提供してくれるのが、一つは、（**старъ, слабъ, юнъ** に対する）**старѣи, слабѣи, юнѣи** 型の比較級であり，もう一つは 現・1・単 **старѣѭ**, 2 **старѣеши**, 不 **старѣти** ; **цѣлѣѭ, цѣлѣеши, цѣлѣти**「平癒させる、治療する」; **о-слабѣѭ, о-слабѣеши, о-слабѣти** 型の動詞である。 **старѣи** ＜ *stār-ē- 型の形容詞比較級は、語根重複の継承である、語幹母音 e の正常延長階梯を持っている（対応階梯 o は *stār-o- ＞ **старъ** に立証される)。意味的には、 *stār-ē-（**стар-ѣ-**）は、ブルガリア語の с т а р-с т а р「大変老齢の」（с т а р-с т а р д я д о 大変歳をとったおじいさん）に近い。 Cf. ν ε ώ τ ε ρ ο ς「より新しい」＜ *neu̯-ō-（cf. ν έ ο ς ＝ **новъ** ＜ *neu̯-o- ）型のギリシャ語形容詞比較級の幹母音 o の延長階梯 及び frodoza「より賢い」＜ *prot-ōs- 型のゴート語形容詞比較級。語幹の *stār-ē- は、i̯is による拡張を受けて以後、先ず **старъ** の揚意級［ēlātīvus］[12]（上級）の形として、更に後に比較級としても使われるに至った（男・単・主 **стар-ѣ-и** ＜ *stār-ē-i̯is-)。同語幹 *stār-ē- は、現・1・単 **стар-ѣ-ѭ**, 2 **стар-ѣ-еши**, 不 **стар-ѣ-ти**「次第に老いゆく」に立証される。Cf. **цѣлѣѭ, цѣлѣеши, цѣлѣти**「平癒させる」と **цѣлѣи**「より健康な」; **о-слабѣѭ, о-слабѣеши, о-слабѣти** と **слабѣи**。

語幹母音の延長（古い語根重複の継承）によって、主・対 **влъка** ＜ *u̯l̥kʷ-ō- のような双数形 ― 意味的には「狼―狼」に等しい、すなわち「2匹の狼」（§．5参照）である ―、また 古イ vṛ̥kā , リ vilkù ＜ *u̯l̥kʷ-ō- ＝ 双・主・対 **влък-а**（§．32 参照）のような共同・具格形（sociative-instrumental)、またこれらに関連する、 ラ bene「良

く」, male「悪く」, cito「速く」(短長格〔iambus〕的短縮を伴う benē , malē , citō), longē「長く」, falsō「虚偽に、間違って」, rārē, rārō「希に」型の副詞の形を得ることができるのであり、ここでの幹母音 ē (ō) は、 *stār-ē-> **СТАРѢИ** の幹母音 ē と同系関係にある[7]。

同様にして、例えば、1・単 **ВЕД-Ѣ-АХЪ** < *u̯edh-ē- のような、古代ブルガリア語の未完了過去(インパーフェクト)語幹も、非現在の(終止した)行為を表すための特別派生語幹として作られたのであり、これは、現在の(終止していない)行為を表すための古い語幹(例、現・単・2 **ВЕД-Е-ШИ**, 3 **ВЕД-Е-ТЪ**, 単純アオ・3 **ВЕД-Е** に立証される語幹 *u̯edh-e-)と対照的である。古代ブルガリア語の未完了過去(минало несвършено време)形(1・単 **ВЕД-Ѣ-АХЪ**, **НЕС-Ѣ-АХЪ**, **СѢД-Ѣ-АХЪ**)を作る *u̯edh-ē- , *nek'-ē- , *sēd-ē- のような語幹は、一つは、発話時における、行為に対する主体の不活発な態度(недействено отношение)(すなわち、過去性 [претеритност] — носех, но сега не нося「私は(過去に)運んでいたが、今は運んでいない」)を表したものであり、もう一つは、行為自体の持続性(трайност)を表したものである。したがって、古代ブルガリア語では、原則として、不完了体動詞だけが未完了過去形を持っている。第一の特徴、すなわち、発話時における、行為に対する主体の不活発な態度という面では、スラヴ祖語の過去時制の(後に、インパーフェクトの) ē 語幹は、語根重複の名残である語幹母音延長階梯であって、意味的には始原的な畳音(reduplication)パーフェクトに近似している。

МЬН-Ѣ-ТИ < *mьn-ē-, **ЛЕЖ-А-ТИ** < *legh-ē-, **БЪД-Ѣ-ТИ**, **ВИД-Ѣ-ТИ**, **ГОР-Ѣ-ТИ** 型の、接尾辞 -Ѣ- を持つ不定詞・アオリスト幹も同一起源である。接尾辞 -Ѣ- を持つ古代ブルガリア語の不定詞・アオリスト幹と同系関係にあるギリシャ語の第Ⅱアオリスト受動形[13]が示しているように、延長幹母音 ē (ギ η) は、非完了(infectum)幹の e

指標から得られたものである　－　次例参照、現・2・複　γράφετε「書く」　に対して、アオ・1・単　ἐ-γράφ-η-ν「私は書かれた」；2・複　βλέπετε「見る」　に対して、アオ・1・単　ἐ-βλέπ-η-ν「私は見られた」；　現・2・複　δέρ-ε-τε＝　**дер-е-те**　に対して、アオ・1・単　ἐ-δάρ-η-ν「皮を剥がれた」（**дьр-а-ти**　のように、語根母音の低減階梯を含む)。スラヴ祖語のインパーフェクトが不活発な意味あいを持つのと同じ意味において、ギリシャ語の第Ⅱアオリスト受動形（aoristus secundus passīvī）の意味は不活発性の表現であり、それは、発話時における、行為に対する主体の不活発な態度を表したのである。受動の意味を持つ形（ギリシャ語）も、過去の意味を持つ形ないしは状態表現の語幹（古代ブルガリア語）も、同様の語幹から発達してきた可能性を持つのである。

スラヴ祖語において、接尾辞　-ē-　の不定詞・アオリスト幹は、何よりも先ず、状態の語幹である。これは、つまり、述語動詞の主体は、絶対的な行為、主体に発するものではない行為（**лежати, стоѭти, бъдѣти, висѣти, летѣти, млѣчати, горѣти, сѣдѣти, боѭти сѧ**）に対して不活発な参与者であって、そうした場合には原則として動詞自体も自動詞であるか、あるいはまた、主体が自己の感覚と思考を通して物事を捉える（**видѣти, слъшати, слъшати, мьнѣти, вѣдѣти, зьрѣти**）場合であり、そのような場合、早期スラヴ祖語では、行為が疑似客体（п с е в д о о б ъ е к т、生・奪格による知覚対象補語）を有したことを伝えるものであろう。スラヴ祖語の疑似客体については、次のような用例がそれを証明している　：詩編（Psalterium）XXXVI-37　**виждь п работы**（直きものを見よ）；スプラシル写本（Codex Suprasliensis ）41$_{26}$　**прѣобидѣвъ страха твоего**（汝の恐れをものともせず）；同写本 457$_{26}$　**стъихъ словесъ да слъшимъ**（聖なる言葉を聞こう）；　ルカ　XXIII-49　**зьрѧштѧ сихъ**（(女達も）これらのことを見て)。しかしながら、古代ブルガリア語では、我々は基本的には対格に

よる直接補語を見い出すのであり － ルカ IV-30 **СЛЪШАТЪ СЛОВО**（彼らは言葉を聞く）； マタイ IX-7 **ВИДѢВЪ ИСЪ ВѢРЖ ИХЪ**（イエスは彼らの信仰を見てから）； マタイ XXVI-71 **ОУЗЬРѢ И**（αὐτόν） **ДРОУГАѢ**（他の女が彼を見た） －、これは恐らくはより新しい現象であろう。動詞 **БОЮТИ СѦ** は、常に生格と共に使われており － 詩編 LXXXV-11 **БОЮТИ СѦ ІМЕНИ ТВОЕГО**（御名を恐れる）； 詩編 LII-6 **БОѢШЕ СѦ СТРАХА**（（そのものは）恐れを抱いた） －、これは、 timē Danaōs「汝はダナオイ人達を恐れよ」（この timē は、幹母音の延長階梯 ē を持つ）におけるラテン語対格に比して更に古い用法であろう。

非完了（infectum）幹に接尾辞 -ē- を持つラテン語の第Ⅱ活用動詞[14]も、不活性（状態）あるいは感覚器官を通しての知覚を表すものである －

例、現・1・単 videō、 不 vidēre「見る」（cf. **ВИДѢТИ**）； taceō、tacēre「黙っている」（cf. **МЛЬЧАТИ**）； teneō, tenēre「保つ、持っている」（cf. **ДРЬЖАТИ**）。接尾辞 -ē- を持つラテン語動詞の一部は、それの非完了幹に接尾辞 -e- を持つ、第一次の行為動詞に起源を持つ － 例、現・1・単 plācō, 2 plācis （i ＜ e）「平にする、鎮める」と 現・1・単 placeō，不 placēre「気に入っている（逐語的には、平静・安寧の内にある）」； pendō, pendis「懸ける、吊る」 と pendeō, 不 pendēre「掛かっている」。古代ブルガリア語の、非完了幹に幹母音 e を持つ動詞の一部の未完了（インパーフェクト）幹も、非完了幹の母音 e の同様の延長によって作られるのである ： 未完・1・単 **НЕС-Ѣ-АХЪ** ＜ *nek'-ē-, cf. 現・3・単 **НЕС-Е-ТЪ** ＜ *nek'-e-ti ； **ВЕД-Ѣ-АХЪ** ＜ *u̯edh-ē-, cf. 現・3・単 **ВЕД-Е-ТЪ** ＜ *u̯edh-e-ti。Cf. ラテン語第Ⅲ活用動詞[15]の未完了形の幹母音 e の延長 ： 現・1・単 tegō「覆う、被う」, 2 tegis ＜ *teges, 未完・1・単 teg-ē-bam。

Ѣ（ē）指標を持つ古代ブルガリア語の未完了幹は、古典ギリシャ語第Ⅱ

アオリスト受動形（aoristus secundus passīvī）の語幹と一致しており、発話時以前に終止した持続的行為を表す。不定詞・アオリスト幹に接尾辞 -ѣ-（ē）を持つ古代ブルガリア語動詞にあっては、第一次動詞の e 語幹との関連は目立たないが、それは、不定詞語末に -ѣти を持つ動詞の現在形が、補足付加的な現在指標 i を伴う不定詞・アオリスト幹から作られるからである：例、不 мьн-ѣ-ти ＜ *mьn-ē-, 現・3・単 мьн-и-тъ ＜ *mьn-ē-i̯-（§. 27 参照）。現・1・単 стар-ѣ-ѭ, 2 стар-ѣ-еши, 不 стар-ѣ-ти（男・単・主 стар-ѣ-и「より古い」の語幹 *stār-ē- より、cf. стар-ъ ＜ *stār-o-）；оумѣѭ, оумѣеши, оумѣти（cf. оумъ）；нѣмѣѭ, нѣмѣеши, нѣмѣти（cf. нѣмъ） 型の、接尾辞 -ѣ-（ē）の名詞派生動詞の場合は、接尾辞 -ēi̯- ＝ē＋i の現在幹は、テーマ母音 e（対応階梯では o）を補って拡張されたものである － 例えば、現・3・単 стар-ѣ-е-тъ（стар-ѣ-ѥ-тъ） は、 *stār-ē-i̯-e-ti から出ている。感覚器官ないしは思考過程を経て知覚することを表す -ѣѭ, -ѣти 型の派生動詞も、スラヴ祖語において、生・奪格の疑似客体を持っていた。次例参照、マタイ XXII-18 アッセマーニ写本（Codex Assemanianus） разоумѣвъ... лѫкавествіѣ ихъ（マリア写本 Codex Marianus では、 лѫкавъство）（彼らの悪意を知って）；ヨハネ XVIII-37 послоушаетъ гласа моего（私の声を聞く）；ヨハネ V-24 слоушаѧ слове моего（私の言葉を聞いて）。

接尾辞 -ѣ- の古代ブルガリア語動詞には、過去（不定詞・アオリストないしは未完了）語幹においてだけ不完了体からの派生であるもの（不 мьн-ѣ-ти, 未完・1・単 мьн-ѣ-ахъ, нес-ѣ-ахъ）と、過去語幹も現在語幹もそうであるもの（現・1・単 стар-ѣ-ѭ, 不 стар-ѣ-ти, 未完・1・単 стар-ѣ-ахъ）とがある。

§．12　古代ブルガリア語過去語幹の起源

これまでの記述において、我々は、母音延長を伴う二種類の語幹に出くわしたことになる　：

1．　延長語根母音を持つ過去語幹　－　アオ・1・単　**нѣсъ**　＜　*nēk'-s-, cf. 現・3・単　**несетъ**　＜　*nek'-e-ti　；　アオ・1・単　**вѣсъ**　＜　*u̯ēdh-s-,　cf. 現・3・単　**веде-е-тъ**　；　アオ・1・単　**бдсъ**　＜　*bhōdh-s-, cf. 現・3・単　**боде-е-тъ**　；　ラ　完・1・単　lēgī「集めた」,　cf.　現・1・単　legō　「集める」；完・1・単　vēnī「来た」,　cf. 現・1・単　veniō「来る」。

2．　接尾辞の延長母音を持つ過去語幹　－　未完・1・単　**нес-ѣ-ахъ**　＜　*nek'-ē-, cf. 現・3・単　**нес-е-тъ**　；　ギ　Ⅱアオ・受動　ἐ-γρά-φ-η-ν「書いた」, cf. 現・2・複　γρά-φ-ε-τε「書く」。

ラリンガル・モデル（§．3）は、古い語根重複（畳音　reduplication）と始原的な一括多数性指標（完遂、完成行為の指標）　H_2　による過去語幹形成から、第一型の延長を引き出すのに有効であろう。

ラ　現・1・単　edō「食べる」＜　*H_1ed-と　完・1・単　ēdī　「食べた」＜　*H_1e-H_1ed-　の相関関係を検討してみよう。歴史的観点からすれば、これは、ラ　現・1・単　pen-d-ō「懸ける、吊る」（語根については、語根母音の低減階梯を持つ　現・1・単　**пьнѫ**　参照）　と　完・1・単　pe-pen-dī「懸けた、吊った」　の相関関係と同じである。　*e-ed-　＞　*ēd-

語幹（現・1・単　**ꙗмь**　＜　スラ祖　*i̯ād-mь　＜　*ēd-　の語幹と同じ）は、　*H_1e-H_1ed-　語幹の　H(H_1, H_2, H_3) 脱落後に、得られたのである　；　非テーマ（無幹母音）動詞　**ꙗмь**　＜　スラ祖　*i̯ād-mь　は、畳音（重複）完了幹からできたもので、**ѧдмь**　＜　スラ祖　　*dō-d-mь　が、もっと別型の始原的な畳音完了幹　*deH_3-dH_3-　からできているのと同じである。同様にして、現・1・単　emō「買う」　と　完・1・単　ēmī

「買った」 の相関関係は、非畳音の語幹 *H_1em- ＞ *em-と 畳音の語幹 *H_1e-H_1em- ＞ *e-em-＞ *ēm- の相関関係に還元できる。欠如動詞（defective verb） 完・1・単 ōdī 「憎む、(が)嫌だ」 ＜ *ōd- ＜ *o-od- ＜ *H_3e-H_3ed- は、短母音を持つ非実現の現在を表す別形（古い非畳音の語幹 *od- ＜ *H_3ed-； cf. odium 「憎しみ」）を前提としたものである。この例においても、過去（完了）語幹の表徴としての、語根母音の延長は、過去（完了 perfectum ）の古い畳音（重複）構造に起源を持つのである。

［語根短母音－非過去語幹］：［語根長母音－過去語幹］のように生成された対立は、現在語幹と見かけ上の非テーマ（無幹母音）アオリスト語幹との同じような対立（現・1・単 φύω「生み出す、作り出す」 ＜ *bhu-e- と 非テーマ・アオ・1・単 ἔ-φῡ-ν ＜ *bhū- ＜ *bhu-H_2-； cf. 不定詞 БЫТИ における不定詞・アオリスト幹 БЫ- ＜ スラ祖 *bū- ＜ *bhu-H_2-）による補強を受けた。現在幹 *ed- ＜ *H_1ed-：過去幹 *ēd- ＜ *H_1e-H_1ed- 及び 現在幹 *mu-（現・1・単 МЫ-ѭ, ロ мою）： 過去幹 *mū- ＜ *mu-H_2- （cf. 不 МЫ-ТИ）型の交替モデルにしたがって、ラ 現・1・単 scabō「掻く、こする」，完・1・単 scābī 「掻いた」 ； 現・1・単 veniō 「来る」，完・1・単 vēnī「来た」 ； 現・3・単 НЕС-Е-ТЪ, アオ・1・単 НѢСЪ ＜ *nēk'-s- ； 現・3・単 БОД-Е-ТЪ, アオ・1・単 БАСЪ ＜ *bhōdh-s- 型の交替が生成されたのである。

ラテン語の、予期される交替 現・1・単 agō ＜ *H_2eg'- と *āgī ＜ *āg- ＜ *a-ag- ＜ *H_2e-H_2eg'- に代わる 現・1・単 agō と 完・1・単 ēgī 「駆った、導いた、動かした」 の交替は、現・1・単 faciō「為す、作る」＜ *dhH_1-k-（§.13 参照），完・1・単 fēcī「為した」＜ *dheH_1-k-（cf. АѢ-ТИ の不定詞幹）； 現・1・単 iaciō「投げる」＜ *iH_1-k-, 完・1・単 iēcī「投げた」 ＜ *i̯eH_1-k- の交替モデルに従って発生したものである。現・1・単 linquō 「残す、去る」,

完・1・単 līquī「残した、去った」; 現・1・単 rumpō「破る、引き裂く」, 完・1・単 rūpī「破った、引き裂いた」 型の交替は、 *li-n-kʷ-: *li-H_2-kʷ- > *līkʷ- 及び *ru-m-p-: *ru-H_2-p- > *rūp- の交替から引き出されるべきであろう。この場合の n (m) は現在幹の指標 (cf. 現・1・単 **СТА-Н-Ж**, 2 **СТА-Н-Е-ШИ**, 不 **СТА-ТИ**)、H_2 は過去幹の指標 (行為と性質の一括性の指標)、kʷ 及び p は現在幹の後ろにも過去幹の後ろにも付加された古い接尾辞 (語根拡張子) である。

ラテン語の、現・1・単 rumpō「破る」, 完・1・単 rūpī「破った」; 現・1・単 fundō「注ぐ」, 完・1・単 fūdī「注いだ」 の交替と古代ブルガリア語の交替、現・1・単 **БЖДЖ** < *bhu-n-dh-, アオ・3・単 **БѢСТЪ** < *bhu-H_2-dh-t- (dt > **СТ** の変化を伴う) は、完全に一致しており、またこの場合の dh は、達成された状態を表す古い接尾辞であって (ギリシャ語の ἐ-παιδεύ-θ-η-ν「私は教育された」型の受動アオリストの接尾辞 -θ- と同じ)、スラヴ祖語の動詞活用形に (不定形ではなく) 特有の接尾辞である (§.13 参照)。アオ・3・単 **БѢСТЪ** を アオ・1・単 **БѢХЪ** < *bhu-H_2-s- と同じシグマ・アオリスト *bhū-s-t- と見るのは誤りである。何故ならば、スラヴ祖語及び古代ブルガリア語アオリストの2・3人称単数は、原則として、シグマを取らないからである — cf. アオ・1・単 **ПАСЪ** に対して、2・3 **ПАТЪ**; アオ・1・単 **РѢХЪ, РЕКОХЪ** < *rēk-s-, *rek-H_2-s- に対して、2・3 **РЕЧЕ** < *rek-e-; アオ・2・3・単 **ДАСТЪ, ІАСТЪ** は、シグマ付加形である 単・1 **ДАХЪ, ІАХЪ** (**ІАСЪ**) とは違って、シグマを取らないスラヴ祖語形 *dōd-tъ, *ēd-tъ から作られたものである。

いわゆる加音 (augmentum) も、頭音 H (H_1, H_2, H_3) を持つ古い過去語幹における畳音に由来するものであり、印欧諸語の一部 (古典ギリシャ語、古代インド語、アルメニア語、プリュギア語[16]) では、この加音の助けによって、過去時制 (未完了過去 imperfectum 、アオリスト aoristu

s、過去完了 plusquamperfectum 、また動詞によっては完了 perfectum も）が形成された。加音はスラヴ祖語においても存在し、少なくとも、推定される、助動詞 *es-（ѥс-мь）の非補充法（suppletion）的過去活用に存在したと考えられ、この活用の助けによって、古代ブルガリア語の未完了過去時制（インパーフェクト минало несвършено време）形が作られたのである。古スラヴ学者達は、通常、古代ブルガリア語動詞の未完了過去語尾、例えば、1・単 нес-ѣ-ѧхъ, бьр-ѧ-ѧхъ, пьс-ѧ-ѧхъ, хожѧ-ѧ-ѧхъ に、助動詞の古い加音過去形があると見ている － 未完・1・単 *e-es- ＞ *ēs-o-m（cf. 古イ 未完・1・単 āsam ＜ *ēsom ）から、過去指標 h の一般化と *ēh ＞ *i̯āh- の変化を介して（§. 2 参照)、母音間のヨット（j）の消失以後に -ѧхъ が得られたというのである。尤も、スラヴ祖語に加音が存在したという推定が絶対不可欠のものだというわけではない。何故ならば、過去語幹 *e-es- ＞ *ēs- は、畳音過去語幹 *H_1e-H_1es- ＞ *e-es- ＞ *ēs- から直接得られるからである。ギリシャ語の加音未完了過去 *ēs- が畳音完了幹の継承であることは、例えば、2・単 ἦσθα ＜ *H_1e-H_1es-tha の形が証明しており、また、この -θα は古い完了語尾であり、古代インド語2人称単数完了 vét-tha（＝ギ οἶσθα, ゴ waist ＜ *u̯oid-th-）「知った」及び da-dā́tha ＜ *de-deH_3-tha の語尾と同じものである。

古代ブルガリア語の未完了過去（インパーフェクト）語尾 － 1・単 -ѧхъ ＜ *ēs-om, 2 -ѧше ＜ *ēs-es, 3 -ѧше ＜ *ēs-et, 1・複 -ѧхомъ ＜ *ēs-omos, 2 -ѧсте ＜ *ēs-te, 3 -ѧхѫ ＜ *ēs-ont － は、助動詞の過去語幹 *H_1e-H_1es-＞ *e-es-＞ *ēs- から引き出された可能性があり、またそこから非完了（infectum）の e 活用の形が形成されたのである。Cf. 単純アオ・1・単（起源的には、古い未完了過去） падъ ＜ *pōd-o-m, 2 паде ＜ *pōd-e-s, 3 паде ＜ *pōd-e-t, 1・複 падомъ ＜ *pōd-o-mos , 2 падете ＜ *pōd-e-te , 3 падѫ ＜ *pōd-o-nt 。スラヴ祖語のイン

パーフェクトは、元来、回説合成的なものであって、 *nek'-ē- (**НЕС-Ѣ-Д ХЪ** 参照) あるいは *bhь r-e-H_2- (**БЬР-Д-ДХЪ** 参照) 型の過去不定形 (純粋過去語幹) から構成され、これに非完了活用助動詞過去形が合成されたものである。ラテン語の、leg-ē-ba-m 「私は集めた」 型のインパーフェクトの形成については、§. 13 参照。

青年文法学派のモデルによれば、完・1・単 ἦχα (ドーリス ἆχα) 「導いた」(cf. 現・1・単 ἄγω「導く」) の形は、語頭母音の延長、すなわち時量的加音 (augmentum temporāle) によって形成されている。ラリンガル・モデルの観点からすれば、ἦχα は起源的には畳音形である (*H_2e-H_2eg'- > *a-ag'- > *āg'- ; g の帯気音化については、§. 13 参照)。同様にして、アオ・1・単 ὤφθην「見た」は、畳音過去語幹 *H_3e-H_3ek^w- > *o-ok^w- > *ōk^w- から引き出すべきである。過去語幹におけるいわゆる時量的加音 (augmentum temporāle) が音節的加音 (augmentum syllabicum) から得られた、すなわち「かつてある時」の意味を持つ副詞的前置小詞の e から得られたものだという定説は、非常に大きな矛盾にぶつかることになる。一面では、ヴェーダの (古代インドの) 頌歌やホメロスの言語において、音節的加音 (augmentum syllabicum) は義務的な現象ではなく、未完・3・単 á-bhar-a-t = ἔ-φερε < 語根 *bher-「運ぶ」 の加音形と並行して、 bhárat, φέρε の非加音形が見られるのであり、このことからすれば、音節的加音は比較的新しい特徴だという結論が為されるべきである。しかし、そうだとすれば、ギリシャ語の ε+ε 及び ε+ο の縮合 (contraction) に際しては、η, ω ではなく、ει, ου となって然るべきであろう — アオ・1・単 *ἔ-οφ-θη-ν, 未完・3・復 *ἔ-εσ-αν は、ὤφθην「私は見た」 や ἦσαν「彼らはあった、いた」ではなく、 *οὔφθην や *εἶσαν の形を与えたはずである。推定される ε+ε > η や ε+ο > ω の縮合は、ある非常に古い古代ギリシャ語前の時期にだけ発生し得たものであろう。しかし、このことは、時量的加音が

音節的加音よりも古い現象であることを表している。ただし、過去語幹における本来の縮合は、e ＋ a ＞ ā（アッティカ η），e ＋ e ＞ ē（η），e ＋ o ＞ ō（ω） ではなく、 e ＋ e ＞ ē， a ＋ a ＞ ā， o ＋ o ＞ ō だったのである。時量的加音は音節的加音から出たものではなく、その逆に、音節的加音が時量的加音から出たのである。

ラテン語文法では、現・1・単 edō「食べる」 と 完・1・単 ēdī「食べた」 の相関関係、odium 「憎しみ」 と 完・1・単 ōdī の相関関係は、母音の量的交替として記述されるのに対して、ギリシャ語文法では、現・3・単 ἐστίν「それ（彼）がある、いる」 と 未完・2・単 ἦσθα「君があった、いた」 の相関関係、未・1・単 ὀψόμαι「見るだろう」 と アオ・1・単 ὤψην「見た」 の相関関係は、非加音動詞語幹と加音動詞語幹（時量的加音を持つ）の差異として記述される。しかし、何れの場合も、古い非畳音（非過去）動詞幹と古い畳音（過去）動詞幹の相関関係である ― 現・1・単 edō「食べた」 ＜ *H_1ed-，完・1・単 ēdī 「食べた」 ＜ *H_1e-H_1ed- ； odium「憎しみ」 ＜ *H_3ed-， 完・1・単 ōdī 「憎んでいる」 ＜ *H_3e-H_3ed- ； 現・3・単 ἐστίν「ある、いる」 ＜ *H_1es-，未完・2・単 ἦσθα「あった、いた」＜ *H_1e-H_1es- ； 未・1・単 ὀψ-θήσομαι「見るだろう」 ＜ *H_3ek^w- (cf. ὄκο ＜ *H_3ok^w-)， アオ・1・単 ὤψ-θην「見られた」 ＜ *H_3e-H_3ek^w- 。現・1・単 ἔδμι ＜ *ēd-mi ＜ *e-ed-mi ＜ *H_1e-H_1ed- の原型は、ギ 未完・2・単 ἦσθα「あった、いた」 ＜ *ēs-tha ＜ *e-es-tha ＜ *H_1e-H_1es-tha の原型も加音的であるのと同じ意味で、加音的なのである。

H(H_1, H_2, H_3) の脱落後、 *e-ed- ＞ *ēd- ； *e-es- ＞ *ēs- 型の過去形は、印欧諸語の一部ではもはや畳音とは感じられなくなってしまったが、その特徴を表示する加音 e は古い非畳音過去形にも引き移されるに至った。加音は常に接頭辞と語根の間に措かれるという状況が、古い畳音動詞幹から加音が作り出されたということを間接的に示唆している ― 現・

1・単　ε ἰ σ-φ ἐ ρ ω「運び込む」，未完・1・単　ε ἰ σ-ἐ-φ ε ρ ο ν「運び込んでいた」。初め畳音語幹中の語頭音節、つまりそこから作られる加音は、独自のアクセントを持った個別の語として発音されたのである。このことについては、語境界を示す符号（：）が証明している、faciō「為す、作る」　の畳音形　*dhe-dhH₁-　＞　fe-fa-k-ed　＝ FHE : FHA-KED[17] のような古いラテン語の書き方。このようにして、古代インド語や古代ギリシャ語の加音上のアクセントも説明がつく　－　cf. 未完・3・単　á-bharat，これと同系の　ἔ-φ ε ρ ε「（そのものは）運んでいた」。

§.13　古代ブルガリア語における過去語幹間の相関関係

古代ブルガリア語には、始原的な過去語幹４型の痕跡が残っている：

１．　畳音を含む過去語幹（不　ꙗсти　＜　*ēd-tēi̯　＜　*e-ed-　＜　*H_1e-H_1ed-；　畳音語幹は現在形にも一般化している　－　ラ　現・１・単　edō「食べる」　に対して、　１・単　ꙗмь　＜　スラ祖　　*ēd-mi)。

２．　全一的実現、完遂、完成、停止終結行為の指標として再解釈を受けた一括多数性指標　H_2　を含む過去語幹（cf.　不　бьрѧти, アオ・１・単　бьрѧхъ　＜　*bhь r-e-H_2-　；　アオ・１・単　нес-о-хъ　＜　*ne k'-H_2-s-［H_2　＞　о　への変化を伴う］；　アオ・１・単　пѧсъ　＜　*pen-H_2-s-,　不　пѧти　＜　*pēn-tēi̯　＜　*pen-H_2-［鋭音調　acute と　H_2　脱落以後の二重母音の延長を伴う］)。

３．　語幹母音　e　の延長を介して作られる過去語幹（不　мьн-ѣ-ти　＜　*mь n-ē-；　未完・１・単　нес-ѣ-ѧхъ　＜　*nek'-ē-）

４．　語根母音の延長を持つ過去語幹（現・１・単　несѫ,　２　несе ши　＜　*nek'-　に対して、　アオ・１・単　нѣсъ　＜　*nēk'-　）。この型も、非常に古いものであるが、第一次的なものではなく、H(H_1，H_2，H_3）の消失後、第１型、第２型の過去語幹に生じた、現在語幹　－　短母音：過去語幹　－　長母音、という交替の類推（アナロジー）によって現れたのである。

同一語根から二方法、また時には、三方法による過去語幹形成が可能である。たとえば、　*bhu-　語根から、現在語幹の　e　母音の延長によって形成される過去語幹　*bhu-ē-　＞　スラ祖　*bu̯-ē-s-　＞　*bē-h-(未完・１・単　бѣхъ)、また、一括多数性指標　H_2　を補って形成される過去語幹　*bhu-H_2-　＞　スラ祖　*bū-（不　бꙋти,　アオ・３・単　бꙋстъ,　ギ　非テーマ・アオ・１・単　ἔ-φῡ-ν「生じた、起こった」）が立証される　；　cf. イタリア祖語のインパーフェクト活用に関与している　*b

hu-e-H_2- ＞ イタリア祖語 *bu̯-ā- ＞ *bā- の語幹も（次例参照、ラ 現・1・単 negō, 不 negāre に対して、未完・1・単 negā-ba-m「拒否した」, 2 negā-bā-s ; 現・1・単 tegō , 2 tegis ＜ *teg-e-s, 不 teg-e-re に対して、未完・1・単 teg-ē-bam「被った」, 2 teg-ē-bās － e の延長幹母音をもつ純粋語幹 teg-ē- は、イタリア祖語のインパーフェクト形成に際して、不定形の役割を演じた)。

助動詞の語根 *es- ＜ *H_1es-からの畳音過去語幹 *H_1e-H_1es-＞ *e-e s- ＞ *ēs- を形成できる、 cf. 純粋過去語幹 *nek'-ē- と助動詞 *H_1e s-の畳音過去語幹 *H_1e-H_1es-＞ *ēs- から得られる 未完・1・単 **НЕС-Ѣ-ДХ-Ъ** の -ДХ- 接尾辞（s ＞ h の規則的変化を行なうシグマ・アオリスト形の類推から s と h の交替を伴う）; cf. 更に、ギ 未完・2・単 ἦσθα ＜ *H_1e-H_1es-tha 。助動詞の現在幹 *H_1es-e- ＞ *es-e- から、一括多数性指標 H_2 を補って、過去語幹 *H_1es-e-H_2- ＞ *es-ā- も作ることができる（cf. ラ 未完・1・単 eram, 2 erās- これは母音間の s を r に変えてしまう r 音化現象 rhotacism を伴う)。

語根 *nek'- からは、一括多数性指標 H_2 を補った過去語幹（アオ・1・単 **НЕС-О-ХЪ** ＜ *nek'-H_2-s 参照）及び語根母音 e の延長による過去語幹（アオ・1・単 **НѢСЪ** ＜ *nēk'-s- 参照）を形成できる。一方、未完・1・単 **НЕС-Ѣ-ДХЪ** における過去語幹 **НЕС-Ѣ-** は、語幹母音 e の延長によって、非完了（infectum）幹 *nek'-e- より出ている（現・1・単 **НЕС-Ѫ**, 2 **НЕС-Е-ШИ**, アオ・3・単 **НЕС-Е** ＜ *nek'-e-t 参照）; cf. ラ 未完・1・単 teg-ē-bam「覆った」の過去語幹は、現・2・単 tegis ＜ *teg-e-s に立証される非完了幹 *teg-e- より作ったものである。

語根 *H_1em-「取る」 からは、一括多数性指標 H_2 を補った過去語幹が形成される － アオ・1・単 **ѦСЪ** ＜ *ēm-s- ＜ *H_1em-H_2-s- (H_2の脱落後、二重母音 em の延長） ; 一括多数性指標 H_2 が非完了幹 *H_1ь m-e-（語根母音の低減階梯を伴う）に付加されると、別の過去

語幹が形成される － 不 **ИМ-А-ТИ, ВЪЗ-ЬМ-А-ТИ** の過去語幹 **ИМА-** は、 *H_1ь m-e-H_2- ＞ スラ祖 *ь m-ā- の継承である。非完了幹 *H_1ь m-e- からは、語幹母音 e の延長によって過去語幹 *H_1ь m-ē- ＞ スラ祖 *ь m-ē- が作られるが、これは **ИМ-Ѣ-ТИ** に立証される；ラ 完・1・単 ēmī「買った、獲得した」は、畳音過去語幹 *H_1e-H_1em- ＞ *e-em- ＞ *ēm- から出たものである。スラヴ祖語においては、過去語幹 *H_1ь m-e-H_2- ＞ *ь m-ā-「取った」が、「持つ」の意の現在形として再解釈を受けたのである － 現・1・単 **ИМАМЬ**, 2 **ИМАШИ** 参照。この動詞の過去形は、補充法（suppletion）語幹 *ь m-ē-（不 **ИМ-Ѣ-ТИ** 参照） より作ったものである。始原的な過去語幹 **ИМ-А-** は、同時に、派生動詞 現・1・単 **ЕМЛЮ**, 2 **ЕМЛЕШИ** の不定詞・アオリスト幹でもある。

語根 *H_1i-「行く」 からは、一括多数性指標 H_2 を補って、過去語幹 *H_1i-H_2- ＞ *ī-（不 **И-ТИ** 参照） が形成される。この語根 *H_1i- は、すでに印欧祖語において dh による拡張を受けている（§. 14 参照)。この派性語幹 *H_1i-dh- から、一つは、能動過去分詞 **ШЬДЪ** が作られたが、この **Ш** は頭音 H_1 の継承である。 **ИТИ** の能動過去分詞 **ШЬДЪ** を動詞 **ХОДИТИ** の語根 *hod- から作った補充（suppletion）形であるとする定説は正しくない － スラヴ祖語の語根 *hod- は、語根母音の低減階梯による *hьd- ＞ **ШЬДЪ** の様な変種は持ち得ない ； 語根母音 e 及び o の低減階梯は、鳴子音の前以外では現れ得ないのである － 例、現・1・単 **БЕР-Ж**, 単・主 **СЪ-БОР-Ъ**, 不 **БЬР-АТИ** ； **О-ПОН-А** 「幕、帳」, 現・1・単 **ПЬН-Ж**。 現・1・単 **ВЕД-Ж**, 2 **ВЕД-Е-ШИ** ； **ВОЖД-Ж**, **ВОД-И-ШИ** ； **МОГЖ**, **МОЖЕШИ** ； **КОСНЖ**, **КОСНЕШИ** のような動詞の能動過去分詞においては、 ***ВЬД-**, ***МЬГ-**, ***ЧЬС-** 型の語根は、絶対に許容され得ない。更に、**ХОЖДЖ**, **ХОДИШИ**, **ХОДИТИ** の能動過去分詞は **ХОЖДЬ** である。拡張語根 *H_1i-dh- からは、更にもう一つ、一括多数性指標 H_2

を補って過去語幹、アオ・1・単 **ИД-Ѳ-Х'ъ** ＜ スラ祖 *ьdohъ ＜ *H_1i-dh-H_2-s- が作られた。古代ブルガリア語では、**И-ТИ** の不定詞幹の母音 **И**（スラ祖 *ī ＜ *H_1i-H_2-）は、動詞の全活用に一般化している — チ 不 jīti（上ソルブ hić）＜ スラ祖 *ī-tēi̯ ＜ *H_1i-H_2- に対する チ 現・1・単 jdu ＝上ソルブ du ＜ スラ祖 *ьd- ＜ *H_1i-dh- の形は、現・1・単 **ИД-Ж**, **ВЪН-ИД-Ж**, アオ・1・単 **ИД-Ѳ-Х'ъ**, **ВЪН-ИД-Ѳ-Х'ъ** の形よりも古い。非完了幹 *H_1i-e- を、先ず H_2 で拡張し、その後 dh あるいは s で以て拡張すると、 *H_1i-eH_2-dh- ＞ スラ祖 *i̯ād-（cf. 現・1・単 **ꙗД-Ж**, 2 **ꙗД-Е-ШИ**「（乗って）行く」）あるいは *H_1i-eH_2-s- ＞ スラ祖 *i̯āh-（cf. 不 **ꙗХАТИ**）なる語幹が得られることになるが、これらは補充法活用を構成するに至っている。畳音過去語幹 *H_1e-H_1ei̯- は、 ギ 未完・1・単 ἦα「行った」（ *H_1e-H_1ei̯- ＞ *e-ei̯- ＞ ἦ ）に立証されるが、これは、一人称単数語尾 -α が示すように、古い完了形（パーフェクト）に由来するものである（〔完了語尾を持つ〕未完・2・単 ἤειθα も参照）。

畳語法（畳音、語根重複）は、過去語幹の形成手段としては、すでにスラヴ祖語期が始まる以前に使われなくなった。例えば、 *ēd-（cf. **ꙗМЬ** ＜ *ēd-mi ＜ *H_1e-H_1ed-）のような、起源的には畳語法であるいくらかの始原的な語幹が残っているが、それは、これらの語幹における H（H_1, H_2, H_3）の脱落後は、もはや本来の語根重複は存在しなかったからにすぎない。スラヴ祖語においては、加音も発達していない。畳音過去語幹の消滅の故に、例えば、 ギ 完・1・単 λέλυκα「解いた、解き放った」あるいは 古ラ 完・3・単 *fe-fa-k-ed「為した、作った」（§. 12 参照）のような、畳音語幹と H_2 指標を結合したような、複合派生的な過去形の痕跡も残っていない — ラ 完・1・単 fēcī「私は為した、作った」や iēcī「私は投げた」（現在幹、例えば、現・1・単 faciō, iaciō の接尾辞 -k- は完了形のアナロジー） や ギ 完・1・単 λέ-λυ-κ-α「解いた、解き放った」に見られる接尾辞 -k- は、 アオ・1・

単 **НЕС-О-ХЪ** ＜ *nek'-H_2-s- や 古イ アオ・1・単 á-bodh-i-ṣam「目覚めた、気付いた」 ＜ *bhou̯dh-H_2-s- に見られる、始原的な一括多数性指標 H_2 に由来するものである。 ラ 完・1・単 fēcī「為した、作った」(同語幹 *dheH$_1$-H$_2$-は、ギ アオ・1・単 ἔ-θη-κ-α「置いた、据えた」にも見える) や iēcī「投げた」(同語幹 *i̯eH$_1$-H$_2$- は、ギ アオ・1・単 ἧ-κ-α「送った、投げた」にも見える) は、ギ アオ・1・単 ἔδωκα「与えた」と共に、それぞれ *dheH$_1$-H$_2$-, *i̯eH$_1$-H$_2$- 及び *deH$_3$-H$_2$- より得られたもので、この H_2 が H(H_1, H_2, H_3) の先行を受けて、後舌子音に変じたのである。完・1・単 λέλυκα の κ は、H(H_1, H_2, H_3) が H_2 の後続を受けて発生したことを間接的に示しているのが、完・1・単 ἦχα (ドーリス ἄχα)「導いた」 ＜ *H_2e-H_2eg'-H_2- (現・1・単 ἄγω ＜ *H_2eg'-) や τέ-τροφ-α「向きを変えた」＜ *te-trop-H_2- (現・1・単 τρέπω「向きを変える」＜ *trep-) のような形にみられる π, β ＞ φ 及び κ, γ ＞ χ の変化である。

かつて同一類であった、接尾辞 H_2 のある過去語幹 (アオ・1・単 **БЫХЪ** ＜ *bhu-H_2-s-, **ПАСЪ** ＜ *pen-H_2-s-, **БЬРАХЪ** ＜ *bhьr-e-H_2-s- , **НЕСОХЪ** ＜ *nek'-H_2-s-) は、語幹が母音または子音で終わる語根 (非テーマ) 過去形と接尾辞 -ā- を持つテーマ (幹母音) 過去形に分解したのである。子音で終わる非テーマ (無幹母音) 過去語幹には、二種類ものが現れている :

I. アオリスト形に繋ぎ母音 **О** を欠き、過去語幹が鳴子音 (**Р**, **Л**, **М**, **Н**) で終わり、かつ鋭音調 (acute) の種類 — cf. アオ・1・単 **ПАСЪ** ＜ *pēn-s- ＜ *pen-H_2-s- (不 **ПАТИ** の語根母音上にアクセントを持つ)。これらの動詞のあるものは、その現在語幹に接尾辞 -e- を持つ — 例、現・1・単 **ПЬНЖ**, 2 **ПЬН-Е-ШИ**, 不 **ПАТИ**, アオ・1・単 **ПАСЪ** (cf. ロ р а с п я т ь) ; **МЬРЖ**, **МЬР-Е-ШИ**, **МРѢТИ** (cf. ロ у м е р ѐ т ь), **МРѢХЪ** ; **ЖЬНЖ**, **ЖЬН-Е-ШИ**,

жѧти (cf. ロ жать), **жѧсъ**、 また、あるものは、現在語幹に接尾辞 -i̯e- を持つ — 例、 現・1・単 **мелѭ**, 2 **мел-е-ши**, 不 **млѣти** (cf. セ・ク млёти), アオ・1・単 **млѣхъ** ; **борѭ**, **бор-е-ши**, **брати** (cf. ロ борòться), **брахъ** 。

これらの動詞類は単純アオリスト (прост аорист) (古いインパーフェクト過去) を持たない。

II. 過去語幹が鳴子音でない子音で終わり、そのアオリスト幹に繋ぎ母音 **о** (起源的には、古い一括多数性指標 H_2) を持ち、不定詞語尾 -tēi̯ にアクセントを持つ種類。例、 現・1・単 **несѫ**, 2 **нес-е-ши**, 不 **нести** (cf. ロ нестѝ), アオ・1・単 **несохъ** ; **могѫ**, **можеши**, **мошти** (cf. ロ по-мòчь), **могохъ** ; **вълѣзѫ**, **вълѣзеши**, **вълѣсти** (cf. ロ лѐзть), **вълѣзохъ** ; **чьтѫ**, **чьтеши**, **чисти** (cf. ロ прочѐсть), **чьтохъ** ; **падѫ**, **падеши**, **пасти** (cf. ロ у-пàсть), **падохъ** [8]。これらの動詞類は、単純アオリスト (古いインパーフェクト過去) 形も持っている — 2・3・単 **нес-е** < *nek'-e-s, *nek'-e-t, **може**, **вълѣзе**, **чьте**, **паде**, 3・複 **несѫ** < *nek'-o-nt, **могѫ**, **вълѣзѫ**, **чьтѫ**, **падѫ** 。これらの動詞の一部は、語根母音の延長を伴う第Iシグマ・アオリスト形も持っている：現・1・単 **несѫ**, 2 **нес-е-ши**, アオ・1・単 **нѣсъ** < *nēk'-s- ; **отвръзѫ**, **отвръзеши**, **отврѣсъ** < *u̯ērg'h-s- ; **ведѫ**, **ведеши**, **вѣсъ** < *u̯ēdh-s- ; **водѫ**, **водеши**, **басъ** < *bhōdh-s- ; **рекѫ**, **речеши**, **рѣхъ** < *rēk-s- ; **гребѫ**, **гребеши**, **грѣсъ** < *ghrēbh-s- 。次のような動詞は、第IIアオリスト形以外のシグマ・アオリスト形を作ることはできない：現・1・単 **вълѣзѫ**, 2 **вълѣзеши**, 不 **вълѣсти**, アオ・1・単 **вълѣзохъ** ; **(съ)пасѫ**, **(съ)пасеши**, **(съ)пасти**, **(съ)пасохъ** ; **крадѫ**, **крадеши**, **красти**, **крадохъ** ; **падѫ**, **падеши**, **пасти**, **падохъ** ; **могѫ**, **можеши**, **мошти**, **могохъ** ; **врьгѫ**,

врьжеши, врѣшти, врьгохъ ; лѧгѫ, лѧжеши, лешти, легохъ ; сѧдѫ, сѧдеши, сѣсти, сѣдохъ ; обрѧштѫ, обрѧштеши, обрѣсти, обрѣтохъ ; идѫ, идеши, ити, идохъ ; ѩдѫ, ѩдеши, ѩхати, ѩдохъ。

接尾辞 -e- の現在幹を持ち、鳴子音でない子音で終わる非テーマ（無幹母音）不定形を持つ動詞については、第Ⅱシグマ・アオリストが一般的であり、したがって、これらの動詞の一部にのみ固有の、語根母音延長を伴う第Ⅰシグマ・アオリストと比べれば、より基本的な部類である。第Ⅱシグマ・アオリストの語幹の方が起源的にもより古いものであり、 *nek'-H_2-s- ＞ **нес-о-хъ** 型の、一括多数性指標 H_2 を伴う過去語幹は、 より後に類推（アナロジー）によって発生してくる *nēk'-s- ＞ **нѣсъ** 型の、語根母音延長を伴う過去語幹に先行するものである。この類推の出発点の一つは、 i, u に終わる、語根母音ゼロ階梯の両子音語根から作る過去形である － 次例参照、 ラ 現・1・単 ru-m-pō「破る、引き裂く」, 完・1・単 rūpī「破った」 ＜ *ru-H_2-p- ; スラ祖 現・1・単 *bu-n-d-ō-m (**бѫдѫ**) ＜ *bhu-n-dh-, アオ・1・単 *bū-d-h- (**бѣхъ**) ＜ *bhu-H_2-dh-s- ; ラ 現・1・単 linquō「残す、去る」＜ *li-n-k^w- (cf. ギ 現・1・単 λείπω「残す」＜ *lei̯-k^w-), 完・1・単 līquī「残した」＜ *li-H_2-k^w- ; スラ祖 現・1・単 *či-t-ō-m (**чьтѫ**) ＜ *k^wi-t-「読む、数える、敬う」(cf. 同語根であるが、 -t- による拡張のない次の語根 **цѣна** ＜ *k^woi̯-n-「価格、敬意」、また、不定詞語幹 *k^wōi̯- ＞ **каѭ сѧ, каеши сѧ**), アオ・1・単 *čīts-om (**чисъ**) ＜ *k^wi-H_2-t-s-。

現・1・単 **живѫ**, 2 **живеши** ＜ *g^wei̯-u̯- (§. 2, 第 7 項 参照) に対する 不 **жити** は、 *g^wī- ＜ *g^wi-H_2- に由来する。H_2 音の痕跡は、 ラ 完・1・単 vīxī「生きた」 ＜ *g^wi-H_2-s- (i-H_2-s ＞ īks への変化を伴う) に見られる（これに対して、 **живѫ** ＜ *g^wei̯-u- と同系の 現・1・単 vīvō)。 Cf. ラ 現・1・単

struō に対して、完・1・単 strūxī「積み重ねた、建てた」< *stru-H_2-s- 。青年文法学派のモデルでは、完・1・単 vīxī, strūxī は、古 fluvo > fluō, flūxī「流れる」, 古 fivo > fīgō, fīxī 「穿つ、刺し通す」といった、その原語根 *bhleu̯g^w-, *dhei̯g^w- に後舌子音を含む動詞の類推によって説明されている。ラテン語における -iH_2s > -īks の変化については、次例参照、 古イ dātrī 「女贈与者」< *doH_3-tr-i-H_2（女性の接尾辞としての -i- については、§. 27 参照), ギ δότειρα < *δοτερια < *dH_3-ter-i-H_2 に対して、単数主格用の語尾 s を補足的に付加した形、 ラ dātrīx < *doH_3-tr-i-H_2-s 。

第Ⅱシグマ・アオリストは、全く新しい過去形で、恐らくは9世紀に現れて、次第に非シグマ・アオリスト（単純アオリスト）形や語根母音延長を伴う第Ⅰシグマ・アオリスト形に取って代わった、とする説が一般的である。しかし、もしそうならば、現在形に幹母音 e を持つ動詞で、第Ⅰシグマ・アオリスト形を持たず、この説からして、元々第Ⅱシグマ・アオリストのない動詞類、例えば、現・1・単 **ПАДѢ**, 2 **ПАДЕШИ**；**МОГѢ**, **МОЖЕШИ**；**ЛѢГѢ**, **ЛѢЖЕШИ** のような動詞は、スラヴ祖語の時代には一般にシグマ・アオリスト形を持たなかったということになるが、それは不自然である。スラヴ祖語文法の観点からすれば、アオリスト1人称単数形である **НЕСОХЪ** < *nek'-H_2-s- と **НѢСЪ** < *nēk'-s- の相関関係は年代順的であり、前者のタイプは後者のタイプより古く、後者はいくつかの動詞にだけ後で広がったものである。古代ブルガリア語文法の観点からいえば、**НЕСОХЪ** と **НѢСЪ** の相関関係は年代的なもの（伝統的分類では、**НѢСЪ** の方が古く、 **НЕСОХЪ** の方が新しいタイプ）ではなく、古代ブルガリア文章語に対する異なる方言的影響によるものである。 **НѢСЪ** 型は、ブルガリア西部地方で書かれたグラゴール文献に特徴的であり（この点で最も首尾一貫しているのが、マリア写本 Codex Marianus とシナイ詩編 Psarterium Sinaiticum)、一方、**НЕСОХЪ** 型は古代ブルガリア語の東部の特徴を反映したキリール文献（スプラシル写本 Codex Suprasliensis と

サヴァの本　Саввина　книга）に特徴的なのである[18]。

語根母音延長を伴う過去語幹（1・単　*nēk'-s-＞ **нѣсъ**, 3・複　*nēk'-s-n̥t ＞ **нѣсѧ**）の出現以後、かつまた非完了活用（2・単　*nek'-e-s ＞ **несе**,　3・単　*nek'-e-t ＞ **несе**）が意味的にアオリストに等しい過去形へと再解釈を受けて以後（すなわち、いわゆる単純アオリスト、換言すれば非シグマ・アオリストの出現以後　－　§.19　参照)、現在語幹に接尾辞　-e-　を持つスラヴ祖語の全ての動詞において、また現在語幹に接尾辞　-ne-　を持つ動詞（例えば、現・1・単　**двигнѫ**, 2　**двиг-не-ши**）の一部においてアオリスト形が二つずつできあがり、また非完了幹の語根母音に正常階梯すなわち e 階梯を持つ動詞においては（例えば、現・1・単　**несѫ**, 2　**несеши**；**ведѫ**, **веде ши**；**жегѫ**, **жеже ши**；**рекѫ**, **речеши**；**текѫ**, **течеши**)、三つずつのアオリスト形が成立することになった　－　1・単　*mogh-o-m ＞ **могъ**, 2　*mogh-e-s ＞ **може**, 3　*mogh-e-t ＞ **може**, 3・複　*mogh-o-nt ＞ **могѫ**；1・単　*mogh-H_2-s- ＞ スラ祖　*mog-o-h-om（単純アオリストから借用した語尾　om　を持つ）＞ **могохъ**, 2　*mogh-H_2-s-s, 3　*mogh-H_2-s-t，3・複　*mogh-H_2-s-n̥t ＞ **могошѧ**；1・単　*nēk'-s-om（単純アオリストから借用した語尾　om　を持つ）＞ **нѣсъ**, 2　*nēk'-s-s，3　*nēk'-s-t，3・複　*nēk'-s-n̥t ＞ **нѣсѧ**；1・単　*nek'-o-m, 2　*nek'-e-s ＞ **несе**, 3　*nek'-e-t ＞ **несе**, 3・複　*nek'-o-nt；1・単　*nek'-H_2-s-om ＞ **несохъ**, 2　*nek'-H_2-s-s，3　*nek'-H_2-s-t，3・複　*nek'-H_2-s-n̥t ＞ **несошѧ**。

スラヴ祖語方言において、この不必要な多様性は次のようにして次第に統一的な過去パラダイムへ変わっていった。単数2・3人称においては単純アオリスト形が定着した：　*mogh-e-s ＞ **може**,　*mogh-e-t ＞ **може**；*nek'-e-s ＞ **несе**, *nek'-e-t ＞ **несе**。開音節法則に従えば、2・単　*nēk'-s-s　及び　3・単　*nēk'-s-t，2・単　*u̯ēdh-s-s　及び　3・単　*u̯ēdh-s-t　からは、*nē 及び *u̯ē　のような実際には表面化しな

かった形が得られたかも知れない。また、第Ⅱシグマ・アオリストは、2人称単数形に *nek'-H_2-s-s ＞ *neso, *u̯edh-H_2-s-s ＞ *u̯edo を、3人称単数形に *nek'-H_2-s-t ＞ *neso, *u̯edh-H_2-s-t ＞ *u̯edo をもたらしたはずであるが、これらの形は単純アオリスト形の *nek'-e-s, *nek'-e-t ＞ **НЕСЕ** 及び *u̯edh-e-s, *u̯edh-e-t ＞ **ВЕДЕ** の形によって簡単に置き換え得るものであった。こうして、アオ・1・単 **НѢСЪ**, 2・3 **НЕСЕ**；1・単 **МОГОХЪ**, 2・3 **МОЖЕ**；1・単 **ПАДОХЪ**, 2・3 **ПАДЕ** 型の補充法（suppletion）的パラダイムが現れたのである。

1人称単数及び双数、複数においては、語根母音の延長階梯を持つ形が、可能な限り定着した － 1・単 **НѢСЪ** ＜ *nēk'-s-om 及び **РѢХЪ** ＜ *rēk-s-o-m が、1・単 *nek'-o-m 及び *rek-o-m に取って代わり、3・複 **НѢСѦ** ＜ *nēk'-s-n̥t 及び **РѢШѦ** ＜ *rēk-s-n̥t が、3・複 *nek'-o-nt 及び *rek-o-nt を駆逐した。

上述の過程は、スラヴ祖語諸方言に均等に及んだものであり、古代ブルガリア西部方言も古代ブルガリア東部方言も、この祖語方言から発生してきたのである。根本的な違いは次の点にある。現・1・単 **ПАДѪ**, 2 **ПАДЕШИ**；**МОГѪ**, **МОЖЕШИ** 型の動詞（現・1・単 **НЕСѪ**, 2 **НЕСЕШИ**；**ВЕДѪ**, **ВЕДЕШИ** 型の動詞とは違って、アオリスト形に語根母音の延長がない）の場合、古代ブルガリア西部方言の基になったスラヴ祖語では、単純アオリスト形が一般化したのであり（1・単 **ПАДЪ**, 3・複 **ПАДѪ**；1・単 **МОГЪ**, 3・複 **МОГѪ**）、古代ブルガリア東部方言の基になったスラヴ祖語方言では、第Ⅱシグマ・アオリスト形が一般化したのである（1・単 **ПАДОХЪ**, 3・複 **ПАДОШѦ**；1・単 **МОГОХЪ**, 3・複 **МОГОШѦ**）。しかし、古代ブルガリア東部方言では、すでに文献出現以前の時期に、第Ⅱシグマ・アオリスト形（接尾辞 -**ОХ**- の形）が、かなりの程度で語根母音延長を伴う第Ⅰシグマ・アオリスト形に取って代わったのである － スプラシル写本やサヴァの本では、1・単 **НѢСЪ**, 3・複 **НѢСѦ** に対して、 **НЕСОХЪ**, **НЕСОШѦ** による規則的な代替が見られる。現・1・単

ρεкѫ, 2 ρечеши の動詞の、語根母音延長を持った第Ⅰシグマ・アオリスト形 1・単 ρѣхъ, 3・複 ρѣшѧ は、スプラシル写本にもサヴァの本にも特徴的であるが、これは古代ブルガリア東部方言のアオリスト活用のもっと古い状態の痕跡である。

古代ブルガリア東部方言のアオリスト活用が古代ブルガリア西部方言のアオリスト活用に比して新しいというのは、第Ⅱシグマ・アオリスト形を含んでいるからではなくて、より統一性が取れているからである（マリア写本及びシナイ詩編での二種類の異なる過去形 ― 単純アオ 1・単 падъ, 3・複 падѫ と 第Ⅰシグマ・アオ 1・単 нѣсъ, 3・複 нѣсѧ ― に対して、スプラシル写本及びサヴァの本では、第Ⅱシグマ・アオリスト一種類の形 ― 1・単 падохъ, 3・複 падошѧ；1・単 несохъ, 3・複 несошѧ だけが対応している）。第Ⅱシグマ・アオリストは、１０世紀の古代ブルガリア西部方言の特徴を最も完全に反映したマリア写本やシナイ詩編には見られないから、この方がより新しい言語現象だとする主張には根拠がない。古代ブルガリア語西部方言の原型においては、すでに文献出現前の段階で、第Ⅱシグマ・アオリストは限られたものであったかあるいは完全に排除されていたのである。その後、１１世紀以後になってようやく、古代ブルガリア西部方言のアオリスト活用の完全統一の過程で、始原的に第Ⅱシグマ・アオリストを継承してきた古代ブルガリア東部方言の影響下に、あらためて第Ⅱシグマ・アオリストが再興復活したのである。

§.14 始原的な動詞非完了（Infectum）幹と完了（Perfectum）幹

古代ブルガリア語過去時制前史から明らかになることは、スラヴ祖語の多様な過去動詞幹及び非過去動詞幹も、ほとんど全て、二つの第一次動詞類から引き出せることである：

1. 動詞非完了幹でテーマ（幹）母音 e を持つ、次のようなタイプのもの － 現・3・単 **НЕС-Е-ТЪ**, **БЕР-Е-ТЪ**, ラ 現・2・単 legis ＜ *leg-e-s「集める」，ギ 現・2・複 φέρ-ε-τε「運ぶ」。

2. 動詞完了幹で、大多数の場合は畳音（reduplication）を伴うもの（ギ 完・1・単 γέ-γραφ-α「書いた」 タイプのもの）、あるいは非畳音タイプのもの（ギ 完・1・単 οἶδα「知っている」 ＜ *u̯ed-H_2e）で、これはすでにスラヴ祖語の時期に消失したが、古代ブルガリア語の動詞活用全体にしっかりと痕跡を止めている（始原的な完了活用と非テーマ動詞間の関係については、§. 18 参照；また、現・3・複 **ДАДѦТЪ** ＜ *dōd-n̥t ＜ *deH$_3$-dH$_3$-n̥t の畳音も参照）。

可変性を持たない（複雑化しない）非完了幹からは、現在時制や単純アオリストが発達した（cf. 現・3・単 **НЕС-Е-ТЪ** ＜ *nek'-e-t-i，単純アオ 3・単 **НЕСЕ** ＜ *nek'-e-t）。第一次的な非完了幹 e 語幹は、能動的で持続的な、終止していない行為を表したのであり、それは原則的には他動詞、つまり主体以外に、行為の及ぶべき直接的客体も持つことを前提とするものであった。第一次的な非他動詞で、接尾辞 -e- を持つもの、例えば、単純アオ 2・3・単 **-ЛЕЖЕ**（現在幹については、以下を参照），不 **ЛЕШТИ**；現・1・単 **ТЕКѪ** 2 **ТЕЧЕШИ**, 不 **ТЕШТИ**「走る、流れる」；現・1・単 **МЬРѪ** 2 **МЬРЕШИ** 不 **МРѢТИ**＜ *mēr- ＜ *mer-H$_2$-（§. 12 参照）のような動詞は比較的少数である。それらの大多数は、例えば、現・1・単 **ВЪ-ЛѢЗѪ**, 2 **ВЪ-ЛѢЗЕШИ** 不

ВЪ-ЛѢСТИ；1・単 **ПАДЖ** 2 **ПАДЕШИ** 不 **ПАСТИ**；単純アオ 2・3・単 **СѢДЕ**, 不 **СѢСТИ**（現在幹については、以下を参照）のように、語根母音延長を含んでおり、これは完了幹の側からの影響を証するものである（§.18 参照)。現・1・単 **БОДЖ** 2 **БОДЕШИ**, 不 **БОСТИ**（刺す）＜ *bhodh-（ラ fodiō「掘る、刺す」と同系）における語根母音の o 階梯については別の説明を行うべきである。そもそもこれの非完了幹動詞は、e 階梯の語根母音（cf. リ bedù, bèsti「掘る」）を持っており、一方それに対応する反復相（多回相 iterative）動詞の表徴が o 階梯である（§.6 及び §.17 第 5 項 b 参照） ― cf. リ badaũ , badýti「刺す」(リ bedù , bèsti , と badaũ , badýti 間の関係は、現・1・単 **НЕСЖ** と **НОШЖ** 間の関係と同様のもの)。スラヴ祖語においては、語根母音の o 階梯が非完了幹にも一般化するに及んで、第一次的な非完了幹動詞と反復相動詞間の違いが目立つようになったのである。

語根母音の e 階梯を持つ非完了幹 e 語幹は、語根母音に o 階梯を持つ名詞 o 語幹と極めて密接な関係を持っている（§.6 参照)。現・1・単 **НЕСЖ** 2 **НЕСЕШИ** に対して、**ВОДОНОСЪ**「水運び人、水運び桶（容器)」＜ *nok'-o- が対応し、以下、**ВЕЗЖ**, **ВЕЗЕШИ** ― **ВОЗЪ**「(荷）馬車、荷ぞり」＜ *u̯og'h-o- ; **ТРѦСЖ**, グ **ѿЬЭЄѠЭЄ**, **ТРѦСЕШИ** ― **ТРЖСЪ**, グ **ѿЬЭЄѠѺ** ; **ПЕРЖ**, **ПЕРЕШИ** ― **СЪ-ПОРЪ**「闘い」; **ЗѦБЖ**, グ **ѺЭЄБЭЄ**, **ЗѦБЕШИ** 「櫛で、何か尖った歯形のもので梳く」, cf. 単純アオ 3・単 **ПРОЗѦБЕ**「突き刺した、(種子が）発芽した」― **ЗЖБЪ**, グ **ѺЭЄБѺ** ; **БЬЖ**, **БЬЕШИ** ＜ *bhei̯-e-（§.2 参照) ― **РАЗБОИ** のような対応を示している。このことは、当初、行為の名称とその行為に関連する特質の名称の間には本質的な違いはなかったことを示唆している。

いくつかの古代ブルガリア語動詞、例えば、現・1・単 **БЖДЖ** 2 **БЖДЕШИ** ＜ *bhu-n-dh-e- ; **ГРѦДЖ**, **ГРѦДЕШИ** ＜ *ghr-n̥-dh-e- ; **И**

ѧѫ, ИѧЕШИ ＜ *H_1i-dh-e-（§.13 参照）; **ꙗѧѫ, ꙗѧЕШИ** ＜ *H_1i-e H_2-dh-e- のような動詞は、古い接尾辞の -dh- を含んでいるのだから非他動詞（自動詞）である。これは、ギリシャ語の受動アオリスト形の接尾辞 -dh- と同系関係にある ― 例、1・単 ἐ-παιδεύ-θ-ην「教育された」, cf. 未・1・単 παιδευ-θ-ήσομαι「教育されるだろう」。接尾辞の -dh- がない場合には、その動詞は他動詞である ― cf. ラ eō Rōmam「ローマへ行く」＜ *eō ＜ *ei̯-ō ＜ *H_1ei̯-ō, ギ εἶμι ὄρθιον「険しい道を行く」。もう一つの古代ブルガリア語自動詞はその現在形に接中辞（infix） -n- を含み、これは起動相（inchoative）動詞の接尾辞 -n- と同系関係にある（例、現・1・単 **ДВИГНѫ** 2 **ДВИГНЕШИ**; **КОСНѫ, КОСНЕШИ**; §.17 第2項参照）。Cf. アオ・3・単 **ВЪЗЛЕЖЕ** に対して、現・1・単 **ЛѪГѫ** 2 **ЛѪЖЕШИ**, グ **ѦЭЄѪЭШѲ**; アオ・3・単 **СѢДЕ** ＜ *sēd-e-t（ラ 現・1・単 sedeō に対する 完・1・単 sēdī と同じく、過去語幹の語根母音延長を伴う）に対して、**СѢДѫ, СѢДЕШИ**。

接中辞 -n- を持つスラヴ祖語動詞は起動（始発）相的な意味を得て、他動詞には発展しなかったのである。鼻音接中辞は、次例のような、語根拡張子を持つ動詞に存在する古い起動相用接尾辞 -n- に起源を持つ ― 例、*bhu-H_2-dh- ＞ アオ・3・単 **БЪСТЪ** に対して *bhu-n-dh- ＞ 現・1・単（単純未） **БѫДѫ**; *ru-H_2-p- ＞ ラ 完・1・単 rūpī「破った、引き裂いた」 に対して、*ru-m-p- ＞ ラ 現・1・単 rumpō「破る、引き裂く」。語根拡張子（上例の dh や p ）と起動相語幹や過去語幹との接合以後は、接尾辞要素 n は接中辞として再解釈を受けたのであり、例えば、**ЛѪГ-** ＜ *legh- あるいは **СѢД-** ＜ *sed-, *sēd- のような他の動詞語根（この場合の gh や d は古い語根拡張子ではないが、鼻音要素は本来の接中辞である）に対しても、類推によって添加されることになったのである。

§.15 始原的な活格活用（активно спрежение）と不活格活用（инертно спрежение）

幹母音 e を持つ古代ブルガリア語の現在語幹及び単純アオリスト語幹に存在している第一次的な非完了活用は、現・1・単 *nek'-o-m，2 *nek'-e-s，3・複 *nek'-o-nt 型のものである。この活用は、始原的な活格動詞活用に起源を持つものである。そして、活格動詞は基本的には主体と客体を具備する動詞に発達したが、極く希には非他動的な動詞にも発達している。不活格動詞は、活格動詞とは違って、原則として、主体・客体関係（他動性）を表す動詞には発達していない。この不活格動詞は、就中、生物及び無生物体のおかれている状態を表す動詞であり、精神状態や思考過程を表す動詞、また感覚器官を通しての知覚を表す動詞を含むものである。スラヴ祖語や古代ブルガリア語においては、このような動詞は概ね非他動詞（自動詞）である — §.11 参照。言語発達の更に古い段階では、動作（行為）主（agens, agent）によって為される行為を表す動詞は全て活格動詞であった。活格類には、「横たわっている（ブ лежа）」（cf. 単純アオ 3・単 **ЛЕЖ-Е**），「座っている（седя）」（cf. 単純アオ 3・単 **СѢД-Е**），「走る（бягам）」（cf. 現・2・単 **ТЕЧ-Е-ШИ**），「死ぬ（мра）」（cf. 現・2・単 **МЬР-Е-ШИ**）のような動詞も入っていた。古い完了活用がすでにスラヴ祖語期に消失している以上、古代ブルガリア語の適当な例を示し得ないが、「赤い（ブ червен съм）」（逐語的には、私の赤いこと［моята червенина］「病気だ（болен съм）」、「善良だ（добър съм）」、「死んでいる（умрял съм）」といった意味の動詞は活格動詞ではない。ギ 完・1・単 *οἶδα*（＝古イ vēda ＜ *u̯oi̯d-H₂e）「知っている」（逐語的には、「私の知（ってい）

ること」、§.6 第 3 項参照）という動詞も、不活格動詞の例となろう。もともと、この動詞は動作主の側からの働きかけを前提としたものではない。後（§.18）に見るように、現・1・単 **вѣмь** ＜ *u̯oi̯d-mi、プレスラフ（Преслав）の古代ブルガリア語文献では **вѣдѣ** ＜ *u̯oi̯d-a-i ＜ *u̯oi̯d-H₂e-i（§.19 参照）となり、2 **вѣси** となる動詞は、不活格活用の継承たる古い完了活用の最も著しい痕跡を残す現在形を有しているのである（不定詞語幹 **вѣдѣ-ти** ＜ *u̯oi̯d-ē- については、§.17 第 4 項参照）。

非完了動詞幹 － 完了動詞幹という二分法に先んじて、活格動詞 － 不活格動詞という二分法があったのである。スラヴ祖語の動詞組織は、活格動詞幹（原則として他動詞幹として、一部は自動詞幹として再解釈された）と不活格動詞幹（原則として自動詞幹として、主として、人あるいは物がおかれている状態の語幹として再解釈を受けた）の対立は知っていたが、時制面の対立、すなわち非完了行為（infectum）と完了行為（perfectum）の対立は知らない始原的な動詞組織の継承なのである。原初の体系においては、活格動詞語幹は、不活格動詞語幹とは独立した存在であった。始原的な活格活用語尾 1・単 -m, 2・単 -s, 3・単 -t, 3・複 -nt を持つ第一次動詞は、1・単 -H₂e ＞ -a, 2・単 -tH₂e ＞ -tha, 3・単 -e（すなわち、始原的な純粋名詞語幹 － §.34 参照）, 3・複 -r となるような始原的な不活格活用語尾を持たなかったのである ; cf. キ゛ 完・1・単 *οἶδα*「知っている」＜ *u̯oi̯d-H₂e, 2 *οἶσθα* ＜ *u̯oi̯d-tH₂e, 3 *οἶδε* ＜ *u̯oi̯d-e ラ 完・3・複 ēgēre（āgēre「導いた、駆った」に代えて）＜ *H₁e-H₁eg'-ēr-（§.12 参照）（古代ブルガリア語の状態動詞［§.17 第 4 項参照］の場合と同じく、幹母音 e の延長を伴う）, 古イ 完・3・複 cakrúr「した、行なった」＜ *kʷe-kʷr- 。また、逆に、不活格活用を持つ第一次動詞は活格活用を持たなかった（例えば、ギリシャ語完了 1 人称単数 *οἶδα*「知っている」は、いわゆる絶対完了類［perfectīva tantum］である）。活格活用と不活格活用

は、同一動詞の二つの異なる形ではなく、二つの異なる動詞類であって、この内、形態面では、活格動詞の方がより発達しており（より多数の異なる形を持っており）、もう一方の不活格動詞は発達性のより劣るものであった。始原的な不活格活用の本来的な特徴は、畳音（語根重複）語幹ではなく（畳音法は、現・1・単　*u̯oi̯d-H_2e ＞ ギ　*o ἶ δ α*，古イ　vēda「知っている」の動詞形を除くギリシャ語及び古代インド語の全完了形の表徴であったけれども）、その独自の語尾　－　現・1・単　-H_2e ＞ -a，　2　-tH_2e ＞ -tha　等　－　にあった。

§.16　古代ブルガリア語の　-ER　語幹の起源

活格活用と不活格活用を持つ言語においては非分離的所有（属性）ないしは有機的所有（属性）（неотделима или органична принадлежност）のカテゴリーが強い発達を示している。このカテゴリーの形態指標は、特別な所有の接辞（affix）であって、それは、近親者、身体部分、必需品の名称を含む一定の名詞群に付加されるのである。空間的、時間的位置づけを示すいくらかの副詞もこのカテゴリーに属している（古代人は、自ら自身を宇宙の中心に据えて、その位置から世界の中での事物の位置を決定したのである；世界の中での位置判断は、世界に属する「私」の一部であり、したがって、この基本的な天地座標は、人たる個性の非分離的な所有（属性）であった）。

不活格活用の接辞機能を果たしたのは、この非分離（有機的）所有の指標である。例えば、完・1・単　*u̯oi̯d-H_2e「知っている」（ギ　οἶδα，古イ　vēda，ゴ　wait，**вѣдѣ**［補足的な現在指標　i　を伴う、§.19 参照］）のような不活格活用動詞は、本質的には「私の知（ってい）ること」の意であった（§.6 第 3 項参照）。恐らく、かつての不活格活用動詞の大部分は語根母音　o　階梯の始原的な名詞語幹から作られたものである（同じく、同所参照）。このことを証明しているのが、始原的な不活格活用の継承であるギリシャ語畳音完了活用における語根母音　o　階梯の例である。次例も参照、完・1・単　*u̯oi̯d-H_2e　＞　現・1・単　**вѣдѣ**　も参照，cf. **не-съ-вѣдѧ-а**「極めて多数、無限数（逐語的には、知らないこと、分からないことの意）」　＜　*u̯oi̯d-e-H_2（§.10 参照）。ギ　完・3・単　οἶδε ＝ 古イ　vēda ＜　*u̯oi̯d-e　は、述語的用法の純粋名詞語幹（不定格 casus indēfīnītus ）だと思われる。3 人称動詞形の名詞起源については、§.34 参照。

名詞付加接辞でもある、不活格活用動詞 3 人称複数語尾　r　は、本来非

分離所有（属性）表現一般の指標たる r に由来するものであり、以下のような特徴を表示する：

1. 近親（血縁）者の名称。次例参照、 古イ pitár-, ギ πατήρ, ラ pater, ゴ fadar「父」; 古イ mātár- 単・生 МАТ-ЕР-Е, ギ μήτηρ, ラ māter 古高ド muoter「母」; 古イ duhitár-, 単・生 ДЪШТ-ЕР-Е, ギ θυγάτηρ, ゴ daúhtar, リ 単・生 dukteřs「娘」; 古イ bhrā́tar-, БРАТРЪ ラ frāter 古高ド bruoder「兄弟」, ギ φράτηρ「フラトリア（胞族）の成員」[19]; 古イ svásar-, СЕСТРА, ラ soror, ゴ swistar, リ 単・生 seseřs「姉妹」。

2. 夫の死後も自分の氏族には戻らず、夫の父及び兄弟のところに残って生活する妻（cf. 古代の逆縁婚制 levirate[20]）の側から見た、夫側氏族の成員の名称。次例参照、 古イ devár-, ДЪВЕРЪ, ギ δᾱήρ, ラ lēvir, リ 単・生 dieveřs, 古高ド zeihhur「夫の兄弟」; 古イ śváśura-, СВЕКРЪ, リ šẽšuras ギ ἑκυρός, ラ socer, 古高ド swëhur「舅、夫の父」。

3. 複数１・２人称物主代名詞（ラ noster, vester, ギ ἡμέτερος, ὑμέτερος, ゴ unzar, izwar 参照）。これは、原始印欧語族社会における非分離所有のものとして、先ず第一に、共有財産があったことを示している。

4. 内臓の名称。次例参照、 古イ udáram, ラ uterus, 古プ weders, リ vẽdaras「胃、腸詰め」; ギ ἦτρον「胃、腹」, ἦτορ「心臓」, 古高ド ādara「血管」。

5. 空間と時間の副詞。次例参照、 ギ ὑπέρ, ラ super, ゴ ufar, 古イ upári「上から」, ゴ undar「下から」, ラ īnfernus「下方にある、地下の」, 古イ ádhar-aḥ「下の」, 古イ ápar-a-「遠方の、もっと後の（遅い）」。これらの諸例における指標 r は、次第に、対立を前提とした、対置あるいは対比の接尾辞に変わっている — cf. 古高

ド fordro, fordaro「前へ、もっと早くに」, ゴ aftaro「後ろから、後ろに」, ラ dexter「右の」, sinister「左の」。

接尾辞 -r- を伴う極めて多数の始原的な名詞の、古代ブルガリア語における継承として、次のような語がある： **МАТИ**, 生 **МАТЕРЕ**；**ДЪШТИ**, 生 **ДЪШТЕРЕ**；男・複・主 **ЧЕТЪРЕ**, 女・中・複・主 **ЧЕТЪРИ**（cf. 古イ catvā́raḥ, ギ τέσσαρες, ラ quattuor, ゴ fidwor「四」）— この語は、空間的定位（東西南北の四基本方位）に関連する語であり、子音幹名詞曲用でもある；接尾辞 -r- の付いたいくつかの近親者名 — **БРАТРЪ**, **СЕСТРА**, **ДѢВЕРЪ**, **СВЕКРЪ**, **СВЕКРЪ**, 生 **СВЕКРЪВЕ**（**СВЕКРЪ** からの派生語）；**ѦТРЪ**, 生 **ѦТРЪВЕ**「夫の姉妹」（**СВЕКРЪ**, **СВЕКРЪВЕ** との類推による）；接尾辞 -r- の付いた身体部分や器官のいくつかの名称 — **ѦТРО**「肝臓」（cf. ギ ἔντερα「内臓、腸」）, **ЖТРОБА**, **ВѢДРО**「水運び容器、バケツ」＜「皮嚢」＜「胃、腹」（cf. ラ uterus（子宮、腹）, リ vẽdaras「腹」）, **ІДРО**「内臓」（ギ ἦτορ「心臓」と同系）, **БЕДРА**, **РЕБРО**, **НОЗДРИ**, **МѦЗДРА**「皮下膜」；方位の名称 **СѢВЕР**；古い対置接尾辞 -ter-（-tor-）を含む代名詞的形容詞 — **ВЪТОРЪ**, **ЕТЕРЪ**, **КОТЕРЪИ**（cf. ラ uter「二つの内何れかの」, 古イ katarā́ḥ, リ katrãs「二つの内の何れかの」）。

イタリック語派・ケルト語派の中間受動（medio-passīvum）の語尾 r も、同一起源である（cf. ラ 現・3・単 dīcitur「と呼ばれている、という名である」, 複・1 dīcimur, 複・3 dīcuntur）。この r は、当初は不活格（完了）活用の3人称複数形だけの表徴であったが、後に中間受動の意味を持つ他の全ての形に一般化したのである（完了活用動詞の一部にある中間受動の意味については、§.18 参照）。不活格活用動詞は自動詞であり、このことから、行為が他の対象に及ばないという意味で、非遠心的な動詞だと言えるであろう。中動相動詞も非遠心的な動詞である。そこでは、行為は、他の対象に及ぼされず、主体の不可分一体（非分離）的な領分にと

どまるからである。

§.17 始原的活格活用動詞における動作態（Aktionsart）カテゴリー

印欧祖語の活格活用にも不活格活用にも時制のカテゴリーは存在せず、これに代わって強い発達を示したのが動作態（Aktionsart）範疇である。かつての活格動詞類に存在していたのは、以下の指標である：

1. 全一的（一括的）実現行為の指標 H_2 。一連の原語根に立証されるもので、後に非過程的な過去として、すなわちアオリスト（минало свършено време）幹として再解釈を受けている。次例参照、アオ・1・単 **несохъ** ＜ *nek'-H_2-s-, アオ・1・単 **бьрахъ** ＜ *bhьr-e-H_2-s-, アオ・1・単 **пасъ** ＜ *pēn-s- ＜ *pen-H_2-s-, 古イ アオ・1・単 á-bodhi-ṣam「目覚めた、気付いた」＜ *bhoudh-H_2-s-, ギ アオ・1・単 ἔ-δω-κ-α「与えた」＜ *deH_3-H_2-m̥, アオ・1・単 **бъхъ** ＜ *bhu-H_2-s-, ギ アオ・1・単 ἔ-φῡ-ν「生じた」＜ *bhu-H_2-m 。

2. 起動性［inchoative］（行為の開始）指標 n 。次例参照、 現・1・単 **станѫ**, 2 **станеши** ＜ *ste-H_2-n-e- ; **двигнѫ**, **двигнеши** ; **коснѫ**, **коснеши**, ギ 現・1・単 πίνω「飲む」, δάκνω「かむ」, ゴ 現・1・単 fraíhna「質問する」, fullna「満たし始める」。

過程全体ではなく過程の開始を表した、接尾辞 -n- を持つ語幹は、スラヴ祖語のアスペクト体系が生成されるとき、基本的には完了体語幹に代わった。次例参照、 現・1・単 **двигнѫ**, 2 **двигнеши** ; **коснѫ**, **коснеши** ; **тъкнѫ**, **тъкнеши** ; **дрьзнѫ**, **дрьзнеши** ; **кликнѫ**, **кликнеши** 。スラヴ祖語動詞の特徴は、同一語根から起動相語幹（接尾辞 -n- を持つ語幹）も、第一次的接尾辞 -e- を持つ非起動相語幹も作ることができたという点である。スラヴ祖語の時制体系の構築に際しては、

ne 語幹からは現在（単純未来）時制の形が、一方 e 語幹からは単純アオリスト形が作られたのである。次例参照、 現・1・単 **двигнѫ**, 2 **двигнеши**, アオ・3・単 **движе** ; **навъкнѫ**, **навъкнеши**, **навъче** ; **издъхнѫ**, **издъхнеши**, **издъше** ; **прозѧбнѫ**, **прозѧбнеши**, **прозѧбе** ; **коснѫ**, **коснеши**, **косе сѧ**（スプラシル写本 561_{28}） ; **оумлъкнѫ**, **оумлъкнеши**, **оумлъче** ; **постигнѫ**, **постигнеши**, **постиже** ; **иштезнѫ**, **иштезнеши**, **иштезе** 。起動相接尾辞 -n- へのアナロジーによって発生した鼻音接中辞を持つスラヴ祖語動詞にも、同様の相互関係ができあがっている（§.14 参照） — 現・1・単 **сѧдѫ**, 2 **сѧдеши**, アオ・3・単 **сѣде** ; **лѧгѫ**, **лѧжеши**, **леже** ; **обрѧштѫ**, **обрѧштеши**, **обрѣте**（単純アオリスト形 1・単 **сѣдъ**, **обрѣтъ**, 2・3・単 **сѣде**, **обрѣте**, 3・複 **сѣдѫ**, **обрѣтѫ** は、過去語幹の表徴である、語根母音 e の延長階梯である、§.11 参照）。

すでにスラヴ祖語期に、現在幹に n 指標を含んでいた動詞の不定形は、接尾辞 -neu̯- 、対応階梯 -nou̯- を持ち、それが鼻音特徴面での同化を経て -non- ＞ **-нѫ-** に変化した、補充法（suppletion）的語幹によって形成された。接尾辞 **-нѫ-** のより古い響きの痕跡が、**дрьзновенъ**（cf. 現・1・単 **дрьзнѫ**, 2 **дрьзнеши**, 不 **дрьзнѫти**）型の受動過去分詞であり、またこれと同系の次のような動名詞である : **доуновенье**（cf. **доунѫ**, **доунеши**, **доунѫти**）, **покъновенье**（cf. **кънѫ**, **кънеши**, **кънѫти**）, **плиновенье**（cf. **плинѫ**, **плинеши**, **плинѫти**）, **кликновенье**（cf. **кликнѫ**, **кликнеши**, **кликнѫти**）。この場合の接尾辞 **-нов-** は -neu̯-（§.2 参照）あるいは -nou̯- の継承である。**-нов-**, **-нѫ-** に再編された接尾辞 -neu̯-（-nou̯-）は、次のような現在幹の特徴を表示しているギリシャ語の接尾辞 -νῡ- と同系関係にある : アオ・1・単 ἔ-δειξα ＜ *deik̯'-s- に対して、現・1・単 δείκ-νῡ-μι「示す、指摘する」 ; アオ・1・

単 ἔαξα に対して、現・1・単 ἄγ-νῡ-μι「砕く、こわす」；アオ・1・単 ὤμοσα に対して、現・1・単 ὄμ-νῡ-μι「誓う、誓約する」。この接尾辞は、また古代インド語の接尾辞 -no-（< -neu̯- あるいは -nou̯-）：-nu-（-nv-）とも同系関係にあり、次例のような動詞の現在幹の特徴を示している：現・3・単 minóti（3・複 minvánti）「損じる、害する、減じる」（cf. ラ 現・1・単 mi-nu-ō「砕く、減じる」）；ṛṇóti「起こる、生ずる」（ギ ὄρ-νῡ-μι「動かす、起こす」と同系）；dhū́noti「震える」。1・単 **ИАВЪКНЖХЪ**, 2・3 **ИАВЪКНЖ**；1・単 **ОУСЪХНЖХЪ**, 2・3 **ОУСЪХНЖ** 型のアオリスト形が、次第に単純アオリスト形（1・単 **ИАВЪКЪ**, 2・3 **ИАВЪЧЕ**；1・単 **ОУСЪХЪ**, 2・3 **ОУСЪШЕ**）に取って代わり始める。それ故に、現在語幹に -ne- を持つ動詞にあっては、第Ⅱシグマ・アオリストの痕跡は極僅かに見えるにすぎない（cf. スプラシル写本 391_{23} の例、1・単 **АРЪЗОХЪ**）。

3. 動作（行為）の集約性（intensive）（頻発性［frequentative］）指標 H_2。行為の一括性（全一性）を表す（第 1 項参照）集合・多数性の接尾辞 H_2 は、集約的（頻発的）行為の接尾辞として発達する可能性を得たのであり、この接尾辞の使用はしばしば動詞幹の意味の変化（強め）に連動した。次例参照、ラ 現・1・単 dūcō 2 dūcis「引く、引き出す」< *dūc-e-s に対して、現・1・単 ēdūcō 2 ēdūcās（-ās < -eH_2-s）「育て上げる、教育する」；flīgō, flīgis「打つ」に対して、prō-flīgō, prō-flīgās「打ち砕く、破壊する」；dīcō, dīcis「話す、言う」に対して、dicō, dicās「宣言する、布告する、知らせる」；**ИДЖ**, **ИДЕШИ** < *H_1i-dhe-（§.13 参照）に対して、**ꙗДЖ**, **ꙗДЕШИ**「旅する、（乗って）行く」< *H_1i-eH_2-dh-, cf. 古イ 現・3・単 ēti, リ 不 eĩti「行く」< *H_1ei̯-t- に対して、古イ 現・3・単 yā́ti「遍歴する、旅する、（乗り物で）行く」, リ 現・1・単 jóju「（乗り物で）行く」< *H_1i-eH_2-。

動詞幹、名詞幹の集約性（強調性）特徴や意味的にこれに近い、動詞幹の頻発性（継続性［durative］）特徴は、多数性の意義を持った形や語幹を形成するのと同じ形態手段によって表された。その形態手段は、以下の通りである：

a） 畳語法（語根重複）。次例参照、 非重複語根 **ГЛАСЪ** ＜ *gal-s- に対して、 重複語根 **ГЛАГОЛЪ** ＜ *gal-gal-o- に見られる語根 *gal- の重複例；同じく、ギ *καλέω*, ラ calō「呼び集める、召集する」＜ *kl̥- に対して、 **КЛАКОЛЪ**（鐘） ＜ *kol-kol-o- ； **ТЖЧА**「雹雲、霰雲」＜ *ton-k- に対して、 **ТЖТЬНЪ**（轟音、雷鳴） ＜ *ton-tьn-o- ； ギ 現・1・単 *φύρω*「かき混ぜる、かき回す、混乱させる」＜ *bhr̥- に対して、 *πορφύρω*「波立つ」＜ *bhor-bhr̥- ； ギ *φαίνω*「現す、見える」＜ **φαν-i̯-* ＜ *bhHn-i- に対して、*παμφαίνω*「光る、輝く」＜ *bhHn-bhHn-（bh ＞ p の異化を伴う）。

b） 語根重複の継承としての語根母音延長（§.12 及び以下の c 項参照）。

c） 多数性指標 H_2 （§.10 参照） と i （第 5 項参照）の付加。

スラヴ祖語期に、接尾辞 -ā- ＜ -eH_2- は、不完了体の二次的（派生）動詞の接尾辞として再解釈を受け、それは、語根母音の延長が可能である場合、その延長階梯を持つ語根の後ろに付加された － 次例参照 現・1・単 **МЬРЖ**, 2 **МЬРЕШИ**（不完了体）：**ОУМЬРЖ**, **ОУМЬРЕШИ**（完了体）：**ОУМИРАЖ**, **ОУМИРАЕШИ**（二次的不完了体）； **КЛЬНЖ**, **КЛЬНЕШИ** : **ЗАКЛЬНЖ**, **ЗАКЛЬНЕШИ** : **ЗАКЛИНАЖ**, **ЗАКЛИНАЕШИ** ; **СЪЛЖ**, **СЪЛЕШИ** : **ПОСЪЛЖ**, **ПОСЪЛЕШИ** : **ПОСЪЛАЖ**, **ПОСЪЛАЕШИ** ; **ГНЕТЖ**, **ГНЕТЕШИ** : **ОУГНЕТЖ**, **ОУГНЕТЕШИ** : **ОУГНѢТАЖ**, **ОУГНѢТАЕШИ** ; **КОЛЖ**, **КОЛЕШИ** : **ЗАКОЛЖ**, **ЗАКОЛЕШИ** : **ЗАКАЛАЖ**, **ЗАКАЛАЕШИ** ; **ГОНЖ**, **ГОНИШИ** : **ИЗГОНЖ**, **ИЗГОНИШИ** : **ИЗГАНѢЖ**, **ИЗГАНѢЕШИ** ; **СѢКЖ**, **СѢЧЕШИ** : **ПОСѢКЖ**, **ПОСѢЧЕШИ** : **ПОСѢКАЖ**, **ПОСѢКАЕШИ** ; **ПАДЖ**, **ПАДЕШИ** : **НАПАДЖ**, **НАПАДЕШИ** :

НАПАДАѬ, НАПАДАЕШИ 。

不完了体派生語幹は、現在幹に接尾辞 -ne- を持つ動詞からも、同じようにして作られる：現・1・単 **ВЪЗДЪХНѪ**, 2 **ВЪЗДЪХНЕШИ**（完了体）：**ВЪЗДЪХАѬ, ВЪЗДЪХАЕШИ**（不完了体）；**ПРИКОСНѪ, ПРИКОСНЕШИ**：**ПРИКАСАѬ, ПРИКАСАЕШИ**；**ВЪЗДВИГНѪ, ВЪЗДВИГНЕШИ**：**ВЪЗДВИѢАѬ, ВЪЗДВИѢАЕШИ** 。現在幹に接尾辞 -e- を持つ動詞、例えば、現・1・単 **БЕРѪ**, 2 **БЕРЕШИ**, 不 **БЬРАТИ** のような動詞の場合は、語根母音を延長した形は不定詞・アオリスト幹に立証されるような語根の変種に変わったのである。例、**БЕРѪ, БЕРЕШИ, БЬРАТИ**：**СЪБЕРѪ, СЪБЕРЕШИ, СЪБЬРАТИ**：**СЪБИРАѬ, СЪБИРАЕШИ, СЪБИРАТИ**；**ПЕРѪ, ПЕРЕШИ, ПЬРАТИ**：**ПОПЕРѪ, ПОПЕРЕШИ, ПОПЬРАТИ**：**ПОПИРАѬ, ПОПИРАЕШИ, ПОПИРАТИ**；**ЗОВѪ, ЗОВЕШИ, ЗЪВАТИ**：**ПРИЗОВѪ, ПРИЗОВЕШИ, ПРИЗЪВАТИ**：**ПРИЗЪВАѬ, ПРИЗЪВАЕШИ, ПРИЗЪВАТИ** 。恐らく、延長語根母音と接尾辞 -a- を備えた二次的不完了体動詞は、**БЬРАТИ**：**СЪБЬРАТИ**：**СЪБИРАТИ**；**ЗЪВАТИ**：**ПРИЗЪВАТИ**：**ПРИЗЪВАТИ** 類に真っ先に現れたのである。このような場合の、頻発性接尾辞 -ā- の起源は、スラヴ祖語動詞の過去語幹における接尾辞 -ā- の起源（第 1 項参照）と同じである。

4．始原的活格動詞の幹母音 e を延長して得られる状態指標 ē（§.11 参照）。このタイプの動詞幹は、古い完了活用（特別な語尾と語根重複を備える）が完全に消失した（スラヴ語群、バルト語群）か、副次的な役割を果たしている（イタリア語群、ゲルマン語群）印欧語群に見られる。古い完了活用が生き残ったギリシャ語では、ē 語幹は、行為に対する主体の不活発な態度を表す第Ⅱアオリスト受動形（aoristus secundus passīvī）にのみ特徴的である（§.11 参照）：現・1・単 κόπτω「切る」，アオ・1・単 ἐκόπην「切ってある、切断済である」。スラヴ祖語においては、接尾辞の ē は状態動詞の不定詞・アオリスト幹の特徴である —

例、 **БЪДѢТИ, МЬНѢТИ, СКРЪБѢТИ, ТРЬПѢТИ, ВИДѢТИ, ЗЬРѢТИ, МРЬЗѢТИ, СМРЬДѢТИ, ЗВЪНѢТИ, СѢДѢТИ, БОЛѢТИ, ВИСѢТИ, ГОРѢТИ, ДРЬЖАТИ, ВРЬТѢТИ, МЛЬЧАТИ** 。原則として、これらの動詞は自動詞である（§.11 参照）。

リトアニア語の過去 ē 語幹は、古代ブルガリア語の ē 語幹と同様の意義を持ち、一連の場合それと完全一致を行う － 例、 不 pavydėti 「羨む」 ＝ **ВИДѢТИ**, minėti （回想する） ＝ **МЬНѢТИ**, smirdėti （悪臭を放つ） ＝ **СМРЬДѢТИ**, budėti （目を覚ましている） ＝ **БЪДѢТИ**, sėdėti （座っている） ＝ **СѢДѢТИ**, garėti （蒸発する、気が抜ける、しおれる）＝ **ГОРѢТИ** 。 ゴート語では、原接尾辞 -ē- は、次のような状態動詞に立証される － 不 haban 「持つ」(cf. **ИМѢТИ**) , thahan「黙っている」(cf. **МЛЬЧАТИ**), hāhan 「ぶら下がっている」(cf. **ВИСѢТИ**) , thulan 「我慢する」(cf. **ТРЬПѢТИ**), trauan「深く悲しむ」(cf. **СКРЬБѢТИ**)、これらの大部分は自動詞である。ラテン語では、接尾辞 -ē- は、次のような動詞の現在幹の特徴である － 例、 dolēre「苦痛を感じる」(cf. **БОЛѢТИ**), tacēre「黙っている」(cf. **МЛЬЧАТИ**), havēre 「持っている」(cf. **ИМѢТИ**), vidēre 「見る、見える」(**ВИДѢТИ** と同系)。一連の場合には、接尾辞 -ē- を持つスラヴ祖語動詞は、古い完了形に取って代わったのである（§.18 参照)。

5．行為の使役性（causative）（作為性）ないしは反復性（iterative）（多回性）指標 ei̯ （ i)。語根母音 o 階梯の語根の後ろに付加した（§.6 参照）：

a）使役動詞。次例参照、ラ 現・1・単 moneō「思い出させる」, cf. 語根母音低減階梯 ラ mēns, 属 mentis「知性、思考」＜ *mьn-ti- ＝ **ПА-МѦТЬ** ; torreō「乾かす」＜ *tors-ei̯-ō, cf. 語根母音 e 階梯 terra 「陸地、日照り」 ; doceō 「教え込む、習得させる、礼儀作法を教える」＜ *dok'-ei̯-ō, cf. 語根母音 e 階梯 decet 「穏当・妥当であ

る、適する、べきである」, decus「気品、品格、栄誉、徳」; ギ 現・1・単 φοβέω「(恐怖のあまり)逃げたくさせる、恐れさす」< *bhogʷ-eḭ-ō, cf. 語根母音 e 階梯 φέβομαι「(恐怖のあまり)脱走する、恐れる」。スラヴ祖語においては、接尾辞 -eḭ- は、ギリシャ語、ラテン語、古代インド語の使役動詞に見られるような、幹母音 e (対応階梯では o)による拡張を受けていない。Cf. 古イ 現・3・単 bodhayati「呼び起こす、喚起する」< *bhou̯dh-eḭ-e-ti に対して、**БОУДИТЪ** < *bhou̯dh-eḭ-ti 。

古代ブルガリア語の使役動詞には、以下のものが挙げられる:現・1・単 **БОУЖДѪ**, 2 **БОУДИШИ** < *bhou̯dh- (cf. 単・主 **БЪДРЪ**, 現・1・単 **БЪЖДѪ**, 2 **БЪДИШИ**, 不 **БЪДѢТИ** < *bhudh-); **ОУЧѪ**, **ОУЧИШИ** < *ou̯k- (cf. **НАВЪКНѪ**, **НАВЪКНЕШИ** < *ūk-ne-、これは添加音 prothesis の **В** を持つ、語根母音の延長については §.18 参照); **ОБѢШѪ**, **ОБѢСИШИ** < スラ祖 *ob-u̯oḭs- (cf. **ВИШѪ**, **ВИСИШИ** < スラ祖 *u̯eḭs-); **САЖДѪ**, **САДИШИ** < *sōd- (cf. 単純アオ 3・単 **СѢДЕ** < *sēd-); **ГОУБЛѪ**, **ГОУБИШИ** < *ghou̯b- (cf. **ГЪБНѪ**, **ГЪБНЕШИ**); **ТОЧѪ**, **ТОЧИШИ**「濾す、注ぐ、流れさす」(cf. **ТЕКѪ**, **ТЕЧЕШИ**「流れる、走る」); **ОУМОРѪ**, **ОУМОРИШИ** (cf. **МЬРѪ**, **МЬРЕШИ**); **ПОѪ**, **ПОИШИ** < *poḭ-eḭ- (cf. **ПЬѪ**, **ПЬЕШИ** < *peḭ-e-、§.2 参照); **ОМРАЧѪ**, **ОМРАЧИШИ** < *mor-k- (cf. **МРЬКНѪ**, **МРЬКНЕШИ** < *mьr-k-); **ПОЛОЖѪ**, **ПОЛОЖИШИ** (cf. **ЛЕЖѪ**, **ЛЕЖИШИ**); **ПРИЛѢПЛѪ**, **ПРИЛѢПИШИ** < *loḭp- (cf. **ПРИЛЬПНѪ**, **ПРИЛЬПНЕШИ** < *lip-); **ПОГРѪЖѪ**, グ **ꙗ҃ѧьѧє ѫѧє**, **ПОГРѪЗИШИ**「沈める、浸すだろう」(cf. **ПОГРѪЗНѪ**, グ **ꙗ҃ѧьѧєѳꙗѧє**, **ПОГРѪЗНЕШИ**「沈むだろう」); **ИСѪЧѪ**, グ **ѹ҃ѧѧєꙗѧє**, **ИСѪЧИШИ**「止めさせるだろう」(cf. **ИСѪКНѪ**, グ **ѹ҃ѧѧєꙗѧє**, **ИСѪКНЕШИ**「止むだろう」)。これらには、次のような動詞も挙げておくべきである:**ОУТѢШѪ**, **ОУТѢШИШИ** < スラ祖 *toḭs- (cf. **ТИХЪ** <

*teis-）；**ОЦѢШТЖ**, **ОЦѢСТИШИ** ＜ *koid-t-(cf. **ЧИСТЪ** ＜ *keid-t-）。

b）反復動詞。次例参照、現・1・単 φορέω「運ぶ」＜ *bhor-ei-ō, cf. 語根母音 e 階梯 現・1・単 φέρω, ラ ferō「運ぶ」, 同系語として **БЕРЖ**, **БЕРЕШИ**； 現・1・単 ὀχέω「動かす、運ぶ、転がす」＜ *uog'h-ei-ō, 同系語として **ВОЖЖ**, **ВОЗИШИ**, cf. 語根母音 e 階梯 **ВЕЗЖ**, **ВЕЗЕШИ**。使役動詞の場合と同様、接尾辞 -ei- は、幹母音 e（対応階梯では o）による拡張を受けていない。

古代ブルガリア語の反復動詞としては、以下のものが挙げられる：現・1・単 **ВОЖДЖ**, 2 **ВОДИШИ**（cf. **ВЕДЖ**, **ВЕДЕШИ**）；**ГОНЮ**, **ГОНИШИ**（cf. **ИЖДЕНЖ**, **ИЖДЕНЕШИ**, 不 **ИЗГЪНАТИ**）； **НОШЖ**, **НОСИШИ**（cf.**НЕСЖ**, **НЕСЕШИ**）；**ВЛАЧЖ**, **ВЛАЧИШИ** ＜ *uolkʷ-（cf. **ВЛѢКЖ**, **ВЛѢЧЕШИ** ＜ *uelkʷ-）； **ВЪЛАЖЖ**, **ВЪЛАЗИШИ** ＜ *lōg'h-(cf. **ВЪЛѢЗЖ**, **ВЪЛѢЗЕШИ** ＜ *lēg'h-）； **ВОЖЖ**, **ВОЗИШИ**（cf. **ВЕЗЖ**, **ВЕЗЕШИ**）；**МЖШТЖ**, グ **ѾЭЄШѾЭЄ**, **МЖТИШИ**（cf. **МАТЖ**, グ **ѾЭЄѾЭЄ**, **МАТЕШИ**）。いくつかの反復動詞、例えば、不 **НОСИТИ**, **ВОДИТИ**, **ВОЗИТИ**, **ВЪЛАЗИТИ** のような動詞は、定動詞である **НЕСТИ**, **ВЕСТИ**（1・単 **ВЕДЖ**）, **ВЕСТИ**（1・単 **ВЕЗЖ**）, **ВЪЛѢСТИ** のような動詞とは対照的な不定動詞（一定の方向を持たない運動を表す動詞）に転化したのである。

非使役動詞と派生使役動詞との本質的な違いは、遠心性（他動性として再解釈を受けた） － 非遠心性（自動詞として再解釈を受けた）特徴の面での違いである。基本的には、使役動詞は、以下の動詞から形成される：

a）第一次自動詞から。例、 現・3・単 **ТЕЧЕТЪ**（**ТОЧИТЪ** に対する), **МЬРЕТЪ**（**МОРИТЪ** に対する), アオ・3・単 **ЛЕЖЕ**（**ПОЛОЖИТЪ** に対する)。

b）現在幹に接尾辞 -ne- を持つ自動詞から。例、 現・3・単 **ГЪБНЕТЪ**（**ГОУБИТЪ** に対する), **МРЬКНЕТЪ**（**МРАЧИТЪ** に対する)。

c）不定詞・アオリスト幹に接尾辞 -ē- を持つ自動詞から。例、 不 **БЪДѢТИ**（**БОУДИТИ** に対する），**ВИСѢТИ**（**ОБѢСИТИ** に対する），**СѢДѢТИ**（**САДИТИ** に対する）。

使役性を通じて、非他動的行為は他動的行為となり、そのことによって動詞語幹の意味も変化する。第一次動詞が遠心性動詞（すなわち、スラヴ祖語期における他動詞）であるときには、派生動詞は、他動性を残しつつ、反復動詞となる。例、現・3・単 **ВЕДЕТЪ** — **ВОДИТЪ**, **НЕСЕТЪ** — **НОСИТЪ**, **ЖЕНЕТЪ** — **ГОНИТЪ**, **ВЕЗЕТЪ** — **ВОЗИТЪ**。

反復動詞も使役動詞も起源的には古い集約性動詞であって、その接尾辞 -ei̯- （ゼロ階梯では -i- ）は、多数性指標 i と同系関係にある（§.27 参照）。集約性動詞の多数性の意義については、§.5 参照。ゴート語やリトアニア語では、接尾辞 -ei̯- はゼロ階梯である。次例参照、ゴ 現・1・単 liga「横たわっている」＜ *legh-ō に対して、現・1・単 lagja「（横にして）置く」＜ *logh-i̯-ō（cf. 接尾辞 -ei̯-の e 階梯、現・1・単 **ПОЛОЖЖ**, 2 **ПОЛОЖИШИ** ＜ *logh-ei̯-）；リ 不 vartýti「回転させる」（ cf. 接尾辞 -ei̯- の e 階梯、 **ВРАШТЖ**, **ВРАТИШИ** ＜ *u̯ort-ei̯-）。

6．意思の指標 ieH₁（ゼロ階梯では、 iH₁ ＞ ī ）。希求法（optative）指標として、再解釈を受けた。次例参照、ギ 希・現・3・単 φέροι「（彼が）運ぶように」＜ *bher-o-iH₁ , ゴ 希・現・3・単 bindai「結び付けるように」＜ *bhendh-o-iH₁ , 古ラ 接・現・2・単 siēs「あるように」＜ *H₁s-i̯eH₁-s, 複・1 sīmus ＜ *H₁s-iH₁-m-, **ЮША**（スプラシル写本）「願わくは・・・ならんことを、させたまえ」＜ 希・3・単 *H₁es-i̯eH₁-t 、これと次は同系、ラ 希・3・単 siet ＝ 古イ syāt 「あらんことを、あれかし」＜ *siēt ＜ *H₁s-i̯eH₁-t 。スラヴ祖語では、希求法は、命令法として再解釈を受け、古代ブルガリア語文献では、これの単数、複数、双数のほとんど全人称の形が文証される： 例、2・単 **МОЗИ** ＜ *mog-oi̯-s ＜ *mogh-o-iH₁-s, 3・単 **МОЗИ** ＜ *m

ogh-o-iH$_1$-t, 1・複 **МОѢМЪ** < *mogh-o-iH$_1$-m-os, 2 **МОѢТЕ** < *mogh-o-iH$_1$-te, Cf. 2・複 **ВѢДИТЕ** < *u̯oi̯d-iH$_1$-te, 2・単 **ВѢЖДЬ** < *u̯oi̯d-i̯-o-s < *u̯oi̯d-i̯H$_1$-s（語末閉音節での H$_1$ > o への変化を伴う）。

古代ブルガリア語の条件法分析型式を構成する動詞 1・単 **БИМЬ** < *bhu-iH$_1$-m, 2・3・単 **БИ** の活用も、古い希求法語幹 *bhu-iH$_1$- > *bhu̯-ī- > *bī- から出ている。動詞 1・単 **ХОШТЖ**, 2 **ХОШТЕШИ** の現在形も、希求法語幹から作られたものである。不 **ХЪТѢТИ**（スプラシル写本 114$_1$), 現・1・単 **ХЪШТЖ**（169$_3$, 534$_{11}$), 3 **ХЪШТЕ**（153$_7$）のような形における **ХЪТ-** という語根がもしも **ХОШТЖ** における **ХОШТ-** の形より古いとすれば、**ХЪШТЖ** の形は希求法の形 *hut-iH$_1$-ō > *hut-i̯-ō から引き出されようし、この場合の *hut- は、不定詞 **ВЪС-ХЪТ-ИТИ** ないしは **ХВАТ-И-ТИ** の語根と同系関係にある、すなわち **ХОШТЖ** の本来の意味は「つかまえんとする」であったことになる。動詞 現・1・単 **ВЕЛЮ**, 2 **ВЕЛИШИ** の現在形が、古い希求法語幹 *u̯el-iH$_1$- に由来するものであることも、極めて蓋然性が高い。Cf. 同じ動詞のゴート語希求法活用 — 現・1・単 wiljau, 2 wileis < *u̯el-ī-s < *u̯el-iH$_1$-s 。

このようにして、同一のスラヴ祖語語根からは、活格活用における様々な動作態（Aktionsart）用原語幹の直接的ないしは間接的継承である、極めて多数の語幹を作ることができたのである。始原的不活格活用の場合は、活格活用とは違って、同一動詞用にそれほど多数の異なる動作態（Aktionsart）指標があった訳ではない。不活格活用の枠内では、指標 k やギリシャ語完了形の一部に見られる語根末無気音の帯気音化から明らかなように、一括（全一的）行為指標である H$_2$ のみが使われたにすぎない（§. 13 参照)。この H$_2$ 指標は古代インド語の次のような完了形の i の背後にも隠れている — 2・単 bubodhitha「君は目覚めている」< *bhu-bhou̯dh-H$_2$-tH$_2$e, 1・双 bubudhivá「私達二人は目覚めている」。

§.18 古代ブルガリア語における始原的な不活格活用の痕跡

活格活用動詞と不活格活用動詞間の原初的な相関関係を崩すような最初の重大変化は、活格動詞類が動作（行為）動詞と状態動詞という二群に分解したこと、さらにこの状態動詞群は意味的に不活格動詞と均等化したことである。同時に、活格動詞と不活格動詞の原初的な独立性 ― 同一語根から作ることができたのは、同時に二つの活用（パラダイム）を持った動詞ではなくて、活格活用動詞か不活格活用動詞の何れかであること ― も、損なわれることになった。一方では、新生の状態動詞群は、形態面で一様ではなく、接尾辞 -ē- を持つ始原的な活格動詞（§.17 第4 項参照）も、始原的な不活格活用動詞も含むものであった。場合によっては、この形態的不均質性は、補充法的語幹形成を招いている ― 例、現・1・単 **вѣдѣ** (**вѣмь**)（始原的な不活格活用の名残り）に対して、不 **вѣдѣти**（古い ē 語幹)。また一方では、始原的な活格動詞は、次第に不活格活用を整理し、その不活格活用は過去として再解釈を受けることになった。

過去語幹は、通常、多数性（一括多数性）指標を含んでいる ― cf. 古代ブルガリア語アオリスト幹における一括多数性指標 H_2 の痕跡例、アオ・単・1 **бьрахъ**, **несохъ**, **распасъ**（§.12 参照)。しかし、多数性は、語根重複によっても表すことができる― cf. 次の畳音例、ギ 完・1・単 κέκλοφα「盗んだ」, 古イ cakára「した、遂行済だ」, ゴ laílot「残した（てある)」, ラ pepercī「節約した、大切にした」。活格動詞（動作動詞）と不活格動詞（性質動詞）という本源的対立は、非完了 (infectum) と完了 (perfectum) という対立として再解釈を受けたのである。

完了活用動詞が表すことができたのは、a）精神状態、思考過程、感覚器官を通しての知覚をも含む、生物及び無生物が置かれている状態、b）過去

性、であった。完了のこの二つの意義の間の共通性は、発話時における、行為に対する行為主の不活発な態度である　－　前者においては、行為主は行為に参与しているが、それに対して働きかける訳ではない、したがって、この動詞は自動詞であり、また後者においては、行為主は過去には活動していたが、現在活動しているわけではない。このような意義について証明しているのが、ギリシャ語完了形である。その一部は、例えば、完・1・単　λέλυκα「解いた、ほどいた」，πεφύτευκα「植えた」，γέγραφα「書いた」のように、過去を表しており、また一部は、次のように、非過去の意味を持った、性質ないしは状態を表す自動詞である：　例、完・1・単　πέπηγα「突き出ている、突っ立っている」（現・1・単　πήγνῡμι「突き刺す、打ち込む、固める」），δέδηα「燃えている」（δαίω「燃やす、焼く」），πέποιθα「確信している」（πείθω「確信させる、納得させる」），ὄλωλα「駄目だ、死んでいる」（ὀλλῡμι「滅ぼす、駄目にする」），ἔφθορα「壊滅状態だ、駄目だ」（φθείρω「破壊する、壊滅させる」），ἐγρήγορα「寝ずにいる、用心している」（ἐγείρω「目覚めさせる、喚起する」），ὄρωρα「動く，進む」（ὀρνῡμι「呼び起こす、動かす」）。

その語幹から現在形を作れない、現・1　μέμονα「望む、欲する」，τέθηπα「びっくりする」，οἶδα「知っている」，μέμῡκα「鳴く」のようないくつかの、現在の意を持ったギリシャ語完了活用動詞は、不活格活用が完全に活格活用から独立してあった、明らかにもっと古い状態の痕跡である。

もう一つの痕跡は、現在形と完了形が別々の語根から作られるギリシャ語第Ⅷ類動詞（verba suppletīva）[21] である　－　例、現・1・単　ἐσθίω「食べる」に対して、完・1・単　βέβρωκα「食べてしまった」；τρέχω「走る、急ぐ」に対して、δεδράμηκα「走った」；　φέρω「運ぶ」に対して、ἐνήνοχα「運んだ」；cf. ラ　ferō「運ぶ」に対して、完・1・単　tulī　＜　*te-tul-ī「運んだ」。

状態を表す、次のようなゴート語の過去現在動詞（praeterito-praesentia）も、同様の痕跡を示したものである　－　例、1・単　wait「知っている」（現・1・単　**вѣдѣ**　と同系、cf. 不定詞　ē　語幹の　**вѣдѣти**），lais「理解する、分かる」，kann「知っている」，man　「考える、思う」（**мьнѣ-ти**　と同系），　og「恐れる」（ cf.　不定詞　ē　語幹の **боѩти сѧ**）、これらは、現在の意味と完了の語尾を有するものである。ゴート語　1・単　áih「持つ」も、ここに属する；　これは、バンヴェニスト（E. Benvenis te, 1960 ）によれば、二つの名詞（一つは主格、もう一つは対格）を所有の関係に置く古い状態動詞（ cf. ē 語幹の不定詞　**имѣти**）である。実際、動詞　**имѣти**　は、ゴート語動詞　áih　と同じく、擬似他動詞であって、**имѣти**　からは、他の他動詞とは違って、受動構文において使用すべき受動過去分詞を作ることはできない。

本来的な不活格活用は、完了活用としてだけではなく、中動相活用としても再編を受けた。最古の中動語尾（1・単　-a　＜　-H_2e,　2　-tha　＜　-tH_2e,　3・複　-r）は、それぞれ始原的な完了語尾と完全に一致する。語尾　-H_2e　＞　-a は、例えば、ヒッタイト語中動相　現・1・単　ēshaḫari（ēšḫaḫari）「座る」に立証される。これの重複語尾　-ha　＝　-H_2e　は、古い H_2 指標を含んだものである（ r　は補足された中動相指標である、これの起源については、§.16 参照）。 Cf.　語尾　-ѣ の　現・1・単　**вѣдѣ**「知っている」　＝　ラ　完・1・単　vīdī「見た」＜　*u̯oi̯d-H_2e-i 、この　i の要素は現在指標であって（§.19 参照）、ギ　完・1・単　*οἶδα* ＝　古イ　vēda 「知っている」には欠けているが、古イ　中動（middle voice ＝　反射態　Atmanepadam）・過去（imperfect）・1・単　bhāre　＜　*bher-H_2e-i　に立証される。 -tH_2e　＞　-tha の語尾は、例えば、ヒッタイト語　現・2・単　ar-ta-ti「立つ」に見られるが、この　ti　は補足付加指標である。また、古イ　過去（impf）・2・単　ábhara-thā-ḥ「運んでいた」も同様の例であるが、この場合の語尾　-tha　に対しては、2人称単数の始原的な活格指標　s　が補足されている（§. 35 参照）。語尾の　-

r は、例えば、中動・古イ　現・3・複　śēre「横たわっている」に見られる。

始原的な中動相動詞も、その源である不活格活用動詞と全く同様に、概ね非遠心動詞（自動詞）であり、大部分自動詞である状態動詞として再解釈を受けたのである。次例参照、現・1・単　τρέπω「回転させる」に対して、中動・現・1・単　τρέπομαι「自分の向きを変える、回る」；κῑνέω「動かす」に対して、κῑνέομαι「動く」；πίμπλημι「満たす」に対して、πίμπλημαι「一杯になる」；ἔλπω「期待させる」に対して、ἔλπομαι「期待する」、また次のような絶対中動相（media tantum）：κεῖμαι「横たわっている」；ἧμαι「座っている」。

早くもスラヴ祖語期には、古い完了形はすでに姿を消している。起源的に不活格活用の語尾を持ち、かつ過去の意味を持った古い形は、活格活用の語尾を起源とするアオリスト形によって　－　例えば、1・単　**БЬРАХЪ** ＜ *bhь r-e-H_2-s-om,　2　**БЬРА** ＜ *bhь r-e-H_2-s-s,　3　**БЬРА** ＜ *bhь r-e-H_2-s-t によって　－　、あるいはまた　完・1・単　**ДАЛЪ Е СМЬ**　型の分析形式構文によって、置換されたのである　－　レスキーン（A. Leskien, 1884）によれば、これは、当初　dator sum（私は与える者である）の意であった。また一方、状態を表し概して自動詞である、起源的に不活格語尾を持つ形は、これまた状態を表し概して自動詞であるが、起源的に活格語尾を持つ　ē　語幹動詞の形（§.11 参照）によって、置換されたのである。なお、スラヴ祖語期には、古い中動相も発達しないか、あるいは消失してしまったのである。

古代ブルガリア語における、古い完了（不活格）活用の痕跡が最も顕著に現れているのが、**ВѢМЬ**　動詞の形であり、これの不定詞・アオリスト幹 **ВѢДѢТИ**　は、過去現在活用　*u̯oi̯d-H_2e（＝ギ　完・1・単　οἶδα；古イ　vēda,　ゴ　wait「知っている」）と　ē　指標を持つ状態語幹（§.17 第4項参照）の間の、スラヴ祖語における補充法的パラダイム関係

について証明している。これらの痕跡が、現・1・単 **вѣдѣ** < *u̯oi̯d-H_2e-i（§.27 参照），2・複 **вѣсте**（ギ 完・2・複 ἴστε < *u̯id-te と同系），そして恐らくは、1・複 **вѣмо**（古イ 完・1・複 vidmá と同系）である。現・1・複 **-мо** の語尾は、古代ブルガリア南西部の原典より書き写された中世ブルガリア語のテキスト（例えば、「オフリドの使徒」[Охридски апостол]、「セヴァスチャン選集」[Севастияновия сборник] 中のクリメントによる「キュリロス礼賛」[Похвално слово за Кирил][22]）の非テーマ動詞に極くまれに見られるものである － さらに、**есмо**, **мамо** < スラ祖 *i̯ьmāmo, **адмо** 参照。これは、**вѣдѣ** < *u̯oi̯d-H_2e-i あるいは **ѣмь**（古い完了の畳音 *H_1e-H_1ed- > *e-ed- > *ēd- を持つ、§.12 参照）のような動詞の始原的な完了活用の遺産であり、非テーマ動詞パラダイム全体に一般化したものである。

始原的な完了活用では、語根母音は単数では正常階梯ないしはその対応階梯、複数ではゼロ階梯の形であった。次例参照、古イ 完・1・単 véda, ギ οἶδα, ゴ wait に対して、1・複 vidmá, ἴσμεν, witum 。これは、活格構造言語の初期の状態の名残であり（§.28 参照）、この場合の動詞の単数形、複数形は補充法的に － 異なる語根から、後には異なる語幹から － 作られたのである、cf. ギ アオ・1・単 ἔδωκα「与えた」< *deH$_3$-H$_2$-m̥, 2 ἔδωκας, 3 ἔδωκε に対して、1・複 ἔδομεν < *dH$_3$-H$_2$-, 2 ἔδοτε, 3 ἔδοσαν。しかしながら、スラヴ祖語期には、古い不活格活用を持つ動詞にあっては、単数語幹が一般化したのである：現・1・単 **вѣдѣ** － 1・複 **вѣмъ** 参照。現・1・単 **могѫ**, 2 **можеши** も古い不活格活用の動詞である。これは、ゲルマン諸語では、過去現在動詞（完了語尾を持つ）である：ゴ 1・単 mag「～できる、～してよい、～かもしれない」，2 magt < *mogh-tH$_2$e 参照。スラヴ祖語では、この動詞は、特別のアクセント・パラダイムを持ち、それは、現在幹に接尾辞 -e- を持つそ

の他の動詞とは違ったものである － cf. ロ мо̀гу, мо̀жешь に対して、несу̀, несёшь ; пеку̀, печёшь 等。

大部分の始原的な完了形の特徴は、語根重複であるが、これは、語頭子音 H (H_1, H_2, H_3) を持つ語根にあっては、H (H_1, H_2, H_3) の脱落後、完了幹語根母音の延長を惹起した。次例参照、ラ 完・1・単 ēdī「食べた」＜ *H_1e-H_1ed-H_2e-i (cf. 古い完了幹と活格語尾を持つ 現・1・単 ѢМЬ) に対して、現・1・単 edō「食べる」＜ 非畳音語根 *H_1ed- 。スラヴ祖語期には、完了活用はすでに消失していたが、完了幹の一部の最も重要な特徴の一つである語根母音の延長は、スラヴ祖語の語幹に広がり、それが始原的な完了形に取って代わった。それの一つが、語根母音延長の現れる過去（アオリスト）語幹であり（例、現・1・単 РЕКѪ, 2 РЕЧЕШИ に対して、アオ・1・単 РѢХЪ)、もう一つが、接尾辞 -ē- を持ついくつかの状態動詞語幹である（例、不 БѢЖАТИ, СТЪДѢТИ Сѧ, СѢДѢТИ)。また、延長にはなじまない語根母音ゼロ（低減）階梯もこの状態語幹の特徴である（例、不 МЬНѢТИ, ЗЬРѢТИ, СМРЬДѢТИ)。

過去語幹における語根母音延長は、何といっても、古い完了活用が完全あるいはほとんど完全に消失してしまった印欧語群に観察される。延長が重要な役割を演じているのは、スラヴ祖語（古代ブルガリア語)、ラテン語 (cf. 現・1・単 legō「集める」に対する 完・1・単 lēgī「集めた」; 現・1・単 vehō「運ぶ、引っ張る」に対する 完・1・単 vēxī「運んだ、引っ張った」) 及びゲルマン祖語 (cf. 現・1・複 niman「取る」＜ *nem- に対する 完・1・複 nemun「取った」＜ *nēm-; 現・1・複 qiman「行く、来る」＜ *g^wem- に対する 完・1・複 qemun「着いた」＜ *g^wēm-; 現・1・複 slahan「打つ」＜ *slak- に対する 完・1・複 slohun「打った」＜ *slāk-) であって、完了活用が存在しているギリシャ語では特徴的でない。しかし、古代インド語のシグマ・アオリストには、古代ブルガリア語やラテン語のシグマ・アオリストと同じ語根母音延長が見られる － cf. 古イ アオ・1・単 á-vāṣam, ラ

vēxī, **ВѢСЪ** ＜ *u̯ēg'h-s-「運んだ」であるが、現・3・単 váhati, ラ vehit, **ВЕЗЕ** ＜ *u̯eg'h-e-「運ぶ」では、非延長語根母音である。古代インド語のアオリスト形の延長は、明らかに、1・単 ā́da「食べた」＜ *H_1e-H_1ed-(cf. 現・1・単 **ꙗмь**）や 1・単 ā́sa「あった」＜ *H_1e-H_1es- 型の完了形（古代ブルガリア語のインパーフェクト минало несвършено време 形の **ѧх** 指標と同系である、これについては、§.12 参照）における延長からのアナロジーである。始原的な過去形の母音延長のそもそもの原因となったのは、H（H_1, H_2, H_3）の音である。現・1・単 **БЬѮ, БЬЕШИ** ＜ *bhei̯-e-: アオ・1・単 **БИХЪ** ＜ *bhi-H_2-s-; 現・1・単 **БЖДѦ** ＜ *bhu-n-dh-: 不 **БЪТИ** ＜ *bhu-H_2- 型の交替については、§. 12, 13 参照。Cf. ギ 現・1・単 φύομαι「育つ、生じる」＜ *bhu- と Ⅱアオ・1・単 ἔφυν「成った、生じた」＜ *bhu-H_2- 。ラテン語の、現・1・単 capiō「掴む、取る」＜ *kH_1-p-: 完・1・単 cēpī「つかまえた」＜ *keH_1-p-; frangō「破砕する」＜ *bhrH_1-n-g'-: frēgī「破砕した」＜ *bhreH_1-g'-; pangō「打ち固める」＜ *pH_2-n-g'-: pēgī（pāgī「打ち固めた」＜ *peH_2-g'- にかえて）型の交替は、H（H_1, H_2, H_3）に終わり、現在幹がゼロ階梯、過去語幹が e 階梯である語根として独立したのである。ラテン語の、1・単 ēdī「食べた」(cf. 現・1・単 **ꙗмь**）は、明らかに、畳音語幹 *H_1e-H_1ed- に由来するものであり、それは、例えば、ドーリス 完・1・単 πέπᾱγα「固定させた」＜ *pe-peH_2-g'-（ラ 現・1・単 pangō「打ち固める」＜ *pH_2-n-g'- と同系）が証明しているのと同じものである。

現在語幹に接尾辞 -ne- を持ついくつかの自動詞、例えば、現・1・単 **БѢГНѪ**, 2 **БѢГНЕШИ** ; **СТЪДНѪ, СТЪДНЕШИ** ; **ГЪБНѪ, ГЪБНЕШИ** のような動詞（例えば、**БѢЖАТИ, СТЪДѢТИ** のような ē 語幹の状態動詞や **ГЪБѢЛЬ** のような名詞に対応する）の語根も、延長語根母音を含んでいる。名詞派生（denominative）語幹としての始原的

完了語幹の一部は、語根母音の　o　階梯を持つ（§．6　第3　項参照)。不定詞・アオリスト接尾辞　-ē-　を持ついくつかの古代ブルガリア語状態動詞（ cf.　不　**БОѢТИ СѦ, ГОРѢТИ, БОЛѢТИ**）も、消失した完了活用の側からの影響によって、語根母音の　o　階梯を持っているが、その活用から、過去形あるいはまた状態動詞が作られたのである。スラヴ祖語の動詞形にあっては、語根母音の　o　階梯は、ゴート語単数過去形に発生したようには　－　例えば、現・1・単　nima「取る」＜　*nem-　に対して、1・単　nam　「取った」＜　*nom-; 現・1・単　qima「来る、行く」＜　*gʷem-　に対して、1・単　qam　「来た」＜　*gʷom- のようには、－　、過去（アオリスト）幹に浸透しなかったのである。

§.19 古代ブルガリア語時制（テンス）の起源

スラヴ祖語のテンス・アスペクト体系は、全て始原的な活格活用の枠内で発達したものである。§.10 において指摘したように、集合多数性指標 H_2 の助けによって、一括（全一的）、完遂、完了的な行為を表す語幹が作られ、それがアオリスト幹に転じたのであった － 1・単 **БЬРАХЪ** < *bhьr-e-H_2-s-, **НЕСОХЪ** < *nek'-H_2-s-, **ПЯСЪ** < *pēn-s- < *pe n-H_2-s-、cf. §.12 。語根母音延長を行うアオリスト幹は、例えば、現・3・単 **НЕСЕТЪ** < *nek'-e- , **ВЕДЕТЪ** < *u̯edh-e- に対する、1・単 **НѢСЪ** < *nēk'-s- , **ВѢСЪ** < *u̯ēdh-s- のような形は、完了活用と H（H_1, H_2, H_3）で始まる語根の完了用畳語法（畳音）を持つ、始原的な過去語幹の影響下に生じたものである － §.12 参照。*bher-e-(cf. 現・3・単 **БЕРЕТЪ**), *nek'-e-(cf. 現・3・単 **НЕСЕТЪ**, 単純アオ・3・単 **НЕСЕ**), *pьn-e-(cf. 現・3・単 **ПЬНЕТЪ**）のように、もともと一括多数性指標 H_2 による拡張を受けない活格語幹は、持続行為を表したものである。ここからは、接尾辞 -e- を持つ動詞非完了（infectum）幹が作られたのである。それは、一つは、現在形であり、もう一つは、以前はインパーフェクト（発話時以前に終わった持続行為）形であった、単純アオリスト形である。

当初存在していたのは、唯一、幹母音 e（対応階梯では o ）と 1・単 -m, 2 -s, 3 -t, 3・複 -nt の語尾（ *nek'-o-m, *nek'-e-s, *nek'-e-t, *nek'-o-nt ）を持つ非完了活用のみであり、その直接的継承が単純アオリストである － 2・3・単 **НЕСЕ**, 1・単 **ПАДЪ**, 3・複 **ПАДѪ**。この形は、持続行為一般を表したのである。現在 － インパーフェクト（минало несвършено време）の対立は、非完了活用の範囲内に、もっと後に現れたものである。現在形（例、3・単 **НЕСЕТЪ** < *nek'-e-t-i, 3・複 **НЕСѪТЪ** < *nek'-o-nt-i ）は、

-m, -s, -t, -nt の語尾の後ろに、 i 指標（§.27 参照）を付加することによって得られたもので、その結果、第一次的な非完了形（語尾を拡張しなかった形）の方は、非現在（過去）の意義を獲得したのであり、それは古代ブルガリア語の単純アオリスト形が引き継いでいる。

幹母音 e を持つスラヴ祖語の動詞形の大部分は、その第一次的な非完了活用を失ってしまっている。古代ブルガリア語文献には、現・1・単 **БЕРЖ**, 2 **БЕРЕШИ**, 不 **БЬРАТИ** ; **ПЬНЖ**, **ПЬНЕШИ**, **ПѦТИ** ; **МЬРЖ**, **МЬРЕШИ**, **МРѢТИ** 型の動詞の場合、単純アオリストの痕跡が文証されない。古代ブルガリア東部方言では、単純アオリストの中で残っているのは、第Ⅱシグマ・アオリストを持つ動詞の補充法（suppletion）活用としての2・3人称の形だけである — 1・単 **ПАДОХЪ**, 2・3 **ПАДЕ** ; 1・単 **НЕСОХЪ**, 2・3 **НЕСЕ**、また、動詞 **РЕКЖ**, **РЕЧЕШИ** のアオリストの活用における 1・単 **РѢХЪ**, 2・3 **РЕЧЕ**（§.13 参照）も。古代ブルガリア西部方言では、単純アオリストは、シグマ・アオリストを失った動詞の個別的なパラダイムとして生き残っている — 例、1・単 **ИДЪ**, 2・3 **ИДЕ**, 1・複 **ИДОМЪ**, 2 **ИДЕТЕ**, 3 **ИДЖ** 。つまり、ここでは、非シグマ・アオリスト（古いインパーフェクト）の方が、シグマ付加の過去形よりも好まれたのである（§.13 参照)。古代ブルガリア西部方言においては、語根母音延長によってシグマ・アオリストを形成する動詞は、2・3人称単数に単純アオリストを持っている — 例、1・単 **НѢСЪ** に対して、2・3 **НЕСЕ** ; 1・単 **БАСЪ** に対して、2・3 **БОДЕ**。第一次的な非完了形（infectum）は、現在形の発生以後インパーフェクトとして再解釈を受けたが、それは、スラヴ祖語の分析型のインパーフェクトに抑えられ、かつまたそれによって置換されてしまった。この分析型インパーフェクトは、活格活用型の助動詞の重複語根によって作られたもので、それを、始原的な不定形 — 一括多数性指標 H_2 の助けによって作られる、完遂行為用不変化動詞幹 — の後ろに付加するか、 e の延長幹母音の助けによって作られる、状態用不変化動詞幹に付加したのである。

前者のタイプは、1・単 **БЬРА-А-ХЪ** ＜ *bhьr-e-H_2- に、後者のタイプは、**НЕСЪАХЪ** ＜ *nek'-ē- に立証される。

完了形（パーフェクト）の消失を通じてその使用範囲を拡大して行った、スラヴ祖語動詞の ē 語幹（§.18 参照）は、完了語幹と全く同じように、1）状態、と 2）過去性、すなわち発話時における、行為に対する行為主の不活発な態度を表したのである。接尾辞 ē を持つスラヴ祖語のインパーフェクト形は、ē 語幹のこの第二の意義を基に構築されたものである（ラテン語の 1・単 leg-ē-bam「集めた」型のインパーフェクトの形成については、§.12 参照)。インパーフェクトの語尾自体（1・単 **-АХЪ** ＜ *H_1e-H_1es-o-m, 2 **-АШЕ** ＜ *H_1e-H_1es-e-s, 3 **-АШЕ** ＜ *H_1e-H_1es-e-t, 3・複 **-АХѫ** ＜ *H_1e-H_1es-o-nt ）は、古い畳音語幹とそれに付加された非完了語尾である（§.12 参照）。

§.20　スラヴ祖語の動詞・名詞接尾辞　-s-

スラヴ祖語のシグマ・アオリスト形を作った　s　指標は、古い過去性指標ではない。過去性を表したのは、接尾辞　-s-　が付加される語幹自体である。そうした語幹の一部は、例えば、アオ・1・単　**БЬРѢХЪ**　＜　*b h ь r-e-H_2-,　**НЕСОХЪ**　＜　*nek'-H_2-s-, **ПѦСЪ**（**ПѦХЪ**）＜　*pen-H_2-s- のように、完遂、完了した行為の全一性を強調する、一括多数性指標　H_2 を含むものであった。また、ある一部の過去語幹は、例えば、1・単　**НѢСЪ**, **ВѢСЪ**　のように、いくつかの完了幹の類似の延長からのアナロジーによって、語根母音延長による形成を行った（§.12 参照）。始原的な接尾辞　-s-　は、古代ブルガリア語、ギリシャ語、古代インド語、また一部ラテン語動詞の過去語幹に見られる。しかし、この接尾辞それ自体が、行為の、対時間関係を表す訳ではない。ギリシャ語、古代インド語及びリトアニア語では、この接尾辞によって、未来形も作ることができる（ cf.　ギ　1・単　δώσω, 古イ　dāsyā́mi,　リ　dúosiu「与えるだろう」)。スラヴ祖語においても、恐らく、プレスラフの古代ブルガリア語の原本から書き写された一連の古代ロシア語写本に見られる分詞　**БЪШѦШТѦІѦ**（τὰ ἐσόμενα）から判断して、シグマ型の未来形も作られたのである。　s　指標によって、いわゆるシグマ型現在（s-praesentia）も作られたのであって、このことは、古代ブルガリア語の、現・1・単　**ТРѦСЖ**,　2　**ТРѦСЕШИ**（ cf.　ラ　現・1・単　tremō「振動する、震える」、この場合、接尾辞　-s-　を欠いている)、不定詞幹　**ІѦХАТИ**「(乗って) 行く、旅する」＜　*H_1i-eH_2-s-、また更に後の文献の、現・1・単　**МАХАЮ**, 不　**МАХАТИ**（ cf.　リ　mosúoti「手を振る」）といった語に証明される。ブルークマン（K. Brugmann, 1906）によれば、現在、未来及びアオリストの接尾辞　-s-　は、スラヴ祖語の　es　語幹の接尾辞の　-es-　と同系関係にある　一　例、単・主　**НЕБО**, 生　**НЕБЕСЕ**；**СЛОВО**, **СЛОВЕСЕ**；**ЧОУ**

ДО, ЧОУД-ЕС-Е 。

動詞・名詞接尾辞 -s- の広範な使用が暗示しているのは、これが始原的な文法的表徴ではなく、むしろ語彙的な表徴だということである。それは、何らかの古い文体、人間の何らかの古代的な行動様式、何らかの原始世界観に関連しているはずであり、その世界観を表す、動詞・名詞の基本的な用語が、共通指標 s を含んでいるのである。動詞接尾辞 -s- と同じ接尾辞を持つ、スラヴ祖語の es 語幹名詞は、あるすぐれて古代的な世界観の中心概念を表しており、その世界観は、ヨーロッパの文明人には消えてしまっているが、18－19世紀の民族学上の記録によると、シベリア諸民族の世界観には類例がある。そうした世界観の最も重要な構成要素は、以下の通りである：

1．地上の他に天空と地下の世界があるという考え。天（НЕБО, 生 НЕБЕСЕ, 古イ nábhas-「天、空」, ギ νέφος「雲」における es 語幹参照）と地を結ぶものは、世界に広がる木（АРЪВО, 生 АРЪВЕСЕ における es 語幹参照；cf. ラ arbor, 属 arboris ＜ *arb-os-is「木」における es 語幹）であり、この木を伝って、人間は天空の中心に、また北極星に上りつめることができ、あるいはまた、地下の世界に降りて行くことができる。夜の星空は、車輪がその軸の回りを回転するが如く、北極星の回りを回転している（КОЛО, 生 КОЛЕСЕ ＝ ギ τέλος, 属 τέλεος ＜ *kʷel-es-「あるものがその回りを回転する先端」における es 語幹参照；同一語根、ただし語根母音 o 階梯の語として、ギ 男 πόλος ＜ *kʷol-o-「(車) 軸、蒼穹、天の北極」がある)。北極星と結びつくのが、星座の大熊座（ブルガリア民間信仰では、“Колата”［荷車座］）と小熊座である。普通の荷（馬）車の一部分の名称が、夜の星空で天空の北端点（北極星）の回りを回転する星座を「荷車」と見た古代人の表象を反映している。くびき（次の es 語幹参照、ИГО, 生 ИЖЕСЕ, ギ ζεῦγος, ゴ jukuzi「くびき」, ラ iūgerum「くびきをはめられた連畜牛が一日の間に耕すことができる地積単位」＜ *i̯ou̯g-es-)

を、轅（次の es 語幹参照、スラ祖 *oi̯-es-, cf. ス ojê, 生 ojêsa「轅」, 古イ ī-ṣ-ā「轅」）に取り付けている位置は、原始スラヴの言い伝えでは、北極星に当たるところであった。 -es- という接尾辞は、荷車の別の部分の名称にも広がっている — ТАЖЕСА「家畜が荷車を引っ張るときの紐」, ポラーブ 主・複 *zvenesa「荷車の輪縁(リム)」参照。

2．この天空と地下世界に到達することができる者は、恍惚状態に没入して、狂ったような忘我の状態になる、あるいは熱病的な興奮状態に達する（ЛЮТО , 生 ЛЮТЕСЕ「狂乱状態への精神的衝動」における es 語幹参照)、あるいはまた、自分自身の中に閉じ込もって自己の夢幻世界に浸ることができる者だけだという考え。恍惚状態の目的は、魂が彼岸世界を自由に遍歴することができるように、魂を肉体（次の es 語幹参照、ТѢЛО, 生 ТѢЛЕСЕ ; cf. ラ corpus, 属 corporis「体、物体」< *corp-os-es）から解放することにある。天との接触交流は驚きを通して得られる（АИВО, 生 АИВЕСЕ < 語根 *di-, *di-u-「天、神、天上の神」における es 語幹参照)。原始スラヴにおける驚嘆（ч у д е н е）は、喫驚（д и в е н е）とは違って、恍惚として地下世界を巡歴することであった（次の es 語幹参照、ギ κ ε ῦ θ ο ς「地下深部、内奥」と同系である ЧОУДО, 生 ЧОУДЕСЕ ; 同一 es 語幹、ただし語根母音 e 階梯に替わって、 o 階梯の語として、ロ к у д ѐ с н и к「魔法使い」, 中・複 к у д е с à「妖怪、悪霊による奇跡」)。恍惚陶酔の時、人は目と耳（次の es 語幹参照、ОКО, 生 ОЧЕСЕ ; ОУХО, 生 ОУШЕСЕ ; СЛОУХО, 生 СЛОУШЕСЕ）に変じて、忘我驚嘆し、星空空間と地下世界への不可思議の旅の見聞に浸るのである。飛ぶことは、魂が肉体を離れて、宇宙を巡歴する能力を象徴化する。恍惚陶酔の時に、人は肩（ポラーブ語 複・主 *ramenesa「肩」における es 語幹参照）から両手を翼のように動かす。そのことによって鳥の飛行を表すのである — 肩は、魂が乗って飛ぶ翼であった。より速く鳥に変身することができるように、恍惚陶酔状態に入った者は、羽（ポラーブ語 複・主 *peresa「羽」における es 語

幹参照）でおおった特別の衣を纏う。接尾辞 -s- を付加する動詞（1・単 **трѧсѫ**, 2 **трѧсєши**［揺る、震える］、不 **мѧхѧти**［振る］, **ꙗхѧти**［乗り物で行く、旅する］）は、恍惚陶酔時の基本動作名 — 魂が飛行準備体勢に入った時の熱病的興奮状態、彼岸世界への驚嘆の旅を表す両手の揺さ振り — に関連がある。

3．独特の転生を体験した者こそ、最も容易に天空と地下世界に到達できるという考え。この転生とは、目、耳、内臓（次の es 語幹参照、**оуѧо**, 複・主 **оуѧєса**「内臓」；**исто**, 複・主 **истєса**「腎臓」；**око**, 生 **очєсє**；**оухо**, 生 **оушєсє**）が入れ換えられるために、肉体が自己分離するか、あるいは分離される可能性を持つという考えである。転生の目的は、魔法の言葉と魔法の業の力（**слово**, 生 **словєсє**；**дѣло**, 生 **дѣлєсє** における es 語幹参照）を習得することである。転生者、すなわち新しい内臓と新しい腎臓（cf. 双・主 **истєсѣ**）を受け供えた者こそ、**истъ**、すなわち真正の人となる（その者の肉体が自己分離を行っていても、未だ自己分離を完了していない時には、その者は、**неистовъ** である）。転生の後、その者は、予言者としての才能と、自分の臓腑（**чрѣво**, 生 **чрѣвєсє** における es 語幹参照）の動きによって予言したり、魔法の呪文（次の es 語幹参照、**грано**, 生 **гранєсє**「詩句、祭司の極まり文句」；**грано** は、**жьрьць**［祭司］と同一語根）を唱える能力を得るのである。

名詞形以外にあった接尾辞 -s- は、一つは、祭司的予言の言葉の動詞形の表徴でもあった。その結果、最初は祭司的文体の範囲内に希求（願望）(desiderative) の形が発達し、そこからシグマ型未来形が発生してくるのである。もう一つは、この接尾辞 -s- は、彼岸世界への驚嘆の旅についての話しの中の動詞形の特徴を表示するものでもあった。これらの話しは、筋立てがヨーロッパの古典的な魔法昔話に極めて近いものであり、通常1人称単数で行われた。話し中の基本的時間は、完了した行為の時間、すなわち当初はむしろ動作態（Aktionsart）的な文法範疇であった過去時制（§.17

参照）である。こうして、祭司的文体（3人称単数をその基本人称とする魔法昔話の語り部の文体と同じ文体）の枠内に、シグマ付き過去時制が現れる前提環境が整ったのである。このシグマ付き過去形は、後になって、スラヴ祖語を含む個々の印欧語群に時制体系が生成されて行く中で、過去時制全般の範疇（シグマ・アオリスト）に変じたのである。

始原的な中性名詞は、形容詞機能も担うことがあった　－　中性名詞の古い主格及び対格は、かつての絶対格（casus indēfīnītus　不定格）に由来するが、それは純粋語幹に相当するものであり、また形容詞的用法も有していた（§.28 参照）；最初は、性、数、格の一致は存在しなかった[9]。一連の古代インド語の　es　語幹名詞は、アクセント記号を使って、形容詞に転用することができた　－　次例参照、táras-「力」に対して、tarás-「力のある、強い」；máhas-「偉大さ、雄大さ」に対して、mahás-「偉大な、大きな」；dū́vas-「礼拝、崇拝」に対して、duvás-「崇めるところの」。しかし、もう少し古い時代には、形容詞形におけるこのようなアクセント移動は不必要であった。このことは、いくつかの古代インド語の例から明かであり、ここでは、接尾辞　-es-（ゼロ階梯では、-s-）が、古い　u　語幹の後ろに付加されている　－　例、vápuṣ-「奇跡」と「奇跡的」；tápuṣ-「熱気、暑熱」と「熱気を発散するところの、燃えているところの」；cákṣus-「目、眼」と「見えるところの」。接尾辞　-u-　（ゼロ階梯）と　-es-（正常階梯）の結合によって複合接尾辞　-u̯es-　が得られ、これによって、古代インド語では、完了分詞として使われる動詞派生形容詞が作られたのである　－　例、　babhūvas-「あったところの、以前の」＜　*bhe-bhu-H_2-u̯-es-　。同様の分詞は、スラヴ祖語にも立証されるが、ここでは、　u̯es　指標の二要素ともゼロ階梯（ u ＋ s ）である　－　cf.　БꙋВѢШ-（添加音　В　を伴う）＜　*bhu-H_2-us-i̯-　。

形容詞比較級も、同様にして作られている。古代インド語では、接尾辞　-es-(対応階梯では　-os-）は、 i　指標（§.27 参照）に付加された。この指標の助けをかりて、形容詞の　i　語幹は、集約的な意義（§.5　参照）

を獲得したのであり、それが比較級（ēlātīvus 揚意級[23] ＜ ラ ēlātiō「高めること、上昇」）の形成に適していたのである。次例参照、古イ návaḥ「新しい」＜ *neu̯-o-s に対して、 návyas-＝ ラ novius「より新しい（中性形）」＜ *neu̯-i-os-（この -os- は、接尾辞 -es- の対応階梯）。同じ複合接尾辞 -i̯-es-（ -i̯-os-）は、スラヴ祖語の形容詞比較級中性単数主格形にも立証される － 次例参照、 **ЛЮТЪ** に対して、**ЛЮШТЕ** ＜ *lēu̯t-i̯-es ； **ЛИХЪ** に対して、**ЛИШЕ** ＜ *leik̯ʷs-i̯-es 。二要素 ei̯ と es のゼロ階梯から、形容詞斜格の指標 is ＞ **ьш** が発生した；形容詞の比較級において － cf. **ЛЮШТьШ-** ＜ *lēu̯t-i̯is-i̯-o- 。能動過去分詞指標 us 及び形容詞比較級指標 is の後ろに付加する接尾辞 -i- の起源については、§.27 参照。なお、以下を参照、ラ 副詞 magis「更に、より以上、より多く」＜ イタリア祖語 中・単・主 *mag-i-s（接尾辞 -es- のゼロ階梯）に対して、中・単・主 māi-us「より大きい」＜ イタリア祖 *mag-i-os（接尾辞 -es- の o 階梯）, māiestās「有力、卓出」＜ *mag-i-es-(e 階梯), 男・複・主 māiōrēs「長老達、先祖」＜ *mag-i-ōs-es（接尾辞 -es- の延長対応階梯 ； この延長は、比較級の接尾辞の古い集約的意義に相当する)。 Cf. ゴート語比較級接尾辞 -iz-(＜ -es-）及び -oz- （ ＜ -ōs-） の場合、manags「大きい」(**МЪНОГЪ** と同系）に対して、managiza「より大きい」 ； hardus 「堅い」に対して、hardiza 「より堅い」 ； froths 「賢い」に対して、frodoza 「より賢い」 ； swinths「健康な」(**СВѦТЪ** と同系）に対して、swinthoza 「より健康な、より丈夫な」 ； いくつかのギリシャ語形容詞形における接尾辞 -i̯os-（ i ＋ os ）の場合、男・複・主 ἐλάσσοος「より小さい」＜ *ἐλαχ-ι̯-ος-ες ；最上級形における接尾辞 -is-（ i ＋ s)の場合、καλός「美しい」に対して、 κάλλιστος「最も美しい」 ； ἐχθρός「敵意のある」に対して、 ἔχθιστος「最も敵意のある」 ； ταχύς「速い」に対して、 τάχιστος「最も速い」。

接尾辞 -es- による形容詞比較級の形成は、かなり新しい方法だと思われる。もっと古い時期には、性質の比較級の形成は補充法語幹を通して生成されたのであり、その痕跡が、ラテン語 bonus「良い」に対する melior「より良い」, optimus「最も良い」; malus「悪い」に対する peior「より悪い」; parvus「小さい」に対する minor「より小さい」; multus「大きい」に対する plūs「より大きい」; ギリシャ語 ἀγαθός「良い」に対する ἀμείνων「よい良い」, ἄριστος「最も良い」; μικρός「小さい」に対する ἐλάττων「より小さい」である。古い補充法的比較級形成の名残は、古代ブルガリア語にも存在している — 例、**ВЕЛЬИ, ВЕЛИКЪ**（比較級 **ВЕЛИЧАИ**）に対する 男・単・主 **БОЛЬИ**, 生 **БОЛЬША**; **МЪНОГЪ**（比較級 **МЪНОЖАИ**）に対する **ВѦШТЬИ, ВѦШТЬША**; **МАЛЪ** に対する **МЬНЬИ, МЬНЬША**; **БЛАГЪ, ДОБРЪ** に対する **ЛОУЧЬИ, ЛОУЧЬША, ОУНЬИ, ОУНЬША, СОУЛЬИ, СОУЛЬША**; **ЗЪЛЪ** に対する **ГОРЬИ, ГОРЬША**。接尾辞 -es- は、比較級用の補充法語幹ないしは非補充法語幹に、後に付け加えられたものであることは確実である。次例参照、ギ καλός「美しい」に対する καλλίων「より美しい」; ἡδύς「楽しい、美味しい」に対する ἡδίων「より楽しい」; ἀγαθός「良い」に対する βελτίων「より良い」、これらの比較級では、接尾辞 -es- は欠けている。形容詞の比較級（起源的には、揚意的 elative, 集約的 intensive）語幹の第一次的な指標は、多数性指標 i であった。

§. 21　青年文法学派の形態モデル

古代ブルガリア語の形態前史の基本問題は、スラヴ祖語の名詞、代名詞及び動詞語尾の起源と意義についての問題である。名詞語幹と動詞語幹の始原的な共通性（§.9 参照）ということから、古い両子音語根を含む二大主要品詞である名詞と動詞は、名詞語尾、動詞語尾という二つのタイプの語尾の発生によって、次第に相互分裂した、という結論を下すことができる。動詞語尾は、誰が当該行為を行い、誰が当該の性質を持つのか、話し手か、その聞き手か、それとも当該時点における対話の直接的参加者ではないある第三者なのか、を表示した。また一方、名詞語尾は、一定の性質の担い手との関係を表示した － 生物や物が、行為に直接参加しているのか（働きかけを行う者としてなのか直接的働きかけを受ける者としてなのか）、それとも、行為には直接的参加を行うのではなくて、ただ行為がどのように推移して行くのか、例えば、行為の起点はどこか、それの終着点はどこか、どのようにしてそれが行われたかを、説明したのである。

概して動詞・名詞語幹の第一次的な接尾辞を以て形成された、始原的な代名詞語幹もまた、名詞語尾を得たのである。代名詞が名詞と異なるのは、1）単子音語根であること（このことから、代名詞語根においては、語根母音交替はあり得ないはずである）、2）補充法、つまり相互補完的な語幹構成を行うこと、である － 次例参照、単・主 **АЗЪ** に対して、生 **МЕНЕ**；複・主 **МЫ** に対して、複・生 **НАСЪ**；男・単・主 **ОНЪ** に対して、生 **ЕГО**（**ІЕГО**）＜ *i̯-o-go ；ギ 男・単・主 *ὁ* ＜ *so に対して、対 *τόν* 。この現象の理由は、§. 33, 35 に示されている。いくつかの古代ブルガリア語の代名詞曲用においては、語根は同一であっても、第一次的接尾辞あるいは第二次的接尾辞が交替する － 例、男・単・主 **КЪ-ТО** ＜ *k^w-o-s に対して、中 **ЧЬ-ТО** ＜ *k^w-i- ；女・単・主 **ТА** ＜ *t-e-H_2（§.10, 24 参照） に対して、生 **ТОѦ**, **ТОА**,

グ ѿѧѧѥ < *t-o-i̯-ā-ns < *t-o-i̯-e-H_2-ns ；生 мене < *m-e-n-es に対して、与 ми < *m-o-i̯ ；男・単・主 сь < *k'-i-s , cf. 女・単・主 си < *k'-i-H_2 に対して、男・中・生 сего < *k'-e-go 。

代名詞曲用のもう一つの特徴は、当該代名詞語幹に対して別の代名詞語幹、あるいはまたある種の指示小詞（deictic particles）を結合し得ること、その結果、格語尾が単純語幹ではなく、拡張代名詞語幹に付加され始めることである。次例参照、 *k^w-o-s 及び *k^w-i- に、指示代名詞語幹 *t-o- を付加して得られた、男・単・主 кѣто, 中 чѣто ；古い生格形 чесо に、語尾 -го 及び -моу を付加して得られた、中・生 чесо го чесомоу（чесо の方は、代名詞語幹 *k^w-e- と 代名詞語幹 *s-o- の結合である、§.33 参照）；主格形 чѣто > что > што と単数造格語尾 -м から得られた、中世ブ 中・単・造 штомь（現代方言 шом）。歴史的にみれば、代名詞 онъ も овъ も複合語幹を含んでおり、それは指示的語幹 *n-o- と *u̯-o- 及び前置的な指示的要素 e（対応階梯で o ）によって得られたものである。この要素は、例えば、е-се （スプラシル写本）（はるかに頻繁に用いられる се と併用される）、現代ブルガリア語の e-то、ロシア語の (в)-о-т(= e-то、ただし、 e の対応階梯と添加音 в を伴う）及び э-тот に立証される。

スラヴ祖語（古代ブルガリア語）も含む印欧諸語の名詞、代名詞、動詞の語尾の起源については、二つのモデル、ないしは二つの理論が存在している。一つは、青年文法学派モデルであり、もう一つは、活格モデルである。これは、印欧語及びスラヴ祖語の形態の説明にとって、類型論的に極めて重要な前提条件となる諸特徴を持っている活格文法構造という名称によって、このように呼ばれている。活格モデルについては、§.28 参照。

青年文法学派モデルによれば、文献以前の非常に古い印欧諸語の全てに、古代インド語及びギリシャ語の基本的な文法範疇とその形態指標が生きていたということであるから、青年文法学派モデルは、古代インド語・古代ギリ

シャ語モデルと言っても良い。このモデルは、文証される古代ブルガリア語の語形をそれに対応する古代インド、ギリシャ、リトアニア、ラテン、古代ゲルマン等の語形と比較しながら、スラヴ祖語の曲用と活用及びその語尾を再構する（文字の形にして提示する）のである。再構の目標は、一連の同系関係にある形（動詞の場合には、当該の人称、数、時制、相［voice］、法及び活用形、名詞、代名詞にあっては、当該の性、数、格及び曲用形）と比較・歴史言語学の設定する転写法によって記述した単一の形の相互置換である。再構形は、そこから、青年文法学派が発見した規則の助けを借りて、それぞれの文法範疇の文証形のほとんど全てないしは全ての形を引き出すことができるため、原形と見なされている。例えば、青年文法学派モデルによれば、 *u̯l̥kʷ-o- 「狼」 の男性複数対格の原形は、 *u̯l̥kʷ-o-ns ＝ 古イ複・対 vṛ̥kān ， ギ λύκους ， ラ lupōs, ゴ wulfans, ВЛЬКѢ リ vilkùs である。複数対格語尾 -o-ns は、ゴート語、古代ギリシャ・クレタ方言、例えば、ἐ-λε ύθ-ερ-ο-νς「自由人出身の人々、両親が奴隷でない人々」、古プロシャ語、例えば、deiw-a-ns「神々」に立証されるが、これは明らかに本源的な形である。複数対格 *u̯l̥kʷ-o-ns の、子音の n ないしは s が脱落して、先行母音 o がその後続子音の脱落が原因で延長したとするならば、そこから ラ 複・対 lupōs も 古イ vṛ̥kān も引き出すことができるのである（複数対格 ВЛЬКѢ の語尾 Ѣ の起源については、§．2 参照)。古代ブルガリア語には、始原的な複数対格語尾が鼻子音を含んでいたという間接証明がある － 複数対格 ѣзрѧзє（キリール КОНѦ ） では、鼻音要素 є はかつての語尾 -ns の n の継承である。男性複数対格の原形 *u̯l̥kʷ-o-ns の再構、したがってその語尾 -ns の再構によって、男性複数対格語尾の起源の問題は、青年文法学派のモデルにおいては、解決されたものと見なされるのである。青年文法学派は、同様の手法で、ほとんど全ての名詞、代名詞、動詞の語尾の原形を設定したのである。

青年文法学派は、同一形に対して二つの異なる指標が存在する場合には、

古代インド語及びギリシャ語に一致するものを原形と見なし、また、古代インド語とギリシャ語の間に差異が現れる場合には、古代インド語に見られる方を原形と見なすのである。例えば、複数生格に対しては、二つの語尾が存在する：古イ　複・属　vṛ̥kān-ām　，リ　vilkų̃　，ギ　λύκων ＜ *u̯l̥kʷ-ō-m　に立証される　-ōm　と　複・生　**ВЛЬКЪ**　＜ *u̯l̥kʷ-o-m、また同じく、ウムブリア方言　複・生　frātrom ＜ *bhrātr-o-m[10] に立証される　-om　である（スラヴ祖語の　-on, -om ＞　-ъ　については、§.2 参照；始原的な複数生格語尾は、本来　-on　である、§.36 参照）。青年文法学派モデルによれば、古代インド語もギリシャ語も長母音であり（リトアニア語も長母音を証明している）、一方、スラヴ祖語の語尾　-om　＞　-ъ　は、後に、-ōm　中の母音　o　の短縮を経て得られたものであるから、複数生格の原語尾は　-ōm　であった。ドイツ人学者シュトライトベルク（W.Streitberg, 1892）は、この短縮を説明するために、曲音調（circum flex）の時スラヴ祖語の　-ōm　は　-om　に移行した、とする特別な法則を設定したのである。

o　語幹名詞曲用の男性複数主格の場合も、二つの語尾が存在する　－　一つは、幹母音　o　と語尾　-es　から得られる語尾　-ōs　であり（古イ　複・主　vṛ̥kāḥ　，ゴ　wulfos ＜ *u̯l̥kʷ-o-es　を参照）、もう一つの語尾は、-oi̯　である（複・主　**ВЛЬЦИ**, ギ　λύκοι, ラ　lupī　，リ　vilkaĩ ＜ *u̯l̥kʷ-o-i̯ ）。青年文法学派モデルによれば、この原語尾は　-ōs ＜ -o-es　である。古代インド語に見られるのはまさにこの語尾であり、語尾　-oi̯　は、代名詞曲用から名詞曲用へ転用されたものだからである　－　次例参照、複・主　**ТИ**, 古イ　te, ゴ　thai ＜ *t-o-i̯ ，ギ　οἱ ＜ *s-o-i̯「これらの」。青年文法学派によれば、語尾　-es　が、子音幹曲用の全てに、また古い接尾辞　-i-　及び　-u-　を持つ名詞男性に特徴的であるという状況も、名詞男性複数主格形語尾　-ōs　の始源性を証するのである　－　次例参照、古イ　複・主　mātáraḥ　，ギ　μητέρες「母達」＜ *māt-er-es；古イ　ávayaḥ　，ギ　οἶες「羊」

＜ *ou̯-ei̯-es ; **КАМЕНЕ** ＜ *kā-men-es ＜ *H_2k'-eH_2-men-es ; **С ЫНОВЕ**, 古イ sūnávaḥ ＜ *sūn-eu̯-es ; **ГОСТЬЕ** ＜ *ghost-ei̯-es 。

青年文法学派モデルにおいては、名詞の文法範疇も同じ様にして再構される － 名詞の始原的な基本的形態指標は、三つの性（男性、女性、中性）、三つの数（単数、複数、双数）、及び、 o 語幹男性単数名詞曲用の古代インド語における様々な格形の数によって、八つの格（主格、属格、与格、対格、具格、処格、奪格、呼格）（古代インド語のその他の曲用では、格形の数はもっと少ない）である。青年文法学派モデルにおいては、古代インド・ギリシャ語的同系関係に基づいた主要な語形変化諸範疇は、もともと独立したものであり、形態的に不浸透性のものである － 数の形は、格の形と同一 起源を持ち得ないし、性の形は、数の形と同一起源を持ち得ない、等。

§．22　古代ブルガリア語の女性の起源

すでに19世紀最終四半世紀と20世紀初頭には、古代インド・ギリシャ語的照合から出てくる再構全部を、一般的な印欧語前史に当てはめることができる訳でないこと、またその全てがスラヴ祖語や古代ブルガリア語の形を引き出す基礎となり得る訳ではないことが、明らかになり始めた。中性複数の主語に対して、述語（名詞述語以外の）が単数におかれる（ 例、π ο λ λ ὰ　τ ῶ ν　ὑ π ο ζ υ γ ί ω ν　ἀ π ώ λ ε τ ο　ὑ π ὸ　λ ι μ ο ῦ「多数の労役用家畜が飢えのために死んだ」[24]）アッティカ方言の特殊な一致の仕方から出発して、ドイツの学者シュミット（J.Schmidt, 1889）は、中性複数の原形は本来単数の集合名詞であること、すなわちギリシャ語　τ ὸ　δ έ ν δ ρ ο ν「樹（中・単・主）」　と　τ ὰ　δ έ ν δ ρ α「樹（中・複・主）」の関係は、ブルガリア語の　т р ъ н　（リンボク、男・単）と　т р ъ н и（複）との関係ではなくて、т р ъ н　と　т р ъ н а к（リンボクの茂み、男性集合名詞）の関係に近いものであることを示した。

シュミットの発見から、二つのことが引き出される：1）スラヴ祖語の女性名詞の一部は、次のような集合的な意味を持つ抽象（派生）名詞であること　－　例、**ГОСПОДА**「男性仲間、集合」（サヴァの本では、**ГОСПОДА**　は、「食堂、旅篭屋、居酒屋」、すなわち男性の集まるところ、といった意味である。意味については、チェコ語　hospoda「旅篭屋、居酒屋」　を参照），**ЮНОТА**「青春（時代）」（シナイ祈祷書　Euchologium Sinaiticum　では、**ЮНОТА**　は、「若者、青年」の意），**СЛОУГА**「使用人、下僕」、もっと前は、「奉仕、奉公」の意も）」（cf. リ　slaugà「世話、看護」）、2）女性範疇と集合多数性の間には、解明すべき何らかの始源的な関連性が存在すること。恐らくは、**СВИНЬЯ**　のような語（古文献には、例えば、複・造　**СВИНЬЯМИ**　のような斜格形だけが文証されるが、これは　女・単・主　**СВИНЬИ**　の形でもあり得る）は、　**ЖЕНА**　＜　*gen-,　*g^{w}en-「産

む」（§.1 参照）が、もっと古い時期には、「家族、子供達を連れた母」（cf. ギ γενεά「氏族、種族、一族」）の意であった可能性があるのと同じように、豚の完全無事な（母子とも）出産を意味した可能性がある。

-ā 語尾の、ある種の中性集合名詞が単数女性名詞へ移行して行った過程は、ブルガリア語の歴史的諸文献中に追跡できる、長期にわたる過程である。今日の女性名詞単数形である уста（口），врата（戸、扉、門），кола（荷馬車）は、古い中性複数形であり、古代ブルガリア語テクストには、これを確証する資料がある — 例、複・与 **врат-о-мъ**, **уст-о-мъ**, 複・所 **кол-ѣ-хъ**（**село** の与、所格複数形 **сел-о-мъ**, **сел-ѣ-хъ** と同じ変化であって、**жена** の与、所格複数形 **жен-а-мъ**, **жен-а-хъ** の変化ではない）。次のような一致も参照、Железни врата, големи уста, Сърдит Петко — п разни му колата（鉄の扉に、大きな口、暴れ馬には、空荷の荷馬車）これは、врата, уста, кола が、古い複数形であることを示唆するものである。

シュミットの推論からして、本来、単数主格に -ā 語尾を持つ独立した女性範疇は存在しなかった、という結論を下すべきである。スラヴ祖語の ā 曲用の原形は、単数名詞として使われる、同語尾の集合名詞形を包摂するものであった（アッティカ方言の一致を参照）。後に、この ā 形の中から、一つは、女性名詞が発生し（**жена** ギ χώρᾱ「国、地方」，ラ terra「土地、国、地方」）、もう一つは、中性複数主・対格形が分離したのである（**села** ギ δένδρα「木々」，ラ loca「場所、地方」）。

印欧語の歴史における女性範疇の後進性については、次のような事実が証明している：

1. 単数主格に男性、女性、中性の三語尾を持つ、一般に見られる形容詞タイプ（例、**добръ**, **добра**, **добро**；ギ καλός, καλή, καλόν；ラ bonus, bona, bonum）と並んで、ギリシャ語、ラテン語には、単数および複数の、主格および対格に二語尾のものがある —

例、単・主 ギ σώφρων（男・女）と σῶφρον（中）「賢い」，εὔελπις（男・女） と εὔελπι（中）「有望な、希望に燃える」，ラ brevis（男・女） と breve（中）「短い」；単・対 σώφρονα（男・女）と σῶφρον（中），εὔελπιν（男・女） と εὔελπι（中），brevem（男・女） と breve（中）；複・主 σώφρονες（男・女） と σώφρονα（中），εὐέλπιδες（男・女） と εὐέλπιδα（中），brevēs（男・女）と brevia（中）；複・対 σώφρονας（男・女） と σώφρονα（中），εὐέλπιδας（男・女）と εὐέλπιδα（中），brevēs と brevia（中）。単数主格の -s 語尾には存否があるが、複数主格に、語根母音延長と語尾 -es を持つような形容詞形は、男性、女性名詞の両形に一致するのに対して、主格でそのような語尾を持たない形は、中性名詞の形に一致する。換言すれば、このようなタイプの形容詞にあっては、中性は、男性、女性に対して、個別に対立しているのではなく、男性、女性の共通特徴を含んでいるため、有生（одушевен，animate）と呼び得るような、同一共通性に対して対立しているのである。このような場合には、中性は、無生（неодушевен，inanimate）と呼び得るのである[11]。

2. 単数主格において、三語尾、すなわち -ος（男性），-α（η）（女性），-ον（中性）を持つ、いくつかのギリシャ語形容詞にあって、男性形が女性形に代替する場合がある。例えば、ἡ ἐρήμη ὁδός「人気のない、寂しい道」 に代えて，ἡ ἔρημος ὁδός を使うことができる。このことは、単数主格に二語尾、すなわち -ος と -ον を持つ形容詞体系は、三語尾形容詞体系よりも古いこと、また、形容詞曲用には、女性範疇は比較的遅く現れたものであることを示唆している。接尾辞（幹母音） -o- 及び -ā- を持つ形容詞についてのこの結論は、単数主格に -os 語尾を持つギリシャ語、ラテン語 o 語幹名詞が、男性名詞（例、ギ ὁ λύκος ＝ ラ lupus「狼」）だけではなく、女性名詞

（ἡ　παρθένος「年頃の娘」, ἡ　ὁδός「道」, ἡ　νῆσος「島」, ἡ　ἄμπελος「葡萄の樹」, populus「ポプラ」, quercus「かし、オーク」, laurus「月桂樹」）も含むものであることに着目するならば、名詞に対しても一般化することができるのである。単数に　-s　語尾を持つ　o　語幹名詞は、始原的な男性ではなく、もっと一般的な有生類に由来するものであり、それが後に男性と女性に分化したのである。さらに、始原的な有生類の範囲内に性の区別が欠けていることについては、ソナント接尾辞（-i-, -u-, -r-, -n-）を持つギリシャ語、ラテン語の男性、女性名詞曲用が証明している　－　ὁ　στάχυς「穂」と　ἡ　πίτυς「松」、ὁ　ὄφις「蛇」と　ἡ　πόλις「都市、国家」、ὁ　πατήρ「父」と　ἡ　μήτηρ「母」、ὁ　ἡγεμών「案内人、指導者」と　ἡ　ἀηδών「鶯」、frūctus「果実」（男性　u　語幹）　と　quercus「オークの木」（女性　u　語幹）　のそれぞれのパラダイム間には、いかなる差異も存在しない。男・複・主　**КАМЕН-Е**　と　女・複・主　**МАТЕРИ**；男・複・主　**ЛЮДЬЕ**　と　女・複・主　**КОСТИ**　の語尾の差異は、もっと後の推移の結果である。ὁ　λύκος「狼」　と　ἡ　παρθένος「若い娘」、ὁ　στάχυς「穂」　と　ἡ　πίτυς「松」、ὁ　πατήρ「父」と　ἡ　μήτηρ「母」　の原形間の真の性の区別が始まったのは、ようやく、これらの名詞の一部が　o　語幹形容詞と一致し、また別の一部が　ā　語幹形容詞と一致し始めた時になってである（§．20, 注9参照）。

3．ヒッタイト語に、またルウィ語[25]にも同じく、名詞の二分法（有生類ないしは活性類と無生類ないしは不活性類）が存在しているが、これは、明らかにその他の印欧諸語にみられる名詞の三分法（男性、女性、中性）よりは古いのである。

有生（活性）類が始原的に統一性を持っていることは、古代ブルガリア語の次のような形態特徴がこれを示している：

1. 疑問代名詞の曲用における、中性（すなわち無生）形（主・対　**Ч-Ь-Т**

о, 生 ч-е-со, 与 ч-е-со-моу, 造 ч-и-мь, 所 ч-е-со-мь）に対立する男性、女性（すなわち、有生）共通形（主 къто, 生 к-о-го, 与 к-о-моу, 造 цѣмь < *kʷo-i̯-mi, 所 к-о-мь）。疑問代名詞 къто は、男性、女性、単数、複数の人の名前の代わりに使用される — 例、ルカ VII-39 マリア写本 вѣдѣлъ би оубо кто и как ова жена прикасаатъ са емь（（その人は）自分にさわっている女が誰だか、どんな女か判るはずだ）；ヨハネ VI-64 マリア写本 кто сѫтъ невѣроующии（誰が信じないものであるか）；マタイ XII-48 къто естъ мати моѣ и кто сѫтъ братриѣ моѣ（私の母とは誰のことか、私の兄弟とは誰のことか）。事物や抽象的な名称の代わりには、чьто が使われる — 例、ルカ XXIV-17 マリア写本 что сѫтъ словеса си（この話しは何のことか）；マルコ VI-2 マリア写本 отъ кѫдоу се естъ семоу. і что прѣмѫдрость даната емоу（この人は、このことをどこから（得たの）か、この人の授かった知恵はどうだろう）

2．古い o 語幹は、指示、承前、複合疑問代名詞の女性単数において、主格、対格以外の曲用では、男性形が作られている語幹に一致している。次例参照、男・単・主 тъ < *t-o-s, 生 т-о-го, 与 т-о-моу, 女・単・主 та < *t-eH₂, 生 т-о-ѭ, 与 т-о-и；男・単・主 онъ, 生 е-го, (ѥго) < *i̯-o-go, 与 е-моу, 女・単・主 она, 生 е-ѭ, 与 е-и；男・単・主 кыи, 生 к-о-его, 与 к-о-емоу, 女・単・主 каꙗ, 生 к-о-еѭ, 与 к-о-еи 。対応階梯、すなわち o 階梯に代わって、正常階梯、すなわち e 階梯が現れる場合については、指示代名詞 сь を参照：男・単・主 сь < *k'-i-s, 生 с-е-го < *k'-e-go, 与 с-е-моу, 女・単・主 си < *k'-i-H₂, 生 с-е-ѭ, 与 с-е-и 。Cf. 以下の *t-o-（*t-e-）語幹：古イ 男・単・属 t-á-sya「これの」, 与 t-á-smai, 女・単・属 t-á-syāḥ, 与 t-á-syai；ゴ 男・単・属 this < *t-e-so, 与 thamma < *t-o-s-m-,

女・単・属 thizos, 与 thizai ＜ *t-e- 。古代インド語やゴート語の女性単数属格形が、それぞれの男性属格形から得られたものであることは極めて明瞭であり、このことは、かつての無生類中での男性 － 女性の対立は二次的なものであることを間接的に証明するのである。

ā 曲用の基になった -ā 語尾は（単・主 **ЖЕН-А**, 複・与 **ЖЕН-А-МЪ**, 造 **ЖЕН-А-МИ**, 所 **ЖЕН-А-ХЪ**； ギ 単・主 χώρ-ᾱ 「国、地方」, 属 χώρ-ᾱ-ς, 対 χώρ-ᾱ-ν； ラ terra 「土地、国、地方」, 古ラ terr-ā-s, 対 terr-a-m）、当初は女性範疇とは無関係であり、集合多数性というサブ・カテゴリーも含めたもっと一般的なカテゴリーに関連するものであった。双数形（例、主・単 **БРАТРА**）を持つが、本当の複数形を持たない 男・単・主 **БРАТРЪ** を参照。絶対単数（singulāria tantum） である補充法的集合名詞 **БРАТРЬЮ**「兄弟仲間、集団」が、複数の意味で使われる。次例参照、マタイ XII-46 マリア写本 **СЕ МА ТИ И БРАТРЬЪ ЕГО СТОѢХЖ ВЬНѢ**（その母と兄弟達は、外に立っていた）；マタイ XXII-25 マリア写本 **БѢ ЖЕ ВЪ НАСЪ С ЕДМЬ БРАТРИЮ**（さて、私たちのところには七人の兄弟があった）；マタイ XXIII-8 マリア写本 **ВЬСИ ЖЕ ВЪ БРАТРЬѢ ЕСТЕ**（あなた達は皆兄弟である）；マタイ XII-48 マリア写本 **КТО СЖТЪ БРАТРЬѢ МОѢ**（私の兄弟とは誰のことか）。

集合多数性の語尾 -ā は、幹母音正常階梯 e と集合性（一括性）指標 H_2 から、すなわち eH_2 ＞ ā （§．3参照）から発生したものである。 -ā 語尾の集合名詞の一部は、中性の先行形である無生（不活性）類名詞の複数形として使われ始めた。ギ 中・単・主 τὸ δένδρον 「樹木」, 複 τὰ δένδρα ； 中・単・主 **СЕЛО**, 複 **СЕЛА**； ラ 中・単・主 iugum 「(連畜の）くびき」, 複 iuga のようなペアの原形は、初めからパラダイムを構成していたのではなく、ブルガリア語の трън（リンボク）と трънак（リンボクの茂み）のように二つの独立した単語であった。原接尾辞 -e- （及びそれの階梯）を持つ有生（活

性）類の名詞のあるものは、それの複数形（分割多数性の形）と並んで、集合形（非分割多数性の形）も持っていたのである。無生（不活性）類名詞も同じく、それの集合形と並んで、分割多数性の形も持つことができた、すなわち現代語の　трън（単数形），трънак（集合形），трънии（複数形）という三つ組の形が可能であった。трънак　の接尾辞　-k-　が、中性複数語尾　-ā　<　-e-H_2　を作っている H_2 指標と同じものである可能性については、マルティネ（A. Martinet, 1955）　が書いている。彼によれば、H_2　音は、始原的な活性類名詞の表徴である単数主格語尾　-s　の前で、後舌子音　k　に変わったのである。

二種類の異なる複数形は、ギリシャ語及びラテン語に立証される。そこでは、男・単・主　locus「場所、位置」，acinus「果実の実」，κέλευθος「道、細道」，μηρός「股、股肉」に対して分割（可算）多数性の形 － locī, acinī, κέλευθοι, μηροί　と非分割（一括、不可算）多数性の形 － loca, acina「房、葡萄」，κέλευθα, μῆρα　が対応している。古代ブルガリア語の、中・単・主・対　**ИГО**，複　**ИГА**，双　**ИЗЪ**　のタイプの三つ組には、古い集合形　**ИГА**　<　*i̯ug-e-H_2　と双数形として再解釈を受けた、可算多数形　**ИЗЪ**　<　*i̯ug-o-i̯　を判別することができる。

性におけるいくつかの揺れも、一つは可算多数性の、もう一つは不可算多数性の形という二つの形の存在によって、説明すべきである。古代ブルガリア語においては、中・単・主・対　**ЕЗЕРО**　の形と並んで、男・単・主　**ЕЗЕРЪ**（cf. ス　jêzer）の形も存在している。後者の単語は、リ　男・単　ẽžeras, ãžeras「湖」から判るように、古い単語である。しかし、集合形　**ЕЗЕРА**（＝ 中・複・主・対）は、古い語尾　-oi̯　を持つ複数形（＝ 古ブ　-И）を駆逐し、　**ЕЗЕРА**　を基にして、中・単・主・対　**ЕЗЕРО**　の形を作りだしたのである。同様の過程は、中・単・主・対　assaran「湖」の形から判るように、古プロシャ語にもある。いくつかのラテン語の、例えば、　rāster（男）と　rāstrum（中）「鍬、鋤」の性の揺れも、複数形

rāstri と rāstra と併せて、同様の説明を行うべきである[12]。

一連の事物や現象は、古代人の意識の中で、ある時は有生、またある時は無生として存在した。ギリシャ人たちは、現れたり消えたり、また生き物のように夜の天空に自分の運行を続ける個々の天体を ἀστήρ（男）（星）と呼んだ。ἄστρον（中）「星座」という名詞は、その全体が非分割（不可算）多数の星 － ἄστρα － を構成する不動の天体によりふさわしいものであった。ラテン語 pira （女）「梨」は、生き物のように果実を生み出す果樹の名称である ； 一方、 pirum（中）は、個々の果実の名称であって、果実全ての総体が、樹に点々と散りばめられている、非分割多数である pira「梨」を構成しているのである。

§. 23　古代ブルガリア語における男性カテゴリー

後期スラヴ祖語期には、新たに男性名詞（主として　o, io　語幹）の再編が始まった。この曲用の範囲内に、-ā（-ꙗ）語尾を持つ単数生格形を単数対格の意味で使用することを基本特徴とする、いわゆる人間類（л и ч е н　п о д р о д）名詞が発生したのである。人間類名詞（その全てではないが）は、単数与格に常に　-ꙋ（-ю）を持つ非人間類と違って、時として、単数与格に　-ови（-еви）語尾を持つことがある。

男性人間類には、人の名前、とりわけ社会的要職を占める人物の固有名詞が属している。次例参照、マタイ　XIV-10　マリア写本　**і посълавъ оусѣкнѫ иоана въ темьници**（人を遣わして、獄中でヨハネの首を切り落とした）；マタイ　I-2　サヴァの本　**авраамъ роди исака**（アヴラハムはイサクをもうけた）；マタイ　XVII-1　マリア写本　**поѩтъ ис петра и нѣкова и иоана братра его**（イエスは、ペテロ、ヤコヴと彼の兄弟ヨハネを連れていった）；マタイ　IX-8　マリア写本　**видѣвъше же народи чюдиша сѧ и прославиша ба**（群衆は［それを］見て驚き、神を讃えた）；マタイ　IX-9　マリア写本　**видѣ члка на мытьници сѣдѧща імен емь матеа**（マタイという人が収税所に座っているのを見た）；マルコ　V-35　**что движеши оучителѣ**（どうしてあなたは先生を煩わすのですか）；スプラシル写本　23₂₄　**и вьси наслаждаѭштеи са чоудесъ. слава тъ от'ца и сна и стаго аха**（神の御業を味わう人たちは全て、父と子と精霊を讃えよう）。いくつかの例では、男性人間類の特徴としての、対格での単数生格の使用は、擬人法の義務となっている。次例参照、ヨハネ　XVI-8　マリア写本　**обличитъ мира о грѣсѣ**（世［の人々］の罪について、明らかにするであろう）；スプラシル写本　338₄₀　**и ада видиши господьскомь повел**

ѣниимь（汝は、主の命によりて、黄泉の世界を見ることになる）；ヨハネ XII-36 マリア写本 **вѣроуите въ свѣта**（汝ら、光を信じなさい）；スプラシル写本 24₂₅ **и прозабоста плода благовѣрьнааго. и нарекоша има ѥмоу кононъ**（彼ら二人は敬虔なる実を育てたが、彼らはその名をカナンと名付けた）；同写本 396₃ **се го хлѣба мариꙗ роди**（マリアはこのパンを産み出した）；同写本 505₂₄ **ты грѣха въ плѣти от'сѫди**（汝は、肉体に存する罪を断罪した）；同写本 155₇ **рьци оубо намъ кто съ т ако льстиши народа**（それでは、汝は一体誰であり、また民を誘惑するのか、述べてください）。中性名詞の場合も、単数生格が対格として使われる場合がある。次例参照、スプラシル写本 448₂₃ **съвазаша в еликааго саѱона слънъца х҃а**（彼らは偉大なるサプソン、太陽であるキリストを捉え縛った）；シナイ詩編 CIII-2 **пропинаꙗи н еба ꙗко и кожѫ**（天を皮の如く礫にする者は）；スプラシル写本 154₂₃ **обраштете тѣла моего**（汝らは我が肉体を得る）。

対格として使われる、**отьца, господа (господѣ), сына, мѫжа, чка, народа, грѣха** 型の生格形に合わせて、単数女性生格形 **матере, дъштере**（er 語幹）, **црькъве, неплодъве, свекрѣве, любъве**（ū 語幹）も、対格として使われた。次例参照、マタイ X-37 サヴァの本 **любꙗі оца ли мтре**（父または母を愛する者は）；スプラシル写本 35₉ **съ вечера идѫште вь съборънѫѭ ѥ моу црькъве**（[彼らは] 夕方より大聖堂に来ると）；同写本 203₂₃ **разоумѣвъ же блаженъи доуховънѫѭ ѥю любъве**（至福なる者は彼ら二人の心の愛を悟りて）。

古文献には、男性の人の名称において、 -ъ 語尾の単数対格形が残っている場合もある。次例参照、スプラシル写本 292₁₈ **богъ же иже присно свои штада робъ аггеломъ своимъ заповѣда**（さて、自分が使っている者をいつも大切にしている神は、自分の天使

達に命じた）；クローツ文書 660 **РАЗБОІНИКЪ СЪ ХМЬ РАСПІНАЮШТЕ**（彼らはキリストと共に強盗を磔にして）；マタイ XI-10 マリア写本 **СЕ АЗЪ ПОСЪЛАЮ АНѢЛЪ МОИ ПРѢДЪ ЛИЦЕМЬ ТВОИМЬ**（私は、汝の前に我が天使を遣わす）。男性単数の対格形に代えての生格の使用は、いくつかの場合、動物名にも見られる。次例参照、ヨハネ X-12 マリア写本 **ВИДИТЪ ВЛЬКА ГРАДЖЩА**（[その者は] 狼が近づいてくるのを見る）； スプラシル写本 192_{27} **ИМЪ ЗА ОУЗДЖ КОНѢ ЮГО**（[その者は]）彼の馬の頭絡を取ってから）；シナイ詩編 XC-13 **ПОПЕРЕШИ ЛЬВА І ЗМЬѢ**（汝は、ライオンと蛇を踏みつける）。

単数与格語尾 **-ОВИ**（**-ЕВИ**）の使用は、男性有生類名詞にあって、はるかにもっと一貫性に欠けている。次例参照、**БОГОВИ**（マリア写本に 4 回、スプラシル写本では約 25 回）に対して **БОГОУ**（マリア写本に12回、スプラシル写本で約 150 回；詩編では **БОГОУ** だけである），**ГОСПОДЕВИ**（マリア写本に 8 回、スプラシル写本で 1 回）に対して、**ГОСПОДЮ**（マリア写本 4 回、スプラシル写本 36 回；シナイ詩編では **ГОСПОДЮ** だけ），**КЕСАРЕВИ**（マリア写本 8 回、スプラシル写本 1 回）に対して、**КЕСАРЮ**（スプラシル写本 1 回），**ИСОУСОВИ**（マリア写本 33 回）に対して、**ИСОУСОУ**（マリア写本 8 回），**ИОАНОВИ**（マリア写本 6 回）に対して、**ИОАНОУ**（マリア写本 2 回），**ПЕТРОВИ**（マリア写本 13 回、スプラシル写本 2 回）に対して、**ПЕТРОУ**（マリア写本 4 回、スプラシル写本 2 回）。更に以下を参照、**АДАМОВИ**，**БЛАГОДѢТЕЛЕВИ**，**ВРАЧЕВИ**，**ИѡСИФОВИ**（スプラシル写本），**АРХИСУНАГОГОВИ**，**АРХИТРИКЛИНОВИ**，**ВИНАРЕВИ**，**ИЗДРАИЛЕВИ**，**МЖЖЕВИ**，**ЦѢСАРЕВИ**（マリア写本）。人の名前ではない男性名詞でも、中性名詞でも、どちらも擬人化される場合には、単数与格語尾 **-ОВИ**（**-ЕВИ**）が見られる。次例参照、スプラシル写本 476_{18} **ГЛАГОЛАШЕ АДОВИ**（地獄に向かって話した）；同 412_{6} **МОРЕВИ ЗАПРѢШТАЮШТАГО**（禁じている者の海に対して）。

男性有生類名詞のこのような曲用（単数対格語尾 -a と 単数与格語尾 -ovi）は、チェコ語にも立証される。次例参照、単・主 pán「方、紳士」，対 pána, 与 pánovi, pánu に対して、単・主 hrad「城」，対 hrad, 与 hradu 。チェコ語の有生男性類名詞曲用と無生男性類名詞曲用の間には、別の差異も存在している — 次例参照、単・生 pána と hradu（古い u 語幹語尾），前置格（古い所格） pánu, pánovi（ =チ 与格）と hradě（ = 単・所 **ГРАДѢ**）。ウクライナ語には、男性名詞の曲用に三種類のものがある：

1． 理性ある生物（人間） — 例、бог（神），ангел（天使），син（息子），чоловік（人），наймит「作男、使用人」，вітер「風（擬人法）」，учитель（先生），цісарь「皇帝」，швець「仕立て屋、靴屋」，Петро のような固有名詞 — 単数対格（古い生格）語尾 -a と複数対格（古い生格）語尾 -ів（-**ОВЪ** から）。例、単・主 бог，生・対 бога，複・主 боги， 生・対 богів。

2．動物、植物、ゲーム、貨幣 — 例、віл「去勢した雄牛」，голуб（鳩），рак（ザリガニ，エビカニ），червак（虫），осел（ろば），дуб（樫），дурак（トランプ遊びの一種），козак（踊りの種類），рубель（ルーブル［貨幣単位］），франк（フラン（貨幣単位）） — 単数対格語尾 -a と複数主格に等しい複数対格形。例、単・主 голуб， 対 голуба， 複・主・対 голуби。

3．無生類のもの — 例、нарід「国民、民（衆）」，день（日、昼間），стіл（テーブル、机），вугол「角」，гріб「墓」 — 単数、複数ともに、主・対格同形。例、単・主・対 гріб，複・主・対 гроби。

§. 24 始原的名詞接尾辞 -H_2-

語尾 -ā を持つ女性名詞は、始原的には、集合名詞や集合的な意味を持つ抽象名詞と同系関係にあった。概して、女性範疇は、比較的新しいものであり、無生類（後の中性）と対立する始原的に単一の有生類が、男性、女性範疇に相当する二種類に分解した時点で始めて顕現してきたものである。印欧祖語の統語体系の根本的再編こそ、こうした分解の必要条件であったが、この再編については、§.33 及び §.38 において検討することになろう。中性範疇の複数の起源についてのシュミット説の観点（§.22 参照）からすれば、女性指標 ā（単・主 **ЖЕН-А**, 複・与 **ЖЕН-А-МИ**, 所 **ЖЕН-А-ХЪ**）は、複数中性指標 ā と同じものである（複・主・対 **СЕЛА** ＜ **СЕЛО**）。ラリンガル・モデル（§. 3 参照）の観点からすれば、 ā 表徴を持つ女性形と同語尾を持つ中性主・対格複数形の基になった始原的な共通範疇指標は、 H_2 の要素であった。

語尾の -ā は、 eH_2 に由来するもので、 H_2 指標を含む — 単・主・対 **ИГО** ＜ *i̯ug-o と 複・主・対 **ИГА** ＜ *i̯ug-e-H_2 の原形は、同一接尾辞を含んでいるが、ただし２つの異なる階梯である対応階梯と正常階梯としてである。 **ИГА** の原形においては、正常階梯の接尾辞の後ろに、非分割（一括）多数性指標 H_2 があったのである。我々は，同指標を、中性複数主・対格形の指示代名詞 **СИ** ＜ *k'-i-H_2 にも見ておかなくてはならない — cf. 男・単・主 **СЬ**「これ」＜ *k'-i-s ; **СИ** ＜ *k'-i-H_2 は、女性単数主格の形でもある。言い換えれば、女性単数主格と中性複数主・対格 **СИ** ＜ *k'-i-H_2 の、男性単数主格 **СЬ** ＜ *k'-i-s に対する関係は、女性単数主格と中性複数主・対格 **ТА** ＜ *t-e-H_2 の、男性単数主格 **ТЪ** ＜ *t-o-s に対する関係と同じである。この同じ H_2 指標は、古い ū 語幹の原形の特徴も表示している。次例参照、単・主 **ЖРЬНЪ**, 生 **ЖРЬНЪВЕ**「石臼、製粉所、水車」, **ЖЕЛЪ**, **ЖЕЛЪ**

ВЕ「亀」, **КРЪВЬ**（古い対格形 ＜ *krū, cf. ス krî「血」）, 生 **КРЪВЕ**。明らかに、***КРЪ** ＜ *krū ＜ *kru-H_2 は、u 語幹名詞の古い集合形であり、これは、中性複数主・対格形 **ИГА** ＜ *i̯ug-e-H_2 が、e 語幹名詞（対応階梯では o）の古い集合形であるのと同じである。かつて ***КРЪ** ＜ *kru-H_2に、H_2 指標が存在したことを間接的に証明しているのが、H_2e が α に変わる（§. 3参照)、ギリシャ語中性主・対格形 κρέας ＜ *kr-eu̯-H_2-es である。

印欧祖語期には、二つの主要な名詞類が存在したが、一つは有生類ないしは活性類で、後にそこから男性範疇及び女性範疇が発生してくるのであり、もう一つは、無生類すなわち不活性類であり、そこから後の中性範疇が発生して来たのである。それ以外に、H_2 指標による特徴表示を受けた派生名詞類である、第三グループの名詞も存在した。このグループの中から、ā 語幹名詞と中性名詞複数形が発生したのである。いくつかの印欧語（例えば、古代ブルガリア語、ラテン語、ギリシャ語）には、ā 語幹男性名詞も存在している － 例、単・主 **СЛОУГА**, **ВОЕВОДА**, **СТАРѢИШИНА**, ラ scrība「書記、書く人」, homicīda「殺害者」, agricola「農夫」, νεᾱνίᾱς「若者」, στρατιώτης「兵士」, γεωμέτρης「測量士、幾何学者」。

主格単数形が純粋語幹の形を成している、古代ブルガリア語やラテン語の形は、明らかにギリシャ語の形よりも古いものであって、ギリシャ語の語尾 s は、男性名詞の別の曲用からもらい受けたものである。極めて興味深い古代ブルガリア語の特徴として、**СТАРѢИШИНА** や **СЛОУГА** のような名詞が、単数では、形容詞や分詞の男性形に一致するのに対して、複数では、原則として、形容詞女性形、また稀には同格的用法の分詞の女性形と一致するのである。次例参照、スプラシル写本 58_{25} **ШЕДЪ ЖЕ ЛЮТЪ СЛОУГА ТЪ**（その悪しき僕がやってきて）；同写本 240_{14} **ВИДѢВЪ ЖЕ СТАРѢИШИНА ЖЬРЬЧЬСКЪ**（祭司長が見て）に対して、同写本 260_{6} **ТО СЛЪШАВЪША ОТЪ НЕЮ СТАРѢИШИНЪ ВЛЪШЬС**

КЪЛ. РАЗГНѢВАВЪША СА ЗѢЛО. ПОВЕЛѢША СЪВАЗАТИ И (祭司長たちは、彼ら二人からそのことを聞いて、激怒し、その者を縛るよう命じた）；同写本 201_{8} **ПОВЕЛѢ ЖЕ ЦѢСАРЬ ѲЕѠДОСИИ. ПРИТИ НА СЪБОРЪ И СТАРѢИШИНАМЪ ЕРЕТИЧЬСКАМЪ** （テオドシウス帝は、異教の族長達にも会議に来るよう命じた）；同写本 12_{30} **И ПРИСТЖПЬША СЛОУГЪ СЪВАЗАША ЮМОУ РЖЦѢ**（使用人達は、近づいてくると、彼の両手を縛った）；同写本 118_{2} **СЛОУГАМЪ ЖЕ ВЪЗГНЕТИВЪШАМЪ ОГНЬ**（使用人達が火を焚くと)。ただし、次例も参照、ヨハネ II-9 マリア写本 **СЛОУГЪ ВѢДѢХЖ ПОЧРЬПЪШЕИ ВОДЖ**（水を汲んだ僕達は知っていた）；スプラシル写本 116_{27} **ОТЪНЕМОГЪШЕМЪ ЖЕ СЛОУГАМЪ**（絶対与格構文）（使用人達は疲れ果てて)。恐らくは、**СТАРѢИШИНА, ВЛАДЪКА, СЛОУГА** のような語は、始原的な集合名詞、抽象名詞の意味あいの何がしかを残したのである － **СЛОУГА** は、むしろ、召使い（集合)、奉仕、奉公の意、 **СТАРѢИШИНА** は、族長職、長老職の意、また、**ВЛАДЪКА** は、支配（権)、覇権の意で用いられたのである。このことは、次のような例に良く現れている － マタイ VIII-9 マリア写本 **АЗЪ ЧЛ҃ВКЪ ЕСМЬ ПОДЪ В ЛК҃ОЖ** = *ἐγὼ ἀνθρωπός εἰμι ὑπο ἐξουσίαν (τασσόμενος)*「私は権威の下にある者です（逐語的には、権力の下にある、権威の下にある)」； cf. ギリシャ語の同じテクストが、次のように翻訳されている、ルカ VII-8 マリア写本を参照、**АЗЪ ЧЛ҃ВКЪ ЕСМЬ ПОДЪ ВЛАСТЕЛЪ ОУЧИНЕНЪ**（私は支配者の下に服している者です）（アッセマーニ写本 Codex Assemanianus では **ПОДЪ ВЛАСТЕЛИ**、サヴァの本では **ПОДЪ ВЛАДЪКАМИ**)。語尾 -ā ＜ eH_2 を持つ集合名詞の原義は、語尾 -ā ＜ eH_2 の女性名詞の原義と同じだったのである － 次例参照、ラ pira（女)「梨を産出する木」, pira（中・複)「梨の木の果実」。すなわち、印欧祖語においては、女性と集合多数性とは、同一のものであった。それ故に、**СЛОУГА** や **СТАРѢИШИ**

HA のような名詞の複数形が、形容詞やまた稀に同格的用法の分詞（participia conjuncta）の女性形に一致するのである。

§. 25　古代ブリガリア語の　u　語幹の起源

名詞範疇内に見られる始原的末尾　H_2　は、増大、増殖、増加の観念（すなわち、生命の女性起源）、多数の肉体を孕むないしは含み込む一つの肉体の観念（すなわち、増大多数性）、生きとし生ける物すべての共通の始祖たる母なる大地の観念、そして滅びの観念、すなわち、産出をもたらす死（新しきものが来るべく、滅び行く古きもの）の観念に関連している。大地　－

これは、陸地であり、島であり、国であり、都市であり、大陸であるが、これらは、ギリシア語やラテン語では、女性起源の生物と全く同じように、常に女性起源である　－　例、ἡ　Λέσβος（島名），　ἡ　Κολοφών（都市名），ἡ　Θρᾴκη（国名、地名），ἡ　Εὐρώπη，ἡ　νῆσος「島」，ἡ　ἤπειρος「陸地」，ἡ　πόλις「都市」，Aegyptus，Rhodus（島名），Rōma, insula「島」，urbs「都市」。母が自分の子を産み出すと同じように、自分の果実を産み出す樹木の名称も女性起源である　－　例、　ἡ　δρῦς「オークの木」，　ἡ　ἄμπελος「葡萄の木」，　ἡ　μηλέα「林檎の木」，　pira　「梨の木」，quercus「オークの木」，pōmus「林檎の木」，**сливa**（プラムの木），　**крушa**（梨の木）。産み出された生物の名称は、通常、中性起源である　－　**козля**（小山羊），**жрѣбя**（小馬），**чядо**（子供），　τὸ　τέκνον「子供」，τὸ　παιδάριον「小さな子供」，τὸ　μῆλον「林檎の実」，pirum　「梨の実」，pōmum　「林檎の実」。

女性起源であるべき樹木の名称の、例えば、**дѫбъ**［オークの木］（男）のような、いくつかの、古代ブルガリア語の、原則からの逸脱については、神話的な解釈がなされるべきである　－　オークの木は、原始スラヴの雷神ペルーヌ（ン）　**перунъ**（バルト　Perkūnas）　に献上されたのであり、したがって、原始スラヴの、母なる大地の観念ではなく、天界の天地創造の、祭祀的なものについての観念に関係があり、それの言語的表現がスラ

ヴ祖語の u 語幹名詞なのである。このことは、この単語の性にも曲用にも反映している — cf. **АЖБЪ** の曲用における、スラヴ祖語 u 語幹の痕跡。宇宙論の次元では、天空は大地（女性的起源）に対置されるものである故、ここでは、予めスラヴ祖語の u 語幹の意味について幾分解説が必要であろう。

天と地は、宇宙の二つの半分である — cf. **ПОЛЪ** の曲用におけるスラヴ祖語の u 語幹。天なる父（cf. ロ небо-батюшка, небо-отец, ラト Debess tęvs「(逐語的には）天の父」, ギ呼 Ζεῦ πάτερ, ラ Iū piter, ルウィ語 tiuaz tatiš「(逐語的には）天－父」；最後の三つの形は、始源的な u 語幹 *di-u- : *di-eu-「天」を含んでいる）は、母なる大地（cf. ロ мать-сыра земля, アッティカ Δημήτηρ, ドーリス Δᾱμάτηρ < *g'hđьm-māter-「母なる大地、(後に）農耕と大地豊饒の女神」；語根 *g'hđem- とその階梯からは **ЗЕМЛЯ**, ギ χθών「大地、土（壌)」, ラ humus「大地、土（壌)」, ギ χαμηλός「低い、小さい、取るに足らない」, ラ humilis「低い、卑しい」が派生している）に対立している。天の雨は、母なる大地を肥沃にし、それに生命を与える（**АЪЖДЪ** は、語根重複 *du-diu- < *di-u-「天」を含んでいる ; 古い u 語幹については、形容詞 **ДОУЖД-ЕВ-ЬНЪ** < *dou-di-ou- が証明している ; cf. リ lietùs「雨」の u 語幹)。天の水（分）の象徴が川であり、これは、ギリシア語、ラテン語では、常に男性である — 例、ὁ Ἕβρος「マリーツァ川」, Sēquana「セーヌ川」, Tiberis「テベレ川」。古代インドの神話では、天の水（分）は dā́n-u-（u 語幹）と呼ばれ、天界の植物ソーマから滴り落ちる樹液である ; 天の水（分）からは、あらゆる川ができている — cf. 印欧の大河ドン川（Дон < *dān-u-)、ドネプル川（Днепър < *dānu-apara「後方の川」)、ドナウ川 **ДОУНАВЪ**（ケルト・ラテン Dānuvius, ゴ *Donawi, ヴィザンツ Δούναβις）の名称における語幹 *dān-u- 。

古代的な u 語幹は（接尾辞 -u- に転化したが）、古代インド語の g rā̊van-「ソーマを砕く石、天の水（分）を絞り出す石」にも立証される。その他の印欧諸語では、この名称は、「手びき石臼、挽き臼」として再解釈を受けている ; cf. キンブリー[26] breuan「手びき石臼」, 古代アイルランド bráu「挽き臼」（ケルト祖語の g ＞ b への転化を伴う）。同じ u 語幹は、ただし、接尾辞を挿入したものであるが、単・主 **ЖРЬНЪ**, 生 **ЖРЬНЪВЕ** ＜ * $g^{w}\underset{\circ}{r}$-H_2-nū「挽き臼、水車（小屋）に立証され、また、ラト dzĩrnus「手びき石臼」, ゴ asilu-qaírnus「ろばの動かす製粉機」も同じである。原始スラヴの神話的伝承においては、天の水（分）は、我が民謡にある蜜と油の川、豊饒の川にも似て、しばしば蜂蜜のイメージを持っていた。 Cf. 古高ド metu「蜜酒、蜂蜜飲料」, リ medùs「蜂蜜」, 古イ mádhu「蜂蜜（飲料）」, ギ μέθυ「ワイン、酒」。この水（分）は、天が地に送り出す果実であり、贈り物である — cf. **ПЛОДЪ** や **ДАРЪ** の曲用における u 語幹の痕跡。

上述の宇宙観が古い起源を持つことは、「リグ・ヴェーダ」[27] の一連の頌歌（例えば、V .53, 5 ; 58, 3 ; 59, 7 ）が立証している。特に、頌歌の VIII. 7, 16 は注目に値するもので、ここでは、雨の役割は、単に大地を肥沃にするだけではなく、天地創造的なものである — 雨は、世界の二つの半分、天と地を分け、配置せしめる、すなわち最初のカオス（混沌）、無定形の自然を秩序だった世界に、天球に、宇宙に変えるのである。頌歌 X. 121, 1 では、雨に代わって、地の実が現れ、それが空間を満たす、すなわち、古代インド的宇宙の状態（天と地の必要な距離）を支えるのである。頌歌 X. 82, 6 では、この実は、水（天の水［分］）から産み出される。この実が、存在全体の象徴、生きとし生ける物全ての所有物の象徴として、宇宙の二つの半分 — 天と地 — を満たすのである（頌歌 X. 45, 6)。

原始印欧の神話的伝承においては、宇宙を支える主柱の役割を果たしたのが、オークの木であり、それが、大地からの然るべき距離で天を支えているのである — Cf. ラ quercus「オークの木」＜ *perk^{w}-u-s と ゴ

faírhvus「宇宙、天地」＜ *perkʷ-u-s における語根と語幹の完全一致。オークの木は、古い他の u 語幹名詞と同じく、印欧及び原始スラヴの雷神神話に関連がある。ソヴィエトの学者イヴァノフ及びトポロフ（В.Иванов, В. Топоров, 1974）によれば、この極めて重要な神話は、次の筋立てを持つ：

1．雷神は、高く、天空に、また枝を四方東西南北に広げる世界樹の頂にいる。印欧語の語幹 *di-u-「天」については、上述参照。同一語幹から、古イ devaḥ, リ diẽvas, ラ deus, ギ Ζεύς, 属 Διός ＜ *di-u̯-os「神」が形成される。当初は、神と天は同義の概念であった。原始スラヴの雷神ペルーヌ **Перꙋнъ** の名称は、リ Perk-ū-nas, 古プ Perc-u-nis（雷の化身），古代アイスランド Fjǫrgyn（神トールの母、これについては、以下を参照）とも、また同じく、宇宙樹たるオークの木 *perkʷ-u-s ＝ ラ quercus「オークの木」，ゴ faírhvus「宇宙、世界」と同系関係にある。宇宙樹の頂の名称における古い u 語幹については、リ virš-ū-s, ラト vīrs-u-s「最上部、頂上、てっぺん」が証明しており、また、**Врьхъ** のいくらかの格形に見られる u 語幹の痕跡もまた同じである。大木は全て、世界樹の象徴だと考えられている。古高ド wit-u「木（木材としての）」，ギ δόρ-υ「木（材）」，δρῦς「木、オークの木」，ゴ tri-u「木」，ヒッタイト tar-u「木」における u 語幹、また同じく、triu, taru, δόρυ, δρῦς と同系関係にある **Дрѣво** ＜ *der-u̯-o の接尾辞 -u- も参照。四方位も宇宙樹と関連があり、そのことを示しているのが、**четꙋре** ＜ *kʷet-ū- における接尾辞の -u-（＜古い u 語幹）である；cf. 同一語根派生の リ ket-u-rī, 古イ 対 cat-ū-ras, ラ quatt-u-or, ゴ fid-w-or「4」。

2．雷神の敵対者が、下方、世界樹の根元に住まう世界蛇である。**Змьи** の曲用には、古い u 語幹の痕跡が見られる。副詞の **Долоу**, **низоу** の原形は宇宙世界の下方、世界蛇の住処に関連しており、これはスラヴ祖語の u 語幹曲用の所格に起源を持つ。

3．世界蛇は、有角家畜を盗んで、それを世界の懸崖絶壁の背後（世界樹に等しい、世界の山の背後）に隠すのである。雷神は、その恐ろしい武器（大槌、刀剣、槍、鉞）を用いて、懸崖絶壁を打ち砕き（切り裂き）、家畜を解き放つ。神話の中には、雷神が、世界樹を打ち砕く異説もある。世界の懸崖絶壁の名称は、ヒッタイト語 per-u-na「懸崖、絶壁」にも、また同じく、ゴ faírguni「山」＜ *per-gh-u-n- や **ПРѢГѢНИ**「深い淵によって、切り裂かれた荒涼たる山地」＜ *per-gh-ū-n- や 古イ pár-v-ata-「山」＜ *per-u- にも見られる。世界の懸崖絶壁（世界樹）の名称は、雷神の名称と同一語幹なのである。特に興味深いのは、「リグ・ヴェーダ」の頌歌 Ⅲ. 35, 8 及び Ⅹ. 94 であり、そこでは、 párvata- と呼ばれているのは、植物のソーマ（天の水［分］）の樹液を絞り出す石のことである。古代インド語の párvata- の古い u 語幹は、単・主 **ЖРЬНѢ**, 生 **ЖРЬНѢВЕ**, ラト dziřnus「手挽き石臼」における古い ū 語幹を我々に想起させるが、これについては上を参照。印欧及び原始スラヴのどの武器も、雷神がそれを用いて世界の懸崖絶壁を打ち砕き（切り裂き）、その敵対者である世界蛇を打ち殺す恐ろしい武器を原形としている － 単・主 **БРАДѢ**, 生 **БРАДѢВЕ** における ū 語幹、ギ π é λ ε κ υ ς「斧、鉞、大なた」における u 語幹参照、これは 古イ paraśúḥ「斧、鉞、大なた」, ゴ haírus「剣、刀」と同系。古い u 語幹は、雷神が懸崖絶壁を切り裂いた後に解放する家畜の名称にも立証される － cf. ラ pecus「家畜」, 属 pecudis「家禽獣、特に羊」、これは ゴ faíhu「金銭、（当初は、家畜の意）」（この意味については、ラ pecūnia「所有物、財産、金（額）」を参照), ゴ writhus「家畜群」, **АФБѢТ-Ъ-КЪ**（財産）[28] と同系 ; **ВОЛЪ** の曲用における古い u 語幹の痕跡も参照。世界蛇に対する勝利は、世界の秩序が到来したことを表す。その宇宙論的かつ倫理的な意味での、整った宇宙と世界秩序の同義語が、スラヴ祖語の名詞である *ręd ъ, *čīn ъ, *mīr ъ である。 *čīn ъ によって、原始スラヴ人たちは、はるか昔から秩序だった世界と人間関係にあまねく定められ、慣習的に保持

されなくてはならない全ゆるものを表している。一方、スラヴ祖語の *mīrъ は、蛇に対する勝利の後の、また二つの宇宙の半分である天と地が最初のカオス（混沌）から脱した後の世界の平静と宇宙の平穏を表したのである。 **РѦДЪ, ЧИНЪ, МИРЪ** の曲用におけるスラヴ祖語の u 語幹の痕跡を参照、 cf. 古高ド fridu 「平和、平穏」, situ「慣習、習俗」。

4．世界蛇に対する雷神の勝利に継いで、天の水［分］（雨）が現れる。その蛇は、大地の水の中に隠れている。**АЪЖДЪ** の古い u 語幹については、上述参照。世界蛇に対する勝利は、天地創造的な意味を持つのである。「リグ・ヴェーダ」の頌歌 Ⅲ. 32, 8 によれば、インドラは、世界の懸崖絶壁を打ち砕き、世界蛇ヴリトラを打ち倒して、雌牛と天の水（分）を解き放つだけではなく、天地を創造して、太陽と月を産み出すのである。頌歌 Ⅷ. 51, 8 によれば、世界蛇に対する勝利に次いで、大地の最初の住人も現れる。勝利の天地創造的な意味合いについては、古高地ドイツ語の sigu「勝利」の u 語幹も、これを証明している。

古代ブルガリア語文献に残る多数の古い u 語幹の痕跡につながる、これら主要な印欧神話、原始スラヴ神話は、様々な異説中にも立証される。そのいくつかの異説の中では、敵対者が世界蛇ではなくて、宇宙樹の根元の水中に住まう世界魚であるものがある。ギ ἰχθύς「魚」における u 語幹、また同じく **РЪБИТВЪ**「漁師」における接尾辞 -tu- も参照。どの原始スラヴの漁師も、世界秩序と世界の平安が到来するように、世界魚に打ち勝ちあるいはそれを捕らえる神格化英雄を自己の庇護者として崇めていた。とりわけ、世界魚と戦ったのが古代ゲルマンの神トールである。その母フィヨルギュン Fjǫrgyn の名は、リトアニア語 Perkūnas や **ПЕРОУНЪ** と同系関係にある[13]。他の異説では、世界蛇に対する勝利は、勝利者を祝って、不思議な大釜を見つけて、酩酊させる飲料（ビール）を作ることが、それを象徴した（ u 語幹の痕跡は、**ОЛЪ**「アルコール飲料」に見られる ； この語は、リ alùs「ビール」, 古プ alu 「蜜酒、蜂蜜飲料」, アングロ・サクソン ealu「大酒宴」 ＜ *alu- と同系）。

その曲用中にスラヴ祖語　u　語幹の痕跡を残す古代ブルガリア語の名詞は、ある非常に古い祭祀的、天体論的、天地創造的な術語類の名残である。一つには、これらの術語類は、天の神（天そのものと同一であるが）の名称、また同じく、天の神に、神とその敵対者である世界蛇との闘いに、直接的な関係を持つ本質の名称を包摂するものであった。もう一つ、　u　語幹に属する名詞は、世界秩序、つまり古代的な発想からして、整備整頓された世界の状態を反映したものであった　－　整備整頓された秩序だった世界においては、天空たる、宇宙空間の天井たる、男性源たるものは、大地たる、宇宙空間の下層部たる、女性源たるものに対して、最高の衝の関係にあった。宇宙の二つの半分、すなわち天と地は、二つの人間の性、つまり男性と女性に相応している。印欧の主要な天地創造神話の一つによれば、世界は、ある第一次的な無定形の（両性的な）（創造）物（ｓ ъ щ е с т в о）から発生したのであり、その中から後に天と地（男性源と女性源）が分離したのである。

氷と世界蛇の毒素　－　太古から存在する死と沈滞とカオスの象徴　－　が、始原的な物質である。次の　u　語幹参照、リ　ledûs,　ラト　lędus「氷」, cf. **ЛЕДЪ, ЮДЪ**　の曲用におけるスラヴ祖語　u　語幹の痕跡。炎熱と発汗が最初の創造の力であった（**ЗНОИ**　は、古代ブルガリア語では、汗の意であり、またこの意味は、我が方言の一部にも残っている；　**ЗНОИ**　の曲用における　u　語幹の痕跡を参照)。最初の人間は、第一次的な両性物の息子である。古イ　sūnúḥ, ゴ　sunus, リ　sūnûs　の　u　語幹、また同じく、**СЪНЪ**　の曲用における古い　u 語幹の痕跡も参照、cf. 古イ　manú-「人」, pūrú-「男」の　u　語幹。最初の人間は、第一次的な創造物が睡夢中に発汗して後に産み出される（睡夢は、大地が未だ創造されない、つまり天と地が未だ分離していない、無定型の混沌［カオス］状態の時期に相応する)。いくつかの天地創造伝説によれば、最初の人間が、第一次的な創造物の膝関節から産み出される　－　ギ　γόνυ, 古イ　jā́nu, ゴ　kniu, ラ genū「膝」における　u　語幹参照。世界は、生け贄にされた第一次的な創造物の肉体の一部から創られるという、印欧及び原始スラヴ

の天地創造神話がある － **ОУДЪ**（部分、肉体の部分、四肢）の曲用における u 語幹の痕跡を参照、cf. ゴ lithus「肉体の部分」の u 語幹、また同じく、単・主 **КРЪВЬ**, 生 **КРЪВЕ** ＜ *kru-H_2- における ū 語幹、これは、ギ κρέας「肉」＜ *kru-H_2-es- と同系である（§. 24 参照）。

ある非常に古い天地創造神話によると、世界は、悠久の海の水の中を泳いでいたという亀の背甲の上で創られたり（ギ χέλῡς「亀」 と同系関係にある、単・主 **ЖЕЛѢ**［亀］, 生 **ЖЕЛѢВЕ** ＜ *ghel-ū- における ū 語幹参照）、あるいはまた、悠久の海の水の上に芽生えたと言う一本の細枝の上で創られたのである ； その細枝が海水をかき混ぜると、その海水は油に変わったという（スラ祖 単・主 *mǫty, 生 mǫtъve「かき混ぜるための細枝棒、油に変ずるべく、ミルクを泡立てる細枝棒」における u 語幹参照）。水鳥が世界の海の底から取り出す一塊の粘土から、大地が創り出されてくる話は、恐らく、印欧と原始スラヴの最古の天地創造神話である － スラ祖 主 *ǫty, 生 *ǫtъve「カモ」, リ antuka「沼地のシギ」における ū 語幹、 **ЖЕРАВЬ**, リ gérvė, ラ 単・主 grūs, 属 gruis 「鶴」における古い接尾辞 -u- を参照 ； スラヴ祖語の u 語幹の痕跡をその曲用中に残す **ИЛЪ**「粘土」は、 u 語幹のギリシャ語名詞 ἰλύς「泥土、粘泥、泥（寧）」と同系である。

小宇宙（家族の秩序としきたり）は、大宇宙の形に合わせて構成された。宇宙の二つの半分である天と地に対応するのは、一族の半分である男性と女性、つまり息子達とその妻達である（娘達や孫娘達は、他の氏族に嫁するものであるが故に、家族の一時的な成員と見なされた）。地上の住まい（**ДОМЪ** の曲用における u 語幹を参照、cf. ラ domus 及び 古イ vǫst u「家、住居」、またこれと同系の ギ ἄστυ「町、都市」の曲用における u 語幹）は、天上の館（神のやかた）をモデルにして整えられた。原始スラヴ人達にとって、地上の町（種族長の住処）は、神々が住み給う囲みを持った中央空間を象徴したもの（写し取ったもの）であった。それ故に、

ДОМЪ（ラ domus 女性 と対照的）や **ГРАДЪ**（ギ πόλις, ラ urbs 女性 と対照的）は、男性起源である。主として男系（すなわち天の系統）親族は、何か小万神殿（パンテオン）の如きものを成していた — **БЛИЖИКА, ЖЖИКА**「親戚、親類」（**И** は i̯ū < i̯uH₂ の継承）における古い ū 語幹を参照；古代ブルガリア語では、これらの語は、集合的な意味で使われており、恐らくは、現代語の Ние сме родина（我々は親族だ）に似た、絶対単数（singulāria tantum）的なものであり、これは、Ние сме роднини（我々は親族達である）より古いのである。

男性（天）の源の最高の代表は家長であり、半分である女性の観点からすれば、舅（夫の父親）であった — 古イ śvaś-u-raḥ, 古高ド swëhur, リ šẽšuras, ギ ἑκυρός「舅」< *su̯e-k'-u-r- における古い接尾辞 -u- を参照、この接尾辞は、もはや **СВЕКРЪ** には見られない；**ВЛАДЪКА** は、接尾辞 -ū- < -uH₂- を持った古い集合名詞であり、pl ūrālis mājestātis（威厳の複数）、すなわち、敬重の複数の意味で使われたものである。**САНЪ** も、原始スラヴ人の、権力至高（天上）起源説の思想に関連している — スラヴ祖語の、この語の曲用における u 語幹の痕跡参照；**САНЪ** は、古代インド語の sā́nu「頂上、上部、高さ」と同じ語根起源である。*su̯e-k'-u-r- のアナロジーによる、ただし接尾辞転位を行った、接尾辞の -u- は、姑（夫の母親）を表す派生語にも一般化した — 単・主 **СВЕКРЪ**, 生 **СВЕКРЪВЕ**, 古イ śvaśrū- < *su̯e-k'-r-u-H₂-, ラ socrus（単・主語尾 -s は新しいもの）を参照。単・主 **ЗЪЛЪ**, 生 **ЗЪЛЪВЕ** 及び **АТРЪ**, **АТРЪВЕ** は、**СВЕКРЪ**, **СВЕКРЪВЕ** からのアナロジーに従って形成されたものである。

古い接尾辞 -u- は、後に接尾辞の -k- を付加したいくつかの形容詞の語幹にも見られる：**СЛАДЪКЪ** < *sal-d-u-, **ГЛАДЪКЪ**, **СТЪДЪКЪ**, **БРИДЪКЪ**「差し込むように冷たい、寒い」, **ЛЬГЪКЪ**, **МАКЪКЪ**, **ТЬНЪКЪ**, **КРѢПЬКЪ**, **ЖЗЪКЪ**, **КРОТЪКЪ**, **ПЛЬЗЪКЪ**, **СЛЬЗЪК**

ъ, **МрьЗъКъ** 。古典ギリシャ語でこれらに対応するのは、純粋な（非拡張の） u 語幹の形容詞である － 例えば、γλυκύς「甘い」, ταχύς「速い」, βραδύς「ゆっくりした」, θῆλυς「女性の」, ἥμισυς「半分の」, πολύς「多量の、豊富な」。これらの形容詞の一部は、明らかに、原始スラヴと印欧世界の秩序と第一次的な無秩序（世界のカオス） － 後に、主要な天地創造活動（世界蛇の抹殺、宇宙の二つの半分である天と地の分離、大地の固定強化、中間の宇宙空間である大気の創造 ; cf. ゴ luftus「空気、大気」における u 語幹）以後、整備整頓された世界に対立する － の構成要素を表徴する形容語（枕詞 epithet）であった。例えば、こうした形容語が、**КрѢПъКъ** であり、これは、宇宙の二つの半分を分け、所定の状態と所定の距離と整備整頓された印欧と原始スラヴ世界の状態（ラ situs「位置、状況、地勢」及び status「（所定の）状態、関係、地位、立っていること」における u 語幹参照 ; cf. ゴ thaúrsus「堅い、硬い」及び tulgus「健康な、強い」における u 語幹形容詞）を支える、蜂蜜を塗った宇宙柱に関して、冠せられたものである。また、原始スラヴの天地創造説や原始スラヴのしきたり（祭式）において極めて重要な役割を演ずる蜂蜜（**МЕДъ** の曲用にある u 語幹の痕跡を参照）に関して用いられた形容語 **СЛАДъКъ**（ cf. ギ γλυκύς における u 語幹） － 宇宙柱は、原始スラヴ的発想においては、蜜蜂の巣箱である宇宙樹の幹に相当する。形容語 θῆλυς「女性の」は、形容語の ἥμισυς「半分の」と共に、宇宙論的発想における母なる大地に相当する、半分である女性に関係するものである。形容語 βαρύς「重い、つらい」 < *g^wьr-u- は、ラテン語の gravis「重い」と同系であるが、古代インド語の grā́van-「天の水（分）、ソーマを絞り出す石」 < *g^wr-eH_2-u- や 単・主 **ЖрьНъ**, 生 **ЖрьНъВе**「挽き臼石、水車、水力製粉所」 < *g^wr̥-H_2-nu-（上を参照）と同じ語根に由来するものである。宇宙論的発想においては、天の水（分）（その多量）を流出させることは、重く困難な仕事であった。**ТѦЖьКъ** < *ten-g-i̯-u-k- における

古い u 語幹参照、cf. **ОТѦГЪЧИТИ** ＜ *ten-g-u-k-、またゴート語形容詞 aglus「難しい」の u 語幹も同じ。一方、**ѪЗЪКЪ**, **ТѢНЪКЪ**, **СЛѢЗЪКЪ**, **ПЛѢЗЪКЪ** は、当初は、世界蛇（蛇魚）の形容語である ― cf. *an-g'-u-「細い、狭い、密集した」（**ѪЗЪКЪ**, ラ angustus, ゴ aggwus, 古イ aṁhū-「細い、狭い」）と *an-g-u-「蛇、蛇魚」（古プ angurgis, リ ungurỹs ＜ *angurỹs「鰻」, ラ anguis「蛇」, anguilla「鰻」; 接尾辞 -u- のない語幹 *ang- は、**ѪЖЬ**, 古ロ **ОУЖЬ**［蛇の一種、紐］, ス vôž（紐、ロープ）, ポ wąż「蛇、ホース」に立証される）には、共通の語根がある。**МРѦЗЪ** 及び 現・1・単 **МРЬЗНѪ**, 2 **МРЬЗНЕШИ** と同系の形容語 **МРЬЗЪКЪ**「厭うべき、忌まわしい、醜悪な」や **СТОУДЪ**「寒さ、恥」 と同系の **СТЪДЪКЪ**「恥知らずの、厚顔な」は否定的な道徳的資質を表したのである。原始スラヴ的発想からすると、始原的なカオス、不安定な世界、未分化な物質、冷却物質、氷（上を参照）に特有なのは、無定型であることだった。氷と冷却性（冷寒）に関連するのが、形容語 **ГЛАДЪКЪ**（なめらかな、滑る、平らな）と **БРИДЪКЪ**（苦々しい、苛烈な、つらい、鋭い、厳しい）である。Cf. twalibwintrus「12の冬の」におけるゴート語形容詞 wintrus「冬の」における u 語幹、**ГОРЬКЪ**（**ь** ＜ iu）（苦い）は、蛇の毒素の形容語である。

u の要素は、接尾辞 **ОВ-** ＜ ou̯- （接尾辞 -u- の古い対応階梯）を持つ一定数の形容詞の語幹にも現れている。接尾辞 **-ОВ-**（軟変化形 **-ЕВ-**）を持つ形容詞の一部、例えば、**СВѦТ-ОВ-ИТЪ**（原始スラヴの光の神の名称であって、起源的には古い形容詞である）, **ЮДА-ОВ-ИТЪ**, **ПЛОД-ОВ-ИТЪ**, **ВОЛ-ОВ-ЬНЪ**, **ДОМ-ОВ-ЬНЪ**, **ЗМЬ-ЕВ-Ъ**, **ДЪЖД-ЕВ-ЬНЪ**, **ДОУЖД-ЕВ-Ъ**, **ДЪЖД-ЕВ-Ъ** は、直接古い u 語幹から作ったものである。一方、他の一部の形容詞、例えば、**ДОУХ-ОВ-ЬНЪ**, **ВѢР-ОВ-ЬНЪ**, **СВѢТ-ОВ-ЬНЪ**, **СТОУД-ОВ-ЬНЪ**「恥ずべき」, **ГРѢХ-ОВ-ЬНЪ**（**ГРѢХЪ** の曲用の古い u 語幹の痕跡を参照）は、新旧を問わず宗教・祭祀的ないしは倫理道徳的な用語であって、原始スラヴ的宇宙信仰に関連する形容語

をモデルにして形成されたものである。こうしたものとして、例えは、**Гро м-ов-ъ**（雷神の基本的修飾語としては最古の形容語 ； **Грьмъ**「灌木、低木、叢林（地)」の曲用には、**Громъ**「雷鳴、雷」との音の類似の故に、古い u 語幹の痕跡がある、ペルーンの声たる雷鳴の同様の連想が、**Гласъ** の曲用の古い u 語幹のいくつかの形の原因ともなっていよう)，**юг-ов-ъ**，**сѣвер-ов-ъ**（宇宙樹の四つの枝によって確定される方位に対する形容語であるが、この樹上には **Пероунъ** ペルーヌの神が住んでいるのであり、これは、リ Perkūnas ペルクーナスと同系関係にある ； バルト・スラヴの **Пероунъ** の神像は、四方位に向けた四つの顔を持ち、一週間の四番目の日であり、リトアニア語で ペルクーナスの日 Perkūno diena、ポラーブ語で Peråunedån と呼ばれる木曜日が **Пероунъ** に捧げられた)，大地の水（分）の形容語たる **соур-ов-ъ**（ cf. ロ м а т ь-с ы р а з е м л я 母なる大地）がある。

男性固有名詞及び男性活動体（有生）普通名詞から派生する一定数の物主形容詞も、接尾辞 **-ов-**（**-ев-**） を以て形成される ― 例、**женихов ъ** ＜ **женихъ**，**пастоухов ъ** ＜ **пастоухъ**，**скѫдельнико въ** ＜ **скѫдельникъ**「陶工」，**китов ъ** ＜ **китъ**，**львов ъ** ＜ **левъ**，**бѣсовьскъ** ＜ **бѣсъ**，**врачев ъ**，**врачевьнъ** ＜ **врачь**，**оучителев ъ** ＜ **оучитель**，**цѣсарев ъ** ＜ **цѣсарь**，**адов ъ** ＜ **адъ**（擬人法での)，**адамов ъ** ＜ **адамъ**，**исоусов ъ** ＜ **исоусъ**，**давыдов ъ** ＜ **давыдъ** 。これらの語派生タイプのものが広く普及するようになったのは、やっと古代ブルガリア語期に入ってからだと思われる。このタイプの派生力は、 u 語幹単数与格の語尾 **-ови** が、非常に広範囲に o，io 語幹の、人及び有生類名詞に置かれた（§.23 参照）ことに関連している ― 例、単・主 **левъ**，単・与 **левови**，物主形容詞 **левов ъ** ； **врачь**，**врачеви**，**врачев ъ** ； **цѣсарь**，**цѣсареви**，**цѣсарев ъ** ； **исоурь**，**исоусови**，**исоусов ъ** 。

女性派生名詞の語尾 - **ЫНИ**（単・主 **БОГЫНИ**, **БЛАГЫНИ**, **ГРЪДЫНИ**, **ПОУСТЫНИ**, **ГОСПОДЫНИ** 参照）における接尾辞 -**Ы**- は、恐らく、始原的な u 語幹形容詞に由来するものである。推定形 *bhag-u-「神の」の幹母音 u に女性名詞を作る H_2 指標が付加され、そこに得られた形 *bhag-u-H_2- ＞ *bogū- に、さらに後に、接尾辞 -nī ＜ -ni-H_2- が付加されて、**БОГЫНИ** の形に至るのである。-**ЫНИ** の語尾を持つ名詞の一定部分、例えば、 **БЛАГОСТЫНИ**, **МИЛОСТЫНИ** のようなものは、二次的な接尾辞 -**ОСТ**- を含んでいるから、語派生タイプとしては、非常に新しいものであり、また一方、例えば、**ПОГАНЫНИ**, **КРЬСТЬЮНЫНИ** のようなものは、借用語起源のものである。第三のグループの名詞、例えば、**БОГЫНИ**, **СВѦТЫНИ**「神聖なこと」, **ПОУСТЫНИ**（世界の荒蕪地、蛇国、混沌世界の名称）は、恐らく非常に古いもので、明らかにスラヴ祖語の祭祀的天地創造的意味の術語群に属したものである。第四のグループの名詞、例えば、**ГОСПОДЫНИ**, **РАБЫНИ**, **СѢСѢДЫНИ** のような名詞は、恐らく、**БОГЪ**, **БОГЫНИ** をモデルにして、**ГОСПОДЪ**, **РАБЪ**, **СѢСѢДЪ** から作られたのである。

本来、 u の要素は、祭祀的、天体論的、天地創造的な用語類とは無関係であって、こうした用語類は、比較的新しいものであり、比較的発達した社会組織と発達した神話思想なり天地創造思想の形式を前提としたものである。 u の要素は、先ず第一には、遠隔、到達不能、彼岸、不可視的で内部が遮蔽された事物、あるいはまた一瞥して即座に捉えきれないものを表す指示小辞であった。始原的な内在指標（инесивен показател ＜ ラ inesse「(～に) 存在する、内在する」) である u は、**К-Ъ-АЕ** ＜ *k^w-u- (cf. 古イ kūha, リ kuř「どこで、どこへ」), **ТОУ** ＜ *t-o-u̯, **Ю-ЖЕ** ＝ リ jaũ「すでに」, **НЕ Ю**「未だ～ない」 ＜ *i-o-u̯ のような代名詞的副詞に立証されるのであって、これが時を経るにしたがって、もっと一般的な、場所的（時間的）用法を獲得したのである。Cf. ラ ubī「どこに、(～の) 所に、(～の) 時に」 ＜ *u-bhei̯ 。内

在指標（ないしはこれと同系の双数・複数指標）の u は、強めの目的で複数所格に付加された — 例、 *u̯l̥kʷ-o-i̯-s-u > **влѣцѣхъ**（§.31, 32 参照)、この場合の s は複数指標である（§.37 参照)。単数与格 **влѣкоу** < *u̯l̥kʷ-o-u̯ は、始原的な内在格（特殊な所格）であって、それが与格として使われるようになったのである（§. 32 参照)。

u の要素は、場所指標として以外に、過ぎ去った行為を表す際の時間指標としても使われた — これを用いて、能動過去分詞形（男・単・主 **несъ**, 女 **несъши**； **събьравъ**, **събьравъши** < *nek'-u-s-, bhьr-ā-u-s- を参照）が作られ、また恐らくは、ラテン語の、1・単 doc-u-ī「教えた」, audī-v-ī「聞いた、聴いた」型の完了形（perfectum）が作られたのである（ -**ъш**- 指標を伴う能動過去分詞の起源については、§. 20 参照)。指示小辞 u からは、代名詞の **овъ** も作られているが、これは主に相関的に、ペア **овъ** ... **овъ** で使われた — 例、マタイ XXII-5 マリア写本 **они же не рождъше отидѫ. овъ на сел о свое. овъ на коуплѭ своѭ.**（そこで、彼らはそ知らぬ顔をして、一人は自分の畑に、一人は自分の商売に出て行った)。 u の要素は、遠くに離れてあるもの（同時一気には知覚できないもの）を表す指標から、二物（すなわち双数）を表す数詞ないしは形態指標に転化したが、それは一連の名詞、代名詞、動詞形に見られる。例えば、**въторъ** < *u-tor-, ラ u-ter-「二つの中の何れ（の)」, 古イ u-bhaú「二つ」, 双・1・主 **вѣ**「私達二人」< *u̯-ē, 現・1・双 **есвѣ**「私達二人はいる」（この動詞語尾 -**вѣ** は、人称代名詞形と一致する), 古イ 双・主・対 vr̥kā u-「二匹の狼」< *u̯l̥kʷ-ō-u̯-, 双・生・所 **влѣкоу** < *u̯l̥kʷ-o-u̯ を参照。

u の要素は、ある純粋に双数を表す接尾辞が、祭祀的な、天地創造神話に関連する指標に転化したのかもしれない — 最古の全人類的な天地創造神話伝承は、古代的な二元的（フラトリア的 = 胞族的[29] ）社会組織に相応しており、この組織に関連する双子神話に起源を持つ — より原始的な

タイプの伝承では、二兄弟、双子兄弟は、デミウルゴス[30]（人類の庇護者）であり、より新しい伝承タイプでは、この双子兄弟は、大地を創造して、次第に天体論的な輪郭を帯び、鳥に変身したり、あるいは古代インドの Aśv īnā（＜語根 *ek'u̯-「馬」）のような天馬（翼を持つ馬）に転身する、あるいはまたギリシャのディオスクーロイ（Διόσκουροι[31]）のような神の子になるという説話である。しかし、接尾辞 -u- の祭祀的な意味合いは、場所指示小詞 u の彼岸的（超越的 trascendent）意味からも、非常に容易に、発達してきた可能性がある。本来、接尾辞の -u-（u 語幹）は、天、すなわち、宇宙高所の要素の特徴も、世界の奈落深淵（太古からのカオス）の、地獄（蛇国）の、すなわち、天地創造上の下部、したがって肉体下部の、産み出しかつ吸い込む（くわえ込む）源 ― 腸、母の腹部、墓 ― の要素の特徴も表示してのである ― ギ δελφύς「母の胎内」，リ vidûs「中、内部、内臓」，ゴ dauths「死」における古い u 語幹、また同じく **чрѣво**（腹、内部），ラ vul-v-a「女性生殖器」，ゴ hlaiw「墓」，**мрьтвъ** ＜ *mr̥-tu- ＝ ラ mortuus「死せる、死人」における接尾辞 -u- を参照。宇宙の下部は、産出する大地 ― 種子が新しい生命のために死んで行く畑 ― である。ゴ fraiw「種」，**нива** ＜ **ни-зъ** の語根 *nei̯-（ギ νειός「畑、耕地」＜ *nei̯-u- と同系），古イ nivát「低地」における接尾辞 -u- を参照。

§. 26 古代ブルガリア語の男性及び女性前史から

時を経ると共に、 -ā ＜ -eH₂ 語尾、すなわち、多数の肉体を含み込む単一の肉体を表す接尾辞（集合多数性の接尾辞）であり、産出（女性）を表す接尾辞が、宇宙（そして肉体）下部の要素を表す基本指標となる。スラヴ祖語の名詞類の特徴は、天の水（分）の要素（宇宙上部に属する）が地（すなわち、宇宙下部）の水（分）の要素に変わり、いくつかの場合、印欧語の対応形とは違って、接尾辞 -u- を取らずに、形態的に女性名詞となった。

リ dangùs（男性）「天、空」[14]の u 語幹に対して、**АЖГА**「虹、弓」の ā 語幹[14]、ラ rīvus（男性）「川、河、流れ、奔流」＜ *rei̯-u- の古い接尾辞 -u- に対して、**РѢКА** ＜ *roi̯-k- における ā 語幹 を参照、 cf. **ТЖТЬНЪ**「天の雷（いかづち）」＜ *ton-tь n-（すなわち、語根 *ten-「轟く、爆ぜる」の畳音形）は男性であるが、**ТЖЧА** ＜ *ton-k-i̯ā「地の水（分）の源としての雲」は女性。同じ理由で、単・主 **ЖРЬНЪ**, 生 **ЖРЬНЪВЕ**「石臼、水車」 ＜ *gʷr̥-H₂-n-u-H₂-, **МЛЬНЬИ** ＜ *ml̥-dh-ni-i-H₂-、また同じく、スラヴの新生河川名、例えば、Morava, Łaba, Волга ＜ *ul̥-g-ā ＝ チ Vlha（Łaba の支流）, ポ Wilga（Wisła の支流）（同一語根であるが、対応階梯なのが、 **ВЛАГА**［露、水分、湿気］）は、女性である。常に男性起源であるギリシャ、ラテンの河川名とは対照的に、 **РОСА**（露、水滴） ＝ リ rasà（露、水滴）は、古い ā 語幹起源であり、古イ rasā「宇宙を回流する神話上の川、湿気、水分」と同系関係にある。

地中、水中動物は、当然、女性に属した － 例、 **ВЪДРА**（川獺）（**ВОДА** 及び ὕδωρ「水」と同一語根）, **ЖАБА**（ヒキガエル）, **РЪБА**, 単・主 **ПЬСТРЪ**, 生 **ПЬСТРЪВЕ**（ニジマス）, **ЗМЬЮ**（**ЗЕМЛЮ** ＜ *g'hđem-, *g'hem- と同一語根であり、ラ humus「大地、地面」及びプリュギア ζεμέλω「母なる大地」と同系 ; cf. ロ мать -

сыра земля「母なる大地」); これは、世界樹の頂に住んでいた男性起源の、例えば、鷹（**соколъ**）や鷲（**орьлъ**）と比べて対照的である。ビーバー（海狸）（**бобръ**）は、男性のスラヴ祖語 u 語幹起源である（cf. リ bebrūs, 古プ bebrus「ビーバー」)。原始スラヴ的発想からすると、宇宙の二つの半分である天と地を繋ぐ世界の木の根元に住んでいたからである。 **жаба** の祖形（ cf. 古プ gabawo「ヒキガエル」) 及び単・主 **пьстръ**, 生 **пьстрьве** < *pik'-r-u-H_2- も、古い接尾辞 -u- を含んでいた。ヒキガエルもニジマスも、天（宇宙の上部、男性である半分）に対立する世界の底（女性である半分、宇宙下部）の怪物・怪魚だったのである。

月（**мѣсѧць**）が男性なのは、天体が宇宙上部に属しているという理由だけによるものではない。ある始原的な発想からすると、月と太陽は夫婦であって、月は新郎、太陽は新婦である。この古い信仰の名残は、今なおポーランド語の月の名称 księżyc（月）（古ポ ksiądz「公」 の指小形） — 新郎の意でもあった — に現れており、また、度々若い娘を太陽に喩える、ベロルシア（白ロシア）の婚礼歌や我が婚礼歌の場合も同様である(「静けき、ますらおの庭に、晴れやかに陽は昇りぬ」)。ブルガリアの婚礼歌では、ベロルシアのそれとは違って、若者を月ではなくて、濃霧 — 雨雲や雨、また種を蒔き、実りをもたらす男性の基（源）の隠喩（メタファー） — に喩えている（「静けき、乙女の庭に、深き霧の立ち込めぬ」)。月（男性の源）対太陽（女性の源）の対置の本来の意味は、原始スラヴのもう一つの月名で、女性である **лоуна** の存在のため、揺れが生じている。ある程度は、近東及び地中海文明の影響によって、またある程度は、月の周期と女性の二月経間の周期の一致のために、月が女性名詞類に算入されることにもなっている（ cf. ラ lūna, ギ σελήνη「月」)。このことは、太陽と月の名称の文法性の上にも意味的特徴の上にも反映している。ラテン語 mēnsis とギリシャ語 μήν（男性）は、特に暦の概念（一か月の期間）として使う ; ギリシャ語同語根の天体の名称は、女性である —

μήνη あるいは μηνάς, 属 μηνάδος「月」。**мѣсѧць** 以外にも、古い男性は、ゴート語 mena, 古代インド語 mās-, リトアニア語 mėnuo「月」にも残っている。ギリシャ語、ラテン語では、太陽の名称（sōl, ἥλιος）は、男性名詞に転じており、また古代ブルガリア語では、**слънце** は中性であるが、原形 *suln-i- は女性であったと考えられる。古い女性は、リトアニア語 sáulė やゴート語 sunno「太陽」に残っている。極めて明白な理由であるが、古い天の光の名称 **дьнь**（＜ *di-u-「神、天」の語根 *di- ; 古イ devaḥ, リ diẽvas「神」 参照）は、男性である。それに対置される概念 **нощь**（＝ ラ 単・主 nox, 属 noctis, ゴ nahts, リ naktìs「夜」）は、女性である。

単数主格に語尾 -**ѧ** を持つ古代ブルガリア語の一連の男性人間名詞も、宇宙下部、肉体下部に属していた。これは、なかんずく、下僕や奴隷の名称である。最下層で、虐げられた階層であった彼らは、自分の耕す土地や飼育している家畜の排泄物に関係していた。概して、社会的な最下層、ルンペン層、浮浪者層、貧困層、乞食が、土地に、宇宙下部に属するものとなった ― cf. ロ чернь「庶民、下層民」と古代インドで庶民層 vaiśya の表徴であった土の黒色、これは、専制・司祭者バラモン（rāj-bhrahmán- ＝ ラ rēx flāmen）のカーストの表徴であった、白色の輝ける天の色（cf. ロ белый царь）と対照的である。次例 -**ѧ** 語尾参照、 **слоуга**, 古ロ **возница**「馬車大工、荷馬車の御者」, **сирота**「肉親のいない人、貧民」, 古ロ **мѣхоноша**「自分の主人の毛皮外套を支え運び従う下僕」, **прѣдътеча**「主人の到着を告げる下僕」（後に、**прѣдътеча** は、Ἰωάννης ὁ Πρόδρομος［先だって走る人ヨハンネス］の古代ブルガリア語訳において、バプテスマ［洗礼者］のヨハネの名前の枕詞に変わっている), 古ロ **вѣстоноша**「下っ走りの使者」, 古ポ smerda「下僕、召使い」＜ 語根 *(s) mer-「泥、汚れ、不潔なもの」, また、乳児もよく smerdy と呼ばれることがあったという。 Cf.

ラ aurīga 「御者」, cacula「召使い兵士、伝令兵」, lixa「輜重兵、酒保商人」, advena 「新来者、新参者」, verna 「持ち主の家で生まれた奴隷」, perfuga 「逃亡奴僕、逃走者」, scrība 「(奴僕) 書記」, popa「(生け贄を捧げる儀式の時、生け贄を屠る) 祭司補」(popellus「平民、細民」及び popīnō 「放蕩者、飲み屋の常連」は同語根), assecla 「従者、付き人奴隷」, scurra「放浪者、旅芸人、ピエロ」, nappa 「怠け者」, リ válkata「放浪者」, eĩgeta「乞食」, alata「貧乏人、浮浪人、ろくでなし」, ギ ἱππότα「馬丁、馬の飼育者」, συβώτης「豚飼い」。

-**а** 語尾は、自分の土地になれ親しんできた土着民の名称として、また田舎に暮らし、土地を耕してきた人々の名称として、全く自然なことであった — 次例参照、**польщина** (農民、百姓、村人) (スヴャトスラフ文集 1073), ラ incola「(地方都市) 居住民」, agricola「農夫」, rūricola「農夫、百姓」, indigena 「その土地生まれの人、土着民」, ギ γεωμέτρης「測量者」, πολίτης「都市住民」(ギリシャ語都市名は、スラヴ語のそれと違って、女性である)。

バフチン (М. Бахтин, 1965) の見事な分析によれば、この辱みということは、生と下半身との関わり、生と胃袋及び生殖器官との関わり、したがって、性交、妊娠、出産、食、排泄のような行為との関わりをも表していた (**пьѩница** [大酒のみ] **любодѣица** [私通者], **ѩдьца**「食い道楽」, **пивьца** [大酒家], **винопивьца** [同], **винопьица** [同], ラ gumia 「大食家、美食家」, galba 「太っちょ」, agaga「(情事の) 取り持ち、(売春) 仲介者、女衒」参照)。そして、結局、宇宙の下部及び下半身は、生の積極的な源 — 健康で強い力の漲る青春(**юноша** [若者], **юнота** [同], ギ νεᾱνίᾱς「若者」参照) — にも、否定的な源 — 横死、殺人、肉体切断、墓 — にも関係しているのである。次例参照、**сѣчьца**「刑吏」, **оубоица** (殺害者), **оубьица** (同), **чьловѣкооубьица** (同), **чьловѣкооубоица** (同), 古ロ **гроборьѩ** (墓地盗掘者), **меченоша** (主人の武器を持つ従者、太刀持ち) (10世紀の

古代ブルガリアの宝石入り指輪の碑銘)，古ロ **вражица**「武装した敵」，ラ homicida「殺害者」，ギ σ τ ρ α τ ι ώ τ η ς「(武装) 兵士」，τ ο ξ ό τ η ς「弓兵」，ὁ π λ ί τ η ς「重装備兵」，α ἰ χ μ η τ ά「槍兵」。

-a 語尾を持つ、スラヴ語の、男性ないしは総性（男性、女性両用）名詞の卑語・罵言の類も、同じような意味分野の語と見なさなければならない － ポ ciapa（＝ ロ р а с-т я̀ п-а「ぼんやり者、うすのろ」)，ロ б р ю̀ з г а「不平家、やかましや」，н е р я̀ х а「だらしない人、ずぼら」，п л а̀ к с а「泣き虫」，р а з и̇̀ н я「間抜け、とんま」（これらは、俗語的文体に特有のものであり、したがって、古い文学作品にはみられない）。-ā ＜ -eH₂ の語尾を持つ、スラヴ祖語の軽蔑語に対応するのが、古代インド語の罵語で、語尾 -ī ＜ -iH₂ を持つ男性人間名詞である。これらの大部分は、男性に転用された女性名称である。バフチンの研究が示しているように、罵詈雑言の本来の目的は、破壊根絶して新しい産出を迎えるために、絶対的な下半身へ、産出、出産器官の領域へ、宇宙と肉体のどん底の淵へ追放することであった。例えば、ブルガリア語のバーバ б а̀ б а（ばあさん、女々しい男、腰抜け）のような、男性に対する罵言の、根底には、多義的で両面価値的な性格があり、それは、一面では、破壊、すなわち老いと死と滅びの暗示であり、また一面では、完成改善と再生復活へ向けての独特の呼びかけなのである － 我が方言では、人間ないしは動物がこの世界に出てくる基になる嚢（胎盤）のことも б а̀ б а と呼んでいる。「老女」である б а̀ б а も「胎盤」である б а̀ б а も、元々二つの異なる単語ではなく、始原的には同一の本質の総称である － 孕める死滅（б е р е м е н н а т а с м ъ р т)、つまり春の来たらんがために去り行く冬（б а б а з и м а）を祭る奇祭である、ブルガリア民族の春のカーニバルの参加者のことを、バブーレツィ б а б ȳ р е ц и（＜ б а б а）と呼んでいる。

старѣишина（長老、族長)，**владѣка**（主人、支配者)，**воевода**

ѧ（司令官），**ВЕЛЬМОЖѦ**（オプティマス、貴族）（в е л м о ж а なる民間語は、つい最近まで、キュディール地方[32]で、家族共同体の長の意で残って来た），**БАЛЬИ**（医師），**ВѢТЬИ**（聖なるスラヴの民会 **ВѢШТЕ** ＜ *u̯ēt-i̯-o- での演説者、発言者），**СЖДЬИ**（裁判官）（最後の三語は -ī ＜ -iH₂ を含んでいる），ギ δέσποτα「主人、支配者、所有者」，κριτής「裁判官」，εὐρύοπα「先見の明のある（人）」，μητίετᾱ「賢明な（人）」のようなゼウスに対する形容詞、あるいは ἀκάτητα「情け深い、有益な（人）」のようなヘルメスに対する形容語は、plūrālis mājestātis（威厳の複数）[33] の意味で使われている、集合的な意味を持つ抽象名詞であった。

§. 27 始原的な名詞接尾辞 -i-

古イ áśvaḥ = ラ equus「(雄) 馬」< *ek'u̯-o-s (幹母音は対応階梯) に対して、古イ áśvā = ラ equa「雌馬」< *ek'u̯-e-H_2 (幹母音は正常階梯) となるタイプのように、男性名詞の語幹に古い語尾 H_2 を付加して作られる女性派生名詞は、古代ブルガリア語には立証されない。この女性派生名詞形成法は、印欧語期に広がったものではない。このことを証明しているのが、ὁ ἵππος < *ek'-u̯-o-s は「雄馬」の意、ἡ ἵππος は「雌馬」の意となるギリシャ語である。しかし、形容詞の場合は、この上述の方法が、非常に広く行われている — 男・単・主 **НОВЪ**, 女 **НОВА**, 中 **НОВО**, ギ νέος, νέα, νέον「若い」, ラ novus, nova, novum < *neu̯-o-s, neu̯-e-H_2, neu̯-o- を参照。女性派生名詞が最も頻繁に作られたのは、i の要素を含む語幹からである。この要素は、起源的には、近辺にあって、手が届く範囲内の、可視的なもの、また同じく、一瞥すると同時に捉えられる、したがって、一箇所に集中した小 (規模複) 数 (ないしは二つ) のものとして再解釈されうる (二つの) 物を表す場所指示小辞である。

この小辞からは、承前・関係代名詞が派生している — 男・単・主 **И-ЖЕ**, 女 **ꙗ-ЖЕ**, 中 **Е-ЖЕ** (**Ѥ-ЖЕ**), ギ ὅς, ἥ, ὅ, 古イ yáḥ, yā́, yád「who, which」< *i̯-o-s, *i̯-ā < *i̯-e-H_2, *i̯-o-d を参照。接尾辞 -o- (-e-) によって拡張しない語根 *i- は、ラ 男・単・主 is「それ」, 対 im (eum は、より新しい形), 中 id, ゴ 中・単・主 ita < *i-d-, 古イ 男・単・対 im-ā́m, 中 id-ā́m に立証される。男性単数対格の承前・代名詞形 **И**、また前置詞に後置されるときの **НЬ** (ゾグラフォス写本) の形は、恐らく *i-m あるいは *i-n から派生したものではあるまい (§.38 参照); 曲用全体に特有である (単・生 **НЕГО**, 与 **НЕМОУ**, 複・生 **НИХЪ**, 与 **НИМЪ**)、前置詞結合 **ВЪ НЬ**,

НА НѢ の **Н** の軟性は、むしろ *i̯-o-m ないしは *i̯-o-n といった原形を前提としたものである。

i の要素は、場所指標（§.31 参照）として以外に、時間指標としても使われている — これは、古代ブルガリア語現在形語尾の一部に存在しており（1・単 **ЕСМЬ** < *es-m-i, 古ロ 3・単 **БЕРЕТЬ** < *bher-e-t-i, 古ロ 複・3 **БЕРЖТЬ** < *bher-o-nt-i 参照)、発話時に遂行された行為の印である — この要素の i が欠損すると、その動詞形は、未完了過去形（インパーフェクト)、すなわち、持続的ではあるが、発話時以前に終了した行為を表す形（古代ブルガリア語の単純アオリストは、これから作ったのであるが）に転じたのである。Cf. 現・3・単 **НЕСЕТЬ** < *nek'-e-t-i と単純アオ・3・単 **НЕСЕ** < *nek'-e-t, 現・3・複 **НЕСЖТЬ** < *nek'-o-nt-i と 単純アオ・3・複 **НЕСЖ** < *nek'-o-nt 。

古代ブルガリア語の物主形容詞の一部も、i の要素の助けを借りて作られている — 例、男・単・主 **ОВЬЧЬ**（*ou̯-i-k-i̯-o-）< **ОВЬЦА**（*ou̯-i-k-）, **ГОВѦЖДЬ**（*gʷou̯-n̥d-i̯-o-）< **ГОВѦДО**, **ОТЬЧЬ**（*at-i-k-i̯-o-）< **ОТЬЦЬ**（*at-i-k-o-）。本来、接尾辞の -i- は、所有を表すのではなく、基となる名詞との、非常に一般的な近接性とか共存性とかを表したのである — **ОВЬЧЬ** の原形は、羊自体を表すのではなく、羊に直接関係するもの、つまり、羊肉とか羊皮とか羊小屋とかを表したのである。

古い女性派生名詞も、この i 語幹に H_2 指標を付加することによって作られている — 次例参照、古イ devā́ḥ「神」< *dei̯-u- に対して、dēvī「女神」(逐語的には、神の近くにいるもの、神に関するもの）< *dei̯-u-i-H_2 ; vṛ̥kaḥ「狼」< *u̯l̥kʷ-o- に対して、vṛkī「雌狼」< *u̯l̥kʷ-i-H_2 。始原的な iH_2 > ī のこの結合は、**ВЛЬЧИЦА** < *u̯l̥kʷ-i-H_2-k-ā にも立証される。マルティネ（1955）が推定しているように、-ikā > **-ИЦА** 語尾の古来の子音 **К**（**Ц**） は、恐らく、H_2 音

の継承であろう。 -iH₂-s の結合（この場合の s は、有生類名詞の古い主格語尾）は、 -īk-s に変じ、一方、後に、女性名詞は補助指標 ā を得て、 ā 語幹に転ずる、すなわち、 -īk-s は -īk-ā に取って代えられたのである；同様に、 трънак（ブ 集合名詞 リンボクの茂み）の語尾 -ак も、 e-H₂-s ＞ -āk- から説明すべきである。

始原的な *u̯l̥kʷ-i-H₂ の形は、逐語的には、「狼の近くにあり、狼に関係する一括多数のものないしは女性のもの」を表したのであるが、これは他の名詞に対する不一致的な付語（同格語）としても使うことができた ― 例えば、 *u̯l̥kʷ-i-H₂ pedes 「狼の足」。当初、組み合わせ全体に複数の意味を付与したのは、 *pedes における語尾の -es ではなくて、 *u̯l̥kʷ-i-H₂ における一括多数性指標 H₂ なのである。ここに示した *u̯l̥kʷ-i-H₂ pedes の組み合わせは、セム語の status cōnstructus （構成位相）（二つの名詞の組み合わせで、その内の一つは後に属格に転じた）、あるいは古代インド語文法で tatpuruṣa-（限定合成語、determinative compound）と呼ばれているシンタグマ（tatpuruṣa- という用語自体は、本来は「ある人の家来」の意味を持つ、文法上の使用例である）を想起させる[34]。このシンタグマは、合成語であって、それの第一要素は純粋語幹で所有者を表し、第二要素は屈折変化を行って、被所有物を表すのである ― 例、古イ rāja-putrá- 「王子」（逐語的には、王－息子）。 lupī「狼の」 ＜ *u̯l̥kʷ-i-H₂ 型のラテン語男性単数属格形は、 *u̯l̥kʷ-i-H₂ pedes ＝ ラ lupī pedes「狼の足」の組み合わせに現れている。すなわち、**влъчица** における語幹 **влъчи-** ＜ *u̯l̥kʷ-i-H₂（ cf. 古イ vṛkī「雌狼」）は、ラテン語単数属格の lupī 「狼の」に等しいのである。

語尾 -īna （男 **храмъ**, 女 **храм-ина**）を持つ女性派生名詞の接尾辞 -i- も、 **-ица** 語尾の派生名詞（男 **влъкъ**, 女 **влъчица**）の接尾辞 -ī- と同一起源（-i-H₂ ）である。同様の語派生モデルは、ラテン語男性主格 rēx「王」 ＜ *rēg'-s, 女性 rēgīna「女王」 ＜ *rēg'-i-H₂-nā にも立証される。通常 ā, i̯ā 語幹名詞から物主形容詞を作る接尾

辞の -ИН- ＜ -i-H_2-n-（例、ЗМЬИНЪ ＜ ЗМЬЮ, БОГОРОДИЧЬНЪ ＜ БОГОРОДИЦА, МАРИИНЪ ＜ МАРИА）は、ГОСТИНЪ ＜ ГОСТЬ（i 語幹、男）, ТАТИНЪ ＜ ТАТЬ（i 語幹、男）, ЗВѢРИНЪ ＜ ЗВѢРЬ（i 語幹、男）, НЕПРИЮЗНИНЪ ＜ НЕПРИЮЗНЬ（i 語幹、女）のような形が証明しているように、恐らく、i 曲用の枠内で発生したものであろう。ВЛЬЧИЦА ＜ *u̯l̥kʷ-i-H_2- や ХРАМИНА ＜ *skorm-i-H_2-n- 、また同じく、БОГЪНИ ＜ *bhag-u-H_2-n- のタイプにおいて、女性語幹も作った一括多数性指標 H_2 は、第一次接尾辞と第二次接尾辞の原形に二回登場しているのである。

時が経つにしたがって、形容詞及び分詞の場合にも、i の要素の助けを借りて女性用派生語幹を作り始めるのである。次例参照、ギ 男・単・主 μέλᾱς「黒い、暗い」, 中 μέλαν に対して、女 μέλαιν-α ＜ *μελαν-ι̯-α ; 男 πᾶς「全ての、全き」, 中 πᾶν に対して、女 πᾶσα ＜ *παντ-ι̯-α ; 男 γλυκύς「甘い」, 中 γλυκύ に対して、女 γλυκεῖα ＜ *γλυκ-εF-ι̯-α（接尾辞 u の e 階梯）; 男・単・主 φέρων「運んでいる（分詞）」, 中 φέρον に対して、女 φερούσα ＜ *φερ-ο-ντ-ι̯-α 。本来女性用派生語幹の表徴であった i の要素は、スラヴ祖語においては、男性・中性単数主格形を除く、能動現在分詞、能動過去分詞の全ての形及び形容詞比較級の形に広がっている。次例参照、男・単・主 БЕРЪ ＜ *bher-o-nt-s（cf. ギ φέρων, ラ ferēns）に対して、生 БЕРЖШТА ＜ *bher-o-nt-i̯-o-（女性形の影響による i 挿入）, 女・単・主 БЕРЖШТИ ＜ *bher-o-nt-i-H_2（斜格の影響により、t ＞ ШТ）, 生 БЕРЖШТѦ ＜ *bher-o-nt-i̯-e-H_2-, 男・複・主 БЕРЖШТЕ（女性形の影響による i 挿入 ; cf. ラ ferentēs, ギ φέροντες）, 女・複・主 БЕРЖШТѦ（女性単数生格と同じ語幹から）; 男・単・主 ОУ-МЬРЪ ＜ *mṛ-u-s-（cf. 古イ 男・単・属 ma-mr-ū-ṣ-aḥ ― 畳音完了形）, 生 ОУМЬРЪША, 女・単・主 ОУМЬ

ръши < *mr̥-u-s-i-H_2 (cf. 古イ ma-mr-ū-ṣ-ī), 生 **оумьръша** < *mr̥-u-s-i̯-e-H_2 (cf. 古イ ma-mr-ū-s-y-ā-ḥ), 男・複・主 **оумьръше**, 女・複・主 **оумьръша** (女・単・生と同じ語幹から) ; 男・単・主 **мьньи**, 生 **мьньша** < *min-i̯is-, 女・単・主 **мьньши** < *min-i̯is-i-H_2, 生 **мьньша** < *min-i̯is-i̯-e-H_2-, 男・複・主 **мьньше**, 女・複・主 **мьньша** (女・単・生と同じ語幹から)。

i の要素を介して作られる、同タイプの女性用派生語幹は、指示代名詞 **тъ** の曲用にも立証される — 例、女・単・主 **та** < *t-e-H_2, 対 **тѫ** < *t-ā-n < *t-e-H_2- に対して、単・生 **тоѧ**, 与 **тои**, 造 **тоѭ** < *t-o-i̯-ā- 。この場合の *t-o-i̯- の語幹は、代名詞語根 *t の o 語幹から取ったものである (cf. 男・単・生 **т-о-го**, 与 **т-о-моу**, 所 **т-о-мь**)。

互いに近くに存在し、そのために集合多数性を構成するか、あるいは自然と対を成すようなものについての派生集合名詞も、 i の要素の助けを借りて作られる。古代ブルガリア語期にも、それらの一定部分は、singulária tantum (絶対単数) として用いられた — 例、**чѧдь**「子供」, **ѥдь**, **съ-нѣдь**「食べ物、食料」, **вѣдь**「知識」(見聞したもの、こと), **соль**, **зъль**「悪事、悪意」, **пѧть**「五」(手を広げたときの五本指) (現・1・単 **пьнѫ**, 2 **пьнеши** [伸ばす、引っ張る] と同一語根から作る ; この同じ語根に、 -t- に代えて古い接尾辞 -d- を付加すると、**пѧдь**「ぴんと張った親指と小指の間の距離」ができる)。当初、これらの集合名詞は、性の特徴においては中立的であって、その原形は恐らく無生類に属したのであるが、後になって、抽象 (派生) 集合名詞も含んだ (§. 10 参照) 女性範疇に算入されたのである。語根 *ok^w- (cf. 単・主 **око**, 生 **очес-е**) 及び *au̯s- (cf. 単・主 **оухо**, 生 **оуш-ес-е**) に i 指標を付加すると、語幹 *ok^w-i- 及び *aus-i- が得られたが、そこから古代ブルガリア語の双数形が作られるのである — 双・主 **очи** < *ok^w-ī- ; **оуши** < *au̯s-ī- を参照。

すでにスラヴ祖語期には、接尾辞 -i- を持つ名詞の大部分は、複数形も形成し始め、その結果、当初集合的に使われていた **ЗВѢРЬ**, **МЪШЬ**, **КОСТЬ** のような単語（接尾辞 -i- のない語幹は、例えば、ギ θήρ「野獣」< *g'hu̯ēr-, 属 θηρός, ラmūs, ギ μῦς, 古高ド mūs「ネズミ」に立証されるが、これらは単数の意味を持っていた）は、単数、複数形を持つ完全曲用を発達させたのである。接尾辞 -i- を持つ形の最初の集合的な意味を基にして、スラヴ祖語集合名詞原形 ***ДЖБЬ**, ***ЗЕЛЬ**, ***ТРЬНЬ** を推定させる **ВРЬБЬЕ**「柳林」, **ДЖБЬЕ**「広葉樹林、カシの森」, **ЗЕЛЬЕ**「草木、緑葉」, **ТРЬНЬЕ**「リンボクの林」のような中性単数の派生集合名詞が作り出された — cf. **ЧѦДЬ** と **ИШТѦДЬЕ** < **ИС ЧѦДЬЕ**; **ЖДОЛЬ**「谷」と **ЖДОЛЬЕ**。**СОЛЬ**, **ДАЛЬ**(cf. ロ д а л ь)「遠方、遠望」, **СЪН-ѢДЬ**, **ВѢДЬ**, **ЧѦДЬ**, **БЛѦДЬ**「思い違い、失策」, **КОНЬ**「初め、起点、終端、果て」, **ЛЬСТЬ**, **СРЬДЬ**「中、内部」のような始原的な集合名詞からは、**СОЛЬНЪ**, **ДАЛЬНЪ**, **СЪНѢДЬНЪ**, **БЕЗ-ВѢДЬНЪ**, **БЕЗ-ЧѦДЬНЪ**, **БЛѦДЬНЪ**, **ЗА-КОНЬНЪ**, **ИС-КОНЬНЪ**, **ПРѢ-ЛЬСТЬНЪ**, **МИЛО-СРЬДЬНЪ** のような派生形容詞、**ЧѦДЬЦЕ**, **ѢДЬЦА**, **СРЬДЬЦЕ**, **ЛЬСТЬЦЬ**, **СРЬДЬЦЕ- ВѢДЬЦЬ** のような派生名詞が発生した。スラヴ祖語においては、接尾辞 - **ЬН-** や - **ЬЦ-** は、派生力が強くなり、他の名詞にも拡大していった — 例、**СЖЧЬЦЬ** < **СЖКЪ**「木枝」, **ГРАДЬЦЬ** < **ГРАДЪ**, **ЮНЬЦЬ** < **ЮНЪ**, **ПОТЬНЪ** < **ПОТЪ**, **ВѢРЬНЪ** < **ВѢРА**, **БѢСЬНЪ** < **БѢСЪ**, **НЕБЕСЬНЪ** < 単・主 **НЕБО**, 生 **НЕБЕСЕ**。変化（declinable）形容詞 **СВОБОДЬНЪ**, **РАЗЛИЧЬНЪ**, **СОУГОУБЬНЪ**, **ОУДОБЬНЪ** は、ゴート語 i 語幹変化形容詞 hrains「清い、清潔な」, anasiuns「見える、可視の」, skeirs「光る、明るい」と同じ語派生タイプである、i 語幹の不変化形容詞（indeclinable） **СВОБОДЬ**, **РАЗЛИЧЬ**, **СОУГОУБЬ**, **ОУДОБЬ** から発生したものである。形容詞比較級を作る集約性語幹の接尾辞 -i- については、§．20 参照。

§.28　始原的な純粋語幹の文法的意義

始原的な有生類名詞と無生類名詞の本質的な違いは、前者は行為主（動作主）にも性質の担い手にもなり得るが、後者は性質の担い手にしかなり得ない、という点にある。古い有生類名詞は、活格動詞とも不活格動詞とも結合できたが、古い無生類名詞は、不活格動詞以外とは結びつき得なかった。始原的な二大活用である活格活用と不活格活用（§.15 参照）、及び二大名詞類である有生類と無生類（§.22 参照）、換言すれば、活性類と不活性類の存在は、スラヴ祖語の主格構文（他動詞の場合は主格主語と対格の直接補語、自動詞の場合は主格主語のみの構文）の基になった古い統語構造が、活格構造であったことを推定させる根拠になる。活格的統語構造にあっては、活格動詞の主語は、特別な語尾を持った活格に立ち、直接補語は、純粋語幹である絶対格に立つのである。直接補語を持たない不活格動詞の主語も、絶対格、すなわち純粋語幹になる。活格的統語構造の言語においては、数のカテゴリーの発達が弱く、単数形と複数形を区別する特別の名詞接辞（affix）を前提とすることはできない。数は、叙述的な方法、例えば、「多数」の意味の副詞を補って、あるいはまた、動詞の屈折によって、表されたのである。文法上の格は、活格と絶対格の二つであった。属格（生格）、対格及び与格に相当するような格は存在していない。しかし、所（処）格的、目的格的、奪格的、共同格的、具格的な意味を持つ様々な後置詞（要素）（з а д л о г）は存在しており、それらが場所、目的地、分離、随伴（協力）、手段を指示したのである。活格構造の言語にあっては、受動構文や動詞の受動活用は無縁であった。

活性（有性）名詞類には、二つの文法格　－　活格動詞文の主語の機能を果たす活格（特別の語尾を持つ）、不活格動詞文の主語の機能及び活格動詞文の直接補語の機能を果たす絶対格（純粋語幹）　－　が存在した。この他、絶対格は、命名と呼びかけの機能も果たした　－　cf. **ВЛЬЧЕ**, リ　vilkė,

古イ vṛ̥ka, ギ λύκε , ラ lupe ＜ *u̯l̥kʷ-e は、純粋語幹。絶対格（純粋語幹）は、古代インド語文法がカルマダーラヤ（karmadhāraya, appositionally defined compound 同格限定合成語） － 不一致形容詞 ＋ 名詞 － と呼んでいる構文での形容詞の役割も演じている[35]。次例参照、スプラシル写本 434_5 **ДОБРОПОМОЩЬНИЦА**（＝ ギ καλὴ βοηθός），同写本 493_{13} **БЛАГОДѢАНИЕ**，（＝ ギ κηδεμονία），同写本 263_4 **БЛАГОИЗВОЛЕНИЕ**（＝ ギ ἀρετή），同写本 300_{19} **БЛАГОДАТЬ**（＝ ギ χάρις） ，ギ ἀκρόπολις「城塞」（逐語的には、上の町） ， μεσόγαια「内地、非沿海地」， 古イ mahāvīrá-「偉大なる英雄」， pūrṇámāsa-「満月」。これらの構文は、限定詞が性、数、格の変化をしない時代の名残である。次のような、 i 語幹の不変化形容詞も、同様の古い統語特徴について証明している － **ИСПЛЬНЬ**（スプラシル写本 136_4 **РЖЦѢ КРЪВЕ ИСПЛЬНЬ**［両の手は血に染まっている］），**СВОБОДЬ**（同写本 244_{20} **ПОСЛАНЪ БЪСТЪ СВОБОДЬ ГРѢХА**［罪を免れて遣わされた］），**РАЗЛИЧЬ**（同写本 42_{29} **СТАДА РАЗЛИЧЬ ВОЛОВЪ**［様々な牛の群れ］），**СОУГОБЬ**（同写本 449_1 **СОУГОУБЬ ДЬНЕСЬ ПРИШЬСТВИЮ ГОСПОДЬНЕ**［今日は主の再来の日］），**ОУДОБЬ**（シナイ祈祷書 24 a 8 **ВѢДЪ ОУДОБЬ ПОГЪБЕНИЕ**［軽い過ちを知って］）；副詞として使われているものもある、例、 スプラシル写本 530_{25} **ОБИЛО И ОУДОБЬ ПОДАЖ**［大量にしかも簡単に落ちて］ 。

純粋語幹は、極めて多様な状況語的意味も持っていた。この語幹のそのような意味については、例えば、 **МЪНОГО, СКОРО, РАНО, ПРИЛЕЖЬНО, СВѢТЬЛО, ДОБЛЕ, ОУДОБЬ, ПРАВЬ** のような o 語幹、 i̯o 語幹、 i 語幹の副詞が証明している － 例、 詩編 CXIX 7 **МЬНОГО ПРИШЕЛЬСТВОВА АША МОѢ.**（久しく、我が魂が住んでいた）；詩編 LXXVII 34 **РАНО ПРІХОЖДАДАХЖ КЪ БОУ.**（早朝から、彼らは神の助けを求めた）；ルカ VII-43 ゾグラフォス写本 **ПРАВЬ**

сѫдилъ еси. （あなたの判断は正しい）；スプラシル写本 367_{15} **и и гладь заморн нн ранъ дастъ.** （飢え死にもさせず、傷も与えなかった）。形の上では、これらの副詞は、中性単数主・対格名詞と一致しており、純粋語幹から直接作るか、純粋語幹に取って代わった中性単数主・対格形から作ったのである（§.38 参照）。

活格動詞の主語となり得ない不活性（無生）類名詞にあっては、活格の範疇は欠如している。不活性類にとっての特徴は、絶対格としてあるいは様々の後置要素（з а д л о г）と組み合わせて使われる純粋語幹だけである。ハーファース（W. Havers, 1924）の研究は、ギリシャ語やラテン語では、時に、不活性（無生）類名詞の絶対格の継承である単数中性名詞の対格が、それ以外の斜格に代わって使われたことを示している。これは、不活性類名詞が活性（有生）類名詞と比べて曲用が未発達である（後置要素によって作る形の少なさをも含めて）、より古い状態の痕跡なのである。古い無生類名詞は、とりわけ様々な意味を持つ純粋語幹として使われたのである。

§.29 始原的後置詞 [задлог]（前置詞 предлог）*od (ot)

未だ格体系が未構築であったスラヴ祖語に遥か先行する時期、文を構成する上で重要な役割を演じたのは種々の副詞（adverbia）である。この副詞と動詞語幹の合成から動詞の接頭辞が作られ、またこの副詞とそれに前置する純粋語幹との合成からは、いくつかの格語尾が発生した。副詞のあるものは、移動語根（лативен корен ＜ラ lātus「運ばれた」） *ad- : d- から形成された。古代ブルガリア語においては、これは前置詞ないしは接頭辞（**ѻтъ**, **ѻт-**, **ѻ-**, **дѻ**）として立証される。この移動語根は、スラヴ祖語 o 語幹単数生格語尾 -ā の基になる要素の一つである — 例、単・生 **влъка** ＜ *u̯lkʷ-ōd , u̯lkʷ-ād ＜ *u̯lkʷ-o-ad ; cf. ラ 単・奪 lupō ＜ *lupōd = 古イ vṛ̥kāt（語末の d ＞ t の無声化を伴う） に対して、リ viĺko ＜ *u̯lkʷ-ā-d ＜ *u̯lkʷ-o-ad 。この移動語根 *ad- : d- は、ある起点から終点への運動を表したものである。この最も一般的な意味からは、二つの対立的な個別的意味の発達が可能であった — 一つは、離奪的な意味（аблативно значение ＜ラ ab-lātus「（～から）運び去られた、遠ざけられた、奪い去られた、引き離された」） — 例、 **ѻтъ**, ラ dē「～から」（= ブ, ロ от), 生 **влъка** ＜ *u̯lkʷ-o-ad = ラ 単・奪 lupō , 古ラ lupōd , 古イ 単・奪 vṛ̥kāt , リ 奪・生 viĺko — であり、もう一つは、接近的意味（алативно значение ＜ラ al-lātus ＜ ad-lātus「（～へ）運び込まれた、近づけられた」） — 例、 **дѻ**, ラ ad「～へ（向かって）、まで」（= ブ, ロ до） ゴ at ＜ *ad「～へ、まで」 , ギ οἶκόν-δε「家へ」 , アヴェスタ vaē smən-da「家へ」 — である。この移動語根 *d- は、指示代名詞や疑問代名詞の主格・対格形の形成にも与っている — 次例参照、 主・対

ТО ＜ *t-o-d ; cf. 古イ t-á-t , ギ τό ＜ *t-o-d , ゴ th ata ＜ *t-o-d, ita ＜ *i-d , ラ id「それ」, quid「何」。この移動語根は、代名詞語幹（例、 *t-o- *i-, *kʷ-i-）の表す不活性類の名詞が行為に参与したのは行為の起点（発源点）としてであり、したがって、それは疑似主体（п с е в д о с у б е к т）の機能を果たすこと、あるいはまた、行為に参与したのは行為の終（着）点としてであり、その場合は疑似客体（п с е в д о о б е к т）の機能を果たすこと、を明確化したのである（§.39 参照）。

移動語根 *d- に由来する前置詞 **ОТЪ** や **АѲ** は、生格とのみ使用されるが、この生格はさらに古い移動格の継承である（起点の格としてだけではなく、限界の格、到達の格としての、古代ブルガリア語における、生格のさらに広い移動格的な用法については、 スプラシル写本 31₁ **АѲИДЕТЪ МѢСТА ТѲГѲ**［その地に到る］のような例がこれを証明している）。前置詞の **АѲ** は、他の古い印欧諸語に多数の類似対応例を持っていて ー 例 ラト da「へ、まで（д о）」, ゴ at「д о」, ギ -δε（oἶκόν-δε「家へ」における）, ゲルマン祖語 *d-（ゴ at-augjan「目に近づける、示す、見せる」 ; cf. ドイツ zeigen ＜ *z-ougen）, ゲルマン祖語 *dō ＝ 古高ド zuo（ド zu「へ」）, ラ en-do ー、「の中へ、中で」の意を持つ古い移入前置詞（и л а т и в е н п р е д л о г ＜ ラ il-lātus ＜ in-lātus「中へ運び込まれた」）である。 **АѲ** とは異なり、前置詞 **ОТЪ** は（ *ad の継承である点については、以下を参照)、古い奪格語尾 -ad とラテン語前置詞 ad （＜ 移動語根 *ad-: d- ）に対応するにすぎない。前置詞の **ОТЪ** ＜ *ad の対応例が極めて少ない理由は、大多数の印欧語では、副詞の *apo : po（cf. 古イ ápa「後ろへ、脇へ、離れて」, ラ ab , ゴ af , ギ ἀπό「から［＝ ブ , ロ о т］」）が奪格的前置詞に転じたからであり、この副詞は、古代ブルガリア語では、上部存在的（с у п е р с и в е н ＜ ラ super-esse「上に在る」）かつ後部存在的（п о с т е с и в е н ＜ ラ post-esse

「後ろに在る」）な意味の前置詞及び接頭辞 **по** として使われている。

この前置詞（接頭辞）**отъ** は、古代ブルガリア語（現代ブルガリア語も）、ロシア語、白ロシア（ベロルシア）語、下ソルブ語、上ソルブ語においては、無声子音を持っている。ウクライナ語では、від あるいは од であり、セルビア・クロアチア語、スロヴェニア語、チェコ語、スロヴァキア語、ポーランド語では、od である。古代ブルガリア語にも、**од** のついたいくつかの形が見られるが — **одънелиже**（［〜の時以来］マルコ IX-21 マリア写本），**одъльткъ**［残り］（＝ギ τὰ κατὰ λοιπα；詩編 XVI. 14）、これは恐らくモラヴィア訛（моравизм）であろう。通説では、第一次形は *ot であり、最初は有声子音前にしか存在しなかった *od の形が、後になってスラヴ語の一部で一般化した、ということになっている。しかし、逆のようにも考えられるのであって、第一次形は *od であり、最初は無声子音前にしか存在しなかった *ot の形が、後になって一般化したのかもしれない。スラヴ祖語の前置詞 *ot（od） には、二つの異なる語幹 — その一つは、移動語根 *ad- : d- から作った語幹、もう一つは、指示小辞 o（正常階梯では e）とそれに指示代名詞語根 t- を加えたものから作った語幹 — が融合していると思われる、次例参照、**еште**，ギ ἔτι「まだ、なお、さらに」，ラト at「〜から、元の方へ、逆の方へ（接頭辞）」，ラ et，ゴ ith「と、そして」，古イ át-i「（の）上に、上方へ、（の）外に」，át-as「そのあと、それから、これより」。o（e） と周辺指標（периферен показател、§.34 参照） t の組み合わせは、指示（ブ ето［ここに、そこに：ロ вот］参照）、すなわち、より近い空間からより遠い空間への（中心から周辺への）目と手の動きを表したのである。この組み合わせが、「ここからそちらへ、〜から、さらに（もっと）」の意味を持った副詞として再解釈を受けたのである。

§. 30 中間的代名詞語根 *m

スラヴ祖語、バルト祖語、ゲルマン祖語の与格形及び造格形の形成に極めて重要な役割を演じたもう一つの後置詞（後置素）が、中間指標（медийнен показател）m である － cf. 単・造 **ВЛЬК-О-МЬ**, 複・与 **ВЛЬК-О-МЪ**, 複・造 **СЪН-Ъ-МИ**, 双・与・造 **ВЛЬК-О-МА**, リ 複・与 vilkáms , 双・与・造 vilkaṁ , ゴ 複・与 wulfam 。m の要素は、中央、中間、中心を意味する、非常に古い代名詞語根である － **МЕЖДОУ** ＜ *me-dhi-（「異なる二つのものの中央にあるもの」を表す、古い双数所格形）参照、cf. ラ medius「中間の」, medium「中央、中心」, ギ μέσσος「中間の、中央にある」, 古イ mádhyas「中間の」, mádhyam「中心、中央」。前置詞 *me-t- も、この中間語根 *m- に由来する（cf. ギ μετά , ゴ mith = ド mit「（と）共に」）；本来、この前置詞は、それが関係するものが、手段、すなわち、行為者の行為遂行を助ける媒体、中心であることを表したのである － ギ μετὰ βοιωτῶν μάχεσθαι「ボイオチア人達と戦うこと」（逐語的には、ボイオチア人達の間で、中で）；μεθ' ὅπλων「武器を持って、武器の助けで、武器によって」；μετὰ θεῶν「神々の助けで、神々によって」。後置詞 m は、最初は、純粋に中間的な職能を持ち、造格・共同格的な形を構成したのである。

この中間素 m は、ある行為や特性の中心ないしは集中点を表すスラヴ祖語の men 語幹名詞、を作る接尾辞 -men- にも関与している － **КАМЪ**, 生 **КАМЕНЕ** ＜ *H_2k'-eH_2-men- の原形は、自分自身の中に鋭度（острота － 形容詞 **ОСТРЪ**［鋭い］は、同語根 *H_2ek'-r- に挿入音 t を添加して作ったもの）を集中体現しているものを表し、**СѢМА** の原形は、播種作業の中心、焦点であるものを、**БРѢМА**, **ЧИСМА**, **ПИСМА**, **ЗНАМА** の原形は、それぞれ、運び、読み、書き、知るという

行為の中心、焦点であるものを表すのである（**ЗНАМА** は、消すと忘れてしまうような覚え書き、目印を表す）。 **ВРѢМА** ＜ *u̯ert-men- は、本来、天空の星座の回転を表している（cf. 古イ vártman-「生け贄献祭に、したがって世界の事件の成りゆきに影響する天体の運行路」） ― **ВРѢМА** の原形は、大空の天体と星座の相互配置に関わる天体の回転の中心たるものを表したのである。

行為の中心を表した古い名詞に起源を持つものとして、**МОЛИМЪ, ЗНАЕМЪ, НЕСОМЪ, ТАИМЪ, ВИДИМЪ** のような、接尾辞 -m- の受動現在分詞がある。Cf. 古イ bhár-amāṇaḥ , ギ φερόμενος , リ nẽšamas「運ばれる」。**НОСИМЪ** ＜ 他動詞 **НОСИТИ**、あるいは、**ВИСИМЪ** ＜ 自動詞 **ВИСѢТИ** のような受動現在分詞の原形は、運ぶ（運ばれる）行為ないしは掛かっている（掛けてある）という行為に関わる性質あるいは能力を、自分自身の中に集中体現する人ないしは物を表したのである。次例参照、スプラシル写本 564$_{23}$ **ВЪ ПОНѢВИЦИ НОСИМЪ**（亜麻布を纏っている） ; 同写本 483$_{12}$ **НА КРЬСТѢ ВИСИМЪ**（十字架に掛かっている）。通常、他動詞から作る受動現在分詞にあっては、しばしば名詞が造格に措かれるが、これは、その人あるいは物が、別の人あるいは物の関与を通して、当該の性質（能力）を集中体現することを示したのである。次例参照、 スプラシル写本 219$_{29}$ **ТѢХЪ РАДИ ИЗЛИХА ЛЮБИМЪ ЮСТЪ БОГОМЪ**（その者達の故に、なお一層のこと神の愛を一身に集めている） ; 同写本 **ТЕКЖШТЕ БѢГАДХЖ АКЪ ОГНЕМЬ ПАКЪ ГОНИМИ**（彼らは再び火に追われる如く一目散に逃走して行った）。

中間語根 *m- は、1人称単数の人称代名詞でもある ― 次例参照、生 **МЕНЕ**, ギ 対 μέ, ゴ 対 mik ＜ *me-g-, 古イ 属 me, リ 対 manė, ヒッタイト 対 a-muk (ammuk)。古代人は、自分自身を宇宙の中心と見なし、その自己の位置から世界のものの位置を決定したのである。1人称単数の人称代名詞指標 m は、**ЕСМЬ**, 古イ ásmi ,

ギ εἰμί，リ esmì，ラ sum，ゴ im「私は、ある、いる（ブ съм）」における動詞1人称単数語尾 -m とも同系関係にある。中間素 m は、スラヴ、バルト、ゲルマン語の造格・与格語尾を作る後置詞（要素）である。

他の印欧諸語では、造格・与格の一部が、前置詞 ѻБ(ѻ) ＝ ラ ob「前に」や数詞 ѻБѧ と同系の別の古い後置詞 bh に起源を持っている。後置詞（前置詞）の原形 *obh は、当該の人物ないしは事物が、他の人物あるいは事物の近辺にあること、それと併せてペアを成し得ることを表したものである。後置詞 bh- の極めて広い意味については、ホメロスの言語がこれを証明しており、そこでは、純粋語幹に -φι ＜ *-bhi の末尾を付加することによって、様々な状況語的な形、なかんずく単数・複数の造格・奪格の意味を持った形を表徴したのである － 例、τ 480（オデュッセイアー） φάρυγος λάβε δεξιτερῆφιν「（その人は）右手で喉を掴んだ」； ρ 696（イーリアス） ὄσσε δακρυόφιν πλῆσθεν「両眼は涙であふれた」（下線は訳者による）。後置詞 bh の具格的、奪格的、与格的意味は、この要素の対置的な用法（обесивна употреба ＜ ラ obesse「の前に、に対して、の為にある、対立する、妨げとなる」）から発達したのである； 後置的副詞 bh は、行為遂行時の、局外的な人物あるいは事物の介在を表したのであるが、それが、間接客体（目的語）、起点、状況促進を表す格語尾として再解釈を受けたのである － 例、ラ 複・与・奪 pedibus, 古イ 複・与・奪 padbhyáḥ，複・具 padbhíḥ ＜ ラ 単・主 pēs，古イ pāt「足」。

単数では、bh の要素は、若干の与格形にのみ認められる － 古イ tū́bhyam，ラ tibi，古プ tebbei「君に」を参照。単数与格形 ТЕБѢ も、同一起源であり、これのスラヴ祖語の語幹 *te-b- ＜ *te-bh- は、他の斜格形にも一般化している － 生 ТЕБЕ，造 ТѲБѲЮ，所 ТЕБѢ を参照。再帰代名詞も、2人称単数の人称代名詞をモデルと

した曲用を行う － 生 **СЕБЕ** 与 **СЕБѢ** 等。

あらゆる **ОБ**（**ѻ**） の用法の中で、恐らく最も古いものは、所格を取って、「回りに、周囲に」の意味を持つ用法であろう － 例、マルコ V-21 ゾグラフォス写本 **СЪБЬРА Сѧ НАРОДЪ МНѻГЪ ѻ НЕМЬ**（大勢の群衆が彼のみもとに集まった）。bh の要素は、「回りに、前に、そばに」の意味以外に、恐らく、同系の前置詞 *ambhi : m̥bhi － これの継承が、ラ amb-（例、ambiō「巡回する、かこむ」），古高ド umbi「回りに、周囲に」 － との混淆の故に、「両側、両面から」の意味も表すに至った。この bh「回りに、両側から」の要素は、数量代名詞双数男性主格の **ОБА**，女性・中性 **ОБѢ** の語根であり、これと同系関係にあるものとして、リ abù，ラト abî，古プ abbai，ラ ambō，ゴ bai，ギ ἄμφω，古イ ubhā「二つ、両方、双方」 がある。古い前置詞 *obhi 及び *epi（対応階梯では *opi） は、前置詞 **ОБ**（**ѻ**）と合一してしまっている － cf. ギ ἐπί「上に」。

幹母音の延長によって作った、始原的な非曲用双数形も、共同・具格的な職能で使われた（§.5 参照）。若干の印欧語では、双数主・対格形が、単数造（具）格形と一致している － 次例参照、古イ 単・具 vṛ̥kā「狼と（共に）」 ＝ 双・主・対 vṛ̥kā「二匹の狼」，リ 単・造 vilkù ＝ 双・主・対 vilkù 。レヴィ（ E. Lewy, 1913）は、フィン・ウゴル系の言語でも、単数造格形と双数形の間に同一性が存在しており、あるフィン・ウゴル語では同一形が造格であり、また別のフィン・ウゴル語ではそれが逆に双数形であることに注目したのである。幹母音の延長を伴った、始原的な印欧語の双数形（例、*u̯l̥kʷ-ō「二匹の狼、別の狼と一緒の狼」）は、随伴・共同格 *u̯l̥kʷ-ō「別の狼と一緒に」の意味でも使われたが、後に、共同・具格形に転じ得た。それ故、一方では、*u̯l̥kʷ-ō から、**ВЛЬКА** や ギ λύκω のような双数主・対格形が発生し、また一方では、ゴ wulfa（与格として使われた）のような単数造格が発生したのである[15]。幹母音の延長を伴う純粋語幹は、すでにスラヴ祖語期に、共同・具格的な意味を持つ

ことを止めてしまった。古代ブルガリア語のあらゆる単数造格形は、始原的な中間的後置詞　m　によって形成されたのである。

§. 31　格語尾としての指示代名詞的小辞　i

所格形形成に重要な役割を演じたのが、純粋語幹の後ろに付加される指示代名詞的小辞　i　である（§.27 参照）　－　単・所　**вльцѣ**　＝古イ　v ṛke「狼のそばに」＜　*u̯l̥kʷ-o-i̯　を参照、　cf.　ギ　*οἴκοι*「家で（副）」。所格形以外では、複数形も、指示代名詞的小辞　i　の助けを借りて作られている　－　主　**вльци**, ギ　*λύκοι*,　ラ　lupī　, リ　vilkaĩ「狼達」＜ *u̯l̥kʷ-o-i̯　参照（　i　の要素の集合・多数性の意味については、§. 27 参照)。純粋語幹　*u̯l̥kʷ-o-　と指示小辞（deictic particle）　i　「近くに」　との結合である　*u̯l̥kʷ-o-i̯　のような始原的な形は、狼の相対的近接性も絶対的近接性も表した。狼の相対的近接性とは、狼の近くにあり、狼と同一場所にあることを、また狼の絶対的近接性とは、一箇所に蝟集する狼達のことである。単数所格　*u̯l̥kʷ-o-i̯　＝　**вльцѣ**　と　複数主格　*u̯l̥kʷ-o-i̯　＝　**вльци**　の同一性は、いくつかのツングース・満州語における、所格形と複数形の同一性を想起させるのであって、そこでは、「と同じ場所に、と一緒に」の意味の所格・共同格的な指標を持った表現が、複数形の意味でも使われているのである。Cf. 古代ブルガリア語の疑問、指示代名詞における、単数造格・共同格語幹（**тѣмь**　＜ *t-o-i̯-mi）と複数語幹（主　**ти**,　生　**тѣхъ**, 与　**тѣмъ**　＜ *t-o-i̯-）の同一性も。

始原的な不活性類の継承である中性名詞は、代名詞的指示小辞　i　の助けを借りて、双数形を作った　－　双・主・対　**иѕѣ**＝ 古イ　yugé「二つのくびき」＜ *i̯ug-o-i̯　参照。 *u̯l̥kʷ-o-i̯（＝ **вльци**）　の複数使用と対照的に、 *i̯ug-o-i̯（＝ **иѕѣ**）　が双数使用であるのは、不活性類名詞は、一括多数性指標　H_2　の助けを借りて複数形を作ったからである（§.10 参照）。当初は集合的意味を伴う抽象（派生）名詞であった、一括多数（非分割多数、不可算多数）形　*i̯ug-e-H_2（＝ 複・主・対　**иґа**）とは対照的に、 *i̯ug-o-i̯　の形（＝ 単・所 、双・対　**иѕѣ**）は、近在的、並存的な小

（規模複）数のもの、分割、可算多数のものを表したのであり、その結果、双数用法を獲得したのである。双数が、小（規模複）数を表す特別な形から発生したことは、ホメロスの言語が証明しており、そこでは、いわゆる双数形なるものが、二つ以上のものについて述べるときにも使われるのである。Cf. I 182 - 198（イーリアス）；ここでは、アガメムノーンが遣わした三人の使者 － オデュッセウス、アイアース、ポイニクス － について、古典ギリシャ語文法の観点から見て双数である動詞、代名詞、分詞を以て語られている。アリストテレス（弁論術、 Ρητ. Γ.5）によれば、優れたギリシャ語話術の特徴の一つは、多数、小数、また単一であるものの形を正確に使用することである － ἐν τῷ πο πολλὰ（多数のもの） καὶ ὀλίγα（小数のもの） καὶ ἕν（一つのもの） ὀρθῶς（正確に） ὀνομάζειν（名を挙げる）。このことは、アリストテレスにとっては、いわゆる双数形とは、本質的には小（規模複）数を表す形であったことを示している。

スラヴ祖語の子音幹曲用の名詞の場合、単数所格語尾は e であった － 単・所 **НЕБЕСЕ, БРѢМЕНЕ, МАТЕРЕ, ОТРОЧАТЕ** 参照。この e（対応階梯では o） は、近くに在るものを指示し、**Е-СЕ**（スプラシル写本） 現代ブ e-то, ロ （в)от に立証される、小辞の e と同系のものである。純粋 o 語幹（例、 *u̯l̥kʷ-o-）が、指示小辞 i を付加することによって単数所格（例、**ВЛЬЦѢ**）、双数主・対格（例、**ИСѢ**）、あるいは、複数（例、**ВЛЬЦИ**）の原形を作ったのと同じように、純粋な子音語幹（例、*māt-er-）も、指示小辞 e を付加することによって、単数所格（例、**МАТЕР－Е**）及び双数（例、ギ主・対 μητέρ-ε「二人の母」， γέροντε「二人の老人」， ποιμένε「二人の牧人」）の原形を作ったのである。単数所格形と双数（複数）形の意味の近似性については、上を参照。ラテン語の単数奪格形 homin-e「人から、人と」， māter-e「母から、母と」， lapid-e「石から、石と」 は、恐らく、古い造格（ないしは共同格）の継承であり、また、単数所格 **СѢМЕН-Е, НЕБЕС-**

E, MATEP-E やギリシャ語双数主・対格 π o ι μ é ν-ε「二人の牧人」, κ ύ ν-ε「二匹の犬」 と同じ e 指標を含んだものであろう。

§．32　状況格的（具格的、共同格的、所格的、奪格的）意義を持つ古代ブルガリア語の格形の起源

スラヴ祖語の格体系は、次のような特徴を持つ活格構造言語の格体系から発達したものである：1）活性（有生）類名詞における二つの文法格（活格と絶対格）と不活性（無生）類名詞における活格の欠損；2）純粋語幹に後置詞（素）ないしは指示小辞を付加して作られ、むしろ副詞的に用いられる、状況格的（具格的、共同格的、所格的、奪格的）意味の格形；3）主格、対格、生格、及び与格範疇の欠損；4）複数専用形の欠損　－　複数範疇は、叙述的に（§.28 参照）、あるいは集合的意味を伴う抽象（派生）名詞によって（§.24 参照）、あるいはまた副詞的に用いられる共同格及び所格の形によって、表される。

単数、複数、双数に、主格、生格、与格、対格、造格、所格形を持つというスラヴ祖語の発達した曲用の代わりに、言語史のさらに古い遠い時期に存在したのは、二つの基本格形　－　活格と絶対格　－　だけ、しかもそれは活性（有生）類名詞の場合だけであり、また同じく、ホメロスの言語で、奪格、所格、具格の指標として使われる、接尾辞　-θεν，-θι，-φι　に似た状況格的意味を持った若干の副詞接尾辞であった　－　次例参照、οὐρανόθεν「空から」，οἴκονδε「家に、家へ」，κηρόθι「心の中で」，κεῖθι「あそこで」，Ἰλιόθι πρό「イリオンの前で」，βίηφι「力で、力によって」；例、ζ 6（オデュッセイアー）　βίηφι δὲ φέρτεροι ἦσαν「彼らは、力において勝っていた」。

古い状況格的後置詞に起源を持つものとして、次の語尾がある：

1．o 語幹単数生格語尾　-ѧ（ВЛЬКѦ　参照）で、これは古い奪格指標　-ōd ＜ -o-ad　の継承である（§.29 参照）。

2．男性・中性・単数・造格語尾　-МЬ（ВЛЬК-Ѳ-МЬ，СЪН-Ъ-МЬ，

ПѢТ-Ь-МЬ 参照）。これは、中間指標 m を含み、それを、近接性も共存性も表した指示的要素 i によって補強したものである（この i の要素は、ギリシャ語の副詞的後置詞 -φι ＜ *-bhi にも立証されるが、これによって、意味的には造格に近い状況格的な形を形成する）。拡張されない中間指標 m は、女性単数造格形に立証される － 例、 **ЖЕНОѮ, КОСТЬѮ, ТОѮ** ＜ *t-o-i̯-ā-m（§. 27 参照）。これは、人称、再帰代名詞の単数・造格形にも存在している － 次例参照 **ТОБОѮ, СОБОѮ, МЬНОѮ** ＜ *m-ь n-o-i̯-ō-m、この場合の o は幹母音、i は共同性指標（§. 31 参照）、 ō は延長を伴って反復された幹母音で、これは古い共同格的な形（§. 5, 31 参照）に特有のものである。

当初、語尾 -mi は、行為実現のための状況（環境ないしは手段）である人物や事物の、単一性も多数性も表していない。Cf. ギ θεόφιν は、意味的には、単・与 θεῷ「神に」, 複・与 θεοῖς, 単・属 θεοῦ, 複・属 θεῶν に等しい（ギリシャ語与格は、共同・具格的な用法を、またギリシャ語属格は、奪格的用法も持つ）。複数造格の語尾 **-МИ** ＜ -mī（例、**ПѢТ-Ь-МИ, СЪН-Ъ-МИ**）は、第一次的な語尾 -mi の語末母音の延長によって、すなわち、古い共同・双数的な形の形成法に従って作ったものである － cf. 双・主・対 **ВЛЬКА** ＜ *u̯l̥kʷ-ō , **СЪНЪ** ＜ *sūn-ū , 古イ 単・具 ＝ 双・主・対 vr̥kā「二匹の狼、狼と（一緒に）」, ギ 双・主・対 λύκω「二匹の狼」；小（規模複）数形の意味を伴う、双数形のさらに古い用法については、上を参照。その他の印欧諸語では、複数具格形は、単数具格に複数指標 s を付加することによって得られる（この指標の起源につては、§. 37 参照） － cf. リ 単・造 móterimi「女性と」 , 複・造 móterimis「女性達と」 , 古イ 複・具 sūnúbhiḥ「息子達と」＜ *sūn-u-bhi-s ；また、数の点で中立的な θεόφι「神々と、神々に」＜ *dheu̯s-o-bhi（**АѲУХЪ** ＜ *dhou̯s-o- と同系）。

3. o 語幹単数・所格語尾（**ВЛЬЦѢ** ＜ *u̯l̥kʷ-o-i̯ 参照）、同じ

く o 語幹中性・双数・主・対格語尾（ИГѢ ＜ *i̯ug-o-i̯ 参照）、また同じく o 語幹男性・複数・主格語尾（ВЛЬЦИ ＜ *u̯l̥kʷ-o-i̯ 参照）、§. 31 参照。

i 語幹、u 語幹名詞においては、スラヴ祖語の単数所格形は、接尾辞の母音 e の正常延長階梯を含んだ純粋語幹に起源を持っている — 単・所 ПѢТИ は、*pont-ēi̯ の継承であり、単・所 СЪНОУ は、*sūn-ēu̯ の継承である（他の格の語幹の影響による eu̯ ＞ ou̯ の交替については、§.2 参照）。幹母音の延長階梯は、かつて子音幹名詞の中性主・対格形の特徴も表示している。このことについては、ヒッタイト語単数 watar- に対する複数 widār- のような例 — ギ ὕδωρ「水」 や ВОДА と同系（起源的には、古い集合名詞、§.2 参照） — 、またアヴェスタ語単数 nāman- に対する複数 nāmąn- ＜ *nāmān- のような例 — ИМА ＜ *n̥men ＜ *H₁n̥-H-men と同系（cf. ギ ὄνομα「名」＜ *H₁on-H-mn̥, 古プ emmens「名」＜ *H₁en-H-men-）— が、証明している。古代インド語の主・対格形 nāmāni「名（複）」のような形においては、複数語幹 *nāmān- は、一括多数性指標 H₂ ＞ i（§.3 参照）によって補強されたものである。こうした例は、所格形と複数形の始原的な関連性のもう一つの例証である。

子音幹曲用の名詞の場合、単数所格形は、指示小辞 e の助けを借りて作られた。古代インド語単数所格、例えば、 áśman「石のそばで」の場合とは違って、古代ブルガリア語では、単数所格の意味をもつ純粋子音語幹は文証されない。複数所格形は、さらに後に現れたものである。それは、純粋語幹あるいは単数所格形に、複数指標 s（これの起源については、§. 37 参照） 及び指示小詞 u を付加して作ったものである。純粋語幹からは、 ā 語幹（例、 ЖЕН-А-ХЪ）、u 語幹（例、СЪН-Ъ-ХЪ ＜ *sūn-u-su）及び i 語幹（例、ПѢТ-Ь-ХЪ ＜ *pont-i-su）の複数所格形が作られている。当初、単数と複数という範疇に対しては中立的であった単数所格形からは、 o 語幹複数所格形が作られ（cf. 単・所 ВЛЬЦѢ

＜ *u̯ḷkʷ-o-i̯ と 複・所 **ВЛЬЦѢХЪ** ＜ *u̯ḷkʷ-o-i̯-su）、また同じく、子音幹曲用複数所格形が作られたのである （cf. 単・所 **МАТЕР-Е, КАМЕН-Е, СЛОВЕС-Е** と 複・所 **МАТЕР-Е-ХЪ, КАМЕН-Е-ХЪ, СЛОВЕС-Е-ХЪ**）。複数所格形の一部（ o 語幹、 u 語幹、 i 語幹）では、複数指標の s ＞ **Х** の転化が音声学的な規則性を持つが（§. 3 参照）、その他の形での語尾 **-ХЪ** ＜ -su は、類推によって得られたものである。

複数所格形において、複数指標 s に対して補足された小辞の u は、指示代名詞的語根 *u- に起源を持つものであって、この場合の u は、内在的な意味（§. 38 参照）を持つか、あるいは話者から離れてあるもの、あるいはまた互いに離れていて一見しただけでは即座に捕捉できないようなもの（§.25 参照）の表徴であった。この最後の用法の故に、 u の要素は、双数（複数）指標の意味を獲得する可能性、したがって、複数所格形において複数指標 s を補強する可能性を得たものであろう。複数所格形に起源を持つ、ギリシャ語子音曲用複数与格形においては、補足的指示小辞が u でなく i になっている － cf. 複・与 μητράσι ＜ *mātr̥-s-i（古イ 複・処 mātr̥ṣu ＜ *matr̥-s-u）。近くにあるものの表徴である指示小詞 i は、共存（同）性も表したが（§.31 参照）、そのため、これもまた複数指標 s を補強することができたのである。所格（状況格）としても用いられた純粋 o 語幹（例、 *u̯ḷkʷ-o-）からは（cf. 純粋語幹単数所格 **ПѢТИ** ＜ *pont-ēi̯, **СЪНОУ** ＜ *sūn-ou̯ ＜ *sūn-ēu̯, 古イ 単・処 áśman「石のそばに」）、双数（複数）指標の付加によって、双数所格形 *u̯ḷkʷ-o-u̯（**ВЛЬКОУ**）が作られた。この形は、スラヴ祖語の曲用を構築するに際して、双数生格形としても用いられるようになった。双数（複数）の意味を伴うこの指示素 u は、古代インド語の双数主・対格形 vr̥kau「二匹の狼」に立証されるが、これは古い共同格的な形 *u̯ḷkʷ-ō ＝ 双・主・対 **ВЛЬКА** から作ったものである。

4. 複数与格語尾 **-МЪ** 。語尾 **-МЪ** は、単数造格語尾 **-МЪ** 及び

複数造格語尾 -**МИ** と同じく、中間素 m を包摂している。与格は、同様の状況格（所格、共同格、奪格、具格）と比べて、更に新しいものである。これは、活格統語構造が主格構造へ転じて行った後、すなわち活格の主格への転化と活格活用動詞に付いていた絶対格が対格に変わって後に、独立したものである（§.38 参照）。状況格的な意義をもつ極めて多様な形が、与格形の原形となった。例えば、人称代名詞の短語尾与格形 **МИ** 及び **ТИ**（< *m-o-i̯ , *t-o-i̯ , cf. ギ 単・与 μοί , τοί, 古イ me , te ）は、代名詞語幹 *mo- 及び *to- に、所格指標 i を補ったものに起源を持っている。この同じ所格指標 i（正常階梯では、 e i̯）は、次のような形における単数与格語尾である — **СЪНОВИ** = 古イ sūnáve < *sūn-eu̯-ei̯ , **СЛОВЕСИ** < *k'leu̯-es-ei̯ , **МАТЕРИ** < *māter-ei̯ , ギ κλέεϊ「栄光のために」< *k'leu̯-es-i , ギ μητρί 「母に」 < *mātr̥-i（ラ mātrī < *mātr̥-ei̯ と同系), ギ λύκῳ = アヴェスタ vəhrkāi「狼に」 < *u̯l̥kʷ-o-ei̯ ; cf. lupō < lupōi (-ōi > -ō の変化を伴う）; 古い決まり文句 populōi Rōmānōi「ローマの民に」 も参照。ギリシャ語複数与格 λύκοις「狼達に」< *u̯l̥kʷ-o-i̯-si , μητρά̓σι「母達に」< *mātr̥-s-i は、本質的には、古い所格形である。スラヴ祖語の古い i 曲用の単数与格形 **ГОСТИ** < *ghost-ei̯-ei̯ は、イタリック系言語の -ei̯-ei̯ の組み合わせと同じように、 -ei̯ に短縮したものである — cf. ラ 単・与 hostī「異邦人に、敵に」< *ghost-ei̯-ei̯。

ā 語幹名詞の場合、単数与格語尾 **Ѣ（ЖЕНѢ）** は、幹母音 ā < *eH₂ と e 階梯の語尾 -ei̯ の融合（ *gʷen-āi̯ < *gʷen-ā-ei̯）から、また単数所格語尾 **Ѣ（ЖЕНѢ）** は、幹母音 ā < *eH₂ とゼロ階梯の語尾 i の結合（ *gʷen-ā-i̯）から、発生したものである。単・主 **ГЛАВА**（ロ голова̀, cf. リ galvà） — 単・対 **ГЛАВѢ**（ロ го̀лову, cf. リ gálvą） ; **РѢКА**（рука̀, rankà） — **РѢКѢ**（ру̀ку, rañką） ; **ЗИМА**（зима̀） — **ЗИМѢ**

（з ѝ м у） ; **страна**（с т о р о н а̀） — **странѫ**（с т о̀ р о н у） ; **гора**（г о р а̀） — **горѫ**（г о̀ р у） ; **стѣна**（с т е н а̀） — **стѣнѫ**（с т ѐ н у） のタイプの、移動アクセントパラダイムを持つ ā 語幹名詞の単数与、所格間のアクセントの差異も、単数与格語尾 **ѣ** と単数所格語尾 **ѣ** の起源の違いによるものである — セルビア シトー（ш т о）方言 単・与 г л а̂ в и ＜ スラ祖 *golvē に対する、 単・所 г л а́ в и ＜ スラ祖 *golvè ; ロ方言 与 з ѝ м е, к с т о̀ р о н е, к с т ѐ н е に対する、 所 с т о р о н ѐ, з н м ѐ с т е н ѐ を参照（§.38 も参照）。

本来、与格は、意味的には、造格にも近いものであった。古い後置的中間素 m は、与格的な意味も造格的な意味も持たず、行為の遂行者（行為主 agent）と行為が直接向けられるものとの間に、第三者（人、もの）があることを示したものである。この第三者は、仲介者ないしは道具手段としての意味付けを受ける可能性を得、そのことの結果、 m 指標は、造格語尾に転じたのである（第 2 項参照）。直接客体を表す特別の格（対格）の出現後（§.38 参照)、付随状況を表す役割を演じた人や物は、間接客体として再解釈を受ける可能性を得た結果、 m 指標は、与格語尾に転じたのである。

複数与格語尾 **-мъ** は、後置的中間語幹 *mo- に複数指標 s（これの起源については、§.37 参照）を加えたものに起源を持っている。 -mos ＞ **-мъ** の変化については、§.2 参照。古代ブルガリア語の複数与格形（例、**вльковмъ, матерємъ, сѫнѫмъ**）に一番近いのは、リトアニア語の複数与格形（例、 vilkáms「狼達に」, mõterims「女達に」, sūnùms「息子達に」）とゴート語複数与格形（例、wulfam「狼達に」, brothrum「兄弟達に」, sunum「息子達に」）である。スラヴ祖語の -mos 語尾の与格形（例、 *sūn-u-mos ＞ **сѫнѫмъ**）は、構造的には、ラテン語の -bus ＜ *-bhos 語尾の与格、奪格形（例、 pedibus「足(複)に対して、足(複)の所に」）に近似しているが、対置後置詞（о б е с и в

ен задлог） -bh の代わりに、中間後置詞（медиен задлог） m をもって形成されるのである。古代インド語の複数与格、奪格、例えば、 vṛ̥kebhyaḥ「狼達に対して、狼達から」 ＜ *u̯l̥kʷ-o-i̯-bhi-es , mātṛ̥bhyaḥ「母達に対して、母達から」 ＜ *mātṛ-bhi-es , padbhyāḥ「足(複) に対して、足(複)から」 ＜ *ped-bhi-es、また複数具格、例えば、 mātṛ̥bhiḥ「母達と」 ＜ *mātṛ-bhi-s , padbhīḥ「足（複）で」 ＜ *ped-bhi-s のような形は、この対置要素 bh を含み、それが、一つは、単数造格語尾 -мь ＜ -mi の中の i の要素と同じ要素 i によって、もう一つは、複数指標 es (s) によって、補強されているのである。複数形において s 指標を加えずに、後置詞 -bhi から作ったものに、ギリシャ語の -φι 語尾の形があるが、これは、ホメロスの言語では、単数、複数の状況格的（奪格的、与格的、具格的）な格の意味で用いれれている － 例、ἀπ' ἰκριόφι「甲板から」, κατ' ὄρεσφι「山々から」, βίηφι「力でもって」, παρὰ ναῦφι「船（複）から」。

古代ブルガリア語の双数曲用は、三形だけしかないのであって、与格、造格においては同一語尾 -ма を持っており、このことは、古くはこの二つの格の意味の間に近似性があったことを証明している。この語尾は、中間語幹 *mo- の末尾母音を延長したものから得られたもので、この延長は、双数的な意味合いでも用いられる共同格（§.31 参照）に特有のものである。代名詞の男性・中性・単数・与・所格形も、中間後置詞 -m をもって作られる － 例、томоу ＜ *t-o-mo-u̯ , 所 томь ＜ *t-o-m-i 。スラヴ祖語の単数与格 *t-o-mo-u̯ は、語尾 u を含んでいるが、これは、o 語幹名詞単数与格形の表徴でもあった － 例、 влькоу ＜ *u̯l̥kʷ-o-u̯ ; 与格語尾 -оу の起源については、以下を参照。近接性も共存(同) 性も表した所格的指標 i は、代名詞男性・中性・所格形 томь ＜ *t-o-m-i に立証される。 *u̯l̥kʷ-o-ei̯ ＞ *u̯l̥kʷ-ōi̯ (＝ ギ 単・与 λύκῳ, 古ラ lupōi, アヴェスタ vəhrkāi) と複数指標 s から出

てくる、 *u̯l̥kʷ-o-ei̯-s ＞ *u̯l̥kʷ-ōi̯s ＞ **влькъ**（§.2 参照）タイプの複数造格形も、与格と造格の意味の古い近似性について証明している。複数造格 **влькъ** ＜ *u̯l̥kʷ-o-ei̯-s に最も近い対応形は、複数具格形として用いられる、古イ vr̥kāiḥ 及び リ vilkaĩsである。

単数与格 *u̯l̥kʷ-o-ei̯ ＞ *u̯l̥kʷ-ōi̯ の語尾 -ōi̯ からは、-ѣ が得られてしかるべきであろう（§.2 参照）。ところが、古代ブルガリア語の男性、中性 o 語幹名詞にあって、与格語尾 -ѣ ＜ *-oi̯ ＜ *-o-ei̯ は、文証されない。**позѧѣ же бывъшоу**（後になってから） の構文（Datīvus absolūtus 絶対与格構文）には、恐らくその痕跡があり、この場合、性、数、格ともに **бывъшоу** に一致した **позѧѣ** は、古い格形（ o 語幹中性単数与格）だと解釈すべきであり、それが副詞に転化したものである。スラヴ祖語の o 語幹名詞にあって、与格の職能で使われたのが、かつての内在格（инесивен падеж）（所格 locātīvus の一種）である。 *u̯l̥kʷ-o-u̯ ＞ 単・与 **влькоу** における内在指標 u については、§.38 参照。遥か遠い時代に、古い内在格と所格は意味的に均等化したのであり、このことを示唆しているのが古代ブルガリア語の -ѣ ＜ -ōi̯ ＜ -o-ei̯ 語尾の副詞と -оу ＜ -o-u̯ 語尾の副詞の対応である － **жтрьждѣ, кждѣ, инждѣ, сждѣ, вьсждѣ, отъвьсждѣ, отъсждѣ, тждѣ, отътждѣ, вьнѣждѣ** に対する、 **жтрьждоу, кждоу, отъкждоу, инждоу, онждоу, извънждоу, отънждоу, сждоу, вьсждоу, отъвьсждоу, отъсждоу, тждоу, отътждоу, овждоу, вьнѣждоу, жтрьждоу, вънжтрьждоу, изжтрьждоу, обождоу** を参照。

§. 33 始原的代名詞語根 *s-

文における活格統語構造が、主格構造へ再編されて以後、主格に転じた古い活格は、 -s 語尾を持っていた。 ギ 単・主 λύκος, ラ lupus, 古イ vṛ̥kaḥ , リ viĩkas「狼」 < *u̯l̥kʷ-o-s の s 語尾を参照。男性単数主格 ВЛЬКЪ も、この原形 *u̯l̥kʷ-o-s から、語末の s が脱落して以後（§.2 参照）、発生して来るのである。この活格語尾 -s は、古い代名詞語根に起源を持つ。この語根は、純代名詞的な用法では、古イ 男・単・主 sá, ギ ὁ, ゴ sa「これ」 < *s-o- 語幹 に立証されるもので、この語幹は、かつて指示代名詞 *t- の活格として用いられ、したがって、活性類名詞だけの代替を務め得たにすぎない。指示代名詞の絶対格として用いられたのは、補充法的語幹 *t-o-（男・中・単・生 Т-О-ГО, 与 Т-О-МОУ, 中・主・対 Т-О）であり、この語幹から、後になって、指示代名詞斜格形が作られるのである － ギ 男・中・単・属 τοῦ, 与 τῷ, 対 τόν ; 古イ 属 tásya, 与 tásmai , 対 tám ; ゴ 属 this , 与 thamma , 対 thana < *t-o- を参照。スラヴ祖語では、この代名詞語幹 *t-o- は、男性単数主格にも一般化したのである － ТЪ < *t-o-s , cf. リ 男・単・主 tàs 。

指示代名詞の活格の古形（ *s-o）を作り、また活格（後には主格）語尾の機能も果たした代名詞語根 *s- は、古代ブルガリア語において、再帰代名詞の語根としても立証される － 生 СЕБЕ, 与 СЕБѢ, 造 СО БОЮ; cf. ラ 与 sibi, 対 sē, 古ラ sēd , ゴ 対 sik , 与 sis 。かつての活格構文（活格動詞文）においては、代名詞主体は、代名詞語幹 *s-o（= 古イ 男・単・主 sá, ギ ὁ「これ」）によって表され、一方、名詞主体は活性（有生）類名詞の純粋語幹と、代名詞語根 *s- を起源とする -s 語尾によって、表されたのである。客体は、もしそれが名詞類であれば、純粋名詞語幹によって、また、もしそれが代名詞類で、主体

と同一でないときには、補充法的代名詞語幹 *t-o によって表された。代名詞客体が、主体と一致する場合には、それは、活格動詞の代名詞主体と同じく、代名詞語幹 *s-e-（*s-o-）によって表され、それが再帰代名詞語幹としても機能し始めたのである。その再帰代名詞は、主格形なしのまま残ったのである。

始原的な語幹 *s-o は、絶対格として機能する指示代名詞語幹 *t-o に対する活格として使われたのである。その結果、*so は、指示代名詞 *t-o の補充法活用における男性単数主格形に変わったが、それは、古イ sá, ギ ὁ , ゴ sa に立証される。語幹 *s-e-（*s-o-）が、再帰代名詞としても使われ、その曲用を構築し始めると、この語幹は、「良き、自分の、血縁の（もの）」を意味する語根 *su-（cf. **СВОИ**, ラ 属 suī , リ 対 savė , 生 savęs , 造 savimì）と混淆したのである。「良き（もの）」と「自分の（もの）」の意味の近似性については、ロシア語 д о б р о「財産、不動産、所有物」 を参照。また、次例も参照、ギ ἐ ὐ 「良く、善、財」＜ *seu̯, 古イ su-「良く」 , **СЪ-МРЬТЬ** ＜ *su-mьr-ti-「（逐語的には）良き、自然な死」（cf. ブ у м р я о т с м ъ р т т а с и, ロ у м е р е т ь с в о е й с м е р т ь ю ＝リ sãvo smerčiù miřti［天寿を全うする］；原形 *su-mьr-ti「（逐語的には）良き死」は、意味的には、ロシア語の с в о я с м е р т ь「自然死」に近く、またこれに対立して、 н е с в о я с м е р т ь「不幸な、不自然な、非キリスト教徒的な死、例えば、自殺死」がある），**СЪЧАСТЬЕ** ＜ スラ祖 *su-čęstьie「（逐語的には）良き分け前、自分の持ち分」（次も参照、スラ祖 *su-božьie ＝ ポ zboże「穀物、穀粒、自分の食べ物、豊かさ」，上ソルブ zbožo「幸せ、平安」 , ウクライナ з б і ж ж я「穀物、財産」 ; cf. 古イ su-bhága-「自分の持ち分を有する、幸せな、富んだ」），**СЪНЪ**（cf. リ sūnùs, 古イ sūnúḥ, ゴ sunus ＜ *sū-n-us , sun-u-s「息子、（逐語的には）血縁の、自分の（者）」；家父長制時代からのロシアの概念範疇としての、不動

産、財産の意味での　д о б р о［財産、所有物］　の語は、息子達も含んでいた），**СВЕКРЪ**,　生　**СВЕКРЪВЕ**　＜　*sue̯-k'rū-　，　**СВЕКРЪ**　＜ *sue̯-k'r-（この場合の　*su̯-e-　の構成は、**СВОИ**　における語幹　*su̯-o-　と同じ）。語幹　*su̯-e-　あるいは　*s-e-　は、さらに、印欧語の姉妹の名称にも現れている　－　**СЕСТРА**, リ　sesuõ,　生　seseřs,　ラ　sor or,　古プ　swestro,　古イ　svásar-　，ゴ　swistar　を参照。

語根　*su-　からは、先ず最初に、代名詞的形容詞語幹　*su̯-o-　が作られ（**СВОИ**,　ラ　suus,　古ラ　sovos「自分の」，古イ　svás「自分自身の」，ゴ　swes「自分自身の」，ギ　ἑός　＜ *seu̯-os「自分の、自分自身の」を参照）、それに関連する生格（属格）形が作られたのである（cf.　ラ　属　suī）。生格形　**СЕБЕ**　は、恐らく、　*seu̯-es　から、与格形中の　**Б**　の一般化と共に発生してくるのであり（cf.　与　**СЕБѢ**　，これは、ラ　与　sibi　＜ *se-bh-ei̯　及び　古プ　与　sebbei　とも同系、§.30 参照）、この与格形をモデルにして、造格形　**СОБОЮ**　及び　所格形　**СЕБѢ**　が作られている。リトアニア語では、　*sev-　＜　*seu̯-　語幹が、再帰代名詞の曲用全体に一般化している。単数２人称の物主代名詞（男・単・主　**ТВОИ**）及び単数２人称の人称代名詞（生　**ТЕБЕ**,　与　**ТЕБѢ**　等）の曲用は、再帰物主代名詞（単・主　**СВОИ**）及び再帰人称代名詞（生　**СЕБЕ**,　与　**СЕБѢ**　等）の曲用をモデルにして構築されたものである。

§. 34　古代ブルガリア語の3人称動詞形の起源

始原的な活性類の名詞は全て、二つの文法格　－　活格（　-s　語尾を持つ)と絶対格（純粋語幹）　－　を持ち、また加えて様々な後置詞を付けて作るいくつかの状況格を持っていた（§.32 参照)。数の範疇の発達は弱く、複数専用形がなくて、むしろ状況語的副詞である状況格のいくつかが、大ないしは小（規模）の多数を表す形としても使われたのである。したがって、例えば、 *u̯l̥kʷ-ō（cf.　古イ　単・具　vr̥kā　型の共同格の形が、双数（cf.　双・主・対　**ВЛЬКА**）の意味も持ち、　*u̯l̥kʷ-o-i̯　(cf. 単・所　**ВЛЬЦѢ**）型の所格形が、複数（cf. 複・主　**ВЛЬЦИ**）の意味を、また不活性類名詞（例、双・主・対　**ИѦѢ**　＜　*i̯ug-o-i̯　参照）の場合には、それが双数の意味を兼ね備えたのである；-e　語尾を付けた子音幹曲用の所格形（cf. 単・所　**КАМЕН-Е**）も、双数形として使われている　－　ギ　双・主・対　π ο ι μ έ ν-ε「二人の牧人」　参照。

活性（有生）類名詞の状況語的な形が、絶対格の意味の複（双）数形として、すなわち、通常、遠心的動詞（他動詞）である活格動詞の非単一的な客体の表現として、あるいはまた、通常、非遠心的な動詞（自動詞）である不活格動詞の非単一的な主体の表現として、使われたのである。本来、活性（有生）類名詞だけが持っていた　-s　語尾の活格は、数範疇に対しては中立的であった。活格構造文の行為主の数は、主体の格形から現れてきたのではなく、単一主体の時には、純粋語幹ないしは　-t　語尾を持つが、非単一主体の時には　-nt　語尾を持つ述語の形から顕現してくるのである。数範疇の発達に伴い、名詞接尾辞や語尾の母音の交替によって、次第に、活格構文の単一主体の形と非単一主体の形とが区分されるようになるのである。活格（後に、主格）には、二つの異なる形、すなわち、一つは単数形、もう一つは複数形が現れ、それはその末尾の階梯によって区別されるのである。次例参照、 単・主　**СЪНЪ**＝古イ　sūnúḥ　＜　*sūn-u-s,　複・主　**СЪНОВ**

ѥ = 古イ sūnávaḥ < *sūn-eu̯-es (cf. ギ 単・主 πῆχυς「ひじ」, 複・主 πήχεις < *πᾱχ-εϝ-ες), 単・主 ГОСТЬ, ゴ gasts「客」, ラ hostis「敵」< *ghost-i-s , 複・主 ГОСТЬѥ, ゴ gasteis, ラ hostēs < *ghost-ei̯-es (cf. ギ 単・主 πόλις「都市」 , 複・主 πόλεις < *πολ-ε ι-ες), ギ 単・主 πούς < *ποδ-ς「足」, 複・主 πόδ-ες 。

語尾 -t の3人称単数及び語尾 -nt の複数3人称の活格形は、起源的には、不変化の動詞派生名詞であって、それが、次第に、動詞活用に吸収されて述語に変わるか、あるいはまた、曲用を発達させて分詞に転じたのである（ここで念頭においているのは、アオリスト3人称単数語尾 -ТЪ — 例、ОУМРѢТЪ, РАСПАТЪ, ПИТЪ — のことだけであって、現在3人称単数語尾 -ТЪ — 例、БЕРЕТЪ = 古イ bhárati「[彼は] 担う」< *bher-e-t-i — やインパーフェクト [未完了過去] 3人称単数語尾 -t — 例、古イ ábharat「[彼は] 担っていた」< *e-bher-e-t — のことではない)。3人称複数の非完了動詞形、すなわち、古いインパーフェクト（単純アオリスト、§.12 参照）形及び現在形と、非完了（能動現在）分詞形との関連性は、明らかである — 次例参照、 単純アオ・3・複 ПАДѪ < *pōd-o-nt, 現・3・複 ПАДѪТЪ < *pōd-o-nt-i (§.27 参照), 男・複・主 ПАДѪШТЕ < *pōd-o-nt-i̯-es (§.27 参照); 3・複 НЕСѪТЪ, 男・複・主 НЕСѪШТЕ; 現・3・複 БЕРѪТЪ (= 古イ bháranti , ギ φέρουσι , ドーリス φέροντι < *bher-o-nt-i) , ギ 未完・3・複 ἔ-φερον (= 古イ á-bharan「[彼らは] 担っていた」< augmentum syllabicum を伴う *bher-o-nt より、 §.12 参照), 男・複・主 БЕРѪШТЕ < *bher-o-nt-i̯-es (ギ φέροντες , ラ ferentēs と同系)。当初、接尾辞 -nt- の付いた述語と分詞は、能動性 — 受動性という特徴に関しては中立的であった。分詞接尾辞 -nt- と同系の接尾辞 -anza- を伴うヒッタイト語分詞は、他動詞から作るときには、受動の意味を持ち（例、adanza-「食べ

られた」、しかし、男・複・主 **ꙗдѫште** ［食べるところの］、またその同系語、ラ edentēs「食べるところの」＜ *H₁ed-e-nt-, ラ dentēs「歯、［逐語的には］食べるところの」＜ *H₁d-e-nt-; kunanza-「殺された」; appanza-「つかまえられた」)、自動詞から作るときには、能動の意味を持つ（例、akkanza-「死んだ」, huyanza-「逃げた」, panza-「動きだした」)。これは、それ以前の古い言語状況の痕跡であって、 nt 付きの述語や分詞の原形は、主体ないしは被（限）定項としての活性類名詞が、相（voice）的な表徴抜きの動詞的特徴（глаголен признак）を付与されたことを表したものである。

始原的な接尾辞 -nt- は、集約的な意味を持っていた。同接尾辞は、ギリシャ語では、形容詞最上級を作る接尾辞として立証される（スラヴ祖語の形容詞比較級の集約的な意味については、§.20 参照） ― 例、 νέος「若い」＜ *neu̯-o-s に対して、 νεώτατος「一番若い」＜ *neu̯-ō-t-n̥t-(集約語幹幹母音における延長、§.5, 6 参照)。同様の、形容詞の集約語幹は、 チ drahý「大切な、愛する」 に対して、 古チ drahúcí 「大変大切な」＜ スラ祖 *dorg-o-nt-i̯-o- ; bílý「白い」に対して、 bělúcí「非常に白い」＜ スラ祖 *bēl-o-nt-i̯-o- のような例から結論できるように、スラヴ祖語にも存在したのである。さらに、チ div divúcí「非常に奇妙な」, svět světúcí「全世界、世界中」, pravda pravdúcí「まぎれもない真実」, ロ тьма тмушая（無数、［逐語的には］ 真っ暗闇）のような語源的な固定表現形も参照。

集約語幹からは、指小（diminutive）名詞も作ることができた。ガータース（A.Gaters, 1954）は、ウラル・アルタイ諸語において、形容詞比較級の接尾辞が、指小名詞の接尾辞と同一であることに注目し、同時に印欧語の類型的な対応例も示したのである。スラヴ祖語では、接尾辞 -nt- の助けを借りて、動物及び人間の子供の名称が表された ― 次例参照、単・主 **отрочѧ**, 生 **отрочѧте**, **прасѧ**, **прасѧте**, **жрѣбѧ**, **жрѣбѧте**, **ослѧ**, **ослѧте**, **козлѧ**, **козлѧте**, **овьчѧ**, **овьчѧте**, **клюсѧ**,

КЛЮСѦТЕ「繋がれている家畜の子供、駄獣」。その他の印欧語にも、いくつかの、接尾辞 -nt- の指小的用法例がある。クレッチマー（P. Kretschmer, 1925）によれば、ラ Pīcentēs「中部イタリアのピーケーヌム Pīcēnum 地方の住民」 は、 pīcus「キツツキ」に由来するもので、「若いキツツキ、キツツキの子供」を表し（キツツキは、この地方の入植者を守護する、トーテム崇拝的な動物）、また、ローマ七丘の一つの名称である、ラ Aventīnus は、 avis「鳥」 の派生語 *aventes「若い鳥」 に起源を持つという — cf. 古高ド hrind < *kr-ent-o「若い雄牛、若い雌牛、若い有角家畜、（逐語的には）小さな角、小牛」（**КРАВА** や ラ cornū「角」 における語根 *kr-, k'r- から）。揚意（ēlātīvus）級（最上級）語幹が、特徴の増大を表す一方（例、 スラ祖 bēl-o-nt-i̯-o- = 古チ bělúcí「大変白い、真っ白な」）、生物の名称を表す語幹は、生物自体の増大・増殖、すなわち、生物の生長と増殖の時期を表したのである。最初は、能動現在分詞は、増大的な動詞特徴を表す動詞派生形容詞である — 次例参照、古ロ **МОГѢТ-ЬНЪ** < スラ祖 *mog-o-nt-「強力な、力のある」（cf. 現・単・1 **МОГѢ, МОЖЕШИ**), **СЛОВОУТ-ЬНЪ**［ < スラ祖 *slou̯-o-nt-「高名な、誉れ高い」（cf. **СЛОВѢ, СЛОВЕШИ**), チ mrzutý < スラ祖 *mьrz-o-nt-「厭うべき、忌々しい、むかつくような」（cf. **МРЬЖѢ, МРЬЗИШИ**「うんざりさせる、嫌悪をもようさせる」）。スラヴ祖語の能動現在分詞の原形、例えば、 *ber-o-nt-i̯-o- > **БЕРѢШТ-** における i 指標の起源については、 §.27 参照。

-Т- 指標を付けた受動過去分詞（例、男・単・主 **ПИТЪ, ПѢТЪ, РАСПАТЪ, ПОЖРЬТЪ**「飲み込まれた」）と **-ТЪ** 語尾のアオリスト３人称単数の動詞（例、**ПИТЪ**「飲んだ」, **ПѢТЪ**「歌った」, **РАСПАТЪ**「磔にした」, **ПОЖРЬТЪ**「飲み込んだ」）の発生源である、接尾辞 -t- を持つ名詞も、相的特徴付けを持たない動詞的特徴の指示を含んでいた。一方で、接尾辞 -t- のある受動過去分詞を作り、もう一方で、語尾 **-ТЪ** の２・３人称単数アオリスト形を作る古代ブルガリア語の動詞類の間には、ほぼ完

全な一致がある。時に、受動過去分詞形が2・3人称アオリストと語根母音階梯に差異を持つことはある　－　例、単・3　**прострѣтъ**　に対して、受過分　男・単・主　**прострьтъ**。

接尾辞　-t-　のある動詞派生名詞は、人が動詞的特徴を付与されていることを表した。動詞的特徴の付与は、通常、行為がすでに遂行済の場合である。それ故、接尾辞　-t-　の付いた古い名詞は、-**тьѥ**　語尾の動（詞派生）名詞を作る一方で（例、アオ・3・単　**оумрѣтъ**　に対して、**оумрьтьѥ**；アオ・3・単　**питъ**,　受過分・男・単・主　**питъ**　に対して、**питьѥ**；アオ・3・単　**житъ**　に対して、**житьѥ**；アオ・3・単　**ѧтъ**, 受過分・男・単・主　**ѧтъ**　に対して、　**ѧтьѥ**；アオ・3・単　**пѣтъ**, 受過分・男・単・主　**пѣтъ**　に対して、**пѣтьѥ**）、3人称単数アオリスト形か受動過去分詞形に変わったのである。もしも他動詞的な特徴を受け取るのが主体であれば、活格構文では文法的客体の役割を果たす絶対格はなくなる、すなわち、接尾辞　-t-　の付いた名詞は自動詞に転じ、そこから受動過去分詞が発生することになろう。もしも他動詞的な特徴を受け取るのが行為の客体であれば、すなわち、活格構文に絶対格である行為の受け手も存在するのであれば、接尾辞　-t-　の付いた名詞は、他動詞述語として、すなわち、動詞3人称アオリストとして、使われることになろう。主体が自動詞的特徴を付与された場合にも、3人称アオリストの動詞が得られよう。

t　指標の受動分詞がある印欧諸語（古代インド語、スラヴ祖語、ギリシャ語、バルト語、ゲルマン語）　－　ギ　κλυτός「知られた」＝古イ　śrutáḥ「聞知された」, λεκτός　＝ラ　lectus「選ばれた、優れた」, ゴ　wasiths「を着た」, リ　siūtas「縫われた、刺繍のある」＝ブ　шит、ただし　古ブ　**шьвенъ**　－　では、これら受動分詞は、基本的には、通常始原的な活格活用の継承である、他動詞（遠心的動詞）から作られている。通常古い不活格活用の継承である自動詞（非遠心的動詞）は、基本的には、接尾辞　-t-　を持つ受動過去分詞を形成しない。本来、接尾辞　-t-

の付いた分詞は、相的表徴は持っていない。ラテン語のいくつかの過去分詞、例えば、praeteritus 「過ぎ去った、過去の」, occāsus「沈んだ」(sōl occāsus「沈んだ太陽」) は、受動的な意味は持たない。自動詞から作る、古代インド語の、例えば、gatá- ＜ *gʷm̥-to- 「去ってしまった、過ぎ去った」のような接尾辞 -t- 付きの分詞も、受動の意味は持たない － cf. 語根については、ラ 現・1・単 veniō, ゴ qima「来る」＜ *gʷem- を参照。時が経つに連れて、**БОГАТЪ, КРИЛАТЪ, БРАДАТЪ, РОГАТЪ** (cf. ラ barbātus「ひげのある」, cornūtus 「角のある」, aurītus 「耳のある、耳の長い」) のような、名詞派生形容詞も、接尾辞 -t- を以て作られた。これらは、人物（事物）が基の名詞によって決定された特徴をもつことを表したのである。

最初は、3人称単数動詞の意味を持った、接尾辞 -t- (-to-) 付きの述語的動詞派生名詞は、純粋語幹、すなわち絶対格として使われた。無客体活格構文においては、この述語的名詞は、自動詞述語の意義を獲得し、そこから、受動過去分詞（動詞派生形容詞）(**ОУБИТЪ**, 古イ hatá ＝ ギ φατός 「殺された」＜ *gʷhn̥-t-o-、すなわち、ギ φονεύω「殺す」と同語根；ギ κλυτός ＝古イ śrutá-, ラ in-clutus 「知られた」＜ *k'lu-t-o- のタイプの分詞）と中動的自動相の3人称単数過去形（ギ 中動・未完・3・単 ἐφέρετο＝ 古イ á-bharata「(自分のために) 運んだ」＜ *bher-e-to- に、後に augumentum syllabicum を付加したもの［§. 12 参照］ － のタイプの過去形）が作られたのである。活格の主体（語尾 -s を伴う）と絶対格（純粋語幹）の客体を持つ活格構文においては、接尾辞 -to- を持つ述語的動詞派生名詞は、他動詞的な意義を持つ3人称単数過去形に発展した。次例参照、アオ・3・単 **ѦТЪ, ОУМРѢТЪ, ПИТЪ, ПѢТЪ, ЗАЧѦТЪ, ПРОКЛѦТЪ, ПРОСТРѢТЪ, ПОЖРЪТЪ, ПОВИТЪ**、これらの大部分は、他動詞派生である。

スラヴ祖語の3人称単数アオリスト語尾 -tъ は、恐らく、-tos 語尾に起源を持ち（§. 2 参照）、それは、述語的名詞の純粋語幹に付加された

有生類名詞の始原的な活格指標　s（すなわち、後の単数主格語尾　-s）を含んだものである。恐らく、活格構文における述語的動詞派生名詞は、格の上では構文の主語と一致していたのである。実在しているのが、印欧語の絶対（独立）分詞構文（古代ブルガリア語の絶対与格 datīvus absolūtus、ギリシャ語の絶対属格 genitīvus absolūtus、古代インド語の絶対処格　locātīvus absolūtus.　ラテン語の絶対奪格 ablatīvus absolūtus）型のシンタグマであり、文証される諸言語では、これは状況語的な従属文の意義で使われている。かつての語尾　-s　の痕跡は、古プロシャ語の過去形に生き残っている　－　アオ・3・単　billāts「言った」，immats「取った」を参照。アオリスト3人称単数語尾　-tъ　と不活格活用の2人称単数語尾 -th（cf. 古イ　完・2・単　vēttha, ゴ　現・2・単　waist，ギ　完・2・単　*οἶσθα*　＜　*u̯oi̯d-th-「君は知っている」）は、混淆してしまっている。そのため、3人称単数アオリストで　-tъ　語尾を持つ動詞にあって、-tъ　は、2人称単数アオリスト語尾としても使われだしたのである。　－　cf. アオ・2・単　**ѧтъ, проклѧтъ, оумрѣтъ**　。この混淆は、スラヴ祖語の、その他の活用の2・3人称形が、語末子音の脱落後、一致してしまったという状況によっても助けられたのである。

§. 35 古代ブルガリア語の1・2人称人称代名詞と動詞語尾の起源

始原的な人称代名詞と動詞活用における始原的な人称語尾の使用は、1つは、話者（1人称）と非話者（2・3人称）の対立、もう1つは、対話者（1・2人称）と非対話者（3人称）の対立を前提としたものである。先ず最初に現れたのは、1・2人称範疇の場合の、人称代名詞と、起源的に代名詞的な動詞語尾である。当初、3人称形は、特別な代名詞語尾を持たず、動詞の純粋語幹か、あるいはまた、動詞派生名詞（分詞）の純粋語幹であった。3人称の人称代名詞も、さらに後の発生である。古代ブルガリア語においても、真の3人称代名詞は未だ現れていない。3人称代名詞として使われているのは、指示代名詞である（男・単・主 **сь**, 生 **сего**, 複・主 **си**, 男・単・主 **тъ**, 生 **того**, 男・単・主 **онъ**, 生 **оного**, 複・主 **они**）。代名詞の **онъ** が、人称代名詞として使われるとき、その斜格の機能を務めるのは、承前代名詞の形である（男・単・生 **его**, 与 **емоу**, 複・生 **ихъ**, 与 **имъ**）。

活格活用動詞の1人称単数指標は、中間的代名詞語根 *m- であったが（§. 30 参照）、この語根から、1人称単数の人称代名詞斜格（生 **мене**, 与 **мьнѣ**, 対 **мѧ**, cf. 古イ 属 máma, mē, 与 máhyam, mē, 対 mā́m, mā ; ギ 属 ἐμοῦ, μοῦ, 与 ἐμοί, μοί, 対 ἐμέ, μέ ; ゴ 対 mik , 与 mis ; ラ 属 meī, 与 mihi, 対 mē ）と1人称複数の動詞形（**есмь** < *es-m-i, 1・複 **есмъ** < * es-m-os 参照 ; cf. 古イ 現・1・単 ásmi , ギ εἰμί, リ esmì, ラ sum , ゴ im「ブ съм」; 古イ 現・1・複 smáḥ , ギ ἐσμέν, ラ sumus , リ esmè, ẽsme, ゴ sijum 「ブ сме」）が作られたのである。1人称単数人称代名詞は、補充法（suppletion）的な曲用を行った — 絶対格は、後の斜格の基になった語根 *m- から作られたのに対

して、後に主格に変わった活格は、語幹 *eg'- から作られたのであり、この場合の e は、恐らく、**Е-СЕ** や ブ e-то（＝ロ вот）と同系の指示的小辞（deictic particle）であり（ギリシャ語１人称単数人称代名詞斜格のトーン・アクセント強意形である 属 ἐμοῦ, 与 ἐμοί, 対 ἐμέ は、これと同一の小辞を伴う)、また、g （摩擦音ヴァリアント g' あり）は、単・生 **ТОГО** の **Г** と同系の指示的小辞であり（cf. ゴ 対 mik ＜ *me-g-)、先行語の強調を行う後置要素であった ― **ОНЪ ЖЕ**（ギ ὁ δὲ），**ѢКОЖЕ**（＝ギ ὡς，ὡς δὲ), 男・単・主 **ИЖЕ**（＝ギ ὅς）における **ЖЕ** を参照, cf. τοῦτο γε「それ（こそ)」, ὅρα γε「(ともかく）見よ」, εὖ γε「大変見事に」 における γε 。

１人称単数主格 **АЗЪ** に最も近い対応形は、古イ ahám ＜ *e-g'-H_2-om（g'H_2 ＞ g'h ＞ h の変化を持つ)、また同じく、ギ ἐγώ（cf. ホメロスの言語における ἐγών ＜ *e-g'-o-H_2-m), ラ ego ＜ *e-g'-H_2 であり、これらの m や H_2 は、強調のための１人称指標である。前者の指標は、人称代名詞の斜格語根 *m- （例、生 **МЕНЕ** 参照）と同系であり、一方、H_2 の要素は、不活格（完了）活用の１人称単数語尾と同一の要素である ― ギ 完・１・単 οἶδα「知っている」＝ 古イ véda ＜ *u̯oi̯d-H_2e を参照 ; cf. 現・１・単 **ВѢДѢ**, スラ祖 *u̯oi̯d-a-i（現在指標 i を付加して、*u̯oi̯d-H_2-e ＞ *u̯oi̯d-a から作ったもの)。完了活用の１人称単数形に H（H_2）の語尾があることは、ヒッタイト語 sakhi（šākḫi)「知っている」が証明しており、この場合の i は、現在指標であって（§. 27 参照)、現・１・単 **ЕСМЬ** ＝ ギ εἰμί, 古イ ásmi , リ esmĩ ＜ *es-m-i「私はある」の i 語尾と同系のものである。また、この H_2 指標を似て作られたのが、ギ φέρω, ラ ferō , ゴ baíra「運ぶ」 ＜ *bher-o-H_2 タイプの１人称単数現在形であり、この形は、恐らく、最初は中動相的な意味（нося си［自分（のため）に運ぶ]）を持っていた可能性がある。１人称単数現在 **БЕРЖ** のような形

は、*bher-o-H_2-m に起源を持ち、これは、1人称指標 m が、1人称単数 *bher-o-H_2 > *bher-ō の形に付加されたものである。Cf. *bher-o-H_2-m に補足的現在指標 i を付加した、古イ 現・1・単 bhárāmi「担う」。古代インド語の1人称複数現在形 bhárāmaḥ「私たちは担う」は、1人称単数現在形の語幹 *bher-o-H_2-m > *bhárām に、複数指標 es (os) を補って作ったものである。ѧѢ の語尾 -ѣ は、恐らくは、-om に起源を持つものであるが (cf. 古イ ahám < *eg'-H_2-om)、語頭母音 ѧ は、ギ ἐγώ, ラ ego, リ aš, ゴ ik「私」< *e-g'- における古い e に対応しない。主格 (古い活格) の語幹 *e-g'- は、恐らく今一度指示的要素 e による補強を受け (cf. ギ ἐ-μοῦ < *e-mo-s-)、その後 *ēg'- < *e-eg'- が、スラ祖 *i̯āzъ を与えた可能性がある — cf. ブ方言 йаз, йа, êз, ロ я, セ・ク jâ, ス jàz, jâ, 古チ jáz, ポラーブ joz, jo。

活格構造の言語の特徴は、複数専用語尾の欠損である。それに代わって、動詞活用で支配的なのは、語幹の補充法 (suppletion) — 単数形と複数形が別々の語幹から形成される — である。印欧語 (古代ブルガリア語も) は、始原的な活格構造言語の継承であるが、ここでは、単数と複数の動詞語幹の間の補充法構成は、消失してしまっている。しかし、いわゆる不規則動詞における、単数語幹と複数語幹の語根母音の階梯の違いは、始原的な状態の痕跡であり、これらの動詞は、過去の言語史の段階の特徴を包含している点で格別な動詞である。Cf. 古イ 現・1・単 ás-mi「私はある」< *H_1e s-m-i, 2 ási, 3 ásti に対して、1・複 smáḥ < *H_1s-m-es, 2 sthá, 3 sánti ; ゴ 1・単 im〔be 動詞〕, 2 is, 3 ist に対して、1・複 sijum, 2 sijuth, 3 sind ; ギ アオ・1・単 ἔδωκα「与えた」< *deH_3-H_2-m (これに、augmentum sillabicum を伴う), 2 ἔδωκας, 3 ἔδωκε に対して、1・複 ἔδομεν < *dH_3-H_2-m-, 2 ἔδοτε, 3 ἔδοσαν ; アオ・1・単 ἔθηκα「置いた」< *dheH_1-H_2-m, 2 ἔθηκα

ς，3 ἔθηκε に対して、1・複 ἔθεμεν ＜ *dhH₁-H₂-m-, 2 ἔθετε, 3 ἔθεσαν ; ギ 現・1・単 εἶμι「行く、来よう」＜ *H₁ei̯-m-i, 2 εἶ, 3 εἴσι に対して、1・複 ἴμεν ＜ *H₁i-m-, 2 ἴτε, 3 ἴᾱσι ; 古イ 完・1・単 vēda「知っている」＜ *u̯oi̯d-H₂e. 2 vēttha, 3 vēda に対して、1・複 vidmá ＜ *u̯id-mo , u̯id-me, 2 vidá, 3 vidúr (cf. 完・1・単 οἶδα, 2 οἶσθα, 3 οἶδε に対して、1・複 ἴσμεν, 2 ἴστε, 3 ἴσᾱσι) ; ゴ 現・1・単 wait「知っている」, 2 waist, 3 wait に対して、1・複 witum , 2 wituth, 3 witun ; 過・1・単 nam「取った」＜ *nom-, 2 namt, 3 nam に対して、1・複 nemum ＜ *nēm-, 2 nemuth, 3 nemun ; ヒットタイト 完・1・単 sakhi (šākḫi) (a ＜ o を伴う)「知っている」, 2 sakti (šakti), 3 saki (šakki) に対して、1・複 sekweni (šekueni), 2 sekteni (šekteni), 3 sekanzi (šekkanzi) (語根母音の正常階梯、すなわち e 階梯)。動詞の単数語幹と複数語幹の古い差異の古代ブルガリア語における唯一の残滓は、3人称複数形 **сѫтъ** とそれに連繫する能動現在分詞形 (男・単・主 **сѫ**, 生 **сѫшта** ; §. 34 参照) が、語根母音の階梯において、残りの全現在形 (例、現・1単 **есмь**, 2 **еси** 等) に対立する非テーマ (無幹母音) 助動詞の現在活用である。

当初、活格活用の単数1人称と複数1人称の形の間に存在した差異は、語根母音階梯にだけあった。どちらの形も、語尾 -m を持ち、それに対して後に複数 (多数性) 指標 s (これに起源については、§. 37 参照) が付加され、その結果、より新しい複数形が得られたのである。Cf. 現・1・単 **есмь** ＜ *H₁es-m-i, 1・複 **есмъ** ＜ *H₁es-mo-s ; 現・1・複 ferimus ＜ *bher-e-mos ＝ 現・1・複 **бєрємъ** における、ラテン語語尾 -mos ＞ -mus も参照。1人称複数語尾 -mo-s ＞ **-мъ** と並んで、 -mo (**-мо**) の語尾も存在したが、これは、一部の古代ブル

ガリア語文献にだけ文証されるもので、非テーマ動詞の場合である（例、現・1・複　ѧдѧмѡ）；セルビア・クロアチア語、スロヴェニア語、ウクライナ語、スロヴァキア語、そしてブルガリア語西部ウ方言（ѫ ＞ y の変化を持つ）では、また、中世の西部ロシアのテクストでも同じく、 -mo　は、1人称複数一般の語尾に変わっている。恐らく、 -mo　は、例えば、古イ完・1・複　vidmá　が　*u̯id-mo の継承である場合、古い不活格活用の複数1人称語尾の継承であろう。複数1人称のもう一つの語尾は、 -me ないしは　-mes （複数指標 s を補っている）である。中世ブルガリア語の非テーマ動詞複数1人称形　вѣме, дѧме, есме、имѧме　を参照、この複数1人称語尾　-ме　は、ここからさらに後に過去語尾　-хомъ　＞　-хме　に転移し、また同じく、1人称単数現在で語尾　-м　を取るテーマ（幹母音）動詞の現在形にも転移したのである、　cf. ブ　現・1・単　д а в а м，1・複　д а в а м е。中世ブルガリア語の　-ме　語尾は、 -me, -mes　のどちらからも出た可能性がある　―　ドーリス　現・1・複　φέρομες「運ぶ」，リ　現・1・複　vẽžame「(乗せて) 運ぶ」参照。

活格構造言語の特徴は、1人称複数に対して二種類の異なる形が存在することである。一つは、内包形（inclusive form　2人称を包摂する形）であり、「君と私（君達と私）」を表すのに対して、もう一つは、外包形（exclusive form　2人称を除外する形）であって、「彼と私（彼らと私）」を表す。1人称代名詞の内包形と外包形は、スラヴ祖語（古代ブルガリア語）や他の印欧諸語が継承した、活格構造の形態・統語組織の原形にも存在した。1人称複数代名詞の内包形と外包形の違いは、文証される印欧語に（古代ブルガリア語にも）現れている。代名詞のかっての活格と絶対格が、異なる語根から作られたことを示唆する唯一の補充法曲用が立証されている。

内包形は、代名詞語根　*u-　から作られ、これは、本来、一見して即座に捕捉不能なものに関係する語根である（§．25 参照)。双数的な意味も持っていたこの語根からは（§．32 第3項参照)、1人称複数の、補充法的内包

形代名詞曲用の活格だけが作られ、それは後に主格に転じた。古イ　1・複・主　vayám「私達」を参照　－　これは、*u̯-e-, u̯-o- 語幹に、古い所格的後置詞 i（§．31 参照）に起源を持つ多数性指標 i と古い中間語根　*m- に起源を持つ1人称指標　m（§．30 参照）をもって補強したもの。Cf. ヒッタイト　1・複・主　wes（u̯ēš）「私達」は、*u̯-e-　の語幹に、多数性指標　s（これに起源については、§．37 参照）を付加したものであり、また同じく、ゴ　weis「私達」も、語幹　*u̯-e-　と二つの多数性（複数）指標　i　と　s　から作ったもの。双数1人称形も、1人称内包形語幹 *u̯-e-「君と私（君達と私）」から作っている。　－　次例参照、双・主　ВѢ　＜　*u̯-ē（幹母音の延長を伴う、§．5　参照）；リ　双・主・対　vè-du ＝ゴ wit「私達二人」（語幹 *u̯-e- を語根　*du-「二つ」をもって補強したもの　－　cf. ДѢВА, ラ　duo, ギ　δύω ＜　*du-ō「二つ」）。u　の要素は、双数及び複数1人称の動詞語尾でもあった　－　次例参照、現・1・双　ЕСВѢ（この語尾の -ВѢ　は、双数主格　ВѢ　と同じもの），リ　ẽsva, esvà「私達二人はある」（複数指標　s　を補った　古イ　sváḥ　＜　*H₁s-u̯e-s　と同系），ヒッタイト　現・1・複　ep-wen-i（ēp-u̯en-i）「掴む、取る」（-u̯e-n〔以下を参照〕を現在指標　i〔§.27 参照〕によって補強した1人称複数語尾）。

1人称複数代名詞の同じパラダイムの斜格は、語根　*n-　から作られたが、これは、本来、外包的な意味（彼と私、彼らと私）を持っていた。同語根は、「彼（彼ら）」だけも表していた；これに指示的要素　e（o）　を補強して、指示代名詞　ОНЪ ＜　*o-no-　が作られ、それが、古代ブルガリア語で3人称代名詞としても用いられるのである　－　cf. リ　añs「それ、彼」，古イ　ana-「あの、その」，　古高ド　ëner ＝ド jener「あの、その」。ギリシャ語中動相1人称複数語尾　-μεθα（例、現・1・複　λυόμεθα「解ける、ほどける」）は、1人称代名詞語幹　*m-e-　と始原的な不活格活用2人称単数語尾　-tH₂e ＝　ギ -θα（cf. 完・2・単　οἶσθα「君は知っている」）から構成された合成内包指標だと見なすべきである；

完了形及び中動相両方の原形としての始原的な完了活用については、§．15 参照。古代インド語の１人称複数語尾 -mahe（例、中動・現・１・複 brūmáhe「話す」）も、同様の説明がなされるべきであり、この語尾は、th ＞ dh の有声化（原因不明）と古い現在指標 i を補った -me-tha-i から作ったものである。Cf. 古代インド語中動相〔反射態〕１人称双数語尾 -vahe ＜ *u̯e-tha － この場合の -tha（起源的には、不活格活用動詞の２人称語尾である -tH₂e から）は、内包指標を補強する役割を果たしている。ギリシャ語中動相１人称複数の完全語尾 -μεσθα（アッティカ方言の 現・１・複 φραζόμεθα「考える」に対して、ホメロスの言語における φραζόμεσθα を参照）においては、合成中動語尾 -me-tha ＜ -me-tH₂e の１人称指標 -me は、多数性（複数）指標 s（これの起源については、§．37 参照）による補強を受けたものである。ヒッタイト語中動相１人称複数語尾 -wasta（-u̯ašta）（例、現・１・複 eswastati（ešuu̯ašta〔ti〕）「座っている」，過・１・複 arwastat（aru̯aštat）「立っていた」 参照）は、始原的な内包指標 *u̯e 「二つ」 ＞ 「君と私」を、複数指標 s と始原的な不活格活用２人称指標 tha ＜ tH₂e とによって補強したものである。内包・双数的要素 u̯e と不活格２人称語尾 -tha の逆配列によって得られたのが、古代インド語中動相２人称複数語尾 -dhve ＜ -th-u̯e（原因不明の th ＞ dh の有声化を伴う）である － 次例参照、中動・現・２・複 bháradhve 「君達は自分のために運ぶ」。

-t-the に起源を持つ、ギリシャ語中動相２人称複数語尾 -σθε（次例参照、現・２・複 παιδεύεσθε「君達は教育を受ける」）は、複数２人称語尾 -te（次例参照、現・２・複 ΒΕΡΕΤΕ＝ ギ φέρετε「運ぶ」）の内の t の要素を、不活格活用２人称語尾 -θε（-θα に代えて） ＜ -tH₂e によって補強したものと見なすべきである（ギリシャ語では、能動相２人称複数語尾 -te の影響によって、 -tH₂e ＞ -θα に代わって、 -θε 語尾が分離独立した；この語尾の起源につい

ては、以下を参照)。ギリシャ語中動相1人称複数語尾 -μεθα < -me-tH₂e 及び2人称複数語尾 -σθε < -t-tH₂e の起源を解明する上で、有効な類型的対応例となるのが、南アメリカ・インディアンの言語グアラニ語の活格的文法構造であるが、ここでは、不活格活用の2人称指標は接頭辞 nde-、活格活用2人称複数指標は接頭辞 pe-、不活格活用1人称複数内包指標は接頭辞 na-nde- であるのに対して、接頭辞 pe-nde- は不活格活用2人称複数指標である。

ギリシャ語1人称複数語尾 -μεν (次例参照、現・1・単 παιδεύομεν「私達は教育する」) は、語尾 -μεθα とは違って、当初は外包的な意味 (彼と私、彼らと私) を持っていたのであり、1人称語幹 *me- とそれに指示的指標 n を加えたものから成っている。この n は、男・単・主 ОНЪ < *o-no-, 生 ОНОГО, 複・主 ОНИ の構成要素の n と同一のものである。ヒッタイト語1人称複数語尾 -wen (-u̯en) (例、現・1・複 epweni (epu̯eni)「私達は取る」、 i は現在指標、§. 27 参照) も、意味的には外包的であって、双数語幹 *u̯e- に ОНЪ の Н と同系の指示指標 n を付加したものから成っている。

1人称複数の古い外包的人称代名詞語幹の機能を果たしたのが、双数的な意味も持っていた古い共同形 (социативна форма) *nō (§. 5 参照) である。次例参照、 双・1・対 НА「私達二人」 < *nō, 双・与・造 НАМА < *nō-mō (§. 32 第4項参照), 複・与 НАМЪ < *nō-mo-s (同所参照), 所 НАСЪ (§. 32 第3項参照)。双数所格形 НАЮ は、生格形としても使われたが (私達の所にあるものは、私達のものである)、*nō に所格的指標 i (§. 31 参照) と双数・複数的指標 u (o 階梯では ou̯) を加えて得られたものである — cf. 複数所格における u の要素 *nō-s-u > НАСЪ, *u̯ḭkʷ-o-i̯-s-u > ВЛЬЦѢХЪ。複数対格形 НЪ は、*n-ō-n-s (-ōns > Ъ の変化については、§. 2 参照) から作ったもので、 -n は対格語尾 (§. 38 参照)、 s は複数指標である ; cf. ラ 複・主・対 nōs「私達は、私達を」, 複・与・

奪 nōbīs ＜ *nō-bhi-s では、-bhi は対置後置詞（§．30 参照）、s は複数語尾である。ゴート語対格 uns「私達を」，属 unsara「私達の」等は、*n̥-s から作ったもので、s は複数指標である。Cf. 古イ 具 asmā́bhiḥ「私達と」＜ *n̥-s-mō-bhi-s, 処 asmā́su「私達の所で」＜ *n̥-s-mō-s-u では、複数指標を含む語幹 *n̥-s- が、1 人称語幹（起源的には、中間語幹、§．30 参照）*mō- ないしは *mē- によって補強されたもの。これは、双数（複数）的な意味も持っていた、*me-（*mo-）語幹の古い共同格である。Cf. レスボス 対 ἄμμε，ドーリス ἄμέ ＜ *n̥-s-me の me は、補強 1 人称語幹。複数主格 МЫ「私達は」は、*mōs に起源を持ち、*mō- は双数（複数）的な意味も持っていた古い共同格、s は二次的に付加された複数指標である。Cf. リ 複・主 mẽs「私達は」＜ *mē-s 。

「君と私、君達と私」の意味を持っていた内包的複数 1 人称代名詞の語幹 *u̯-e-は、2 人称複数代名詞語幹としても使われた ― 次例参照、対 ВЫ ＜ *u̯ō-ns, 主 ВЫ ＜ *u̯ōs，双・主・対 ВА ＜ *u̯ō, 複・与 ВАМЪ ＜ *u̯ō-mo-s，双・与・造 ВАМА ＜ *u̯ō-mō, 複・造 ВАМИ ＜ *u̯ō-mī；cf. ラ 主 vōs ＜ *u̯ō-s, 対 vōs ＜ *u̯ō-ns, 古プ 対 wans ＜ *u̯ō-n-s-, ラ 与・奪 vōbīs 等。2 人称複数代名詞の補充法曲用の古い活格は、語幹 *i̯-u- から作られたものであり、この場合の i は、近接性を表す代名詞語根（§．27 参照）であり、u は、双数性（複数性）指標である。Cf. ゴ 複・主 jūs「君達」、これと同系のものに、リ jũs「君達」＜ *i̯-ū-s があるが、この s は、多数性（複数）の補足的付加指標であり、語幹は、かっての共同格の形と合一した双数形に見られるように、語幹末母音の延長を伴っている（§．30 参照）。Cf. 古イ 複・主 yūyám「君達」＜ *i̯-ū- は、1 人称複数代名詞の形 vayám（これの起源については、上を参照）から借用した補足的接尾辞 -yam を伴う。古代インド語や、リトアニア語では、当初活格だけに特有であった語幹 *i̯-u（i̯-u-s）が、曲用全体に一般化するが（次例参照、古イ 具

yuṣmā́bhiḥ「君達と」 < *i̯-u-s-mō-bhi-s の接尾辞 -mō は、1人称複数具格形 asmā́bhiḥ から借用したもの；リ jumìs < *i̯-u-m-i-s、§. 32 第2項参照)、スラヴ祖語では、曲用全体に一般化したのは、*u̯ō- 語幹である － cf. 主 **вѣ** =ラ 主 vōs < *u̯ō-s，対 **вѣ** =ラ 対 vōs < *u̯ō-n-s；古プ 対 wans も参照。対格 izwis「君達を」< *i-s-u̯e-s タイプの、ゴート語斜格形は、代名詞語根 *i-「近くに」に複数指標 s を加えたものと、語幹 *u̯e- にこれまた複数指標 s を加えたものの合成である。

代名詞の1人称単数形を作った中間指標 m (例、生 **мене**, 与 **мѣнѣ**, ギ 対 *ἐμέ, μέ*, 与 *ἐμοί, μοί*, ゴ 対 mik, 与 mis) に対立したのが、代名詞2人称単数形 (生 **тебе**, 与 **тебѣ**, ラ 与 tibī，対 tē, ゴ 対 thuk, 与 thus) と指示代名詞形 (男・単・主 **тъ**, 生 **того**, 与 **тому**, ギ 対 *τόν*, 与 *τῷ*, 古イ 対 tám, 与 tásmai, ゴ 対 thana，与 thamma 型のもの － これは、ブルガリア語史の上では、3人称代名詞形として使われるに至っている) を作る周辺指標 (п е р и ф е р е н п о к а з а т е л) t である。男・単・主 **тъ**, 生 **того** 型の指示代名詞の原形と2人称単数代名詞の原形との違いは、語幹にあるのではなくて (語幹は両者とも同じ)、語尾にある。すなわち、語幹 *te-(*to-) は、人称代名詞語尾を伴えば、人称代名詞曲用を行い、指示代名詞語尾を伴えば、指示代名詞曲用を持つに至るのである － 次例参照、 男・中・与 **тому**「これに、彼に (対して)」< *t-o-mo-u̯ (§. 32 第4項参照), 与 **тебѣ**「君に」< *t-e-bhōi̯ < *t-e-bho-ei̯ (§. 31 参照)。

古い指示代名詞曲用の活格は、代名詞純粋語幹 *s-o である － ギ 男・単・主 *ὁ*, 古イ sá，ゴ sa「その、それ、彼」 を参照。当初、s の要素は、動詞活格活用の2人称単数の語尾でもあった － 次例参照、現・2・単 **вѣси** < *u̯oi̯d-s-, **береши** < *bher-e-s-, cf. 古イ 現・2・単 bhárasi, ゴ baíris「君は運ぶ」< *bher-e-s-, ラ fe

rs「君は運ぶ」＜ *bher-s-。Cf. ギリシャ語現在２人称単数語尾 -ε ι ς 、例えば、ἄ γ ε ι ς ＜ *H₁eg'-e-i̯-s の場合は、現在指標 i の後ろに、代名詞要素 s を加えたもの。恐らく、古代ブルガリア語２人称単数語尾 -СИ（ВѢСИ 参照）及び -ШИ（БЕРЕШИ 参照）は、中動相現在形に特有の語尾 -sai の継承である － cf. 古イ 中動・現・２・単 bhárase ＝ギ φ έ ρ ε α ι ＜ *bher-e-sai̯、この場合の i は、古ロ 現・２・単 БЕРЕШЬ＝ 古イ bhárasi ＜ *bher-e-si にも継承されている現在指標である。スラヴ祖語の２人称単数語尾 -sai̯ の末尾の -ai̯ は、古い不活格活用動詞の１人称単数現在から移されたものである － cf. 現・１・単 ВѢДѢ ＜ *u̯oi̯d-ai̯ , ２ ВѢСИ ＜ *u̯oi̯d-s-ai̯。古代ブルガリア語の現在２人称単数語尾 -СИ（ -ШИ） に一番近い対応形に当たるのが、古プロシャ語の語尾、例えば、現・２・単 assai ＝ЕСИ「君はある」, waissei ＝ВѢСИ「君は知っている」, ēisei「君は来る」のような形における -sai （-sei）である。

スラヴ祖語１人称単数現在 *u̯oi̯d-a-i̯ から現在指標 i （§．27 参照）を排除すれば、*u̯oi̯d-a （＝古イ 完・１・単 vēda , ギ o ἶ δ α「私は知っている」）の形が残ることになるが、これは、*u̯oi̯d-H₂e （§．3 参照）に起源を持っている。Cf. 古イ 中動・現・１・単 bhare「自分のために運ぶ」＜ *bher-H₂e-i̯ 、この i は現在指標。完了形と中動相の形が、共に始原的な完了活用に起源を持つことについては、§．16 参照。ギリシャ語の中動相１人称単数現在語尾 -μ α ι（例、φ έ ρ ο μ α ι「自分（のため）に運ぶ」）は、不活格活用１人称単数語尾 -a ＜ -H₂e に現在指標 i を補ったものと始原的な活格活用１人称単数語尾 -m との合成だと見なすべきである、cf. 現・１・単 ЕСМЬ。この語尾 -ai̯ は、始原的な１人称単数の完了ないしは中間受動（medio-passive）語尾 -ai̯（-mai̯）から、中動相活用２・３人称単数及び３人称複数にも移された（次例参照、ギ 現・２・単 φ έ ρ ε α ι ＜ *φ έ ρ ε σ α ι, ３・複 φ έ ρ ο ν τ α ι, 古イ 現・２・単 bhárase ＝БЕРЕШИ, ３ bhárate ＝φ έ

ρεται, 3・複 bhárante＝φέρονται)。明らかに、もっと古い中動相語尾は、ギリシャ語及び古代インド語の indicatīvus praeteritī mediī（直接法中動相〔反射態〕過去）の形に立証されるが（例、 2・単 ἐφέρεο, ἐφέρου ＜ *ἐ-φέρεσο, cf. ラ 中動・2・単 sequere「君は従う」＜ *sekʷ-e-se , 3・単 á-bharata＝ἐ-φέρετο, 3・複 á-bharanta ＝ἐ-φέροντο)、ここには補足付加現在指標 i は置かれていない。しかし、もっと古い起源を持っているのが、不活格活用2人称語尾 -th を含む、古代インド語の中動相過去 2・単 á-bharathās である。したがって、2人称単数活格語尾 -s は、2人称単数不活格語尾 -t（-th ＜ -tH₂ ）と対応関係をなしており、それは、始原的な活格代名詞語幹 *so が始原的な不活格代名詞語幹 *to と対応をなしている（§. 33 参照）のと同じである。

恐らく、古イ 中動・現・2・単 bhárase , 3 bhárate , 3・複 bhárante は、*bhere-so-i̯ , *bhere-to-i̯, *bhero-nto-i̯ の直接的な継承であり、このことは、古プ 現・2・単 waissei ＜ *u̯oi̯d-se-i̯ ＝ **вѣси** のような形に立証されるとおり、2・単・現 **берешн** が *bher-e-so-i̯ ないしは *bher-e-se-i̯ から引き出され得ることを表している。2人称単数不活格語尾の H₂ 指標は、1人称単数不活格語尾から引き移されたものであり、それは、このようにして2人称単数形と2人称複数形を区別するためである。

2人称単数人称代名詞斜格及びスラヴ祖語の指示代名詞 *t-o-（男・単・主 **тъ**, 生 **того**, 与 **тому** を参照）の格形は、代名詞語根 *t- から作ったものである。2人称単数動詞語尾としての、代名詞要素 t は、古い不活格活用形に立証される ― 古イ 完・2・単 vēttha＝ギ οἶσθα, ゴ waist「君は知っている」＜ *u̯oi̯d-t-H₂e を参照（§. 15 参照)。**оумрѣтъ, распатъ** のような形の、アオリスト2人称単数語尾 -**тъ** も、恐らく、同一要素から発生したものであろう。印欧語の2人称複数語尾 -te も同一起源である ― 次例参照、現・2・複 **бе**

ꙋЕТЕ, ギ φέρετε, ゴ baírith, 古イ bhárathа「君たちは運ぶ」(古い不活格活用2人称単数語尾の影響によって、t の帯気音化を伴う — cf. 古イ 完・2・単 vēttha「君は知っている」), ラ fertis「君たちは運ぶ」 < *bher-te-s (この s は、補足付加複数指標)。古い2人称双数語尾が複数語尾と異なるのは、末尾音の階梯(-te に代えて -to)だけである — 古イ 2・双 bhárathaḥ < *bher-e-to-s (t の帯気音化 — これについては上を参照 — と補足付加複数指標 s)を参照; cf. ゴ 2・双 baírats「君達二人が運ぶ」< *bher-e-to-s, リ vẽžat a「君達二人が運送する」< *u̯eg'h-o-to 。双数2人称 БЕРЕТА の語尾 -ТА は、末尾母音の延長を伴った -to から発生したもので、同じことは、双数の意味も持っていた古い共同格形に見られる(§. 11 参照)。

不活格活用動詞の第一次的な3人称単数形は、純粋語幹である — 古イ 完・3 véda (=ギ οἶδε, ゴ wait)「知っている」< *u̯oi̯d-e 参照。恐らく、活格活用動詞の純粋語幹を3人称単数形として用いることも可能であった; cf. 現・3・単 φέρει < *bher-e-i̯ (i は、古い現在指標、§. 27 参照)。しかし、基本的には、活格活用動詞の3人称単数形は、周辺指標 t を含むものであり、これは、スラヴ祖語の指示代名詞の一つ(男・単・生 Т-ОГО, 与 Т-ОМОУ, 男・複・主 Т-И 参照)の語根であり、また2人称単数人称代名詞(生 Т-ЕБЕ, 与 Т-ЕБѢ 参照)の語根である。この周辺指標は、現在3人称単数形に立証される — БЕРЕТЪ < *bher-e-t-i (この i は、古い現在指標)を参照; cf. 古イ 現・3・単 bhárati「担う」=ゴ 現・3・単 baírith, ギ ἐστί「彼はある」< *H₁es-t-i , ラ vehit「運送する」< *u̯eg'h-e-t-i, ヒッタイト epzi (ēpzi)「取る」(この -zi は、-ti の継承)。古代ブルガリア語の3人称単数現在 БЕРЕТЪ と比べて、古代ロシア語の3人称単数現在形 БЕРЕТЬ の方が、原形 *bher-e-t-i = 古イ bhár-a-t-i に近い。3人称単数の予期される語尾 -ТЬ に代えて -ТЪ が現れたのは、ОУМРѢТЪ, РАСПАТЪ 型の3人称単数アオリスト形(これの起源については、

§．34 参照）の影響であり、また同じく、3人称代名詞としても用いられる 男・単・主 **ТЪ** 代名詞の影響でもある。 -**Ъ** の語尾は、3人称複数現在形としても一般化したのである — cf. 古ブ **ХОДѦТЪ** と 古ロ **ХОДѦТЬ** 。

双数3人称語尾は、-te であった — 現・3・双 **ЕСТЕ, БЕРЕТЕ,** ギ ἐστόν「彼ら二人はある」, φέρετον「彼ら二人は運ぶ」(語末 o 階梯の -to と 男・単・主 **ОНЪ** の要素 n と同系の遠心性指標〔еференттен показател〕 n を持つ), 古イ stáḥ「彼ら二人はある」< *H₁s-te , *H₁s-to, bháratah̥「彼ら二人は担う」< *bher-e-te , *bher-e-to (これに補足付加複数指標 s を付ける)。当初、双数2・3人称語尾は同一であり、また起源的には、2人称複数語尾 -te に一致していた — cf. 現・2・複 **ИДЕТЕ** と 3・双 **ИДЕТЕ**, 現・2・複 **БЖДЕТЕ** と 3・双 **БЖДЕТЕ**。-te 語尾は全て、周辺的代名詞指標 t を包摂したのであって、これは、2人称の人称代名詞としても、指示（3人称）代名詞としても用いられた指標である。

いくつかの古代ブルガリア語文献には、双数3人称語尾 -**ТЕ** と並んで、-**ТѦ** 語尾のものもある — 例、マタイ XXIV-40 **АЪВѦ БЖДЕТЕ** (マリア写本及びアッセマーニ写本) に対して、**АЪВѦ БЖДЕТѦ** (ゾグラフォス写本及びサヴァの本)。これは、恐らく、3人称人称代名詞としても用いられる指示代名詞双数主・対格 **ТѦ**「これら二つ（二人)」 < *t-ō (§．11 参照）の影響によって現れたものであろう。Cf. 古イ 未完・3・双 ábharatām「彼ら二人は担っていた」< *e-bher-e-tē-n, *e-bher-e-tō-n (ギ 未完・3・双 ἐ-φέρέτην と同系)、この場合の語尾 -tē (-tō) は、周辺（指示）代名詞 *t- の双数・複数形と一致したのであり、n は、古い遠心性指標である（§．38 参照)。いくつかの古代ブルガリア語例で、また中世ブルガリア語文献では極めて頻発的に、双数女性主語の場合に、3人称双数語尾が、-**ТѢ** となる — 例、ヨハネ XI-3 **П ОСЛѦСТЕ** (ゾグラフォス写本、マリア写本、アッセマーニ写本) に対して、

ПОСЛАСТѢ ЖЕ СЕСТРѢ〔二人の姉妹は人を遣わした〕(サヴァの本)；この語尾は、指示代名詞双数女性主格形 **ТѢ** の影響を受けたものである。中世ブルガリア語の文献例には、双数中性の主語の時にも、双数3人称語尾として -**ТѢ** を用いるものがある － cf. 双・中・主・対 **ТѢ**。

当初、双数2・3人称語尾は、語末母音 -te の階梯の違いによって、2人称複数語尾とは区別されていた － 次例参照、現・2・複 **БЕРЕТЕ**＝ギ φέρετε「君達は運ぶ」＜ *bher-e-te に対して、ギ 2・3・双 φέρετον「君達二人は運ぶ、彼ら二人は運ぶ」＜ *bher-e-to-n (n は、**ОНЪ** の要素 n と同じ補足付加遠心性指標), cf. 古イ 未完・2・双 ábharatam ＝ギ ἐφέρετον「君達二人は運んでいた」。動詞複数形を形成する場合、n の要素は、語尾 -men 及び -u̯en (上を参照) を持つ1人称複数 (双数) の外包形の表徴であり、また同じく、もっと後の2人称複数形や2・3人称双数形の基になった同一共通形の表徴であった － cf. ヒッタイト 2・複 sek-te-n-i (šek-te-n-i)「君達は知っている」, ap-te-n-i 「君達は取る」(この i は、古い現在指標) ； 古イ 2・複 (命) hántana「君達は殺す」＜ *gʷhen-e-te-n, vádathana「君達は話す」＜ *u̯od-e-te-n (**ВАЖДЖ, ВАДИШИ**〔とがめる、動かす、駆り立てる〕と同系) ； cf. ヒッタイト 過・2・複 kuen-te-n 「君達は殺した」。古イ 現・2・複 vádathana「君達は話せ」のような形は、古イ 未完・2・双 ábharatam＝ギ ἐφέρετον「君ら二人は運んでいた」, 3 ábharatām ＝ギ ἐφερέτην「彼ら二人は運んでいた」における末尾の m は、弱化した n に由来することを示している (§. 38 参照)。

古代インド語の 中動・未完・2・複 の語尾 -dhvam ＜ -th-u̯e-n (上を参照)、例えば、中動・未完・2・複 ábharadhvam「君達は自分 (のため) に運んでいた」 は、ヒッタイト語 中動・2・複 の語尾 -tu ma-t ＜ -th-u-n-(双数・複数接尾辞 u のゼロ階梯と先行の u の円唇的影響によって、遠心性指標 n ＞ m の変化を伴う) と同系である；次例参

照、中動・現・2・複　pahhastuma（paḫḫaštuma）「君達は、自衛する」（**пасѫ, пасеши**　と同系），中動・過・2・複　kistumat（kištumat）「君達は残った」。古代インド語の、さらに古い　n　の継承としての語末弱化子音　m　については、§．38 参照。古代ブルガリア語には、動詞複数2人称及び双数2・3人称の始原的な遠心性指標 n のいかなる痕跡も残っていない。

§. 36 古代ブルガリア語の生格の起源

古い活格統語構造（活格活用動詞と活格主体を持つ）は、所有の意義を持っていた。再構文 *u̯lkʷos ou̯i nek'et を検討してみよう。この場合の *u̯lkʷos (cf. **ВЛЬКЪ**, ラ lupus , ギ λύκος , リ vìlkas「狼」)は、 *u̯lkʷ-o「狼」の活格で、文法的主体（行為主、行為者）の役割を果しており、一方、 *ou̯i (cf. **ОВЬ-ЦА**, 古イ áviḥ, ラ ovis, リ avìs, ギ ὄϊς「雌羊、羊」)は、絶対格で、活格動詞 *nek'-e- の文法的客体の役割を果している（活格構造の言語での語順は、通常、主体 ― 客体 ― 述語 である)。この文の意味は、大体、「狼の・羊・運ぶこと」(на въ л к а о в ц е н о с е н е т о) であった。活格構造が主格構造（活格が主格に変わる）に転換して以後始めて、この文は、「狼が羊を運んだ」という文に転換するのである。*u̯lkʷos ou̯i nek'et「狼の・羊・運ぶこと」型の動詞的所有構文と並行して、*u̯lkʷos ped「狼の・足」型の、活格を伴った純粋な名詞的語結合句も可能となった ― cf. 古イ 単・主 pāt, 与 padē , ギ 単・主 πούς , ドーリス πῶς , 与 πόδι, ラ 主 pēs, 与 pedī「足」。ヴァン・ヴェイク（N. van Wijk, 1902）は、印欧語の一連の単数主格形が、単数属格形と共通の起源を持ち、かつ属格との差異は、その末尾の階梯にだけ存する、ことを示している ― cf. 単・主 **ГОСТЬ** < *ghost-i-s と 単・生 **ГОСТИ** < *ghost-ei̯-s, 古イ 単・主 áv-i-ḥ「羊」 < *ou̯-i-s と 単・属 ávyaḥ < *ou̯-i-es, ギ 単・生 ὄϊς「羊」 < *ou̯-i-s と 単・属 οἰός < *ou̯i-os, 単・主 **СЫНЪ**= 古イ 単・主 sūnúḥ , リ sūnùs < *sūn-u-s と 単・生 **СЫНОУ**= 古イ 属 sūnoḥ, ゴ sunaus, リ sūnaũs < *sūn-ou̯-s, ラ 単・主 pēs「足」 < *ped-s と 単・属 pedis < *ped-es (ギ 単・主 πούς , ドーリス πῶς「足」 < *pod-s と 単・属 πόδος と同系)。

本来、 s 語尾の生格（属格）形は、同語尾を持つ活格の変異形（varian t ）であった。古い活格指標 s が、主格語尾に転換する一方で所有的指標（属格語尾）に変わると、この所有的指標は、人称代名詞語幹とは違って物主代名詞を作れない、指示代名詞や疑問代名詞の語幹にも付加され始めた。Cf. 中・単・生 **чесо** ＜ *kʷ-e-so ，古イ 男・単・属 tásya（＝ギ τοῖο ― ホメロスの言語）「それの」＜ *t-o-s-i̯-o（この場合の i は、指示的要素 i 〔§．27 参照〕に由来するもので、所有の意の強め指標），ゴ 男・単・属 this「それの」＜ *t-e-so。

この所有的語幹 *kʷ-e-s- 及び *t-o-s-（ *t-e-s ）は、単数斜格の語幹に転換した ― 中・単・生 **чесо**, **чесого**, **чьсого**, 与 **чесому**, **чьсому**, 所 **чемь**, **чесомь**, ゴ 男・単・与 thamma「それに」＜ *t-o-s-m- ，古イ 男・単・与 tásmai ＜ *t-o-s-m-ōi̯ ，処 tásm in ，奪 tásmād 参照（この場合の m は、古い中間指標〔§．30 参照〕）。スラヴ祖語の指示代名詞斜格は、古い活格指標によって拡張されない代名詞語幹から作ったものである ― 例、男・単・与 **тому** ＜ *t-o-mo-u̯（§．32 第4項参照），造 **тѣмь** ＜ *t-o-i̯-mi （§．31 参照），所 **томь** ＜ *t-o-mi 。Cf. 古リ 男・単・与 tãmui ＜ *t-o-m-ōi̯，造 tuomî ＜ *tō-mi（この *tō- は、幹母音の延長を伴う古い共同格形〔§．10 参照〕）；中・単・造 **чимь** ＜ *kʷ-ī-mi も参照、この *kʷī（＝ポ czy ）は、古い共同格 ― 非延長語幹 *kʷ-i- は、中・主・対 **чьто** に立証される。

§. 37　古代ブルガリア語の複数形の起源

活格統語構造の言語では、数範疇の発達が弱いため、 s 指標を持った古い活格は、単数形にも複数形にも用いられた。古い活格を継承したのは主格であるが、一連の場合、その単数主格形が複数形と区別されるのは、末尾の階梯においてだけである。次例参照、単・主 **ГОСТЬ**（＝ゴ gasts）「客」＜ *ghost-i-s と 複・主 **ГОСТЬЕ**（＝ゴ gasteis）＜ *ghost-ei̯-es，古イ 単・主 áviḥ（＝ギ ὄϊς）「羊」＜ *ou̯-i-s と 複・主 ávyaḥ（ギ οἶες）＜ *ou̯-ei̯-es，ギ 単・主 πούς，ドーリス πῶς「足」＜ *pod-s と 複・主 πόδ-ες。単数も複数も表す古い活格の所有的用法から s 語尾の属格形が発生したが、この属格形もまた当初は単数、複数両用であった。このことを証明しているのが、ヒッタイト語の antuhsas（antuḫšaš）「人」 タイプの単数主格形であり、これは、複数属格としても使われる。初めは、 s 指標は古い活格形特有の性質を持ち、それは所有的な意義も持つが、単数・複数特徴を表さなかった。スラヴ祖語の代名詞曲用の構築に際して、この指標は、複数生格形に込められた － 複・生 **ТѢХЪ** ＜ *t-o-i̯-s-on, **НАСЪ** ＜ *nō-s-on, **ВАСЪ** ＜ *u̯ō-s-on 参照、この on は、複数生格用の補足付加指標（§.38 参照）。Cf. 1、2人称複数の物主代名詞 **НАШЬ**, **ВАШЬ** の語幹も、 s 指標を伴う古い生格形（ *nō-s-, *u̯ō-s-）に、代名詞語根 *i-（§.27 参照）に由来する所有指標 i̯o を付加したものに起源を持つ。この所有指標 i̯o については、古イ 単・属 vṛ̥kasya（＝ギ λύκοιο － ホメロスの言語）「狼の」＜ *u̯l̥kʷ-o-s-i̯o を参照。

古い活格統語構造が、主格構造に転換され、不活格活用動詞の主体が絶対格に代わって、主格（古い活格）でもって表されるようになると、有生類名詞（活格活用動詞、不活格活用動詞何れの主体でもあり得る名詞）にだけ特徴的であった s 語尾の古い活格形が、主格形に変わるのである。それは、

不活格構造文の古い絶対格を駆逐し、単数、複数の主格形として使われだしたのである。古い有生類に起源を持つ名詞の単数形と複数形の違いは、末尾の階梯に存する － cf. 単・主 **СЪНЪ**（＝古イ sūnúḥ，ゴ sunus ）＜ *sūnus と 複・主 **СЪНОВЕ**（古イ sūnávaḥ， ゴ sunjus）＜ *sūn-eu̯-es 。例外は、男性 o 語幹の名詞及び代名詞である。これらの複数主格形は、 s ではなく、 oi̯ で終わるのである － 複・主 **ВЛЬЦИ**（＝リ vilkaĩ, ギ λύκοι, ラ lupī 「狼達」）＜ *u̯l̥kʷ-o-i̯ と 複・主 **ТИ**（＝ 古イ tē，ゴ thai「彼ら、それら」）＜ *t-o-i̯ を参照。

*u̯l̥kʷ-o-i̯ 及び *t-o-i̯ は、起源的には、指示的小辞 i （§. 27 参照）を用いて作られる古い所格形であるが、これは、複数（多数性）の意味を持つ絶対格の形としても用いられた、すなわち、複数の場合の、不活格活用動詞の文法的主体の役割も果たしたのである。後に、 *u̯l̥kʷ-o-i̯ と *t-o-i̯ は、複数主格形（文法的主体の形）一般としても用いられ始めるのである。

ВЛЬЦИ（＝リ vilkaĩ, ギ λύκοι, ラ lupī 「狼達」）＜ *u̯l̥kʷ-o-i̯ タイプの複数主格形は、古代インド語の vṛ̥kāḥ（＝ゴ wulfos）「狼達」＜ *u̯l̥kʷ-o-es タイプの複数主格形に比べて、古体であり、この語尾の -es は、古い有生類名詞を含む他の曲用の複数主格形の類推によって付加されたものである － 次例参照、複・主 **СЪНОВЕ** ＜ *sūn-eu̯-es，**ГОСТЬЕ** ＜ *ghost-ei̯-es, 古イ pā́daḥ「足」＜ *pēd-es 。 o 語幹名詞複数形の i 指標が古いことについては、古代インド語の複数斜格形、例えば、複・与・奪 vṛ̥kebhyaḥ 「狼達に、狼達から」＜ *u̯l̥kʷ-o-i̯-bhi-es のような形がこれを証明している（この es は、後に補われた複数指標)。 i 語幹、 u 語幹名詞の場合は、始原的な所格形が、複数の意味で用いられることはない。それは、代名詞的指標 i を含まず、接尾辞の延長階梯を伴う純粋語幹だからである － cf. 単・所 **ГОСТИ** ＜ *ghost-ēi̯, **СЪНОУ**（古イ 単・処 sūnaū́, ゴ 与 sunau 「息子に」と同系） ＜ *sūn-ēu̯ （スラヴ祖語の接尾辞 -ou̯- の一般化を受ける、

§．2 参照)。子音幹曲用の場合、スラヴ祖語単数所格形は、i の要素ではなくて、指示的指標 e を含む（cf. 単・所 КАМЕНЕ, МАТЕРЕ）のであるが、これは、ギリシャ語 μητέρε「二人の母」や ποιμένε「二人の牧人」 タイプの双数主・対格形にも立証される（§．31 参照)。

時が経過すると共に、始原的な活格語尾 -s に起源を持つ語尾の -es は、古い有生類名詞の複数主格形の一部の特徴を表示し始めた — 次例参照、СЪНОВЕ ＜ *sūn-eu̯-es, ГОСТЬЕ ＜ *ghost-ei̯-es, КАМЕНЕ ＜ *kā-men-es ＜ *H₂k'-eH₂-men-es 。この -es (-s) 語尾は、名詞形の、さらにその後、いくつかの動詞形の、複数一般の語尾に転じて行った（§．32, 35 参照)。これは、恐らく、次のようにして生成して行ったものであろう。鳴子音に終わる子音幹の始原的な有生（活性）類名詞は、単数主格語尾 -s（例、単・主 КАМЪ ＜ *kāmons ＜ *H₂k'-eH₂-mon-s , МАТИ ＜ *mā-ter-s ）と複数主格語尾 -es （例、複・主 КАМЕНЕ ＜ *kā-men-es , ギ 複・主 μητέρες ＝ 古イ mātáraḥ ＜ *mā-ter-es-）を持っていた。すなわち、単数主格形も複数主格形も、 -s 語尾を持つ同一始原的な活格の継承であり、それは、元々単数の意味でも複数の意味で使われて来たが、時が経つに連れて、その末尾（-s ,-es ）の階梯の違いによって、数も表現し始めたのである。単数主格形において、鳴子音に後続する語末子音 s は脱落し、接尾辞母音が延長したのである — ギ 単・主 μήτηρ ＜ *mā-tēr ＜ *mā-ter-s, КАМЪ ＜ スラ祖 *kā mūn ＜ *kā-mon-s 参照。いくつかの印欧語では、古い -s 語尾だけでなく、先行鳴子音も脱落している — ラ 単・主 homō＝ ゴ guma「人」＜ *g'hđom-on-s すなわち「大地の、大地から生まれた」の意, 古イ mātā́「母」＝リ mótė「妻、母」＜ *mā-ter-s 参照。スラヴ祖語においては、鳴子音の脱落が、接尾辞の延長母音の狭めを伴った — 単・主 МАТИ ＜ *mā-ter-s, КАМЪ ＜ *kā-mon-s 参照。Cf. 語末 s の同様の脱落が、先行母音の延長を伴う場合として、古イ 単・主

pā́t「足」＜ *ped-s （ *pod-s ），ギ 能動現在分詞・男・単・主 φέρων（＝БЕРѢ）「運ぶところの」 ＜ *bher-o-nt-s 。

子音幹曲用名詞の一部での、単数主格形語末の s の脱落後、かっての活性（有生）類の古い活格形の表徴であった -es 語尾は、複数主格指標に変わった － cf. 古イ 単・主 mātā́（次も同系、МАТИ，ギ μήτηρ，ラ māter「母」，リ mótė 「妻、母」）に対して、古イ 複・主 mātáraḥ （次も同系、МАТЕРИ，ギ μητέρες，ラ mātrēs，リ móters ）。曲用の構築に当たっては、語尾の -es は、他の格にも一般化し、単数形と複数形の弁別手段となった。次例参照、単・所 ВЛЬЦѢ（＝古イ 単・処 vṛ̥ke ） ＜ *u̯l̥kʷ-o-i̯ （cf. §.31 ）に対して、複・所 ВЛЬЦѢХЪ（＝古イ 複・処 vṛ̥keṣu）＜ *u̯l̥kʷ-o-i̯-s-u （ u は、所格ないしは複数形の補足付加指標 － §.32 第3項 参照）；単・対 ВЛЬКЪ（＝古イ 単・対 vṛ̥kam ，リ viĩlką ，ギ λύκον，ラ lupum ）＜ *u̯l̥kʷ-o-n （対格語尾 n の起源については、§. 38 参照）に対して、複・対 ВЛЬКЪ（＝古イ 複・対 vṛ̥kān，ギ λύκους ，クレタ λύκονς ，ラ lupōs，ゴ wulfans ）＜ *u̯l̥kʷ-o-n-s ；ギ 単・与 λύκῳ，ラ lupō ，リ viĩkui ＜ *u̯l̥kʷ-ōi̯ ＜ *u̯l̥kʷ-o-ei̯（§. 32 第4項参照）に対して、複・造（起源的には、古い具・与格） ВЛЬКЪ（＝古イ 複・具 vṛ̥kaiḥ ，リ 複・具 vilkaĩs，ラ 奪・与 lupīs） ＜ *u̯l̥kʷ-ōi̯-s ＜ *u̯l̥kʷ-o-ei̯-s （§. 32 第4項参照）。

始原的な、子音語幹、 u 語幹、 i 語幹名詞の曲用と o 語幹名詞の曲用の間には原理的な差異が存する。かつての活格の前者型の曲用では、末尾母音の交替によってのみ、単数主格形（例、СЪНЪ ＜ *sūn-u-s，ГОСТЬ ＜ *ghost-i-s ，ギ μήτηρ ＜ *mā-ter-s ）、単数生格形（例、СЪНОУ ＜ *sūn-ou̯-s，ГОСТИ ＜ *ghost-ei̯-s，ギ μητρός ＜ *mā-tr-os ）、及び複数主格形（例、СЪНОВЕ ＜ *sūn-eu̯-es ，ГОСТЬЕ ＜ *ghost-ei̯-es，μητέρες ＜ *mā-ter-es ）が得られたが、始原的な o 語幹名詞の場合は、一つの基本の格からこれら諸形を得ること

ができるためには、音交替のメカニズムだけでは、明らかに不十分であった。接尾辞 -e- の対応階梯、すなわち、o 階梯は、*u̯l̥kʷ-o-「狼」の曲用においては不変のままであった — 同接尾辞の e 階梯から得られたのは、動詞非完了幹であり（次例参照、単・・主 **влькъ** < *u̯l̥kʷ-o-s に対して、現・3・単 **влѣчетъ** < *u̯elkʷ-e-t、§. 9 参照)、一方、ゼロ階梯であれば、本質的には子音幹曲用である ギ 単・主 πός（< *pod-s), 属 ποδός（< *pod-os） 型の非テーマ形になってしまうであろう。始原的な o 語幹名詞は、単数生格（属格）と複数主格の形をもっと複雑な方法で形成したのである。 o 語幹名詞は、生格（属格）として、奪格を利用したり（例、単・生 **влька**＝リ 単・生 vilko < *u̯l̥kʷ-o-ad 、§. 29 参照)、あるいは活格を利用したり、ただし所有的接尾辞 -i̯o によって拡張したり（例、古イ 単・属 vṛ̥kasya ＝ギ 単・属 λύκοιο〔ホメロスの言語〕< *u̯l̥kʷ-o-s-i̯o 、§. 27 参照)、あるいはまた、所有的接尾辞 -i- に一括多数性指標 H_2 を付加した形によって拡張することもあった（例、ラ 単・属 lupī < *u̯l̥kʷ-i-H_2 、§. 27参照)。 i 指標を持つ形は、複数主格の意味（例、複・主 **вльци**＝ギ λύκοι, リ vilkaĩ < *u̯l̥kʷ-o-i̯）を獲得したが、それは、所格の意味も持つものであった（例、単・所 **вльцѣ**＝古イ vṛ̥ke < *u̯l̥kʷ-o-i̯、§. 31 参照)。

§. 38　古代ブルガリア語の対格の起源

活格統語構造の主格統語構造への再編以後、活性（有生）類名詞にだけ特有であった、 -s　語尾を持つ古い活格は、主格に転じた。それは、不活格活用動詞の文法的主体の役割を果たしていた活性（有生）類名詞の純粋語幹（絶対格）を駆逐したのである。それと並行して、古い活格は、かつての活格的述語構文の枠内で持っていた所有の意味を失った。非述語構文内でのこれの使用（§.36 参照）は、 -s　語尾の新しい所有格（属格）の原形となったが、これは主格と同一起源のものである。

古い活格が、人の命名機能も果たす一般的な主体の格に変わると、すなわち、主格としても使われるようになると、活性（有生）類名詞の古い絶対格（純粋語幹）は、名詞の基本形ないしは一般形であることを止めてしまった。古い活格構造文では、活格は、文法的主体（主語）の役割を果たし、一方、絶対格は、文法的客体（直接補語）の役割を果たしていた。古い不活格構造文では、絶対格（純粋語幹）が、主体（主語）の役割を果たしていた。活格構造文の主要部は、述語と絶対格（客体）である。さらにまた、不活格構造文の主要部は、述語と絶対格（主体）である。

主格構造文では、その主要部は、述語と、主語、すなわち、かつての活性（有生）類名詞の活格の継承である主格の名詞である。主格統語構造においては、絶対格（純粋語幹）は、もはや客体関係の表現の用をなさない　－主格文では、客体は、主体に比して、二次的なもの（重要性が劣る）のである。したがって、絶対格（直接補語の役割を果たす）に活格指標　s　を補った形から主格の前身である活格を作った、始原的な活格構造文におけると同様のやり方を以て、客体の格（純粋語幹）の形から主体の格（主格）の形を引き出すことはできないのである。かつての活性（有生）類の継承である名詞の場合、語尾　-n　を持つ始原的な状況格の一つが客体の格（対格）の役割を果たしたのである。

主格構造文の客体の格（対格）の基になった、 -n 語尾の状況格は、本来は、方向指示的、終点指示的（terminative）な意味を持っていた。それは、遠心運動（еферентно движение ＜ ラ ef-ferō「持ち出す、運び出す」）による方向と到達点の表現、すなわち、ある人に発して、別の人ないしは別の物に運び及ぼされる運動を表したのである。遠心的な方向指示（中心から周辺へ向けての）を行う場合、 n の要素は、遠隔性を表す指示代名詞の意味を持っていた － 男・単・主 ОНЪ ＜ *o-no- を参照（この語頭の o は、古い指示小辞であって、Е-СЕ〔＝ラ ecce, ギ ἰδοὺ, ロ вот〕や ブルガリア語 е-то〔＝ロ вот〕の е、またロシア語の（в）от の о とも同系である）。遠心的なジェスチャーは否定の意味も持っていたのであり、語幹 *n-e は、否定小詞としても使われている － НЕ, リ nè , 古イ na, ラ ne (ne-sciō「知らない」における), ゴ ni 参照。代名詞語根 *n- からは、前置詞の НА も作られたが、これは、所格と共にするとき、遠心的な位置（物の表面ないしは終端における）を表し、一方、対格と共にするとき、遠心的な運動（物の表面、終端へ向けての）を表したのである。遠心運動を伴う、現代（ブルガリア）語の на!「(物を差し出し、指さして）さあ、ほら、そら、取れ」 も、前置詞 НА と同系である。

遠心運動の一変種に、移入運動（илативно движение ＜ ラ il-lātus「運び込まれた、持ち込まれた」）があるが、それを表すのが、遠心指標 n と同系の語幹 *en- である。接頭辞および前置詞 ВЪ, ВЪН（例、 アオ・3・単 ВЪН-ИДЕ, 男・単・対 ВЪ НЬ「それの中へ」）も、同語幹から派生しており、これは、古いゼロ階梯 n̥ ＞ ъn と語頭添加音（prothesis） В を含んだものである（この場合のかつての n̥ は、超越・内在指標〔трансцендентен и инесивен показател〕である u〔au̯〕との混淆のために ъn が ъn に代わっている；この指標の継承が、内在的・移入的前置詞の ОУ であり、それは、否定小詞の意味も持っている － 次例参照、БОГ

-ДТЪ〔富んだ〕に対して、ОУ-БОГЪ〔貧しい〕)。Cf. ギ ἐν (＝ゴ in) ＜ *en, ラ in (＝リ ị)「の中で、の中へ」 ＜ *ṇ 。移入語幹の o 階梯からは、ВЪН-Ж-ТРЬ (重複語幹 *ṇ-on-) (内部で、内部へ) と ЖТРОБА (内蔵、腹、子宮、内部) (グ ѵѹѳ-ѳє-ѡь ѳ と ѳєѡьѳѣѣ) が派生している。移入指標 en は、後置詞としても使われていた — 古イ 男・単・処 tásmin「そこに、彼のそばに」(*t-o-s-m-i〔§. 36 参照〕と古い移入指標 n から) 参照。

遠心指標 n は、動詞語幹と結合すると、受動過去分詞を作った — 次例参照、РЕЧЕНЪ、НЕСЕНЪ、БЬРАНЪ。受動過去分詞は、遠心運動、すなわち、他の人物ないしは事物に発源する行為ないしは運動、の結果たる性質を表した。それ故、受動過去分詞は、原則として、他動詞 (遠心動詞) から形成される。次例、ヨハネ I-6 ゾグラフォス写本 ПОСЪЛАНЪ ОТЪ БА (神から遣わされている) タイプの受動過去分詞付き受動文を参照、この場合、行為の起点は、ОТЪ と生格名詞との離脱的結合句によって表されている。 n 指標を持つ受動過去分詞は、古代インド語、古代ゲルマン語の何れにも固有のものであるが (古イ gīrṇá「飲み込まれた」 と 現・3・単 giráti「飲み込む」 — 現・1・単 ЖЬРЖ, 2 ЖЬРЕШИ〔飲み込む〕 と同系；ゴ gibana「与えられた」 不 giban「与える」 を参照)、作り方は、男・単・主 ОУБИТЪ 型の、 t 指標を持つ受動過去分詞 (§.34 参照) に似ている。前者の場合、分詞指標 n は、遠心的、したがって、周辺的指示代名詞の語根 *n- と同一である — cf. 男・単・主 ОНЪ, リ añs「それ」, 古イ ana-「これ」, 古高ド ëner ＝ド jener「それ、あの」。後者の場合には、分詞指標 t は、周辺的代名詞要素 t (§. 34 参照) と同一である。人物 (事物) が、他の人物が行った行為によって得られた特徴を付与され得るのは、その行為が完結している場合だけである。それ故に、 n 指標を持つ受動過去分詞も、 t 指標を持つ受動過去分詞 (§.34 参照) も、動詞過去語幹から作られるのである。受動過去分詞の形成にとって最適なのは、他動詞であり、その場

合こそ、行為は他の人物ないしは事物に運び及ぼされるからである。

再構文 *u̯l̥kʷos ou̯i nek'et「狼の・羊・運ぶこと」(на вълка овценосенето)型の構文(§. 36 参照)においては、絶対格である *ou̯i に代えて、方向指示格である *ou̯in を用いることもできた。このような場合の再構文 *u̯l̥kʷos ou̯in nek'et が表した意味は、「狼の・羊に向けられた〔関わる〕・運ぶこと〔運搬〕」(на вълка носенето, насочено〔отнасящо се〕към овцата)であった。活格統語構造の、主格構造への転換とともに、活格(*u̯l̥kʷos)は主格に変わり、絶対格(*ou̯i)は、方向指示格(*ou̯in)によって置換され、それは、客体(対)格に転じた。すでに、古い活格構造文の文脈の中で、(絶対格 + 活格活用動詞)の組み合わせ *ou̯i nek'et「羊・運ぶこと」は、所有的な意味「羊の運搬〔運ぶこと〕」(genitīvus objectī〔客体の属格〕の意味)を持っていた。これは、同じく所有的な意味であるが、ただし、genitīvus subjectī(主体の属格)の意味である、(活格 + 活格活用動詞)の組み合わせ *u̯l̥kʷos (ou̯i) nek'et「狼の・(羊)運搬〔運ぶこと〕」とは、対照的である。Cf. 古代インド語の tatpuruṣa(限定複合語)型の構文(§. 27 参照)、例えば、rājáputrá-「王子、(逐語的には、王-息子)」においては、第一要素 rājá-(絶対格、純粋語幹)は、所有者を表すのに対して、語形(屈折)変化指標を含む第二要素は、所有されるものを表している。

活格構造文における絶対格に取って代わった、-n 語尾の方向指示格も、所有的な意味を獲得した — *ou̯in nek'et は、*ou̯i nek'et と同じように、初めは、genitīvus objectī の意味での「羊の・運ぶこと(運搬)」(носенето на овцата)を表したのである。*ped ou̯in「羊の・足」型の名詞的所有構文も、*ou̯in nek'et(*nek'et ou̯in)「羊の・運搬」型の動詞的所有構文をモデルにして、構築された。当初は、所有的意味を持つ二つの格形が存在したのであり、一つは、古い活格指標 -s を含むもの、今一つは、古い方向指示(遠心)指標 -n を含むもので

ある。この古い状態の痕跡は、ヒッタイト語が残しており、そこでは、属格に -as と -an という二つの異なる語尾がある。これらの語尾を以て形成される形は、単数にも複数にも使われている。その他の印欧諸語の名詞語尾の生成の場合は、 -es (-s) 語尾の所有形は、単数属（生）格形となり（例、単・生 **матере** < *mā-ter-es , ギ μητρός , ラ mātris, リ móters ; 単・生 **сѫноу**= 古イ sūnóḥ, リ sūnaũs, ゴ sunaus < *sūn-ou̯-s)、一方、 -en (-n) 語尾の所有形は、複数属格形なった（例、複・生 **матеръ** < *mā-ter-on , ラ mātrum , ギ μητέρων ; 複・生 **гостьи** < *ghost-ei̯-on , 次も同系ラ hostium「敵達の」 < *ghost-i-on ; 複・生 **влькъ** < *u̯l̥kʷ-o-n , 次も同系 ギ λύκων, 古イ vṛ̥kān-ām「狼達の」)。古代インド語やギリシャ語の形は、複数属格語尾 -on が、子音幹曲用から o 語幹に引き移され、それが先行幹母音 o 及び e と融合して、ō となったことを示している（次例参照、ギ 複・属 λύκων < *u̯l̥kʷ-o-on）；同様にして、複数主格語尾 -es も、子音幹曲用から o 語幹に移されたのである － 古イ 複・主 vṛ̥kāḥ = ゴ wulfos「狼達」 < *u̯l̥kʷ-o-es を参照（§. 37 参照)。古代インド語の複数属格 vṛ̥kānām「狼達の」は、重複の格指標 ān < -o-on を含んでいるが、複数主格 vṛ̥kāsaḥ「狼達」が、重複格指標 es を含んでいるのと同じである。このようにして得られた複数属格語尾 -ōn は、その後、全ての複数属格形に一般化したのである － ギ 複・属 μητέρων「母達の」, οἰῶν < *ὀϝιῶν「羊達の」, πήχεων < *πήχεϝων「肘の、前腕の」参照。スラヴ祖語は、この逆の現象 － 複数生格語尾の、全曲用の生格語尾への一般化 － について証明している。それ故、ウムブリア方言に対応形を持つ（§. 21 参照)、**матеръ** < *mā-ter-on, **сѫновъ** < *sūn-eu̯-on , **гостьи** < *ghost-ei̯-on 型の規則的な複数生格形と並行して、複・生 **влькъ** < *u̯l̥kʷ-o-n（ギ 複・属 λύκων < *u̯l̥kʷ-o-on に対して）の様な多数の古い形も、複・生 **женъ**

＜ *gʷen-on （ギ 複・属 χωρῶν「国々の」 － 語尾 -ῶν ＜ -ā-on の語尾を持つ； cf. 単・主 χώρᾱ「国、地方」 － に対して）のような新しい形も存在したのである。

一般に、始原的な複数属格語尾と単数対格語尾は、 -m であるとされている。この再構は、古代インド語とラテン語の文献に基づくものであって、そこでは、これらの格形の語末子音は、常に、 m である － 例、ラ 単・対 lupum，複・属 lupōrum（これは、複・生 **влькъ** や ギ 複・属 λύκων と同系の、より古い形 *lupum ＜ *u̯l̥kʷ-o-n あるいは *u̯l̥kʷ-ō-n に取って代わったもの）； ラテン語の語尾 -ōrum は、語尾 -ōs-on の継承である － cf. 始原的な二つの所有語尾 -es (-os) と -on 語尾の合成形である 複・属 eō-rum「彼らの」 ＜ *ei̯-o-os-on 。さらに、次例参照、古イ 単・対 vṛ̥kam ＜ *u̯l̥kʷ-o-n, 複・属 mātṛ̥ṇām 「母達の」、この場合、 -n 語尾を持つ古い属格形 *mā-tṛ-n-（ヒッタイト語の単数・複数属格語尾 -n と同じ語尾）が、所有語尾 -ōm ＜ -ōn によって補強されたものであり、これは、例えば、ギ 複・属 λύκων ＜ *u̯l̥kʷ-o-on に立証される。 *mā-tṛ-n と *u̯l̥kʷ-o-on ＞ *u̯l̥kʷ-ōn における所有語尾の結合から、合成的複数属格語尾 nōn ＞ nām が現れたのであり、この語尾は、古代インド語のほとんど全ての曲用で一般化したのである － 例、複・属 vṛ̥kānām「狼達の」, ávīnām 「羊達の」, sū-nū́-nām 「息子達の」、ただし、複・属 padā́m「足の」（ギ 複・属 πόδων, ラ 複・属 pedum と同系）。

単数対格語尾と共通の起源を持つ、複数属格の始原的な語尾は、 -m ではなくて、 -n である。印欧語の大部分では、語末の位置にあって、例えば、ギリシャ語では n 調音が一般化し、ラテン語や古代インド語では、文字上 m を以て示される弱化した鼻音調音が一般化したように、二つの鼻子音 m と n は、弱化するか、あるいは発音面で均等化した。一連のラテン文法家達（クインティリアヌス、大ロンゴス、プリスキアヌス）の伝えるところから明らかなように、語末では m は発音されず、ある弱化

鼻子音の曖昧調音であった。後続語が母音で始まる場合は、ウェリウス・フラクスは、 M を書かず、 M の前半分を思わせるような特別な文字記号を書き、また、同位置で、カトー・ケーンソーリウスは、回転した M 、すなわち Σ を利用したが、クインティリアヌスは、これを E と見なしている[36]。一連の古いラテンの碑文では、語末の M が抜け落ち、ある箇所では N が記されている。古代インド語の語末子音の m も、似たような曖昧調音であった。その複数属格と単数対格の始原的な鼻音指標は、m ではなくて、 n であった。このことについては、ヒッタイト語の単数・複数属格語尾 -n や古代インド語の所有語尾 -nām 及び -ān-ām（複・属 mātṛṇām「母達の」, vṛ̥kānām「狼達の」）以外にも、次の諸事実が証明している：

1．スラヴ祖語 -i̯ā 語幹名詞の単数生格語尾 -ѧ 。単・生 БОУРѦ, ДОУШѦ, ЗЕМЛѦ を参照、この場合の幹母音 ā は、始原的な不活性（無生）類名詞の集合性語尾 -ā ＜ -e-H_2（§．10 参照）と同系である。単数生格語尾 -ѧ は、語尾 -i̯āns の継承であり、この s は、古い活性（有生）類から借用した所有の補足付加指標である ― cf. 単・生 МАТЕРЕ ＜ *mā-ter-es, 単・生 НОШТИ ＜ *nok^{w}t-ei̯-s 。これに対応する ā 語幹の語尾は、 -āns である ― 単・生 ЖЕНЪ ＜ *g^{w}en-ā-n-s 参照（ -āns ＞ Ъ 及び -i̯āns ＞ ѧ の推移については、§．2 参照)。 ā（i̯ā）語幹名詞における所有指標 n は、他の印欧諸語に立証される所有指標 s（次例参照、リ 単・生 rañkos「手の」, ギ 単・生 χώρᾱς「国の」, ゴ 単・生 gibos 「贈り物の」）よりも自然である。始原的な不活性（無生）類名詞の集合性語尾 -ā（-eH_2） ないしは -a（H_2） に関係する ā 語幹名詞 ― 例、複・主 НГА ＜ *i̯ug-e-H_2（ギ 複・主・対 ζυγά, ラ iu-ga 「くびき」 ＜ *i̯ug-H_2 と同系） ― は、-s 語尾所有形の発展の基となるべき -s 語尾の活性（後の主格）を持たなかったのである ― 次例参照、単・主 ЖЕНА ＜ *g^{w}en-ā ＜ *g^{w}en-e-H_2 , cf. 古イ 単・主 áśvā ＝ ラ equa

「雌馬」，ギ　χώρᾱ「国、地方」，リ　rankà ＝ РЖКА, ゴ　giba「贈り物」。古代インド語の単数属格　áśvāyāḥ「雌馬の」型の、 -s　語尾を含む形は、明らかに、二次的なものである　－　ここでは、古い所有指標は、 ya　＜　i̯o であり（これに起源については、§．27 参照）、これは、古イ　単・属　vṛ̥kasya（ ＝ ギ　λύκοιο　－　ホメロスの言語）「狼の」　＜　*u̯l̥kʷ-o-s-i̯-o（ i̯o　でもって拡張した、所有的意味の古い活格形）や　Пророчь　＜　*pro-rok-i̯-o　型の物主形容詞、における　i̯o 指標と同一である。

2．1人称単数人称代名詞生格　МЕНЕ　＜　*me-n-es（この　-es　は、所有の補足付加指標）の表徴となっている接尾辞　-n-　。属格形は、印欧語の曲用の生成過程における最も古い斜格形であった。その他の斜格形、例えば、所格、共同格（具格）、奪格は、今なお状況語的副詞の意味を持っていた。それ故に、属格形は、他の斜格の形成基盤にもなった　－　例、古イ　男・単・与　tásmai「それに、彼に」　＜　*to-s-mo-ei̯, 奪　tásmāt「彼から、それから」　＜　*to-s-mo-ad, 処　tásmin「彼の所で」＜　*to-s-m-i-n（この　*tos　は、古い所有形であり、 m　は古い中間指標［§．30 参照］である）。Cf. ギ　単・属　τίνος「誰の」　＜　*kʷ-i-n-os, 与　τίνι　＜　*kʷ-i-n-i, 対　τίνα　＜　*kʷ-i-n-n̥（この　*kʷ-i-n　は、古い対格形であり、この形は所有の意味［genitīvus objectī の意味］も持っていた）。1人称単数人称代名詞形の場合にも、 *men- の語幹（　n　は古い所有指標）が、与格、造格、所格形に一般化したのである　－　与　МЬНѢ, 対　МѢНОЖ, 所　МЬНѢ　を参照。

3．印欧語の中性不規則（heteroclite）名詞の斜格の表徴であった接尾辞　-n-　。次例参照、古イ　単・主　áhar,　属　áh-n-as「日、昼」，単・主　ū́dhar, 属　ū́dh-n-as「（動物の）乳房」（ cf.　単・主　ギ　οὖθαρ, 属　οὔθατος「（動物の）乳房」　＜　*ōu̯dh-n̥-t-os), 単・主　yā́kṛt, 属　yak-n-ás「肝臓」（ cf.　ギ　単・主　ἧπαρ, 属　ἥπατος「肝臓」　＜　*i̯ēkʷ-n̥-t-os), 単・主　ásṛk, 属　as-n-ás「血」，ギ　単・

主 ὕδωρ, 属 ὕδατος「水」 < *ud-n̥-t-os 。 n 指標は、本来、所有指標であり、これを使って属格形が形成された。後に、古い属格語幹が、曲用の全斜格に一般化した（第2項参照)。この不規則名詞は、始原的な不活性（無生）類名詞の継承であって、 -s 語尾の活格を持たず、したがって、同語尾の始原的属格形も持たない。古代インド語の yak-n-ás やギリシャ語の ἧπατος「肝臓の」 は、後になって、別の曲用の影響で付け加えられたものである。

4．リトアニア語の人称及び再帰代名詞単数生格形における n 指標 — manęs < *mo-n-en-s「私の」, tavęs「君の」, savęs「自分の」。ここに挙げた形は、新しく形成されたものであるが、古い所有指標 n を包摂しており、これに、他の曲用の影響によって、一般的な属格語尾 -s が付け加えられたのである。

5．いくつかのゲルマン諸語の ā 語幹名詞の複数属格形における n 指標 — 古高ド gebono, アングロ・サクソン gebono「贈り物の」 < *ghebh-ā-n-ōn 参照。語尾の -ānōn は、ā 語幹名詞の古い所有語尾 -ā-n から得られたもので、それが、 o 語幹から借用した所有指標 ōn によって補強されたものである。古代インド語の複数属格語尾 -nām 及び -ānām の起源を参照。

この古い所有指標 n と同系なのが、**ГРАДИНА** < **ГРАДЪ**, **ИСТИНА** < **ИСТЪ**, **ОТЪЧИНА** < **ОТЬЦЬ**, **ХРАМИНА** < **ХРАМЪ** のような派生名詞における接尾辞 -n- である。Cf. ラ rēgīna「女王」(逐語的には、「王に属する、王に関係する（女)」の意, cf. ラ 単・主 rēx, 属 rēgis, 古イ rāj-「王」 ; rēgīna は、 *rēg'-i-H_2-n- に由来する。 ī < i-H_2 の起源と意味については、§．27 参照。 *rēg'-n-i-H_2- に由来する 古イ rājñī 「女王」における接尾辞 -ī- と -n- の置き換えも参照[16]。これと同類の接尾辞 -in- は、**ВѢРЬНЪ** < **ВѢРА**, **ВѢТРЬНЪ** < **ВѢТРЪ**, **НЕБЕСЬНЪ** < *nebh-es- (単・生 **НЕБЕСЕ** の語幹), **ЖИТЬНЪ** < **ЖИТО** のような関係形容詞に立証される。こ

れらの形容詞にあっては、 i 指標は **ГРАДИНА** やラテン語 rēgīna「女王」 型の女性名詞の場合のような、一括多数性指標 H_2 による拡張を受けない。

有生類名詞の対格（ラ 単・対 lupum, ギ λύκον, 古イ vr̥kam, **ВЛЬКЪ** ＜ *u̯l̥kʷ-o-n ）を作り出す基になる、古い方向指示（遠心）格の語尾も、 -n であって、 -m ではない。このことについては、ゴート語 wulfans ＜ *u̯l̥kʷ-o-n-s 型の複数対格形が証明している － cf. 古プ 複・対 deiwans「神々を」, クレタ 複・対 νόμους「諸法を」。これは、 *u̯l̥kʷ-o-n 型の古い方向指示形に由来するものであり、それは、最初は、単数、複数両方の意味を持っていた。後に、これに多数性（複数）指標 s （これの起源については、§．37 参照）が付け加えられたのである。複数対格語尾 -ns は、いくつかの印欧諸語（例えば、wulfans「狼達を」型 の複数対格形が存するゴート語）において、 s 前の m が、 n に変わるのではないから、 -ms から引き出してくることはできない。

スラヴ祖語とバルト祖語の ā 語幹単数対格語尾 -ān は、幹母音 ā と o 語幹の古い単数対格語尾 -o-n（単・対 **ВЛЬКЪ** ＝ リ vìlką ＜ *u̯l̥kʷ-o-n 参照）との融合から得られたものである。このことについては、移動アクセント・パラダイムを持つ ā 語幹曲用の名詞が証明している。すなわち、単数主格では、幹母音の鋭（acute ）音調によって、アクセント（力点）は、幹母音 -ā- ＜ -e-H_2- の上に引きつけられるが、単数対格では、 -ā-on ＞ -ān の縮約によって、語尾 -ān が曲（circumflex）音調を受けるために、アクセント（力点）は語根の上に留まるのである。次例参照、単・主 **БРАДА**（ロ бородà, セ брадȁ, リ barzdà「顎ひげ」）に対して、単・対 **БРАДЪ**（ロ бо̀роду, セ бра̑ду, リ bãrzdą）; **РЪКА**（ロ рукà, セ рукȁ, リ rankà）に対して、**РЪКЪ**（ロ ру̀ку, セ ру̑ку, リ rãnką ）; **ГЛАВА**（ロ головà, セ главȁ, リ galvà「頭」）に対して、

ГЛАВЖ（го̀лову, セ глâву, リ gálvą）; **ЗИМА**（ロ зима̀, セ зимâ, リ žiemà「冬」）に対して、**ЗИМЖ**（ロ зѝму, セ зѝ̂му, リ žiẽmą）; **НОГА**（ロ нога̀, セ ногâ, リ nagà「ひづめ」）に対して、**НОГЖ**（ロ но̀гу, セ но̀̂гу, リ nãgą）。ギリシャ語の、τῆς στρατιᾶς「軍隊の」型の単数属格形の曲アクセントは、語尾 -ᾶς（-ῆς）、が、幹母音 ā と子音幹曲用から借用した単数属格語尾 -es あるいは -os（単・主 κόλαξ, 属 κόλακ-ος「おべっか使い」, 単・主 **КАМЪ**, 生 **КАМЕНЕ** < *kā-men-es 参照）との融合から得られたものである、ことを示している。例、ギ 単・属 τῆς（ドーリス τᾶς）は、*tā-os あるいは *tā-es から出たもので、この語幹の *tā- は、*t-e-H_2 の継承である（§. 10, 24 参照）。ギリシャ語の ā 語幹の全ての複数属格形の曲アクセント（τῶν χωρῶν「国々の」）は、ā 語幹名詞の語尾の -ῶν が、幹母音 ā と属格語尾 -ōn との縮約によるものであることを示している（χωρῶν < *χωρ-ᾱ-ων）。これらの事実は、ā 語幹名詞の曲用は、より遅い時期に発生したものであることを証明しているのである。

§. 39　古代ブルガリア語の中性の起源

活格統語構造の、主格構造への再編以後、活性（有生）類名詞の古い -s 語尾活格は、主格としての再解釈を受け、一方、活性類名詞の古い絶対格（純粋語幹）は、 -n 語尾の方向指示格に置換され、それは、対格として再解釈を受けた。対格の方向指示的な意義は、依然として、ラ Rōmam tōta Italia convenit「イタリア中が、ローマに集まった」, ギ κνίση δ' οὐρανὸν ἷκε「そして、生け贄を燃やす煙は、天に達した」, **пристоѥ хсъ небесьскꙑѧ двьри**（キリストは、天の扉に着いた）（古代ブルガリア語原本の比較的遅い時期の写し）のような文例に現れている。

活格は、不活性（無生）類名詞には存在せず、それの絶対格（純粋語幹）は、活格構造文では、文法的客体の役割を、また不活格構造文では、文法的主体の役割を果たした。換言すれば、不活性類名詞にあっては、客体の形（活格構造文内の）と主体の形（不活格構造文内の）が一致していたのである。このことの結果が、始原的な不活性類の継承である中性名詞の主・対格形の一致である － 主・対 **иго**, ラ iugum, ギ ζυγόν, 古イ yugám, ヒッタイト jugan (iukan)「くびき」を参照。活格統語構造では、活格構造文での活性（有生）類名詞の客体の格（＝絶対格、純粋語幹）は、不活格構造文での不活性（無生）類名詞の主体の格（＝絶対格、純粋語幹）と一致した。また一方、不活格構造文での不活性類名詞の主体の格は、活格構造文での同名詞類の客体の格の職能も務めたのである。古い活格構造文の活性類名詞の絶対格が、新しい主格構造文にあって、 -n 語尾対格によって置換されて以後、古い不活性類の継承である中性名詞の一部には、その主・客体の形を有生類名詞の新しい客体の形に合わせたものもある。何れの格の形も、元々、活格統語構造における絶対格、すなわち、純粋語幹であるという点での同等性を持っていたからである。

この均等化現象に関わったのは、o 語幹名詞だけであって、しかもこれは、恐らくいくつかの印欧語だけのことであろう － 古イ 男・単・対 vr̥kam ＝ ギ λύκον, ラ lupum ＜ *u̯l̥kʷ-o-n「狼を」 と 古イ 中・単・主・対 yugám ＝ ギ ζυγόν, ラ iugum「くびきを」における共通語尾を参照。他の語幹の名詞、例えば、u 語幹名詞の場合は、このような均等化は発生していない － -n 語尾は、男性名詞単数対格形を表徴したにすぎず、中性名詞単数主・対格の特徴は表示していない： 例えば、古イ 男・単・対 sūnúm ＝ リ sūnų「息子を」に対して、古イ 中・単・主・対 mádhu「蜂蜜を」 ＝ ギ μέθυ「(純精)酒を」。古代ブルガリア語の 単・主・対 **ИГО** 型の -**О** 語尾中性名詞は、絶対格（純粋語幹 -o）の継承であって、例えば、単・主・対 **СЛОВО** ＜ *k'leu̯-os あるいは **БРѢМА** ＜ *bher-men が、絶対格（純粋 -es 、-men 語幹）の継承であるのと同じである。古代ブルガリア語の **ИГО** の形は、古イ 中・単・主・対 yugám ＝ ギ ζυγόν や ラ iugum「くびきを」 の原形 *i̯ug-o-n から法則的に引き出すことはできない。このような場合には、語尾の -o-n は、**Ъ** になったであろうから（ cf. 単・対 **ВЛЬКЪ** ＜ *u̯l̥kʷ-o-n ）、ここでは、n は、二次的に付加された指標なのである。

活性類と不活性類名詞に代わることができ、時を経るにしたがって、性の特徴を獲得した代名詞の曲用は、名詞曲用をモデルにして、生成されて行った。例えば、絶対格の職能を務めた代名詞語幹 *t-o- は（活格の役割を果たしたのは、補充法語幹 *s-o である、これについては、§．33 参照)、方向指示指標 n の助けを借りて対格形を作った － cf. 男・対 **ТЪ** ＝ ギ τόν, ゴ thana, 古イ tám, リ tą̃「これを、彼を」 ＜ * t-o-n 。属格は、名詞曲用から借用した s（so） 指標を以て形成された： いくつかの言語では、この指標は、所有指標 i （これの意義については、§．27 参照）によって、補強を受けている。 Cf. 古イ 男・単・属 tá sya ＝ ギ τοῖο（ホメロスの言語） ＜ *t-o-s-i̯-o, ゴ this ＜

*t-e-so 。ТОГО 及び ЕГО 型の男性・中性属格形は、 go の指標の助けを借りて作られたが、これの本来の意義は完全には明かではない（この指標の正常階梯 ЖЕ ＜ *ge は、前接的な［enclitic］接続詞である)。ゲルマン系では、 g（go） 指標の助けを借りて、人称、再帰代名詞の単数対格形が作られている － 例、ゴ 1・単・対 mik ＜ *me-g-「私を」, sik ＜ *se-g-「自分を」。これは、対格と属格（genitīvus objectī）の意義が元々近似性を持っていたことを確認させるものである。

指示代名詞中性主・対格の役割は、純粋語幹（古い絶対格）が、果たすはずであった。ところが、極めて早期に、 *t-o 型の純粋語幹は、移動指標 d による補強を受けた（§．29 参照)。この指標は、この代名詞が、不活性類名詞に属するものであって、それは、行為の真の主体や客体にはなり得ないものであり、単に行為の起点ないしは終点であり得るにすぎないことを強調したのである。このようにして、絶対格（純粋語幹） *t-o と後にその代替を務めた対格 *t-o-n は、活格構造文の活性（有生）の客体を表し、一方、拡張語幹 *t-o-d は、不活格構造文の不活性（無生）の主体を表したのである。起源的に疑似主体と疑似客体の形である *t-o-d（この語尾は、奪格語尾 -d と同一のもの、§．29 参照）の継承が、中性単数主・対格 ТО ＝ 古イ tát, ギ τό ＜ *τοδ, ゴ thata 「それ」である － cf. ラ 中・単・主・対 id「それ」 及び quid「何」における語尾 -d 。さらに次例参照、古ラ 対 mēd「私を」, tēd「君を」, sēd「自分を」及び 奪 mēd「私から」, tēd 「君から」, sēd 「自分から」、恐らく、これらの形は、 *m-e-ad, *t-e-ad, *s-e-ad から出たものであろう ; cf. 古イ 奪 mád「私から」, tvád 「君から」、これらは、 *m-e-d ないしは *m-o-d 等から得られたものである。リュキア語[37]では、移動語尾 -d は、代名詞曲用から名詞曲用へ移され、 o 語幹の中性主・対格形の表徴となった。代名詞曲用の影響の下に作られた名詞形は、スラヴ祖語にも存在したかもしれないが（中・主・対 ИГО は、 *iug-o-d から引き出すこともできる)、このような仮定が、古代ブルガリ

ア語の o 語幹中性単数主・対格形の説明に必要だというのではない。この形は、恐らく、古い絶対格（純粋語幹）の直接的な継承であろう。 *m-e-n, *t-e-n, *s-e-n から得られた、古代ブルガリア語の対格形 **мѧ**, **тѧ**, **сѧ** は、かつて、絶対格の機能を持ち、後には対格の機能を持つ（ cf. ギ 対 μέ「私を」, ドーリス τέ「君を」）ことになった、スラヴ祖語代名詞の純粋語幹 *me, *te, *se が移動指標 d の代わりに、方向指示指標 n による補強を受けたことを示している。古代インド語の対格 mām は、 *me-on あるいは *me-en に由来するものである。

始原的な活格統語構造が、主格統語構造へ再編され、始原的な活格が主格に変わると、活格指標 s （すなわち、始原的な代名詞語根 *s- ）は、有生類名詞の主格指標に転じた。いくつかの場合、無生類名詞（中性発達の基となった）の指標となったのは、不活格指標（すなわち、指示代名詞の絶対格 *t-o の基になった始原的な代名詞語根 *t- ）である。次例参照、古イ 中・主・対 yákṛt, 属 yaknás「肝臓」, śákṛt, 属 śáknas「牛の排便」, ギ 中・単・主・対 δόρυ, 属 δόρατος < *doru̯-n̥-t-os「槍」, γόνυ, γόνατος「膝」, οὖθαρ, οὖθατος「(動物の）乳房」, οὖς, ὠτός「耳」, σῶμα, σώματος「身体、物体」, μέλι, μέλιτος「蜂蜜」。恐らく、**БРѢМѧ**, **СѢМѧ**, **ВРѢМѧ**, **ВЪІМѧ**（ギ οὖθαρ と同系）, **ПЛѢМѧ**, **ЧИСМѧ**, **ПИСМѧ** のような古代ブルガリア語の中性 men 語幹名詞は、トルベツコイ（N. Trubetzkoj, 1922 ）が推定しているように、かつての単数主・対格形に t 指標を持っていた可能性がある。すなわち、**БРѢМѧ**は、 *bher-men-t（ t は、始原的な不活格指標）の継承かも知れないのである。ただし、次例参照、 古イ 中・主・単 bhárma, ギ φέρμα「重荷、積み荷」（**БРѢМѧ** と同系） < *bher-mn̥, ギ γνῶμα「しるし」（**ЗНАМѧ** と同系） < *g'nō-mn̥, ラ sēmen「種」（**СѢМѧ** と同系） < *sē-mn̥ 。一方、 古イ nā́mā「名」や ゴ namo 「名」（**ИМѧ** と同系）のような中性単数主・対格形は、 *no-mon-t あるいは *no-men-t から、

t の脱落以後の o あるいは e を延長して、引き出すことができよう。Cf. リ、šelmuõ（中性に代えて、男性）「屋根の棟木」 — この -muõ の語尾は、おそらく、 -mon-t ＞ -mōn の継承であろう（リ šelmuõ は、сѧтмѧ「丸太、梁材」及び ギ σέλμα, 属 σέλματος「漕ぎ手が座る太い横板、腰掛け」 ＜ *k'sel-mn̥-t- と同系）。中性の men 語幹に対して t 指標が付加されたことを間接的に示しているのが、ラテン語の次のような対応形である — augmen : augmentum 「増加」, fundāmen : fundāmentum「基礎、土台」, sēmen「種子」（сѣмѧ と同系）: sēmentis 「播種」, strāmen : strāmentum 「藁、藁床」（ギ στρῶμα, 属 στρώματος「藁床」 と同系）。

§. 40　古代ブルガリア語の動詞アスペクトの起源

活格活用動詞の完了体と不完了体への二極文化は、始原的には、一括多数性指標　H_2　の存否に規定されるものであった。この指標を介して、発話時以前に完遂、完了、終止した行為を表す動詞語幹が作られたのである（§.10 参照)。H_2　指標を持つ活格活用動詞からは、次第に、アオリスト（минало свършено време［完了過去時制］－　aorist）形が発達して来るのであり　－　例、1・単　**БѢРАХЪ**　＜　*bher-e-H_2-s-, **НЕСОХЪ**　＜　*nek'-H_2-s-、また、H_2　指標を持たない活格活用動詞からは、非完了（infectum）活用の形が発生してくるのである（§.14 参照)。この非完了活用からは、後に、現在時制の形（例、3・単　**БЕР-Е-ТЪ, НЕС-Е-ТЪ**）と始原的なインパーフェクト（未完了過去）が得られることになり、それは、さらに後に、単純アオリスト（例、3・単　**НЕСЕ**　＜　*nek'-e-t）として再解釈を受けることになる。始原的な不活格活用からは完了（パーフェクト）活用が発生した（§. 18 参照）のであるが、これの基本的な意義が(ただし、最古の意義ではないが)、過去性（претеритност）であることから、時を経るにしたがって、完了活用動詞の一部も、一括多数性指標　H_2　を獲得したのである。これは、例えば、次のようなギリシャ語完了形に現れている　－　例、　1・単　λέλυκα「解いた、ほどいた」, πεφύτευκα「植えた」, ἦχα「導いた」　＜　*H_2e-H_2eg'-H_2-, τέτροφα「向きを変えた、回した」＜　*te-trop-H_2-（§. 13 参照)。

以上により、不完了体は、初めの内は、非完了的動詞幹　e　語幹に等しく、そこから、古代ブルガリア語の現在時制と単純アオリストが発生して来るのであるが、完了体は、一括多数性指標　H_2　付きの動詞幹に等しく、そこからは、古代ブリガリア語のシグマ・アオリスト形（1・単　**БѢРАХЪ**　＜　*bher-e-H_2-s-, **ПѦСЪ**　＜　*pen-H_2-s-,　3・単　**НЕСОХЪ**　＜ *nek'-H_2-s-）やギリシャ語完了形の一部（例、　1・単　λέλυκα「解いた、

ほどいた」, ἦχα「導いた」 < *H_2e-H_2eg'-H_2-)、アオリスト形（例、ἔθηκα「置いた、据えた」 < *dheH$_1$-H$_2$-）が発生して来るのである。後に、非完了活用は、分化して、一つは、過程的な非過去に（例、3・単・現 **БЕРЕТЪ, НЕСЕТЪ,** ギ φέρει「運ぶ」)、今一つは、過程的な過去（例、 スラ祖 3・単・未完 *neset > アオ **НЕСЕ,** ギ 3・単・未完 ἔ-φερε「運んでいた」）に変わるのである（§. 19 参照)。スラヴ祖語では、ギリシャ語とは違って、過程的な過去（古いインパーフェクト［未完了過去］）は、その過去的な意味を失い、アオリストに転化するのである。それ故に、始原的な不完了体の直接的な継承は、スラヴ祖語の接頭辞の付かない現在幹 e 語幹でけである — cf. 3・単・現 **БЕРЕТЪ, БЬЕТЪ** < *bhei̯-e- , **НЕСЕТЪ, ЗОВЕТЪ, БОДЕТЪ, ВЕДЕТЪ, ВЕЗЕТЪ**「輸送する」, **ВЛАДЕТЪ, ДѢЕТЪ** < *dheH$_1$-e-, **КЛЬНЕТЪ, ВЛѢЧЕТЪ** < *u̯elk^w-e-, **МОЖЕТЪ, ГНЕТЕТЪ, МЬРЕТЪ, ЖЕНЕТЪ, ЖИВЕТЪ, БЛЮДЕТЪ** < *bheu̯dh-e-, **ЖЬРЕТЪ, ВЬЕТЪ** < *u̯ei̯-e-, **ЖЬДЕТЪ, ЧЬТЕТЪ, КЛАДЕТЪ, ТЕПЕТЪ, КРЪЕТЪ, РАСТЕТЪ, ИДЕТЪ, ЖЕЖЕТЪ** ; **ПО-ЧЬЕТЪ** < *kei̯-e- , cf. ギ κεῖμαι「横たわっている」, 集約的対応形 **ЧАЕТЪ** < *kēi̯-e- も参照。例外は、完了体の **РЕЧЕТЪ, ПАДЕТЪ** < *pōd-e-（語根母音の延長対応階梯を伴う、このような階梯は、始原的な過去活用に見られるものである — §. 10 参照), **ИМЕТЪ**「取る、つかむ」 < *ьm-e- （疑似他動詞［始原的な不活格動詞］ **ИМѢТИ** と同系、§. 18 参照）である。

始原的な、動詞アスペクトの分化に、最初に重大な変化が始まったのは、起動的（inchoative）接尾辞 -ne- を持つ非過去語幹や（3・単・現 **СТАНЕТЪ, КОСНЕТЪ, ДВИГНЕТЪ, ГЪБНЕТЪ** 参照)、また同じく、起動的接中辞（infix） n を持つ非過去語幹（次例参照、3・単・現 **САДЕТЪ, ОБ-РАШТЕТЪ, ВЪЗ-ЛАЖЕТЪ, БЖДЕТЪ** に対して、3・単・アオ **СѢДЕ, ОБ-РѢТЕ, ВЪЗ-ЛЕЖЕ, БЪСТЪ** ; cf. 3・単・

現 **ПРИ-СѦЖЕТЪ**「手を伸ばす」に対して、 リ 不 sègti 「締める、留める」, **И-СѦКНЕТЪ**「止む、終わる」に対して、 リ 不 sèkti 「減少する、衰える、尽きる、なくなる」) が、完了体に算入されるに至ったときである。接中辞 n の起源については、§. 14 及び §. 17 第2項を参照。起動的接尾辞（接中辞） n の起源は、遠心・方向指示指標 n （§.38 参照）と同一である。非完了活用を持つ動詞幹 e 語幹においては、遠心・方向指示指標 n は、前進的展開行為（п р о г р а д и е н т н о д е й с т в и е ＜ ラ gradior「歩行する、前進する」) を表したのであり、その行為の起点を現在とし、したがって当然未来に向けられた行為を表したのである。それ故に、起動接尾辞（接中辞） n を持つ非完了動詞形は、スラヴ祖語の時期に、未来時制の意義を持って使われ始めるのである。

スラヴ祖語の ne 語幹も、また接中辞 n を持つ語幹も、原則的には、自動詞であって（§. 18 参照)、語根母音の延長階梯を含むことが多いが（次例参照、3・単・現 **ПО-БѢГНЕТЪ** に対して、ギ 1・単・現 φ ἔ β ο μ α ι「逃れる、驚いて逃げる」 ＜ *bhegʷ-, **ПО-ГѢБНЕТЪ** に対して、 **ГѢНЕТЪ**「曲げる」, **ТѢКНЕТЪ** に対して、 **ТѢЧЕТЪ**, **ГАСНЕТЪ** ＜ *gʷōs- に対して、ギ 1・単・現 σ β ἑ ν ν ῡ μ ι（消す） ＜ *sgʷes-nu-, **ПО-СТѢДНЕТЪ**)、このことは、これらが古い不活格活用と関連性を持っていることを示している。ゴート語の起動動詞、例えば、 不 and-bundan「解ける、ほどける，自由になる」, gahailnan「健康になる、全快する」, mikilnan「大きくなる、増える」 のような動詞も、自動詞的な意義を持っており、これらは、新しい状態への移行を示すもので、ウルフィーラ（Wulfila)[38] の新約聖書訳では、しばしば、ギリシャ語中動相形に相当するものである。ゴート語の -ne- 接尾辞を持つ起動動詞の過去形が、一括多数性指標 H_2 の始原的な存在について証明している（例、1・単・現 fullna「一杯になる」 ＜ *pь ln-no-に対して、1・単・過 fullnoda ＜ *pь ln-ne-H_2-）のに対して、スラヴ祖語の現在幹 ne

語幹動詞の過去形は、補充法的非完了幹 e 語幹から作られるか（例、3・単・現 **ДВИГНЕТЪ** に対して、3・単・アオ **ДВИЖЕ**, cf. ギ 1・単・現 ἄγνῡμι「こわす、砕く」に対して、1・単・アオ ἔαξα）、あるいは、接尾辞 u を介して作られており（例、3・単・アオ **ДОУНЖ** ＜スラ祖 *doṷ-no-n- ＜ *dhoṷ-no-ṷ-, cf. §. 17 第2項)、これは、当初は、行為が、視界外でなされたものであることを表し（§. 25 参照)、過去時制の指標の一つに容易に転化し得る可能性を持ったのである — cf. 能過分・女・単・主 **НЕСЪШИ** ＜ *nek'-u-s 及び ラ 完・1・単 doc-u-ī「教えた」, audī-v-ī「聴いた」。ギリシァ語の接尾辞 -nu-（-neṷ- のゼロ階梯） は、過去指標として独立していない。この接尾辞の延長階梯 -nū-は、単数形と複数形を区別した : 1・単・現 δείκνῡμι「示す」, 2 δείκνῡς, 3 δείκνῡσι に対して、1. 複 δείκνυμεν, 2 δείκνυτε, 3 δείκνύᾱσι ; cf. 1・単・現 φημί「言う、話す」, 2 φῆς, 3 φησί に対して、1・複 φαμέν, 2 φατέ, 3 φᾱσί、§. 35 も参照。

いくつかの完了体第一次動詞、また現在幹に接尾辞 -ne- を持つ起動動詞に対応するのが、接尾辞 -i- を持つ不完了体派生動詞の現在形である。この -i- は、スラヴ祖語の反復（iterative）動詞の形成にも与るものである（§. 17 第5項参照)。派生動詞のいくつかは、語根母音に別の階梯を持つか、あるいはまた、別の原語根を持つ — 例、不完・1・単・現 **ДАЖ**, 2 **ДАЕШИ** ＜ *deH₃-i̯-e- と 完・1・単・現 **ДАМЬ** ＜ *de H₃-dH₃-mi（完了［パーフェクト］型の始原的重複語幹で、後に、完了体動詞に算入された）; **ВЪ-СТАЖ**, **ВЪ-СТАЕШИ** ＜ *steH₂-i̯-e-と **СТАНЖ**, **СТАНЕШИ** ; **ЕМЛЖ**, **ЕМЛЕШИ**「取る（ブ в з е м а м)」＜ *H₁em-i̯-e- と **ИМЖ**, **ИМЕШИ**「取る（ブ в з е м а)」＜ *H₁ь m-e-; **ГЪБЛЖ**, **ГЪБЛЕШИ** と **ГЪБНЖ**, **ГЪБНЕШИ** ; **КАПЛЖ**, **КАПЛЕШИ** と **КАНЖ**, **КАНЕШИ**「滴る」; **ДВИЖЖ**, **ДВИЖЕШИ** と **ДВИ**

ГНѪ, ДВИГНЕШИ ; **КЛИЧѪ, КЛИЧЕШИ** と **КЛИКНѪ, КЛИКНЕШИ** ; **ТѦЖѪ, ТѦЖЕШИ** と **ТѦГНѪ, ТѦГНЕШИ** 。 これらの動詞のアオリスト語幹は、 eH_2 から得られた接尾辞 **-А-** を含んでいる — **ИМАТИ, ГЪБАТИ, КАПАТИ, ДВИѢАТИ, КЛИЦАТИ, ТѦѢАТИ, ДАѢТИ, ВЪСТАѢТИ** (最後の二形は、二次的な母音間のヨット［ｊ］化を伴う）を参照。 **ПЛЮѪ, ПЛЮЕШИ,** ＜ *pi̯eu̯-i̯-e-, 不 **ПЛЬВАТИ** ＜ *pi̯u-eH_2- (**БЪВАТИ** ＜ *bhū-eH_2- と同じように、二次的な **В** を伴う） と **ПЛИНѪ, ПЛИНЕШИ** ＜ *pi̯ū-ne- も参照。

合成（テーマ付加）接尾辞 -i̯-e-(構成要素 -ei̯- のゼロ階梯と幹母音の e 階梯 — **ДАѪ, ДАЕШИ** ＜ *deH_3-i̯-e- 参照）に代わって、さらによく用いられるのは、テーマを付加しない（単純）接尾辞 -ei̯-（構成要素 -ei̯- の e 階梯と幹母音のゼロ階梯）であり、これを用いて、古代ブルガリア語の使役（causative）動詞が作られている（§．6 第２項, §．17 第５項参照)。 Cf. １・単・現 **ЛѦГѪ**, 2 **ЛѦЖЕШИ** に対して、**ПО-ЛОЖѪ, ПО-ЛОЖИШИ** ; **СѦДѪ, СѦДЕШИ** に対して、 **НА-САЖДѪ, НА-САДИШИ** ; **СТАНѪ, СТАНЕШИ** ＜ *steH_2-ne- に対して、 **СТАВЛѪ, СТАВИШИ** ＜ *steH_2-e-i̯- (**СТОѪ, СТОИШИ** ＜ *stH_2-ei̯-, 不 **СТОѢТИ** ＜ *stH_2-ē- における語根母音のゼロ階梯を参照、 cf. **МЬНѪ, МЬНИШИ, МЬНѢТИ**) ; **БѪДѪ, БѪДЕШИ** ＜ *bhu-n-dh- に対して、**БАВЛѪ, БАВИШИ** ＜ *bhōu̯-ei̯- ; **ГЪБНѪ, ГЪБНЕШИ** に対して、 **ГОУБЛѪ, ГОУБИШИ** ; **ТѦГНѪ, ТѦГНЕШИ** に対して、**ТѪЖѪ, ТѪЖИШИ** ; **И-СѦКНѪ, И-СѦКНЕШИ** に対して、 **И-СѪЧѪ, И-СѪЧИШИ** ; **ПО-ГРѦЗНѪ, ПО-ГРѦЗНЕШИ** に対して、 **ПО-ГРѪЖѪ, ПО-ГРѪЗИШИ** ; **ИС-ЧЕЗНѪ, ИС-ЧЕЗНЕШИ** に対して、 **ИС-КАЖѪ, ИС-КАЗИШИ** ; **ГАСНѪ, ГАСНЕШИ** に対して、 **ГАШѪ, ГАСИШИ** ; **ВЪС-КРЬСНѪ, ВЪС-КРЬСНЕШИ** ＜ *krips- に対して、 **ВЪСКРѢШѪ, ВЪСКРѢСИШИ** ＜ *kroi̯ps-; **ТОНѪ, ТОНЕШИ** ＜ *top-ne- に対して、**ТОПЛѪ, ТОПИШИ** 。いくつかの場合、起動動詞に対応しているの

が、使役動詞なのか、古い接尾辞 -ei̯- の付いた名詞派生動詞なのか、明瞭ではないことがある — 例、 **съхнѫ, съхнеши** に対して、 **соушѫ, соушиши** ; **мрькнѫ, мрькнеши** に対して、**по-мрачѫ, по-мрачиши** ; **свьнѫ, свьнеши**「夜が明ける」 < *k'u̯it-ne- に対して、 **свѣштѫ, свѣтиши** 。 §. 17 第5項には、いわゆる verba causatīva（使役動詞）が、本質的には、第二次的な verba transitīva（他動詞）であることを、示した。

次のような、不完了体 i̯-e- 語幹動詞は、起動動詞の対応形を持たない — 1・単・現 **колѭ**, 2 **колеши**, 不 **клати** ; **жьнѭ, жьнеши, жати** ; **борѭ, бореши, брати** ; **мелѭ, мелеши, млѣти** ; **пишѫ, пишеши, пьсати** ; **мажѫ, мажеши, мазати** ; **кажѫ, кажеши, казати** ; **кѫплѭ, кѫплеши, кѫпати** ; **иштѫ, иштеши, искати** ; **вѧжѫ, вѧжеши, вѧзати** ; **орѭ, ореши, орати** 。 これらの i̯-e- 語幹の一部（**борѭ, жьнѭ, орѭ**）は、始原的な完了（不活格）活用に関連する、かつての非テーマ動詞に起源を持っている。 Cf. 非テーマ動詞完了幹 1・単・現 **ѣмь**, 2 **ѣси** ; **дамь, даси** ; **вѣмь, вѣси** 。

始原的な、動詞アスペクトの分化に二度目の重大変化が始まったのは、完了体動詞に、接頭辞付きの非完了活用 e 語幹動詞が、算入されるに至ったときである — 不完・1・単・現 **идѫ**, 2 **идеши** に対して、完・1・単・現 **отидѫ**, 2 **отидеши, изидѫ, изидеши, придѫ, придеши, сънидѫ, сънидеши** 。初めの内は、接頭辞は、状況語的な意味を持った adverbia（副詞）であり、それが、次第に、動詞語幹と融合したのである（また、その形容付加的（adnominal）用法から、前置詞が発生した — **въ** と **въниде̑тъ**, **съ** と **сънидетъ**, **при** と **придетъ**, **из** と **изидетъ** を参照 cf. ギリシャ語前置詞と接頭辞 ἐξ, κατά, ἀπό, ἀνά は、副詞 ἔξω, κάτω, ἄπω-θεν, ἄνω に対応している)。この融合の結果として、始原的

な非完了動詞幹からは、 verba terminatīva ［終止相動詞］（すなわち、空間的限界行為の名称）が発生し、それが、完了体に算入され、起動相動詞と同じく、未来の意義で用いられるに至ったのである。

二次的不完了体動詞の現在幹は、接尾辞 -ā-i̯-e（§．17 第3項参照）と、また普通は、語根短母音の延長によって、作られた：

a）起動相動詞から ： 完・1・単・現 **дрьзнѫ**, 2 **дрьзнеши** ： 不完・1・単・現 **дрьзаѭ**, 2 **дрьзаеши** ； **въздъхнѫ**, **въздъхнеши** ： **въздъхаѭ**, **въздъхаеши** ； **бѫдѫ**, **бѫдеши** ＜ *bhu-n-dh-: **бъваѭ**, **бъваеши** ＜ *bhū-eH₂-。

b）接頭辞によって作られる二次的完了体動詞から ： 不完・1・単・現 **текѫ**, 2 **течеши** ： 完・1・単・現 **мимотекѫ**, 2 **мимотечеши** ： 1・単・現 **мимотѣкаѭ**, 2 **мимотѣкаеши** ； **кльнѫ**, **кльнеши** ： **заклькнѫ**, **заклькнеши** ： **заклинаѭ**, **заклинаеши** ； **вѣмь** ＜ *u̯oi̯d-mi, **вѣси** ： **повѣмь**, **повѣси** ： **повѣдаѭ**, **повѣдаеши** ； **владѫ**, **владеши** ： **обладѫ**, **обладеши** ： **обладаѭ**, **обладаеши** ； **оучѫ**, **оучиши** ： **наоучѫ**, **наоучиши** ： **наоучаѭ**, **наоучаеши** ； **творѭ**, **твориши** ： **затворѭ**, **затвориши** ： **затварѣѭ**, **затварѣеши**（ -ei̯-ā- ＞ -ī-ā- ＞ -i̯ā ＞ -ѣ- の変化を伴う）； ただし、次を参照、 **възложѫ**, **възложиши** に対して **възлагаѭ**, **възлагаеши**、 **оуготовлѭ**, **оуготовиши** に対して **оуготоваѭ** **оуготоваеши**、**настѫплѭ**, **настѫпиши** に対して **настѫпаѭ**, **настѫпаеши**、**омочѫ**, **омочиши** に対して **омакаѭ**, **омакаеши** は、二次的不完了体派生語幹に、接尾辞 -ei̯- ＞ -ī- ＞ -i̯- の痕跡がない。

1・単・現 **витаѭ**, 2 **витаеши**, **вълаѭ**, **вълаеши**「波まかせに行く」 ＜ *ul- （**влѣкѫ**, **влѣчеши** ＜ *u̯el-kʷ- と同系）, **желаѭ**, **желаеши**, **копаѭ**, **копаеши** は、 imperfectīva tantum ［絶対不完了体］（完了体根源動詞がない）である。

二次的な verba duratīva ［継続相動詞］（不完了体語幹から作る）として、次のものがある － 1・単・現 **блисцаѭ**, 2 **блисцаеши**（**блѣштѫ**, **блѣштиши** に対する）, **лѣтаѭ**, **лѣтаеши**（**лештѫ**, **летиши** に対する）, **валѣѭ**, **валѣеши**（**валѭ**, **валиши**「転がす」に対する）, **мѣштаѭ**, **мѣштаеши**（**мѣштѫ**, **мѣстиши** に対する）, **метаѭ**, **метаеши**（**мештѫ**, **мештеши**「投げる」に対する）, **нѫждаѭ**, **нѫждаеши**（**нѫждѫ**, **нѫдиши** に対する）。

原　　注

1．古代ブルガリア語の多数のキリール文字写本では、語頭ないしは母音後の位置にある原母音　e　に対しては、　ꙗ　が対応する。

2．リトアニア語では、語中音節の原母音　ō　に対して、もしそれが　e（軽い語基における）または　ē（重い語基における）の対応延長階梯であるときには、　o　が対応する。語中音節の原母音　ō　が、e　ないしは　ē　の階梯でないときには、リトアニア語での対応は、　uo　である。語末音節での原母音　ō　に対しては、リトアニア語では常に　uo　が対応するが、それは　u　に短縮する。

3．**лѣ**（**лъ**）や　**рѣ**（**ръ**）に代わる、　**ьл**（**ъл**）や　**ьр**（**ър**）の書法は、マケドニア・キリール文書（Македонски кирилски лист）やシュメオン帝時代のキリール文字碑文に見られる　―　例、　**прьвое**　に対して　**пьрвое**、　**млъчати**　に対して　**мьлчати**　。

4．ヒッタイト語のテクストでは、通常、　kk　を以て後舌無声子音が、また、k　を以てその対応有声音が表される。

5．ヒッタイト語は、助動詞の語根が　*H_1es-　であることを間接的に示唆している；この言語では、母音前で　H_1　が消失し、語頭子音前では、それが　a　に変わっている　―　3・単・現　eš-zi　＜　*H_1es-ti（**єсть**　と同系），　3・複・現　aš-anzi　＜　*H_1s-onti（**сѫть**　と同系）参照。語頭子音前での　H_1　の　a　への変化については、さらに、3・複　adanzi　＜　*H_1d-onti「彼らは食べる」（**ꙗдѧть**　＜　*H_1e-H_1ed-n̥t-、§．12 参照）を参照。

6．非完了（infectum、ギ　ἀτελής「未完の、無限の、終わりなき」の借用訳［カルク］）という用語は、ヴァロー（訳注、　M. Terentius Varro, B.C 116-27）のラテン文法からの借用である。これを用いて、非完了の行為の時制が表される。スラヴ祖語初期においては、その時制は二種で、

現在時制（3・単 *nek'-e-ti ＞ **НЕСЕТЪ** を参照）と古い未完了過去（インパーフェクト）（3・単 *nek'-e-t ＞ **НЕС-Е** を参照）であったが、後者はアオリストとして再解釈を受けることになる。これら二つの非完了時制の共通起源については、§．19 参照。

7．ラテン語の bene (benē), longē 型の副詞は、古い所格形に起源を持つ **ЗЪЛѢ, ДОБРѢ, ЛЮТѢ** 型の副詞とは同系関係を持たない。このことは、第二次口蓋化の例 － **ГОРЪЦѢ, КРОТЪЦѢ, СЛАДЪЦѢ, ТАЖЬЦѢ** － から明らかである。

8．ロシア語の二音節不定詞と比べる場合、次のことを考慮しておかなくてはならない。始原的な語末アクセントは、語根短母音の不定詞に残っている － 例、 м е с т и̑＝**МЕСТИ**, в е с т и̑＝**ВЕСТИ**, н е с т и̑＝**НЕСТИ**, п л е с т и̑＝**ПЛЕСТИ** 。Cf. セ・ク м ѐ с т и, в ѐ с т и（**ВЕЗЖ, ВЕЗЕШИ** と同系）, н ѐ с т и, п л ѐ с т и（この短上昇アクセント［ ˋ ］は、アクセントの一音節前進を示す）、また チ mésti, vésti（**ВЕДЖ, ВЕДЕШИ** と同系）, vézti（**ВЕЗЖ, ВЕЗЕШИ** と同系）, nésti, plésti（アクセント直前音節における長音の発生を証するもの）も。 スロ miest', viest', viezt', pliest' も、同様のことを示しているが、このことは、 ウクライナ м ѐ с т и, в ѐ с т и, в ѐ з т и, н ѐ с т и, п л ѐ с т и の、アクセント位置が、スラヴ祖語のものではないことを表している。逆に、 セ・ク м ȍ ħ и＝**МОШТИ**, п ѐ ħ и＝**ПЕШТИ**, т ѐ ħ и＝**ТЕШТИ** ； チ téci, péci ； スロ piect', tiect' ウクライナ м о ч и̑, п е ч и̑, т е ч и̑ は、ロシア語の м о ч ь, п е ч ь, т е ч ь が、アクセント的に見て、より新しいものであることを証明している。長母音を持つ不定詞、例えば、 **ПАСТИ** ＝ セ・ク п а̏ с т и, ロ у-п а̏ с т ь, **ЛѢСТИ** ＝ ロ л е з т ь, **КРАСТИ** ＝ セ・ク к р а̏ с т и, ロ к р а с т ь においては、アクセントは、スラヴ祖語期にすで不定詞語尾前にあった。

9．例、女性指標にも転化した、一括多数性指標 H_2（§．24 参照）は、

かつては、被限定語ではなく、限定語（同格語［apposition］、形容詞）にのみ付加されたのである。このことを示しているのが、 中・複 ūdhar divyā́ni 「神の乳房」 型の古代インド語の構文であり、 H_2 の継承である（§. 3 参照)、この中性複数語尾 -i は、形容詞にのみ付加される。名詞が、かつてのその（限）定語に常に一括多数性指標 H_2 を含むような場合、そのような名詞が、女性名詞としての再解釈を受けたのである。

10. ウムブリア方言で、語尾 -ōm は、 -um になったかもしれない。しかし、ラ 複・属 deum「神々の」 からは、ラテン語の古い複数属格語尾が、 -ōm であるか -om であるかは、決定できない。ラテン語では、 -ōm は短縮して、 -om ＞ -um になっているからである。

11. Cf. u 語幹、 i 語幹の形容詞では、男性、女性間の差異がないゲルマン諸語 － 例、ゴ 男・女 hardus「硬い」, 中 hardu ; 男・女 hrains「清潔な」 ＜ *hrain-i-s, 中 hrain ＜ *hraini 。単数女性に別の形を持つ、古代インド語やギリシャ語の u 語幹、 i 語幹形容詞の方が、より新しいタイプのものである － 例、 ギ 男 ἡδύς「甘い」, 女 ἡδεῖα ＜ *ἡδεϝ-ι-α ＜ *svēd-eu̯-i-H_2 ; 古イ 男 svādúḥ, 女 svādvī ＜ *su̯ēd-u̯-i-H_2（女性名詞の接尾辞 -i- については、§. 27 参照)。この二分法（有生と無生）は、印欧語の始原的な疑問代名詞にも関わっている － ギ 男・女 τίς ＜ *k^w-i-s, 中 τί ＜ *k^w-i-d, ラ 男・女 quis, 中 quid 。

12. さらに次を参照、 ギ ὁ σῖτος「穀物、穀類」, 複 τὰ σῖτα, ラ iocus「冗談、しゃれ、娯楽」, 複 ioca, clīvus「傾斜、勾配、丘」, clīva, また、同じく、 ロ сто̀рож, 複 сторожа̀, го̀лос, голоса̀, го̀род, города̀, лес, леса̀, луг, луга̀, хлеб, хлеба̀（ただし、 ブ 単 крак, рог に対する、 複 крака̀, рога̀ は、起源的には、古い双数形である)。 Cf. ブ лист と листо, лѝсти と листа̀。 集合多数性から、女性単数への変化につ

いては、 ギ κάλαμος, 古高ド halm, ラト salms「穀草の茎」 < *k'olHm-o-, 古ブ СЛАМА < *k'olHm-e-H_2, ゴ 男 laufs, 古高ド 女 loupa「ひさし、軒、陰のある場所、夏に蓄えた家畜の冬用樹葉の小枝」のような形が、証明している。印欧語の、原則として女性である樹木の名称において、接尾辞 -o- と -ā- < -eH_2 の間で揺れがあるときに、より古いのは、明らかに、o 語幹の形の方である — 次例参照、 ギ φηγός, ドーリス φᾱγός「オークの木」, ラ fāgus「ブナ」 < *bhāg-o-, ゴ boka「ブナ」 < *bhāg-ā ; ラ quercus「オークの木」 < *perk^w-o-, 古高ド forhe「松」 < *perk^w-ā 。樹木の名称における、集合多数性名詞とそれに対応する有生（活性）類名詞の対立は、初めは、樹木の果実と樹木自体を区別するものであった — ギ ἡ κέδρος「西洋スギ」 と τὰ κέδρα「西洋スギの実」, ἡ κέρασος「桜の木」 と τὰ κέρασα「さくらんぼ」, ἡ προῦμνος「スモモの木」 と τὰ προῦμνα「スモモ」, ラ 女 pirus「梨の木」と pira「梨」参照。 単数の意義の中性 o 語幹の形も、集合多数性名詞を基にして、さらに後に作られたのである — 例、ギ τὸ κέδρον「西洋スギの実」, τὸ κέρασον「桜」, τὸ προῦμνον「スモモ」, ラ pirum「梨」。ただし、全ての印欧語においてではない。スラヴ諸語では、果樹とそれに対応する果実の名称は一致している — 例、 ブ крушa「梨の木、実」, слива「スモモの木、スモモ」, череша「セイヨウミザクラの木、実」。このような名詞の場合、いくつかの他の -a 語尾女性名詞の場合と同様、ブルガリア語では、副詞 много をおくことができる — много круша, много ябълка, много мечка（多数の熊）。

13. 天の水分（露）を絞り出す石、すなわち、製粉所（製粉器）［ブ мелница］の原型（主・単 ЖРЬНЪ, 生 ЖРЬНЪВЕ［石臼、挽き臼］と 古イ grāvan-「ソーマを挽き砕く石」の同系関係については、上

を参照）と雷神がその敵を打ち砕く武器である稲妻［ブ　мълния］との関連性については、次の語の共通の語根も、これを証明している　－　**МЛЬНЬИ**　＜　*mḷ-dh-n-, 古プ　mealde「稲妻」, 1・単・現　**МЕЛЖ**, 2　**МЕЛЕШИ**,　不　**МЛЪТИ**,　古アイスランド　myln「火、稲妻、天の火」, 古アイスランド　Mjǫllnir〔ミョッルニル〕「神トールが世界の蛇を打ち破るときの大槌（ハンマー）」, **МЛАТЪ**　＜　*mol-to-「大槌（ハンマー）」。「二羽の鷲が合い戦って、白い泡を吹き出す」（два　орла　се　бият, бяла　пяна　пушат.）（水車とそれが挽く粉）といったブルガリアの謎かけも参照。鷲（水車）は、ブルガリア民間信仰によれば、雷雲の告知者でありかつその先導者であり、一方、白い泡のように流れ出す大量の粉は、大地が穀物を産み出すべく大地を肥沃にする天の水（分）の隠喩である。［訳注、神トール（ソール）は、スカンジナヴィア神話の主要神の一。雷と嵐と豊饒の神。巨人と怪物からの、神々と人々の守り手。戦闘用のハンマーで武装した赤毛の勇士として画かれる　－　БСЭ　等による］

14. 原始スラヴ的発想では、虹は、大地が豊饒の水を受けた、つまり天（天の雨）が母なる大地を肥沃にしたことの印である；ブルガリアの諺、「雨降って、お天動様の熱ければ、悪魔の奴の嫁取りだ」（Дъжд　вали, слънце　грей, дяволът　се　жени.）は、天と地の、天界の婚礼を祝う遠い昔の異教の祭の余韻を残したものであり、ロシア語の虹の名称　ра̀дуга　あるいは　весёлка　もこれに起源を持つ［訳注、весёлка「虹」は、ロシア方言　－　プスコフ、スモレンスク州等　－　、Словарь　русских　народных　говоров, вып. 4］。

15. 双数（本質的には、古い共同格）二個の単語を含む、古代インド語の構文　dvandva［並列合成語　copulative compound］（この名称は、主・対　**ДЪВА**,　生　**ДЪВ-Ѳ-Ю**　と同系の　*du-o- の重複語幹を含んだものである）は、極めて興味深い　－　例、Mitrā-Váruṇā「ミトラとヴァル

ナ」, dyā́vā-pṛthivī「天と地」, uṣā́sā-náktā 「朝と晩」(訳注 34 参照)。

Mitrā́-Váruṇā, dyā́vā-pṛthivī, の本源的な意味は、「と（一緒の）ミトラ、と（一緒の）ヴァルナ」(Митра с, Варуна с)、「と(共にある) 天、と（共にある）地」(небето с, земята с）であった — Mitrā́ 「ミトラとヴァルナ」, dyā́vā「天と地」のような、 dvandva の、いわゆる省略形 (eliptical dvandva)［訳注、常時並び挙げられる名詞の一方が略される場合 — 辻直四郎、サンスクリット文法、 p.226、岩波全書、1976］は、古典的な古代インド語文法の観点からすれば双数であるが、双数の始原的共同格的用法、あるいはまた、同じことであるが、共同格の始原的双数用法に起源を持つものである。

16. 物主形容詞（所有と起源の形容詞）も、接尾辞 -īn- を以て作られる。次例参照、ラ haedīnus 「山羊の」 < haedus「小山羊」, bovīnus 「牛の」 < bōs, 属 bovis 「牛」, fāgīnus 「ブナの木の」 < fāgus「ブナ」, ゴ staineins 「石の」 < stains「石」, 古高ド guld în「(黄) 金の」(cf. ゴ gulth 「(黄) 金」) ; ゴート語の、単・属 meina 「私の」, seina 「自分の」 の原形から作った、物主代名詞 meins 「私の」 < *mīn-, seins 「自分の」 < *sīn- も参照。接尾辞 -ИНЪ の付いた古代ブルガリア語の物主形容詞については、§. 27 参照。短い i は、ギ φήγινος「オークの木の」 < φηγός, ドーリス φᾱγός「オークの木」, ἀνθρώπινος「人間の」 < ἄνθρωπος「人間」, ЖЕЛѢЗЬНЪ < ЖЕЛѢЗО, И ѢДЬНЪ「青銅の」 < МѢДЬ に立証される。

引用文献

Н. Д. Андреев. Из проблематики индоевропейских ларингалов. —Доклады и сообщения института языкознания Академии наук СССР, XII, 1959.

М. Бахтин. Творчество Франсуа Рабле и народная культура Средновековья и Ренессанса. М., 1965.

В. В. Иванов, В. Н. Топоров. Исследования в области славянских древностей. М., 1974.

E. Benveniste. Origines de la formation des noms en indo-européen. Paris, 1935.

E. Benveniste. "Être" et "avoir" dans leurs fonctions linguistiques. — Bulletin de la société Linguistique de Paris, LV, 1960.

K. Brugmann. Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen. 2 Aufl. Straßburg, II, I, 1906.

A.Gaters. Indogermanische Suffixe der Komparation Demunitivbildung. — Zeitschrift für vergleichende Sprachforshung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen, LXXII, 1954.

W. Havers. Eine sintaktische Soderstellung grieheîsher und lateinischer Neutra. — Glotta, XIV, 1925.

P. Kretschmer. Das nt-suffix. — Glotta, XIV, 1925.

H. Kuhn. Ablaut, *a* und Altertumskunde. — Zeitschrift für vergleich ende Sprachforshung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen, LXXI, 1954.

J. Kuryłowicz. ə indoeuropéen et *h* hittite. In : Symbolae grammaticae

in honorem J. Razwadovski. Crakoviae, I, 1927.

J. Kuryłowicz. L'apophonie en indoeuropéen. Wrocław, 1956.

A.Leskien. Der Ablaut der Wurzelsilben im Litauischen. — Abhandlungen der Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften, IX, No.4, 1884.

E. Lewy. Zum Dual und zum Toharischen. — Zeitschrift für vergleich ende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen, XLV, 1913.

A. Martinet. Le couple *senex-senātus* et le "suffix" -k-. — Bulletin de la Société linguistique de Paris, LI, 1955.

E.Sapir. Indo-European Words for "tear". — Language, XV, 1939.

J. Schmidt. Die Pluralbildung der indogermanischen Neutra. Weimar, 1889.

W. Streitberg. Der Genitive Pluralis und die baltisch-slavischen Aus lautgesetze. — Indogermanische Forschungen, I, 1892.

N. Trubetzkoj. La forme slave du nominatif-accusatif singulier des th èmes neutres en -n-. — Mémoires de la Société de linguistique de Paris, XXII, 1922.

N. van Wijk. Der nominale Genitiv Singular im indogermanischen in seinen Verhältnis zum Nominativ. Zwolle, 1902.

訳　　注

1. 古代ギリシャ語は、東ギリシャ方言と西ギリシャ方言に大別され、前者には、イオーニア・アッティカ方言（Ionic-Attic)、アルカディア・キュプロス方言（Arcado-Cyprian)、アイオリス・レスボス・テッサリア（Aiolis-Lesbos-Thessalia）の方言群、ボイオーティア方言（Boiotia）が、また、後者には、北西ギリシャ方言（Lokris, Phokis, Delphoi, Aitolia 等の方言)、ドーリス方言（Korinthos, Argolis, Lakonia 等のペロポネーソス半島より、Melos, Thera, Kreta, Rhodos 等のエーゲ海南部の諸島の方言）が数えられるという。なお、本書の記述に出てくる、「イリアス」と「オデュッセイア」(BC 9 世紀）の作者とされる「ホメーロスの言語は、イオーニア方言とアイオリス方言との混淆体に多少アルカディア・キュプロス方言の語彙を含んだものであって、西ギリシャ方言の要素は皆無である」という（高津春繁、印欧語比較文法、岩波全書 ; 同、比較言語学、同全書 ; 同、比較言語学入門、岩波文庫　等による)。

2. 本書では、古代インド語なる用語が使われている。古代インド語は、古代インドの文学語で、これは、ヴェーダ（Veda）語と古典サンスクリット（Sanscrit）語に大別され、前者は、リグヴェーダを最古とし、ウパニシャッドの最古層を最新とする聖典文学の言語で、紀元前千年以前より紀元後数世紀までの時代に属するものであり、また古典時代の古代インド語たるサンスクリット語は、紀元前４～５世紀に文学語として固定したが、次第に日常会話語より遊離し、ために変化しなかったが、これと並存して日常会話語としてのプラークリット語があった、とされる（高津春繁、同書による)。

古代イラン語は、二つの言語によって伝えられ、一つは、古代ペルシャ帝国の言語で、諸王が残した碑文の楔形文字（BC 520-350）によって、もう一つが、古代ペルシャ語とは異なる方言に属するアヴェスタ聖典の言語（最古層は　BC 1000-600、その他は　BC 500-300)、とされる（高津春繁、同書による)。

紀元前4・3世紀、イタリア半島に行われていたイタリア語派の言語は、ラテン・ファリスキ方言（ラテン語はこれに属する一小方言群）、オスク・ウムブリア方言等に分類される、という（高津春繁、同書による）。

3. Cimbrī 。紀元前一千年紀中期に、ユトランド半島北部に居た北ゲルマン民族。前2世紀末、チュートン人と共に南下。BC 102 年、ローマに移動、北部イタリア全土を占めたが、BC 101 年、ローマ軍マリウス（Gaius Marius, BC 157-86）将軍によって打ち破られた（БСЭ 及び Българска енциклопедия による）。

4. 訳注 2 参照。

5. スラヴ祖語では、一般に、語末では、語中とは違った変化の発生が認められることがある。例えば、語末閉音節（非破裂子音 -n-, -s- 前）では、早くから、 a, o 母音は、拡散性（diffuse）を発達させた（例、単・主 dōros＞ dōrus , 複・対 dōrons＞ dōruns）。また、長い二重母音（diphthong と diphthongoid）は、一般的には、かなり早くから短縮傾向を持っていたが（例、ēi ＞ ei, āu ＞ au, ār ＞ ar 等）、語末（鼻子音前）の短母音は、逆に長母音化している。このような長母音化は、通常、緊張性の拡散音、つまり u, i の母音に発生するものであったが（例、 複・対 dōruns ＞ dōrūns, gostins ＞ gostīns）、方言によっては、このような傾向が -ens ＞ -ēns にも広がったのである。複・対 [nozi-ans ＞ nozi-ens ＞ nozi-ēns ＞ nozi-ē ＞ nozi-ě ＞ **НОЖ-Ѣ** [古代ロシア] に対して、古代ブルガリア語、つまり古スラヴ語では、このような長母音化は起こらず、 nozi-ens ＞ nozi-ę ＞ **НОЖ-Ѧ** となっている — なお、 nozi-ans ＞ nozi-uns ＞ nozi-ins ＞ nozi-īns ＞ ***НОЖИ** とはならない。 -ans ＞ -uns のような拡散性の発達よりも、嬰音調（sharp）の i に後続する変音調（flat）の音（a, u）の円唇性喪失（嬰音調性強化）傾向（例、iu ＞ ii , ia ＞ ie 等）の方が早かったからである（Г. А. Хабургаев, Старославянский язык, Просвещение, М., 1986 等に

よる)。

6. 現代イラン語の一。「現代イラン語は、現代ペルシャ語、クルド語、コーカサスのオセト語、アフガニスタンのアフガン語、バルチスタンのバルチー語及び、パミル高原に行われているいくつかの弱小の言語よりなる」(高津春繁、比較言語学、比較言語学入門による)。

7. 訳注 1 参照。

8. ドナウ川右岸支流のサヴァ(Сава)川流域をいう。ベオグラード — ザグレブ — リュブリャナを通っている。

9. セルビア・クロアチア語は、ロシア語の что (= what, that) に相当する代名詞のどれを使うかに従って、シトー(што)方言、チャ(ча)方言、カイ(кaj)方言に分かれる。セルビア・クロアチア語の大部分は(セルビア、ヴォエヴォヂナ、ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、モンテ・ネグロ、またダルマチア、スラヴォニアの大部分、そして北西クロアチアの一部)、シトー方言が占めるが、チャ方言とカイ方言は、クロアチアに広がり、前者はアドリア海沿岸地域及び諸島、後者はシトー方言に次いで大きな方言であり、北西クロアチアで行われ、クロアチアの首都ザグレブはカイ方言である。さらにまた、シトー方言は、かつての ѣ (ě) の反映の仕方によって、エ方言群、イエ方言群、イ方言群(例、дед, река; дјед, ријека; дид, рика)に分かれる。カラジーチ(Вук Караџић, 1787-1864)は、ユーゴスラヴィアの中心部のシトー方言(いわゆる新シトー方言 новоштокавские говоры)の担い手(セルビア、モンテ・ネグロ、クロアチア人)の民謡、俚諺、説話等のフォークロアの言語を標準語の規範とするよう提案したが、ここに、新シトー方言を基礎にした今日のセルビア・クロアチア語が成立するのである。しかし、今日の言語情勢は、政治によって大きく左右されかねない複雑な環境にあると言えよう(Славянские языки, Из-во Мос. ун., 1977; М. Степановић, Савремени српскохрватски језик I, Научна књиг

a, Београд, 1981 等による)。

10. 発生的には、過去時制(厳密には、完了形)であるが、現在の意味で用いられる動詞。完了形で現在時を表す動詞は、ギリシャ語やラテン語にも見出されるが、特に顕著なのは、ゲルマン諸語であり、ここでは、古い現在形をゲルマン祖語の時代に失い、古い強変化過去形を新しい現在形として用い、過去の意味を表すにはこれに基づく新しい弱変化形を用いる。近代英語の can, dare, may, must, ought, shall, will や近代高地ドイツ語の dürfen, können, mögen, müssen, sollen, wissen 等がこの類である(イェスペルセン、半田一郎 訳、文法の原理、岩波書店 及び 現代言語学辞典、成美堂 等による)。

11. 訳注 1 参照。

12. 訳語については、泉井久之助、ラテン広文典(白水社)の、「最上級を、比較の相手を省いて用いるとき、比較を絶する意味があって、これを揚意的な用法(ēlātīvus)という」に依った。

13. ギリシャ語動詞の受動相アオリストには、第Ⅰ、第Ⅱの別があるが、動詞幹に時称接尾辞 -θη-(θε-)を付したものは第Ⅰ受動幹(例、παιδευ-θη-〔-θε-〕)、これに代えて -η-(-ε-)を当てるものが第Ⅱ受動幹(例、γραφ-η-)である(-θη-, -η-は、直接法と不定詞で、-θε-, -ε-は、接続法、希求法、分詞の時に使用される):例、現・1・単 παιδεύω, Ⅰアオ・受動・1・単 ἐ-παιδεύ-θη-ν; 現・1・単 γράφω, Ⅱアオ・受動・1・単 ἐ-γράφ-η-ν(田中美知太郎、松平千秋、ギリシャ語入門、岩波全書 等による)。

14. ラテン語文法は、伝統的に、動詞を第Ⅰ活用から第Ⅳ活用までの四種に分類している。例、第Ⅰ am-ō (1・単), am-ā-s (2・単、現在幹 -ā-), am-āre (不定詞);第Ⅱ mon-eō, mon-ē-s, mon-ēre;第Ⅲ reg-ō (rege + ō), regis (現在幹 -e-), reg-ere;第Ⅳ ven-iō, ven-ī-s, ven-īre(呉茂一、ラテン語入門、岩波全書;田中秀央、初等ラテン語文典、研究社による)。

15. 訳注　14　参照。

16. 印欧語の一。トラーキア語と同系関係にあった。プリュギア人は、紀元前1200年前後にトラーキアの地より、イリュリア人の大移動に押されて、小アジアのプリュギアに移動し、これがヒッタイト帝国崩壊の原因となった。二つの年代の異なる碑文　－　ギリシャ文字を多少改編した文字を使い、紀元前７～６世紀の古プリュギア語と紀元後最初の数世紀のもので、ギリシャ文字を使う新プリュギア語　－　が知られるという（高津春繁、印欧語比較文法による)。

17. プラエネステー（Praenestē）　－　Latium　の町（現　Palestrina）　－　の前６世紀の碑文（高津春繁、印欧語比較文法　参照)。

18. ムラデーノフ（Стефан　Младенов）によれば、ブルガリア語史は、主として、格変化形（曲用）の維持ないしは衰退の程度によって、三つの時期に分けられる。すなわち、文献出現（９世紀）以前のブルガリア語前史の時期に次いで、古代ブルガリア語期（９～11世紀　старобългарски　период）－　極めて豊かな曲用を有する時期　；中世ブルガリア語期（12～15世紀　среднебългарски　период）　－　次第に格変化形が統合・簡略化され、古代ブルガリア語文法に反するような写字生の誤りが顕著になってくる時期　；　新ブルガリア語期（14世紀以後　новобългарски　период）　－　古い曲用体系の片鱗だけが残る時期である。

今日の方言区分については、古代ブルガリア語の　ѣ　の反映の仕方に基づいて、二大方言が区別される。ブルガリア北部のニコーポル（Никополь　ブルガリア、ルーマニア国境線であるドナウ川に面する町）とギリシャのサロニキ（ブルガリア名　ソールン　Солун）を南北に結ぶ線以東の方言をブルガリア東部方言（източнобългарски　диалект)、この線以西のものブルガリア西部方言（западнобългарски　диалект）という。概して、前者では（特に南部では）　ѣ　＞ 'a（ä)、後者では　ѣ　＞　e　が普通であるが、両方言とも全

て一様と言うわけではない（Стефан Младенов, История на българския език, София, 1979, Издателство на българската академия на науките〔Geschichte der bulgarischen Sprache, 1929〕による）。

19. エンゲルスの「家族、私有財産および国家の起源」（村井康男、村田陽一 訳、大月書店）では、イロクォイ人、ギリシャ人、ローマ人の「フラトリア」が詳しく研究されているが、そこでは、「兄弟団体」と訳されている。同一種族中の二氏族またはそれ以上の氏族が、社会的、宗教的機能を負って有機的に連合したもので、氏族よりは大きく、種族よりは小さい組織。例えば、セネカ・イロクォイ種族の八氏族は、動物の名をつけた二つのフラトリア（第一フラトリア － 1 くま、2 おおかみ、3 ビーバー、4 海がめ；第二フラトリア － 5 しか、6 しぎ、7 さぎ、8 たか）に包括されていた。エンゲルスは、「これらのフラトリアは、たいてい種族が最初に分裂して行ったもとの氏族を表していることがわかる。というのは、氏族内部の通婚が禁止されているのだから、各種族は、自立的に存続できるためには、少なくとも必ず二つの氏族を含まなければならなかったからである」と書いている。同じフラトリアの諸氏族は互いに兄弟であり、他のフラトリアの諸氏族に対して従兄弟である。

20. ラテン語 lēvir「夫の兄弟」 より。子のない寡婦を、亡夫の兄弟と再婚させる習慣。群婚の名残である逆縁婚制は、氏族制のもとで広く行われていたが、コーカサス、中央アジア、ユダヤ人等の間では、氏族制崩壊期、階級社会に入っても長期にわたって残存した（Большая Советская Энциклопедия 等による）。

21. ギリシャ語動詞は、現在語幹と語根の相関関係によって、八種類に分けられる。この内、第Ⅰ類、第Ⅱ類、第Ⅲ類は、正則類と呼ばれる。その他は、語根と現在幹とのかなりの不統一のため非正則類とされる。この場合、語根は、アオリストに最もよく現れる。

第Ⅰ類 － 現在語幹と語根の一致するもの：主として、母音幹 λύω,

νικάω 等であるが、子音幹 γράφω 等もある。

第II類 ― 唇音（β, π, φ）に終わる語根を持つ動詞、現在幹では τ を加える：βλάπτω（語根 βλαβ-, 末 βλάφω）等。

第III類 ― 前舌、後舌子音、鳴子音に終わる後根を持つ動詞、現在幹は、歴史的には、j を付加したもの：γυμνάζω（γυμνασδ-j-ω), πράττω〔πρασσω〕（πρασγ-j-ω）等。

第IV類 ― 語根母音の延長によって現在幹を作るもの：λείπω（λιπ-, ア ἔλιπον）等

第V類 ― 現在幹に鼻音接中辞を持つもの：λαμβάνω（λαβ-, ア ἔλαβον）等

第VI類 ― 語根に -σκ- を加えた現在幹を持つもの：διδάσκω（διδαχ-, ア ἐδίδαξα）等

第VII類 ― 単純語幹と -ε-（-η-）による拡張語幹が交替するもの：γίγνομαι（γεν-, γν-), 未 γενήσομαι 等。

第VIII類 ― 異なる語根から作るもの（補充法）：λέγω, ア εἶπον；ἐσθίω, ア ἔφαγον 等。

（А. Э. Козаржевский, Учебник древнегреческого языка, Из-во Мос. ун-та, 1975 による)。

22.「オフリドの使徒」は、12世紀末の中世ブルガリアの文献。キリール文字によるもの若干、多くはグラゴール文字による。112葉の羊皮紙に書かれる。新約聖書からの抜粋を含む。ロシア人スラヴィストであるグリゴローヴィチ（В. И. Григорович）によって、オフリド（現在、マケドニア・ギリシャ国境近くのオフリド湖北の町）で発見された。現在、モスクヴァに収蔵。クリバーキン（С.М.Кульбакин）によって、出版された。

クリメント（840-916）は、キュリロス、メトディオスの高弟であり、モラヴィア伝導使節のメンバーであり、885（886）年、ブルガリアに戻ると、

主教（эпископ）に叙任された。クリメントの仕事の一つは、ギリシャ語からの教義の旺盛な翻訳活動であったが、今一つ特筆すべきは、彼自身による50に上る作品の執筆活動である。その中でも特に有名なのが、正教会の英雄、活動家達に対する一連の「礼賛」ものである。（Българска Енциклопедия, Издателство на българската академия на науки те, София, 1974 及び В. Д. Андреев, История болгарской литературы, М., Высш. школа, 1987 による）。

23. 訳注 12 参照。

24. πολλὰ は、πολύς「多くの」の中性複数。ἀπώλετο は、ἀπ-όλλῡμι「滅びる、死ぬ」の中動相第Ⅱアオリスト3人称単数形。なお、ギリシャ語は、シグマ〔s〕の要素を包摂するアオリストを、第Ⅰアオリストないしはシグマ・アオリストと呼び、この要素のないものを第Ⅱアオリストと呼んでいるが、本書で言われている、古代ブルガリア語の第Ⅰシグマ・アオリスト（1人称単数で、 х あるいは с 要素のあるの：例、бьр-д-х-ъ, нѣ-с-ъ）、第Ⅱシグマ・アオリスト（1人称単数で、 ох の要素が現れるもの：例、 нес-ох-ъ, пад-ох-ъ）は、歴史的にはどちらもシグマの要素を含むアオリストの別であり、シグマを含まないアオリストは、単純アオリストと呼称されている、ことに注意しなければならない。序でながら、ラントは、アオリストを、語根アオリスト（root-aorist）とシグマ・アオリスト（sigmatic aorist）に分け、後者を、s アオリスト、 x アオリスト、 ox アオリストに分類しており（Horrace G.Lunt, Old Church Slavonic Grammar）、木村彰一氏の「古代教会スラヴ語入門」（白水社）も亦同じである。また、これまでソヴィエトで発行されて来た一連の古スラヴ語（старославянский язык）やロシア語歴史文法（историческая грамматика русского языка）の教科書類の場合は、単純アオリ

スト（простой аорист）とシグマ・アオリストを分け、さらにこれを、古（非テーマ型）シグマ・アオリスト（сигматический аорист старого〔архаического〕типа〔нетематический〕）と新（テーマ型）シグマ・アオリスト（сиг. аор. нового типа〔тематический〕）に分けている。そして、前者は不定詞語幹に直接シグマの要素を付加するものを（1人称単数で χ 及び c の要素の現れるもの）、後者はテーマ母音（ο）を介してシグマの要素の要素が現れるもの（οχ のもの）で、これは比較的遅い時期にアナロジー的に現れてくるものだという解説が普通である。こうした点で、ラリンガル・モデルによる本書の解釈とは大きな差異が存在する。

25. 紀元前二千年紀から紀元前一千年紀にかけて、小アジア（アナトリア）に行われていた印欧語（アナトリア語派）には、ヒッタイト語、パラー語、（楔形文字）ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語、ミリア語、リュディア語、の七つが確認され、このうち、ルウィ、象形文字ルウィ、リュキア、ミリア語は、年代こそ違え言語的には密接な関係にあることから、アナトリア語派の下位区分として「ルウィ語群」を形成する、という。また、ヒッタイト語以外は、互いに共通する言語特徴があることから、「西アナトリア語群」という下位区分を立てることもあるという（大城光正、吉田和彦、印欧アナトリア諸語概説、大学書林；高津春繁、印欧語比較文法　による、なお、後者では、「ルヴィア語」である）。

26. 訳注　3　参照。

27. 訳注　2　参照。

28. 現代ブルガリア語　добытък　は「家畜（集合）」の意。

29. 訳注　19　参照。

30. Δημιουργός，Δημιοεργός「職人、創造者、造物主」の意。プラトンは、「ティマイオス」篇で、世界をつくる巨人にこの名を与えた。世界を無から創造したキリスト教の神とは違い、このデミウル

ゴスは、世界をつくるに当たっての手本（イデア）と材料（場所）とがあらかじめ与えられていた。プラトンのこの神話的宇宙発生論は、彼以前のイオニアの自然哲学が唯物論的な宇宙を展開していたのと比べて対照的である（森宏一、古在由重編、哲学辞典、青木書店　等による）。

31. 逐語的には、「ゼウス（神）の子供達」の意。ギリシャ神話に登場するゼウスとレダの子、カストルとポリュデウケスのこと。前者は馬術の、後者は拳闘術の達人として知られ、後、天のふたご座になったという。本来、スパルタの地域神であったが、歴史時代に入って、スパルタ国家の守護神となった（ＢＣＥ　等による）。

32. 西部ブルガリアの都市キュステンディールとその州。西は、ユーゴスラヴィアに接する。古くからの温泉保養地で、２世紀からローマ人達が利用した（Българса　енциклопедия　による）。

33.　１人称単数の代わりに、１人称複数を用いるのは、「我」を拡大して権威、威厳を示す場合と、逆に、自己を聴衆や読者、あるいは自分の一党の後ろに隠すことによって、これらの人々との共同責任において主張する意味あいの場合がある。前者を「威厳の複数」、後者を「抑遜の複数」（plūrālis modestiae）という（泉井、上掲書等による）。

34.　印欧祖語期より、新しい概念を表す方法として合成語が盛んに造られたという。そして、合成名詞には、「母と父」（古イ　mātárā-pitárā）のように、二つ以上の語を単に並置した並列合成語（dvandva, copulative compound）－ 原注 15 参照 － と第一要素が第二要素を限定する限定合成語（広義の　tatpruṣa, determinative compound）等があり、限定合成語はさらに名詞的合成語と動詞的合成語に分かれ、前者が、サンスクリットで言うところの　karmadhāraya（appositionally defined compound 同格限定合成語）　－ 例、ギ　ἰατρό－μαντις「医者で予言者」，古イ　rāja-putrá「王の子、王子」（§．28 参照）等　－　であり、後者は、ラ　iū-dex, -dic-is「裁判者」（dīc-ō「言う、示す」）のように、第二要素に動詞語根あるいはこれを　e／o によって拡大したものが

用いられる、という（高津春繁、印欧語比較文法；辻直四郎、サンスクリット文法、岩波全書　等による）。

また、status cōnstructus （構成位相）とは、シリア語をはじめとするセム諸語で、属格構造を表す時に取る名詞の特別な形式をいう。例えば、「王の本」という表現において、シリア語では、sefrā「本」と　malkā「王」を組み合わせて、 səfar malkā　となるが、このような場合の、 səfar をその名詞　sefrā の構成位相という（大阪外国語大学アジア・アフリカ講座高階美行先生による）。

35.　訳注　34（§．27）参照。

36.　ウエリウス・フラクス（Verrius Flaccus）－ アウグストゥス（Augustus　= Gaius Julius Caesar Octavianus, BC 63 -AD 14）及びティベリウス（Claudius Nero Tiberius, BC 47 -AD 37）時代のローマの文法家。カトー・ケーンソーリウス（Cato Cēnsōrius）－　Marcus Porcius Cato（BC 234 -149）。　ローマ最古の散文、「農業論」の著者。ローマの作家、政治家。ローマ貴族の中の名門ではなく、homo novus（新しい人）であった。第二ポエニ戦争に参加した。執政官（cōnsul）、観察官（cēnsor）を歴任したが、この時の厳格さから、cēnsōrius　の異名を取った。ロンゴス（Λογγος）－ 2～3世紀のギリシャの物語作家。牧歌物語「ダフニスとクロエ」の作者（Краткая литературная энциклопедия, Том 3, Из-во Сов. Энц., ; И. Х. Дворецкий, Латинско-русский словарь, Из-во Русский язык М., 1976 等による）。

37.　訳注　25　参照。

38.　Wulfila（Ulphilas）［＜ wulfs「狼」の指小形］（311－383）。西ゴート人、341年コンスタンチノポリスで、アリウス派（キリストの神性を否定した）の主教として、「ゴート人の主教」の位階に任ぜられて後、ゲルマン人の間で活発な伝導活動を行なった。ゴート語アルファベットの創始者であり、ギリシャ語よりゴート語への聖書の翻訳者であると考えられて

いる（研究者の中には疑義を持つ者もあるが)。この翻訳は、ゴート語の最古の文献資料である（ＢＣＥ　及び　高津春繁　印欧語比較文法　等による)。

あとがき

本書がソフィアで発行（2700部）されたのは、1982年であるから、発行から数えてすでに、11年余が経過しようとしている。そして、私がナウカ書店を通して本書を手にしたのは、1985年２月のことである（序でながら、これは、日本では、木村彰一氏の「古代教会スラヴ語入門」の初版が白水社より発行された年月でもある）。怠け者の私は、本書を入手した時点から、その内容の重要性に気がついていた訳ではない。それからしばらくの間、私は本書を本棚に放り込んだまま、その存在については忘れていた。1984年には、旧ソヴィエトのグルジア、トビリシ大学から、ヤコブソンの序言のついたガムクレリゼ、イヴァノフの共著「印欧語と印欧人」（5000部）が発行され、その内容に圧倒され、かつまた半ば呆気にとられつつ、時々ページをめくっているときに、本書の存在を想い出したのである（1986－1987年頃のことである）。やがて、「序」に述べた、京都大学の山口巖先生の1989－1990年の論文発表を迎えるのである（それに先立って、同先生の「類型学」についての草稿を見る機会を得たのであるが）。

日本で発行されている言語関係の月刊誌の類には、度々高名な言語学者による「能格言語」についての発言が見られるにもかかわらず、そこに「活格言語」についての記事を目にすることはないように思われる。「活格言語」という訳語タームの登場は、同先生の論文が最初であろう。こうして、それまでも噂には聞いていたが、一向に記憶に残らなかったクリモフ（Г．А．Климов）他ソヴィエトが産んだ、偉大な言語学者の名前も、嫌が上にも私の脳裏に刻み込まれることになった。このように考えてみると、あまりにも大きな欠陥を持った政治・経済体制としてのソヴィエト体制（敢えて、社会主義体制とは呼ばない）は崩壊したが、ソヴィエト言語学は、紆余曲折を経つつも、巨大な不滅の業績を残したことに気付くのである。それは何故か、このことを深く問うことは、今日流行のマス・メディア的論調とは全く逆に、今までにもまして一層重要な意義を持っているように思うのである。

古スラヴ語関係の書物は、日本ではともかく、欧米やスラヴ語圏では、数も種類も豊富であるが、本書ほど私を熱中させた本はない。それは、恐らく、形が、形式間の関係が意味（signifié）をもって記述されていく魅力であろう。ソシュール以来の言語学が、客観性と科学性をより一層重視する方向に進んできたこと自体は、科学の方向性一般の傾向として当然のことであろうが、言語を自然科学的な対象としてのみ、ないしはそれと同様に扱う風潮を、私はかねてから違和感を持って眺めて来た。そうした点からみれば、これは大変興味深い形態論である。

上述のように、本書の発行以来すでに11年が経過しているが、その内容は未だ充分に有効である。本書は、ガムクレリゼ、イヴァノフの「印欧語と印欧人」のような大部な著書ではないが、小さな容量の中に、近年における印欧語や古スラヴ語研究の成果がよく凝縮されており、そうした意味で類書にない魅力を持っているように思う。ただ、ドブレフ氏の印欧語構想には論争点も多く、構想の全てが認知されている訳ではない。そのため、山口先生からは、論証されていないものについては、注を付した方がよいという御助言をいただいたが、原稿募集規定により、最初の原稿の大幅な変更はできないため、新たな注については断念せざるを得なかった。この課題の遂行については、別の機会（例えば、「ロシア・ソビエト研究」誌等）に譲りたい。なお、本書の副題「語幹論」の語幹は、原語幹、ないし原（語）基とも言うべきものであるが、ここでは、あえて一般的な用語法に則ったことを断わっておきたい。

今回、1990年から始まった学術研究双書のシリーズの一冊として出版する機会を与えてくださった学術出版委員会の諸先生方、また、抽選とはいえ、御自分の「ルーマニア語史概説」の出版に代えて私に出版の機会をお譲りくださった伊藤太吾先生、またセム語（訳注　34）のことを教えてくださった高階美行先生、そして佐藤光夫氏をはじめとする附属図書館の関係各位に対して深い感謝の意を表するものである。また、本学大学院修士課程の赤井規晃君（ロシア語学専攻）には校正全般をお願いした。同君の校正内容は特筆

すべきものがあり、印欧諸語について旺盛な好奇心と知識を持った同君の援助がなければ、多くの誤りを見過ごすところであった。特に記して深い感謝の意を表する次第である。

1993年3月

著書紹介

イヴァン・ドブレフ・ドブレフ（Иван Добрев Добрев）1938年スリヴェン市（Сливен ブルガリア南西部の都市）に生まれる。1962年より、ソフィア大学に勤務。1984年 博士号取得。1986年ソフィア大学教授。主著に、「古代ブルガリア語文法－語幹論」（Старобългарска граматика, Теория на основите, Наука и изкуство, 1982, София）、「スラヴ祖語子音幹・二重音幹曲用の起源と意義」（Произход и значение на праславянското консонантно и дифтонгично склонение, Издателство Българската Академия на науките, 1982, София）。主論文に、「グラゴール文字を守るために」（В защита на глаголическите писмена, 1969）、「ブルガリア一南方言の古い特徴」（Старинна черта на един южен български говор, 1974）、「印欧語語根の子音構造」（Консонантната структура на индоевропейския корен, 1992）等がある。

訳 者 紹 介

石 田 修 一（いしだ しゅういち）

1938年 松山に生まれる。1963年 神戸市外国語大学ロシア学科卒業。1965年 京都大学大学院文学研究科修士過程（言語学専攻）修了。1968年同博士過程中途退学。1968年 香川大学教育学部に勤務。1970年 大阪外国語大学ロシア語学科に転任、1991年同教授。ロシア語学専攻。関係論文 ： 「ロシア語所有パーフェクトについて」（ロシア・ソビエト研究 15号、大阪外大ロシア語研究室、1989）、「類型学的にみたスラヴ語過去時制とブルガリア語パーフェクトの動向」（大阪外国語大学学報 76－1・2号、1988）、「ロシア語史概説（序説）1－4」（大阪外国語大学学報 77号、1988、同論集 2号、3号、6号、1989-1991）。日本ロシア文学会会員。日本古代ロシア研究会会員。

大阪外国語大学学術研究双書 8

1993年3月30日発行

訳 者 石田修一（いしだ しゅういち）

発 行 者 〒562 箕面市粟生間谷東8丁目1番1号
大阪外国語大学学術出版委員会

印 刷 所 〒531 大阪市北区中津6丁目13番20号
㈱アイジイ

ISBN4－900588－08－3

無断転載を禁ずる。

大阪外国語大学学術研究双書 既刊

1．レフ・トルストイと革命運動（1990）　エルヴィン・オーバーレンダー著
法橋和彦　監訳・解説

2．ロシア語アクセント研究（1990）　神山孝夫　著

3．社会言語学（1991）　フリチョフ・ハーガー　等著
乙政潤　訳

4．Dwelling Space in Eastern Asia（1991）　Richard ZGUSTA　著

5．ラ・アラウカーナ（第一部)(1992)　吉田秀太郎　訳

6．私の精神鑑定集（1992）　志水彰　著